

本高円ノ前遺跡

中国横断自動車道 姫路鳥取線整備促進関連事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書

2004. 3

財団法人 鳥取市文化財団

本高円ノ前遺跡

中国横断自動車道 姫路鳥取線整備促進関連事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書

2004. 3

財団法人 鳥取市文化財団

序 文

鳥取市は、鳥取県の県庁所在地として、また、山陰地方の中核都市として発展してきた、人口15万人あまりを擁する地方都市です。

鳥取市内には、鳥取平野をはじめその周辺丘陵に、数多くの遺跡が存在しています。これらの埋蔵文化財は地域の先人たちの生活を語る歴史資料であり、後世に継承していくべき市民の貴重な財産です。このような認識のもと、財団法人 鳥取市文化財団では、開発と文化財の共存をはかるべく、各関係機関の協力を得ながら埋蔵文化財発掘調査事業を進めています。

さて、今回実施した本高円ノ前遺跡の調査は、中国横断自動車道 姫路鳥取線整備促進関連事業に係る発掘調査として、平成14年度から調査を行ってきました。調査の結果、弥生時代と中世を主とした時期の貴重な遺構、遺物が検出され、当地域の古代文化の一端を明らかにする資料を提供することができました。ささやかな冊子ではありますが、市民各位ならびに関係各位の埋蔵文化財の理解に供していただければ幸いです。

おわりに、今回の発掘調査にあたり、ご理解とご協力をいただきました地元の皆様をはじめ関係各位の方々に、心から感謝申し上げます。

平成16年3月

財団法人 鳥取市文化財団
理事長 石谷雅文



例 言

1. 本書は、中国横断自動車道 姫路鳥取線整備促進関連事業の事前調査として実施した本高円ノ前遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、財団法人 鳥取開発公社の委託を受けて、財団法人 鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財調査センターが、平成14年度に現地調査を実施し、15年度に報告書を作成した。
3. 発掘調査を実施した遺跡の所在地は、鳥取市本高 字円ノ前である。
4. 発掘調査によって作成された記録類および出土遺物は、鳥取市教育委員会に保管されている。
5. 現地実測、図面の作成は、調査員、補助員を中心に調査参加者全員の協力のもとに行い、出土遺物の整理および遺物実測は、下多 みゆきを中心として、濱橋 博子、中村 真樹子がこれを補佐した。
6. 本書の執筆、編集は、藤本 隆之が行い、永田 りん太郎、井上 初恵がこれを補佐した。
7. 現地調査から報告書作成にいたるまで、以下に列記している多くの方々からの指導、助言ならびに協力をいただき、厚く感謝いたします。

鳥取県土木部道路課、姫路鳥取線用地事務所、財団法人 鳥取開発公社、鳥取市建設部土木建設課
久保 智康、藤澤 良祐、穴澤 義功、古川 登、八峠 興、杉谷 美恵子、森下 佐智枝

(順不同、敬称略)

凡 例

1. 本報告書における方位はすべて磁北を示し、レベルは海拔標高である。
2. 本書に使用した遺構等の略号等は次のとおりである。
SB：掘立柱建物、SK：土坑、SD：溝状遺構、P：柱穴・ピット
KR：攪乱坑、TR：トレンチ、：石、：木
3. 今回の調査によって出土した遺物は、遺跡名、調査年度、遺構番号、取上げ順による遺物番号(遺物台帳登録番号)、取上げ年月日を基本的に注記している。写真や図面などの記録類も同様である。
4. 現地調査時の旧遺構番号と本書に使用した正式遺構番号との対応は以下のとおりである。

新旧遺構番号対応表

新	旧
SK-34	P-23
SK-35	P-26
SK-36	P-28
SK-37	P-29

新	旧
SK-38	P-80
SK-39	P-145
SK-40	P-155
SK-41	P-600

新	旧
—	SD-18
SK-23	SD-23

本文目次

序文

例言 凡例

第1章 発掘調査の経緯

- 1. 発掘調査に至る経緯1
- 2. 発掘調査の経過1
- 3. 調査の組織・体制2

第2章 遺跡の位置と歴史的環境3

第3章 調査の結果

第1節 本高円ノ前遺跡の立地と基本層序8

第2節 弥生時代の遺構・遺物11

- 1. 土坑12
- 2. 溝状遺構12

第3節 中世期の遺構・遺物15

- 1. 掘立柱建物15
- 2. 土坑36
- 3. 溝状遺構62
- 4. 遺構外遺物67

第4節 まとめにかえて70

掘立柱建物調査一覧表74

出土遺物観察表75

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第 1 図 本高円ノ前遺跡周辺遺跡分布図 7	第30図 SK-02 出土遺物実測図・……37
第 2 図 調査位置図 ……………8	第31図 SK-04 実測図 ……………37
第 3 図 調査地断面図 ……………9・10	第32図 SK-05 実測図 ……………38
第 4 図 SK-31 実測図 ……………11	第33図 SK-05 出土遺物実測図 ……………38
第 5 図 SK-32 実測図 ……………11	第34図 SK-06 実測図 ……………39
第 6 図 SK-31 出土遺物実測図 ……………12	第35図 SK-06 出土遺物実測図 ……………40
第 7 図 SK-32 出土遺物実測図 ……………12	第36図 SK-07 実測図 ……………40
第 8 図 SD-34 実測図 ……………13・14	第37図 SK-08 実測図 ……………41
第 9 図 SD-35 実測図 ……………13・14	第38図 SK-08 出土遺物実測図 ……………41
第10図 SD-32 出土遺物実測図 ……………15	第39図 SK-09 出土遺物実測図 ……………42
第11図 SD-34 出土遺物実測図(1) ……16	第40図 SK-09 実測図 ……………43・44
第12図 SD-34 出土遺物実測図(2) ……17	第41図 SK-10 実測図 ……………45
第13図 SD-35 出土遺物実測図 ……………18	第42図 SK-11 実測図 ……………45
第14図 SB-01 実測図 ……………19・20	第43図 SK-10 出土遺物実測図(1) ……46
第15図 SB-02 実測図 ……………21	第44図 SK-12 実測図 ……………46
第16図 SB-03 実測図 ……………22	第45図 SK-10 出土遺物実測図(2) ……47
第17図 SB-04 出土遺物実測図 ……………22	第46図 SK-11 出土遺物実測図 ……………48
第18図 SB-04 実測図 ……………23・24	第47図 SK-13 実測図 ……………48
第19図 SB-05 実測図 ……………25・26	第48図 SK-14 実測図 ……………48
第20図 SB-06 実測図 ……………27	第49図 SK-12 出土遺物実測図 ……………49
第21図 SB-08 実測図 ……………28	第50図 SK-13 出土遺物実測図 ……………50
第22図 SB-07 実測図 ……………29・30	第51図 SK-14 出土遺物実測図 ……………50
第23図 SB-09 実測図 ……………31	第52図 SK-15 実測図 ……………50
第24図 SB-10 実測図 ……………32	第53図 SK-16 実測図 ……………50
第25図 SB-10 出土遺物実測図 ……………33	第54図 SK-17 実測図 ……………51
第26図 SK-01 実測図 ……………34	第55図 SK-18 実測図 ……………51
第27図 SK-02 実測図 ……………35	第56図 SK-19 実測図 ……………51
第28図 SK-01 出土遺物実測図 ……………36	第57図 SK-21 実測図 ……………51
第29図 SK-03 実測図 ……………36	第58図 SK-22 実測図 ……………51

第59図	SK-23	実測図	……………	51	第86図	SK-40	出土遺物実測図	……………	61
第60図	SK-17	出土遺物実測図	……………	52	第87図	SK-40	実測図	……………	62
第61図	SK-24	実測図	……………	52	第88図	SK-41	実測図	……………	62
第62図	SK-25	実測図	……………	52	第89図	SD-01~07	断面実測図	……………	63
第63図	SK-18	出土遺物実測図	……………	53	第90図	SD-03	出土遺物実測図	……………	64
第64図	SK-20	出土遺物実測図	……………	54	第91図	SD-06	出土遺物実測図	……………	64
第65図	SK-23	出土遺物実測図	……………	54	第92図	SD-07	出土遺物実測図	……………	64
第66図	SK-19	出土遺物実測図	……………	54	第93図	SD-08	出土遺物実測図	……………	64
第67図	SK-24	出土遺物実測図	……………	54	第94図	SD-13	出土遺物実測図	……………	64
第68図	SK-26	実測図	……………	55	第95図	SD-21	出土遺物実測図	……………	64
第69図	SK-26	出土遺物実測図(1)	……………	55	第96図	SD-08~10・12~17・19・20	断面実測図	……………	65
第70図	SK-26	出土遺物実測図(2)	……………	56	第97図	SD-17	出土遺物実測図	……………	65
第71図	SK-26	出土銭貨拓影	……………	56	第98図	SD-21・22・24・25・32	断面実測図	……………	66
第72図	SK-27	実測図	……………	57	第99図	SD-22	出土遺物実測図	……………	67
第73図	SK-28	実測図	……………	57	第100図	SD-25	出土遺物実測図	……………	67
第74図	SK-29	実測図	……………	57	第101図	SD-39	出土遺物実測図	……………	67
第75図	SK-29	出土遺物実測図	……………	58	第102図	SD-54	出土遺物実測図	……………	67
第76図	SK-33	実測図	……………	58	第103図	ピット内出土遺物実測図(1)	……………	68	
第77図	SK-34	実測図	……………	58	第104図	ピット内出土遺物実測図(2)	……………	69	
第78図	SK-30	実測図	……………	59	第105図	遺構外出土遺物実測図(1)	……………	70	
第79図	SK-35	実測図	……………	59	第106図	遺構外出土遺物実測図(2)	……………	71	
第80図	SK-36	実測図	……………	59	第107図	遺構外出土遺物実測図(3)	……………	72	
第81図	SK-30	出土遺物実測図	……………	60	第108図	遺構外出土遺物実測図(4)	……………	73	
第82図	SK-35	出土遺物実測図	……………	61	第109図	遺構外出土遺物実測図(5)	……………	74	
第83図	SK-37	実測図	……………	61					
第84図	SK-38	実測図	……………	61					
第85図	SK-39	実測図	……………	61					

図版目次

図版 1

- 調査地南半全景(俯瞰)
- 調査地北半全景(東から)

図版 2

- 南半中央断面①(北から)
- 南半中央断面②(北から)
- 南半中央断面③(北から)

図版 3

- 五銚鈴
- 華瓶
- SK-12 出土遺物(1)

図版 4

- SK-02 出土遺物(1)
- SK-06 出土遺物(1)
- SK-09 出土遺物(1)

図版 5

- SK-12 出土遺物(2)
- SK-13 出土遺物(1)
- SK-26 出土遺物(1)
- SD-06 出土遺物

図版 6

- SD-13 出土遺物(2)
- SD-21 出土遺物
- SD-22 出土遺物

図版 7

- P-510 出土遺物
- P-1469 出土遺物
- SK-02 出土遺物(2)
- SK-09 出土遺物(2)
- SK-09 出土遺物(3)
- SK-26 出土遺物(2)

図版 8

- 調査前(北西から)
- SK-01 完掘状況(北東から)

図版 9

- SK-02 完掘状況(北から)
- SK-03 断面(北東から)
- SK-03 完掘状況(北東から)

図版10

- SK-04 検出状況(北東から)
- SK-05 断面(南から)
- SK-05 完掘状況(西から)

図版11

- SK-06 断面(南から)
- SK-06 完掘状況(南から)
- SK-07 断面(南東から)

図版12

- SK-08 完掘状況(北東から)
- SK-09 断面(西から)
- SK-09 完掘状況(西から)

図版13

- SK-10 断面(南から)
- SK-10 完掘状況(南から)
- SK-11 断面(北東から)

図版14

- SK-11 完掘状況(南西から)
- SK-12 断面(北西から)
- SK-12 検出状況(西から)

図版15

- SK-13 断面(北西から)
- SK-13 完掘状況(北西から)
- SK-16 断面(北から)

図版16

- SK-17 断面(北から)
- SK-18 断面(北東から)
- SK-19 断面(東から)

図版17

- SK-19 検出状況(西から)
- SK-21 断面(南西から)
- SK-21 完掘状況(北西から)

図版18

- SK-23 断面(東から)
- SK-23 完掘状況(南東から)
- SK-24 検出状況(西から)

図版19

- SK-25 断面(南東から)
- SK-25 完掘状況(北東から)
- SK-26 断面(南西から)

図版20

- SK-26 完掘状況(南東から)
- SK-26 遺物出土状況(北西から)
- SK-27 断面(北東から)

図版21

- SK-29 完掘状況(北東から)
- SK-30 断面(北東から)
- SK-30 検出状況(南東から)

図版22

- SD-01 断面(東から)
- SD-03 断面(南西から)
- SD-06 断面(西から)

図版23

- SD-10(南から)
- SD-15・16・17 断面(南東から)
- SD-21 断面(南西から)

図版24

- SD-23 断面(南西から)
- SD-25 断面(南東から)
- SD-34 断面①(北から)

図版25

- SD-34 断面②(南から)
- SD-34 断面③(北から)
- SD-34 検出状況(北から)

図版26

- SD-34 検出状況(北から)
- SD-34 遺物出土状況(南東から)
- SD-34 完掘状況(北から)

図版27

- SD-35 検出状況(西から)
- SD-35 断面①(西から)

図版28

- SD-35完掘状況(西から)
- SD-35断面②(西から)

図版29

- SD-35 遺物出土状況(南から)
- P-1031 検出状況(北から)
- P-1397 断面(南東から)

図版30

- P-1405 検出状況(北東から)
- P-1555 検出状況(南東から)
- P-1557 断面(東から)

図版31

- P-1558 断面(北から)
- P-1634 断面(北から)
- 整地層断面(南から)

図版32

- 北半ピット群(北東上空から)
- 南半ピット群(北から)
- 南半中央ベルト下遺物出土状況(北東から)

図版33

- SK-01 出土遺物
- SK-02 出土遺物(3)
- SK-06 出土遺物(2)
- SK-06 出土遺物(3)
- SK-08 出土遺物

図版34

- SK-09 出土遺物(4)
- SK-10 出土遺物(1)

図版35

- SK-10 出土遺物(2)
- SK-11 出土遺物
- SK-12 出土遺物(3)
- SK-14 出土遺物
- SK-17 出土遺物

図版36

- SK-18 出土遺物
- SK-26 出土遺物(3)
- SK-29 出土遺物
- SK-30 出土遺物(1)

図版37

- SK-30 出土遺物(2)
- SK-31 出土遺物(1)
- SK-31 出土遺物(2)
- SK-32 出土遺物(1)
- SK-35 出土遺物(1)
- SD-03 出土遺物

図版38

- SD-07 出土遺物
- SD-08 出土遺物
- SD-21 出土遺物
- SD-32 出土遺物
- SD-34 出土遺物(1)

図版39

- SD-34 出土遺物(2)

図版40

- SD-34 出土遺物(3)
- SD-35 出土遺物(1)

図版41

- SD-35 出土遺物(2)
- SD-39 出土遺物
- SD-54 出土遺物
- P-018 出土遺物

図版42

- P-437 出土遺物
- P-534 出土遺物
- P-796 出土遺物
- P-1078 出土遺物
- P-1269 出土遺物
- P-906 柱根
- P-1405 柱根

図版43

- 遺構外出土遺物(1)

図版44

- 遺構外出土遺物(2)

第1章 発掘調査の経緯

1. 発掘調査に至る経過

本高円ノ前遺跡は、鳥取市本高地内の独立丘陵裾の微高地上、標高約8～10mに立地する。過去の分布調査などにより遺物の散布が確認されており、集落遺跡などの可能性が指摘されていた。また、昭和44年(1969年)、丘陵と服部集落との間の水田から圃場整備工事によって弥生時代中～後期の土器とともに田下駄、大足が出土している。古来、丘陵の北東側に広がる菖蒲集落を中心とする平野部一帯は、律令体制下では因幡国高草郡に含まれ、白鳳時代の菖蒲廃寺の建立や、郡衙の推定地など歴史ある地域として知られている。本格的な発掘調査例としては、昭和62年に北村恵儀谷遺跡、平成3年に釣山古墳群、平成4年に古海古墳群、翌5年に菖蒲遺跡、平成6・7年度に山ヶ鼻遺跡、平成11・12年度には服部墳墓群などがあり、古くは縄文時代後期から人の足跡がたどれる地域となってきた。

今回の発掘調査の契機となった中国横断自動車道 姫路鳥取線整備促進関連事業は、服部墳墓群が所在する丘陵と丘陵裾に建設予定地が計画されているものである。服部墳墓群については平成11・12年度に本格的な発掘調査を終えている。工事範囲内の丘陵縁辺の微高地では遺物散布地が含まれていることから、鳥取市教育委員会が平成11～13年度に試掘調査を実施した。調査の結果、今回の調査予定地には弥生時代と中世期を主とした遺構、遺物が確認された。鳥取市教育委員会はこれらの試掘結果をもとに、関係機関との路線変更等を含め種々の協議を行ったが、現状での保護、保存は難しく、記録保存で対応することとなった。

2. 発掘調査の経過

本高円ノ前遺跡の発掘調査は、財団法人鳥取市開発公社の委託を受け鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財調査センターが調査を実施した。

平成14年度は、資材搬入などの調査準備の後、平成14年10月から開始した。調査地内には用水路が機能しており、この水路を境に調査地を南北に二分し、調査は南側(A区)から着手して、北側(B区)を残土置き場として利用した。A区の調査が終了した後、残土を反転してB区の調査を行った。表土除去については重機を用いた。測量杭の設置は任意のライン(A—I)を基準として、直交する基準杭を遺構の密度に応じて適宜設置した。降雨や積雪の際、調査地の冠水、水没を防止するため排水溝を設置して常時排水を可能にした。調査期間の短縮を計り、A区については遺構の検出と並行して業務委託にて遺構測量を実施した。北側B区については調査面積が狭小のため、担当調査員、補助員で測量を行った。A区についてはラジコンヘリコプター、B区は高所作業車にて全体の写真撮影を行った。全ての調査が終了した後、調査地の埋め戻しを行い、業務委託にて再度地籍測量を実施し、主な畦畔や排水路の復元を行った。遺構は弥生時代と中世期を中心に大きく2時期が存在するが全て同一面において検出している。検出した遺構は総数1,368を数え、最終的な調査面積は3,236㎡である。

こうして、年度末3月下旬で現地調査を完了した。検出した各遺構、遺物については適宜写真撮影や実測を行った。出土した遺物と写真や図面などの記録類の整理は現地調査と並行して進め、遺物については、水洗い、バインダー処理等の後、注記、復元作業を行なった。また、本格的な報告書作成は平成15年度に行った。

3. 調査の組織・体制

発掘調査の組織、体制は以下のとおりである。

平成14年度	調査主体	財団法人	鳥取市文化財団	
		理事長	竹内 功 (鳥取市長)	
		副理事長	福田 泰昌	
			中川 俊隆 (鳥取市教育長)	
		常務理事	小谷 荘太郎 (事務局長兼務)	
	調査指導	鳥取市教育委員会事務局	文化課	
	事務局	財団法人	鳥取市文化財団	鳥取市埋蔵文化財調査センター
		所長	前田 均	
		主幹	山田 真宏	
		調査事務	秋田 澄世	
			白岩 千足	
			水戸口 直美	
	調査担当	財団法人	鳥取市文化財団	鳥取市埋蔵文化財調査センター
		調査員	藤本 隆之	
		調査補助員	小杉 雄貴	
			永田 りん太郎	
			井上 初恵	
平成15年度	調査主体	財団法人	鳥取市文化財団	
		理事長	石谷 雅文 (鳥取市副市長)	
		副理事長	中川 俊隆 (鳥取市教育長)	
			三田 三香子	
		常務理事	小谷 荘太郎	
	調査指導	鳥取市教育委員会事務局	庶務課	文化財室
	事務局	財団法人	鳥取市文化財団	鳥取市埋蔵文化財調査センター
		所長	前田 均	
		主幹	山田 真宏	
		調査事務	秋田 澄世	
			白石 千足	
	調査担当	財団法人	鳥取市文化財団	鳥取市埋蔵文化財調査センター
		調査員	藤本 隆之	
		調査補助員	永田 りん太郎	
			下多 みゆき	
			濱橋 博子	

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

鳥取市は県東部に位置し、面積237.25km²、人口15万人余りを擁する県庁所在地である。市域の三方は山に囲まれ、北は日本海を臨む鳥取砂丘が広がる。市の中央には中国山地を源とする千代川が流れ、この下流域に広がる鳥取平野は、縄文時代前期の縄文海進時には複雑に入り組んだ内湾状を呈していたとみられ、海退に伴う湖沼化と海岸部の砂洲の発達、千代川が運ぶ膨大な土砂の堆積によって形成された沖積平野である。

今回調査した本高円ノ前遺跡は、鳥取市本高地内に所在する標高8～9mの丘陵裾に立地する。JR鳥取駅から直線にして南西約3kmの位置である。この丘陵は東に千代川を望みながら中国山地から鳥取平野へと延びる丘陵の、標高294mの八町山を頂として更に北東へと延びる丘陵北端部に位置し、最北端は有富川を隔てた釣山(標高105m)である。1985年(昭和60年)の鳥取国体を一つの契機として、国道29号線(旧国道53号線鳥取南バイパス)が菖蒲と服部集落の間を通過して南吉成へと開通し、その沿線に店舗や各種事業所が進出するなど調査地以北では開発が著しい地帯となっている。ただ、南側の丘陵縁辺部においては、のどかな田園風景が広がる地域でもあるが、今後の開発によってその様相は一変するものと思われる。

縄文時代

鳥取平野において最初に人の足跡がたどれるのは、千代川東岸の浜坂地内の砂丘で採集された黒曜石製の有舌尖頭器である。詳細は不明ながら旧石器時代まで遡る可能性をもつ遺物である。続く縄文時代前期の遺跡として、砂丘後背地の低湿地に立地する福部村栗谷遺跡が中期から始まる直浪遺跡とともに、後・晩期まで続く遺跡として知られている。やや遅れ、前期末の大歳山式土器が千代川東岸の丘陵上に立地する美和古墳群下層遺跡から微量ながら出土している。また、調査地から北西へ3.5km、湖山池南東岸の低湿地に立地する桂見遺跡は現在のところ前期末を初源とし、東桂見遺跡、布勢第1遺跡とともに後期を中心とした湖山池南東岸の低湿地遺跡群として知られる。桂見遺跡ではこれまで数度にわたる調査が行われているが、平成6、7年度に全長7.2、6.4mの丸木舟が相次いで出土し話題となった。桂見遺跡の東側に位置する布勢第1遺跡では木組みを有する水路や漆塗で木製の広口壺や腕輪が出土し、高度な漆技術が示された。また、湖山池に浮かぶ青島遺跡では、磨消縄文の浅鉢など多くの遺物が出土している。中期の遺跡としては砂丘地に立地する栃木山遺跡、追後遺跡、天神山遺跡があげられるが、中期の断片的な土器の出土にとどまる。今回、調査範囲に該当しなかったが平成11年度の試掘調査において隣接地から晩期の突帯文土器が出土している。また、そのさらに北側、釣山の北東に広がる山ヶ鼻遺跡で、縄文時代後期後葉から晩期前葉に比定される土器群が出土している。さらに千代川の自然堤防上に立地する古海遺跡では突帯文土器の良好な資料が出土しており、中期から晩期へかけて遺跡の立地場所が推移していく状況が窺える。布勢第1遺跡では晩期後半になると平野中心部の微高地上に遺跡が進出するようになる。このように後期も後半を過ぎると遺跡は自然堤防上へ進出するようになり、晩期後半になると平野中心部の微高地へ進出するようになる。また、千代川左岸では、岩本第2遺跡、帆城遺跡、湖山第2遺跡、岩吉遺跡、大桝遺跡、里仁遺跡(仮称)等で少量の土器片が出土している。千代川東岸では、平野部に位置する大路川遺跡でトチ・アラカシなどの堅果類の詰まった貯蔵穴5基、土製耳飾、後期～晩期前半の土器等が検出され、この他晩期の土器が断片的ながら、西大路土居遺跡、古市遺跡などで出土している。

弥生時代

弥生時代に入り、縄文時代晩期からの遺跡が引き続き営まれるが、前期の遺物を断片的に出土するだけで中期へ継続しない傾向がみられ、前期の実態は不透明な部分が多い。前期の遺物を出土する遺跡として、青島遺跡、湖山第1・2遺跡、布勢第1遺跡、桂見遺跡、帆城遺跡、天神山遺跡、身干山遺跡な

どが挙げられる。そんな中、鳥取平野の拠点集落と考えられている岩吉遺跡では、千代水平野の自然堤防上の砂州を中心とした微高地に立地し、これまで数度の調査が行われている。遺跡の範囲は南北1,300m、東西800mに及び、鳥取平野で最初に稲作を導入した遺跡と考えられる。ただ前期の資料は数少なく、中期の遺物も今のところ断片的な出土にとどまり、昭和63～平成2年度の調査では、弥生中期中葉末から後期にかけて掘立柱建物、土坑、溝状遺構等の遺構が検出されている。この他、千代川東岸では西大路土居遺跡、富安遺跡が前期の遺物を出土する遺跡として知られる。中期中頃には自然堤防上に出現する古海、菖蒲、山ヶ鼻、服部、秋里遺跡などがある。中期後葉になると段丘状の微高地に立地する遺跡が目立ち始め、帆城、湖山第2、布勢第2、大柄、北村恵儀谷遺跡などがその例である。こうして後期に入ると松原谷田、桂見遺跡をはじめ数は飛躍的に増加するとともに遺跡内の住居も増加傾向がみられ、それぞれ古墳時代へと営まれていく。

この地域の弥生集落の一特徴として、玉作り関連の遺物が帆城、岩吉、秋里遺跡で出土している他、布勢第2遺跡で玉作り工房とみられる竪穴住居が検出されている。この他に、祭祀遺跡として湖山池に浮かぶ青島遺跡、湧泉に展開した塞ノ谷遺跡、弥生中期を初現とした秋里遺跡があり、高住字宮ノ谷では、扁平鈕式の流水文銅鐸が出土している。

周辺の弥生時代の遺跡としては、千代川水系の氾濫原にあたる平野部にあたり、服部集落西側の標高7～8m程度の微高地に服部遺跡が内包している。昭和44年、圃場整備に伴う工事によって弥生時代後期の土器とともに田下駄、大足などの木製品が出土している他、服部遺跡出土とされる弥生時代中期の土器が鳥取県立博物館で所蔵されている。また、調査地より西側1.3kmの丘陵裾部の微高地には北村恵儀谷遺跡が位置しており、後期を主体とする竪穴住居や土坑、掘立柱建物などが検出されている。また、北側の独立丘陵の釣山では、弥生時代後期の住居跡が検出されている。調査地から0.8～1.5km北の自然堤防上の微高地には、山ヶ鼻遺跡、菖蒲遺跡が位置しており、中期中葉～後期の土坑や重複する溝状遺構が検出されている他、山ヶ鼻丘陵では、中期の竪穴住居、貯蔵穴が調査されている。

こうして弥生時代も後期に入ると、諸集団の統合がすすみ、千代川東岸の南部地域の勢力に対するかのように地域勢力として目覚ましい台頭がみられる。その構造を具体的に示すものとして挙げられるのが、布勢鶴指奥1号墓、第1土壙墓を中心とした桂見土壙墓群である。これらは、湖山池を望む丘陵上に突如造営され、この中で最も古い布勢鶴指奥1号墳丘墓は後期中葉の造営で、次の時期となる西桂見墳丘墓は四隅突出型墳丘墓と考えられており、突出部を含め一辺64×高さ5mと傑出した規模である。続く桂見土壙墓群では調査前重機の削平・攪乱を受けていた後の調査であったが、丘陵頂部に位置し、石列と地山の浅い掘削によって12mの方形状に墓域を区画し、中心主体とみられる第1土壙墓でのガラス製勾玉、水銀朱の出土などから墳丘墓であった可能性があると考えられる。この他に、千代川東岸では、桂見周辺の勢力に対峙すると考えられている郡家町下坂1号墓、紙子谷遺跡門上谷1・2号墓がある。このうち1号墓は長辺24mの規模で26基の埋葬施設をもち、ガラス製管玉や鉄刀などが出土している。この他、これまで調査事例の少なかった弥生時代の墳墓は、後期前葉に位置付けられる滝山猿懸平2号墓をはじめ、土壙墓については古墳築造以前の遺構として検出される例(六部山古墳群など)もあり、弥生時代の墳墓の調査例は今後増加していくものとみられる。

古墳時代

古墳時代になると、平野周辺部の丘陵上に大小さまざまな古墳が造られるようになる。引き続き千代川西岸では湖山池南東岸の桂見古墳群、倉見古墳群などを中心として展開されるが、これらは弥生時代からの系譜を引く方墳である。桂見1号墳は長辺22m×高さ2.5m、続いて作られた2号墳は長辺28m×高さ4.5mの規模で長大な木棺から舶載鏡を出土している。これらに続く主体部や副葬品等卓越した内容の古墳は今のところ明らかになっていない。10m前後の小規模古墳として倉見2～7号墳、桂見10・16号墳が調査されており、前期後半～中期初頭とやや遅れて丘陵上に造営されている。土器転用枕

や弥生時代からの系譜とみられる湾曲する小口を有する木棺、舟形木棺の採用が特徴的であり但馬から丹後地方との同期の交流を窺う上で興味深い。周辺では、これまでに判明しているものでは、釣山24号墳(長辺22m、方墳)、銅鏡を出土した古海40号墳を含め古海古墳群、徳尾古墳群が前期古墳として知られている。また、調査地に隣接する服部墳墓群では平成11・12年度に調査が行われ、弥生時代の墳墓が3基、前期古墳が3基、後期古墳が4基確認されており、前期古墳である服部18号墳から捩文鏡が出土している。中期になって前方後円墳としてそれぞれ未調査のため内容は不明瞭ながら、里仁29号墳(全長85m)が、やや遅れて栢間1号墳(全長92m)、前方後方墳では古海36号墳(全長67m)などが点在する。調査例としては方墳で構成される里仁古墳群があり、畿内地方の影響を強く受けた鱗付円筒埴輪が出土している。また、最近調査された下味野古墳群では箱式石棺より鉄鉾が出土している。後期に入って小規模古墳は墳丘規模が全体的に小型化する傾向があり、支稜線上にも造られるようになる。前方後円墳として布勢1号墳(全長59m)、大熊段1号墳(全長46.5m)があり、三浦1号墳(全長36m)、桂見6号墳(全長24.5m)、釣山2号墳(全長26.4m)等のように小規模な前方後円墳の築造もみられるようになる。このように小規模な前方後円墳を比較的多く有する古墳群として良田古墳群、松原古墳群などが挙げられる。桂見古墳群では湾曲した小口穴をもつ木棺が再び採用されるなど木棺墓が主流であり、千代川右岸に比べて箱式石棺の事例が少ないようである。千代川左岸では古墳の内部構造については右岸に比較して調査例が少なく特に湖山池周辺の横穴式石室については6世紀中葉の葦岡長者古墳(吉岡1号墳)、後葉の倉見9号墳、時期不明の石場山5号墳、高住12号墳が確認されているだけである。石材の豊富な東岸と比べて全体的に横穴式石室の造営が数少なく東岸でよく見られる所謂「中高式天井石室」とは異なる石室形態をとるようである。ただ、野坂川右岸の丘陵東側斜面に立地する山ヶ鼻古墳(古海13号墳)は巨石を削り抜いた石棺式石室で7世紀中頃の築造でありその特徴的の石室構造とともに数少ない後期～終末期古墳として、7世紀後半に創建されたと考えられている菖蒲廃寺につながる貴重な存在である。

古墳時代の集落の調査例は比較的少ないものの、現在のところ古墳の立地する丘陵の後背地微高地上、現集落と重なって営まれたものと推察されている。弥生時代から続く遺跡として、布勢第2遺跡、桂見遺跡、帆城遺跡、湖山第1、湖山第2遺跡、天神山遺跡等がある。いずれも大集落とはいかず微高地上に住居跡が点在するといった状況で、西桂見遺跡の調査から、弥生時代丘陵上にみられた住居も古墳築造期になると丘陵斜面へ下りていくとされる。この他に千代川左岸では、岩吉、菖蒲、山ヶ鼻、大栢遺跡等がある。菖蒲遺跡では釣山裾の微高地に焼失住居が検出されている。しかし菖蒲・服部の平野部周辺では中期になると溝状遺構を除いて明確に古墳時代中後期に比定される遺構は7世紀に入るまでみられなくなるようである。また、この時期の特徴的な遺跡として、秋里、塞ノ谷遺跡を挙げることができる。前者は古墳時代を中心として弥生後期、奈良・平安時代と祭祀色が濃く、特に多量の土師器とともに各種模造土・石製品が出土する土器群、土器溜状遺構が特徴的である。後者は湧泉を中心に弥生～古墳時代と継続して展開され、分銅形土製品や、舟、刀等各種木製模造品が注目される。

歴史時代

7世紀に入ってから、白鳳後期創建とされる菖蒲廃寺に象徴されるように菖蒲村周辺は古代山陰道の通過地点とともに駅衛、郡家の推定地でもあり、律令期に入って鳥取平野西岸の中心的地域であったとされる。現在でも菖蒲集落の西に菖蒲廃寺の塔の心礎とみられる礎石があり、この付近で土師百井式軒丸瓦が出土している。またその250m西の山ヶ鼻遺跡では、菖蒲廃寺の時期と重なる7世紀の掘立柱建物群、溝状遺構、土坑等が検出されている。千代川対岸の古市遺跡では7世紀後半から平安時代にかけての掘立柱建物と奈良三彩小壺、墨書土器などが出土している。また、律令体制下のこの地域は、天平勝宝7年(755年)、『東大寺東南院文書』「東大寺領因幡国高草郡高庭庄坪付注進状案」から南北10条にわたり条里制が施行されていたことが明らかとなっている。この時期、菖蒲遺跡では釣山沿いの微高地に8世紀後半の総柱建物が検出されている。しかし高庭庄の経営はうまくいかず、その後延暦20年(801

年)、延暦22年(803年)東大寺から庄域の多くが藤原縄主、藤原藤嗣へ売却され、残りの散在する5町8反余りを中心として開発を行ったが、その後10世紀後半には完全に没落し、長保6年(1004年)を最後に史料に見られなくなる。10世紀初頭から国衙領体制が成立していく中で国衙領として再編されたものと考えられ、中世には一部を高草郡の郡領寺である薬師寺(後の座光寺)が有していたと『因幡民談記』に記されている。その間の遺構として、山ヶ鼻遺跡のそれぞれ墨書土器などが出土した9世紀後半の井戸や13世紀に至る多量の遺物が出土した大形土坑があり、菖蒲遺跡では9世紀後半の墨書土器が出土している。また、岩吉遺跡では8～10世紀にかけて溜り状遺構や自然流路から567点にもおよぶ多量の墨書土器、人形、「天長二年(825年)税帳」と記された題箋軸を含む木簡等が出土し、桂見遺跡堤谷地区では8世紀後半、9世紀後半の掘立柱建物が検出され、いずれも公の機関の存在を示唆する報告がなされている。山ヶ鼻遺跡では輸入陶磁器類が土坑や井戸から出土しており、菖蒲遺跡では、京都、近江産の緑釉陶器片とともに、白磁片、青磁片が多数出土していることなどから、高庭庄没落後も中世にかけて何らかの統治機関的なものがあったと考えられている。

貞治3年(1364年)、因幡守護に山名氏が任じられる。山名氏は15世紀に入って守護所を布施に移して布施天神山城を築き、鳥取城へ移るまでの100年程の間、因幡支配の拠点とした。『大幅絵図』『因幡民談記』所載の17世紀後半の古絵図には、天神城周辺の様子が描かれており、一部調査されて内堀や土塁、井戸、焼け落ちた建物跡等が検出されている。また、「葬地」と記された丘陵である布勢鶴指奥墳墓群、桂見墳墓群で中世墓が検出され、この他に西桂見遺跡、大熊段遺跡、三浦遺跡、里仁古墳群、徳尾古墳群や、中世の埋葬施設とみられる集石遺構が釣山古墳群で検出されている。また、中世の倉庫跡が布勢第2遺跡で、長さ45m以上の土塁状遺構が西桂見遺跡で検出されている。

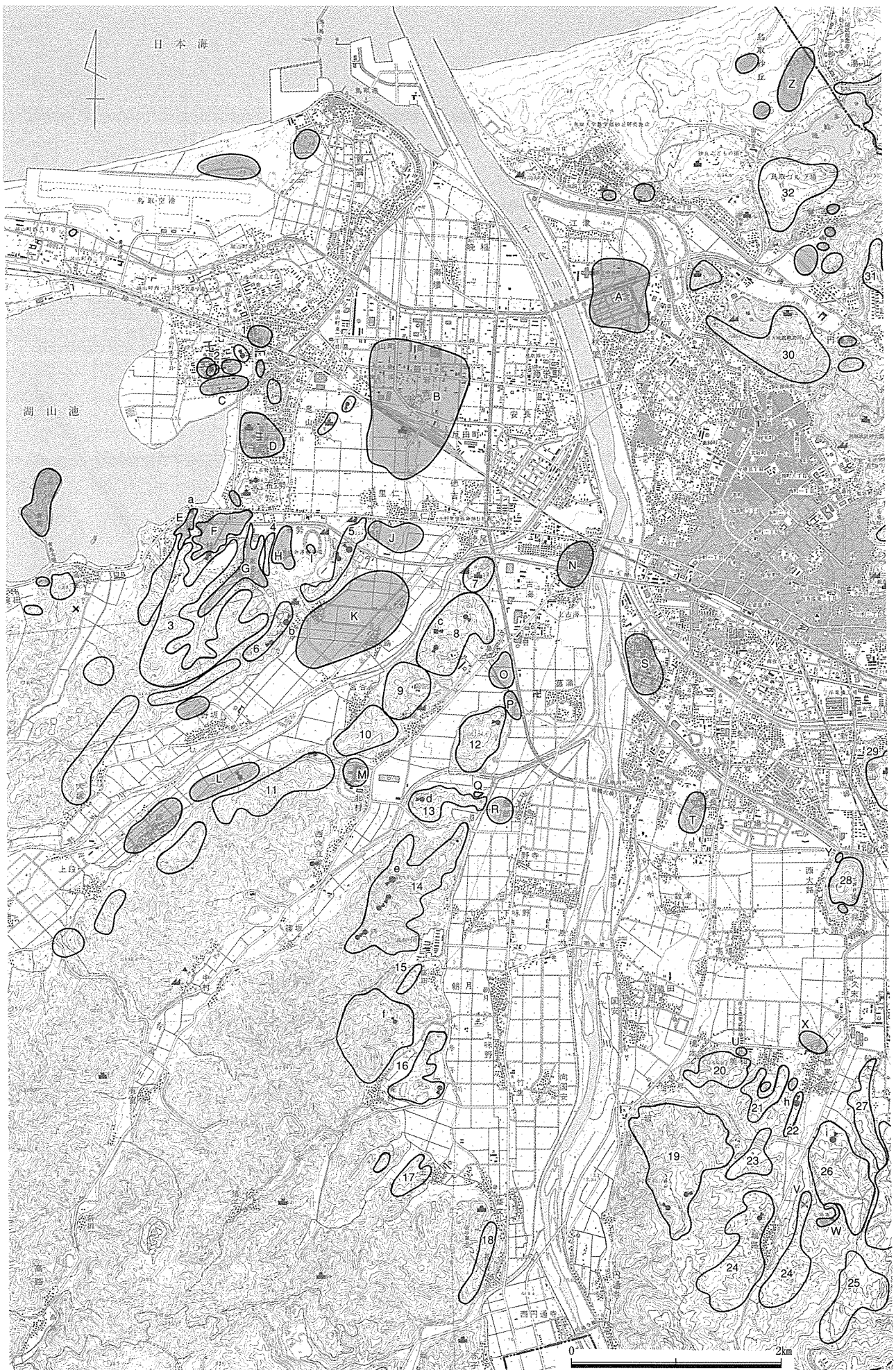
慶長5年(1600年)関ヶ原の合戦後鹿野城主となった亀井茲矩は、慶長年間(1596～1614年)によって行われた亀井堤と呼ばれる大規模な堤防や河原を取水口とする大井出用水を開削した。古海、菖蒲、服部地区を含む千代川西岸下流域一帯は安定した用水を確保できるようになった。

引用・主要参考文献

鳥取市『新修鳥取市史 第1巻 古代・中世篇』1983年
 平凡社『日本歴史地名大系第32巻 鳥取県の地名』1992年

第1図 遺跡名称

- | | | | |
|-------------|------------|-----------------|--|
| 1. 大熊段古墳群 | 25. 空山古墳群 | O. 山ヶ鼻遺跡 | <p>—凡例—</p> <p>集落遺跡・遺物散布地</p> <p>墳墓群・古墳群</p> <p>主要古墳</p> <p>横穴</p> <p>城跡</p> |
| 2. 三浦古墳群 | 26. 六部山古墳群 | P. 菖蒲遺跡 | |
| 3. 桂見墳墓群 | 27. 船木古墳群 | Q. 本高円ノ前遺跡 | |
| 4. 布勢鶴指奥墳墓群 | 28. 大路山古墳群 | R. 服部遺跡 | |
| 5. 里仁古墳群 | 29. 面影山古墳群 | S. 古市遺跡 | |
| 6. 桝間古墳群 | 30. 雁金山古墳群 | T. 宮長竹ヶ鼻遺跡 | |
| 7. 徳尾古墳群 | 31. 円護寺古墳群 | U. 橋本遺跡 | |
| 8. 古海古墳群 | 32. 開地谷古墳群 | V. 越路銅鐸出土地 | |
| 9. 本高古墳群 | 33. 湯山古墳群 | W. 七谷須恵器窯跡群 | |
| 10. 宮谷古墳群 | | X. 久末・古郡家・大路川遺跡 | |
| 11. 小森山古墳群 | A. 秋里遺跡 | Y. 西大路土居遺跡 | |
| 12. 釣山古墳群 | B. 岩吉遺跡 | Z. 追後遺跡 | |
| 13. 服部墳墓群 | C. 湖山第2遺跡 | a. 西桂見墳丘墓 | |
| 14. 下味野古墳群 | D. 天神山遺跡 | b. 桝間1号墳 | |
| 15. 篠田古墳群 | E. 西桂見遺跡 | c. 古海35号墳 | |
| 16. 横枕古墳群 | F. 桂見遺跡 | d. 服部23号墳 | |
| 17. 玉津古墳群 | G. 東桂見遺跡 | e. 下味野23号墳 | |
| 18. 長谷古墳群 | H. 布勢第1遺跡 | f. 横枕55号墳 | |
| 19. 八坂古墳群 | I. 布勢第2遺跡 | g. 横枕13号墳 | |
| 20. 橋本古墳群 | J. 里仁遺跡 | h. 古郡家1号墳 | |
| 21. 美和古墳群 | K. 大桝遺跡 | i. 六部山3号墳 | |
| 22. 古郡家古墳群 | L. 小森山遺跡 | | |
| 23. 園原古墳群 | M. 北村恵儀谷遺跡 | | |
| 24. 越路古墳群 | N. 古海遺跡 | | |



第1図 本高円ノ前遺跡周辺遺跡分布図



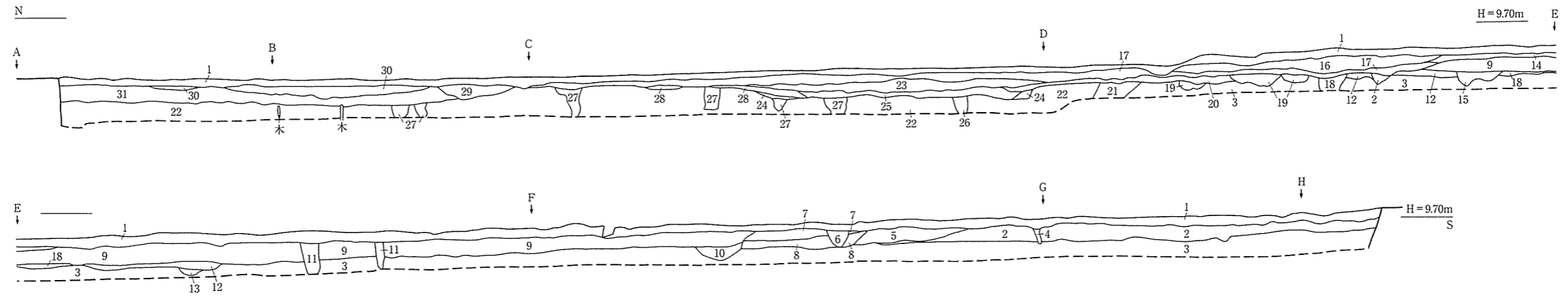
第2図 調査位置図

第3章 調査の結果

第1節 本高円ノ前遺跡の立地と基本層序 (第2・3図)

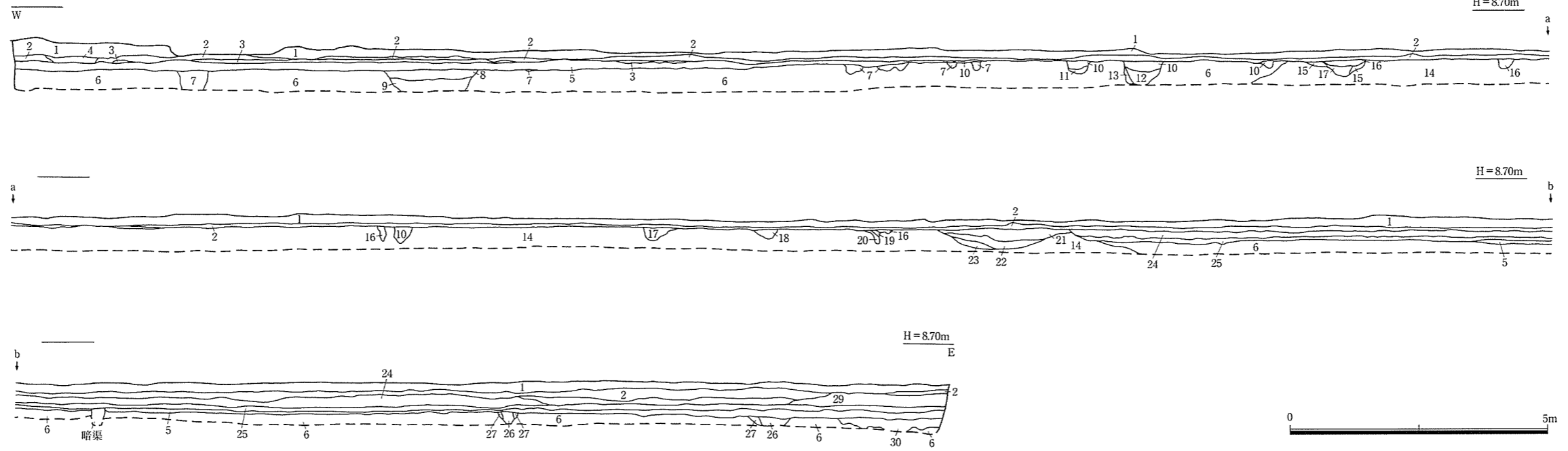
鳥取市本高地内の独立丘陵裾の微高地上、標高約8～10mに立地する。丘陵上には弥生時代の墳墓を含め50基の古墳が確認されている。大井出川を挟んで東側、服部集落までの田圃からは昭和44年(1969年)の圃場整備工事によって弥生時代中後期の土器、木製品が出土している。また、有富川を挟んで北東側、0.8～1.5kmには菖蒲遺跡、山ヶ鼻遺跡が位置しており、弥生時代と古代から中世期を主とした集落である。当地は以前から土器などの遺物の散布地として周知されていたが、中国横断自動車道 姫路鳥取線整備促進事業において建設予定地に該当するため平成11年度から13年度にかけて、遺跡の範囲、遺構、遺物の有無と埋蔵状況、遺跡の性格等の資料を得ることを目的とした試掘調査が実施された。その結果、隣接する字段木には顕著な遺構は確認されず、字円ノ前のみが調査対象地となった。これに伴い仮称であった遺跡名「本高段木遺跡」を「本高円ノ前遺跡」と正式に改めた。

調査地は丘陵裾に位置するため、北側を流れる有富川へ向かって南北に緩やかに傾斜する。調査前の標高は南端で9.9m、北端で8.1mである。比高差は1.8mを測る。地表から10～20cmは耕作土(褐色系10YR4/4～3/4の粘質土または粘質シルト)が堆積する。北半は田圃として利用されていたため、耕作土下には床土である灰黄褐色シルト10YR5/1～5/2が10cm程度堆積している。北半では標高9.2m前後の遺構検出面である褐色粘質土10YR4/4まで黄褐色粘土10YR5/6、褐色系砂混粘質土7.5YR4/4、10YR3/4が堆積する。北半は田圃として利用するため、削平を受けていると考えられるが、標高7.7m前後の遺構



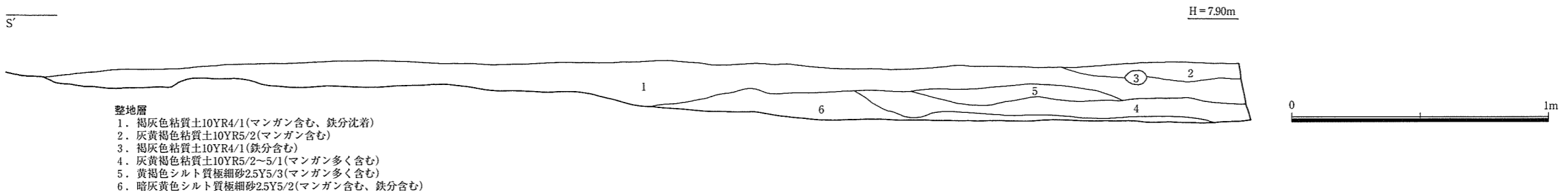
南北断面図

- | | | |
|--|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 暗褐色粘質土10YR3/4(耕作土) 2. 黄褐色粘土10YR5/6(にぶい黄褐色粘土10YR6/4混じる、鉄分多く含む・下位に鉄分沈着) 3. 褐色粘質土10YR4/4(マンガン含む) 4. 黒褐色粘質土7.5YR3/2(木根痕) 5. 褐色砂混粘質土7.5YR4/4 6. にぶい褐色粘質土(濁る) 7. 褐色砂混粘質土7.5YR4/4~4/6(濁る、黄色を帯びる) 8. 褐色粘質土10YR4/4~3/4(マンガン、鉄分含む、黄色を帯びる) 9. 暗褐色砂混粘質土10YR3/4(マンガン、僅かの炭化物含む) 10. 暗褐色粘質土7.5YR3/4(マンガン、僅かの炭化物含む) 11. 暗褐色粘質土7.5YR3/4(にぶい黄褐色粘土10YR6/3ブロック10%、マンガン、鉄分含む)
…木根痕 | <ol style="list-style-type: none"> 12. 暗褐色粘質土10YR3/4(マンガン、鉄分多く含む) 13. 暗褐色粘質土10YR3/4~4/4(マンガン、鉄分含む、濁る) 14. にぶい黄褐色砂混粘質土10YR4/4~4/3(マンガン、鉄分含む) 15. 暗褐色粘質土7.5YR3/3(マンガン、鉄分、炭化物含む、黒色帯びる) 16. にぶい黄褐色砂混粘質土10YR4/3(マンガン含む) 17. 褐色砂混粘質土7.5YR4/4(マンガン、鉄分含む、黄色を帯びる) 18. 灰褐色粘質土7.5YR4/2(褐色粘質シルト10YR4/4~4/6ブロック15%、マンガン、鉄分含む) 19. 黒褐色粘質土7.5YR3/2(褐色粘質シルト10YR4/4~4/6ブロック5%含む、マンガン、鉄分、炭化物含む) 20. 褐色砂混粘質土7.5YR4/2(マンガン、鉄分、炭化物含む、褐色粘質シルト10YR4/4~4/6ブロック10~20%含む) 21. 褐色粘質シルト10YR4/4~4/6(マンガン、鉄分含む) 22. にぶい黄褐色シルト10YR4/4~4/6(鉄分、マンガン含む) | <ol style="list-style-type: none"> 23. にぶい褐色砂混粘質土7.5YR5/3(マンガン、鉄分含む) 24. 褐色砂混粘質土7.5YR4/1 25. 褐色砂混粘質土7.5YR4/1(マンガン多く含む、褐色を帯びる) 26. 黒褐色粘質土7.5YR3/2(にぶい黄褐色シルト10YR5/4ブロック5%、マンガン、炭化物含む) 27. 褐色粘質土7.5YR4/1(にぶい黄褐色シルト10YR5/4ブロック5%、マンガン、炭化物含む) 28. 暗褐色粘質土7.5YR3/4(マンガン多く含む、灰色帯びる) 29. 暗褐色粘質土7.5YR3/4(マンガン多く含む、灰色帯びる) 30. 褐色粘質シルト10YR4/4(にぶい黄褐色粘土10YR5/4ブロック20~30%含む、マンガン、鉄分含む、黄色を帯びる) 31. 灰黄褐色粘質土10YR5/2(鉄分、マンガン含む、褐色を帯びる) |
|--|--|---|



東西断面図

- | | | |
|---|---|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 褐色砂混粘質シルト10YR4/4(鉄分含む、0.5~3.0cm小石1%以下含む)耕作土 2. 灰黄褐色シルト10YR5/2~5/1(鉄分含む)(床土) 3. 黄褐色粘質シルト10YR5/8(鉄分沈着) 4. 黄褐色細砂10YR5/8(鉄分含む) 5. 灰褐色砂混粘質土7.5YR4/1(マンガン多く含む、鉄分含む、土器(中世~弥生)含む、遺物包含層) 6. 暗灰黄色(シルト質)極細砂2.5Y5/2(上位10~15cmに鉄分多く含む) 7. 黄褐色粘質シルト2.5Y4/1(暗灰黄色(シルト質)極細砂2.5Y5/2混じる、鉄分含む) 8. 黄褐色粘質シルト2.5Y5/1(暗灰黄色シルト質極細砂2.5Y5/2混、鉄分多く含む) 9. 黄褐色粘質シルト2.5Y4/1(暗灰黄色シルト質極細砂2.5Y5/2混) 10. 灰黄褐色シルト10YR5/2~5/1(褐色砂混粘質土7.5YR4/1ブロック僅かに含む、鉄分沈着) | <ol style="list-style-type: none"> 11. 灰黄褐色シルト質極細砂10YR5/2(上位に鉄分、マンガン多く含む) 12. 灰黄褐色シルト質極細砂10YR5/2~5/1(マンガン、鉄分含む) 13. 灰褐色シルト10YR5/1(鉄分、マンガン含む) 14. 暗灰黄色シルト質極細砂2.5Y5/2(鉄分含む) 15. 褐色シルト10YR4/4(黄褐色シルト質極細砂2.5Y6/2ブロック20%含む、マンガン多く含む) 16. にぶい黄褐色粘質土10YR5/3~5/2(鉄分、マンガン含む) 17. 灰黄褐色粘質シルト10YR5/2(上位に鉄分沈着) 18. 灰黄褐色粘質シルト10YR5/2(マンガン、鉄分含む、灰色帯びる) 19. にぶい黄褐色砂混粘質土10YR4/3(マンガン含む、僅かな鉄分、炭化物含む) 20. 暗褐色粘質シルト7.5YR3/4(マンガン多く含む) | <ol style="list-style-type: none"> 21. にぶい黄褐色粘質シルト10YR5/4(僅かに鉄分含む) 22. にぶい黄褐色粘質土10YR5/3(マンガン多く含む、鉄分含む)褐色帯びる 23. にぶい黄褐色粘質土10YR4/3(僅かに鉄分含む) 24. 灰黄褐色粘質シルト10YR5/2(僅かに鉄分含む) 25. 褐色シルト10YR4/4(マンガン多く含む、鉄分含む)(26ブロック7~10%含む、濁る) 26. 黄褐色シルト2.5Y5/1~5/1(鉄分含む)(下位に鉄分沈着) 27. 黒褐色粘質シルト10YR3/2(黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/3ブロック10%含む、鉄分、僅かにマンガン含む) 28. 黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/3(27のブロック3%含む)(鉄分含む) 29. にぶい黄褐色粘質土10YR4/3(マンガン多く含む)褐色帯びる 30. 褐色粘質土7.5YR4/2(マンガン多く含む、鉄分含む) 31. 褐色粘質土7.5YR4/1(マンガン多量に含む、10~15cm石10%含む、下位に鉄分沈着) |
|---|---|---|



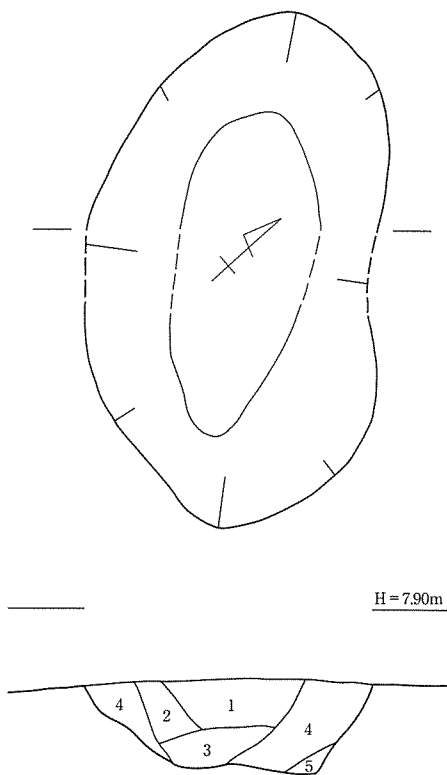
- 整地層
1. 灰褐色粘質土10YR4/1(マンガン含む、鉄分沈着)
 2. 灰黄褐色粘質土10YR5/2(マンガン含む)
 3. 褐色粘質土10YR4/1(鉄分含む)
 4. 灰黄褐色粘質土10YR5/2~5/1(マンガン多く含む)
 5. 黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/3(マンガン多く含む)
 6. 暗灰黄色シルト質極細砂2.5Y5/2(マンガン含む、鉄分含む)

第3図 調査地断面図

検出面は東半と西半で段階的に若干異なり、東側は褐色シルト10YR4/4、西側は暗灰黄色シルト質極細砂2.5Y5/2である。検出面の上位には10cm弱の遺物包含層である褐灰色砂混粘質土7.5YR4/1が堆積しており、弥生時代から中世までの土器類を含む。標高7.7~9.2mの暗灰黄色シルト質極細砂、褐色シルト、褐色粘質土が遺構検出面となる。遺構は弥生時代と中世期の大きく2時期が存在するが全て同一面で検出している。

第2節 弥生時代の遺構・遺物

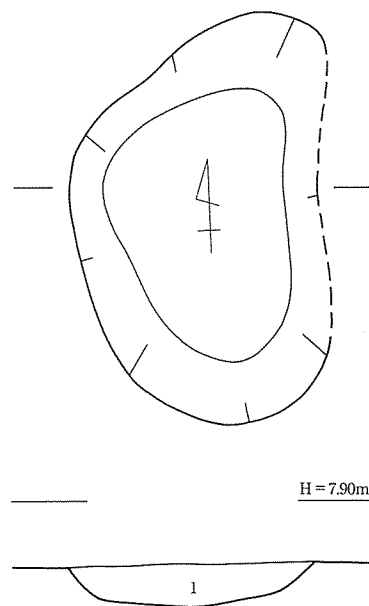
弥生時代の遺構は北半西側から土坑2基(SK-31・32)、溝状遺構3条(SD-32・34・35)のみを検出した。北半東側、南半からは明確に当時期に該当する遺構は検出されなかった。このことは、当該期の遺跡の中心は今回の調査地から外れるものと考えられ、北側を流れる有富川方向へ広がるものと考えられる。



1. 暗灰黄色砂混粘質シルト2.5Y5/2~4/2(黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/4ブロック1%、マンガン、鉄分含む)
2. 暗灰黄色砂混粘質シルト2.5Y4/2(マンガン、僅かの鉄分含む)
3. オリーブ褐色シルト質極細砂2.5Y4/4~4/6(僅かにマンガン、鉄分含む)
4. 黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/4(鉄分、僅かにマンガン含む)
5. オリーブ褐色シルト質極細砂2.5Y4/3~5/3(鉄分含む)

0 50cm

第4図 SK-31実測図



1. 暗灰黄色シルト2.5Y5/2(マンガン、鉄分含む)

0 50cm

第5図 SK-32実測図

1. 土坑

SK-31(第4・6図)

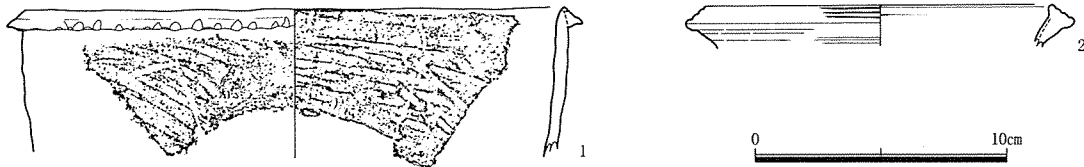
北半の西側に位置する。平面形は不整楕円形を呈す。長さ2.74m、幅1.66m、深さ50cmを測る。主軸はN-40°-Wにとる。遺物は縄文土器(1)、壺甕類の口縁部(2)などが出土している。

(1)は鉢の口縁部、所謂「突帯文土器」。口縁部は直立し、端部突帯を外方につまみ出す。突帯には刻み目を有する。内外面には工具による条痕が観察される。(2)は所謂「繰上げ口縁」。口縁端面に3条の凹線を有する。

SK-32(第5・7図)

北半の西側、SK-31の北側に位置する。平面形は不整楕円形を呈す。長さ1.03m、幅0.79m、深さ11cmを測る。主軸はN-17°-Wにとる。遺物は甕(1)が出土している。

(1)の口縁部は短く外傾し、端部で肥厚して面を有する。外面、ハケ目後下半ヘラ磨き。内面頸部以下ハケ目。



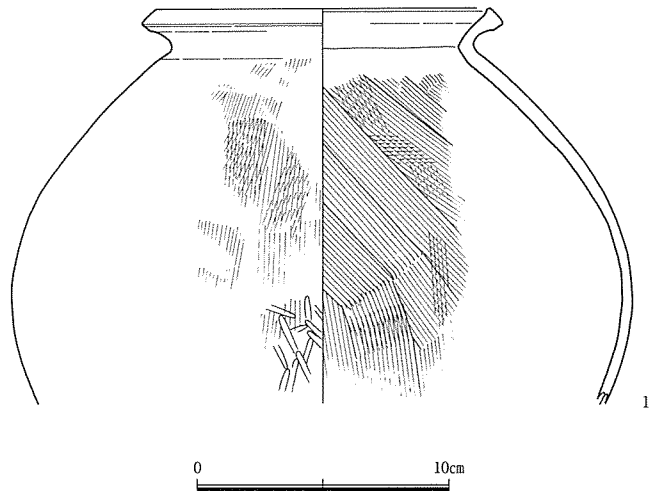
第6図 SK-31出土遺物実測図

2. 溝状遺構

SD-32(第7・10図)

主軸を概ねN-43°-Eにとるが緩やかに蛇行する。両端は調査地外へと延びる。溝幅は60cm前後を測り、深さは検出面から15cm程度、底面の標高は7.64~7.70mである。遺物は土器が数点出土している。

(1・2)は壺の口縁部。共に所謂「繰上げ口縁」と称される端部が下方に肥厚して面を有するものである。共に端面に3条の凹線を有する。

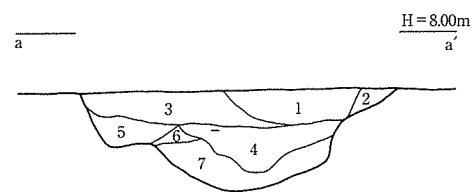
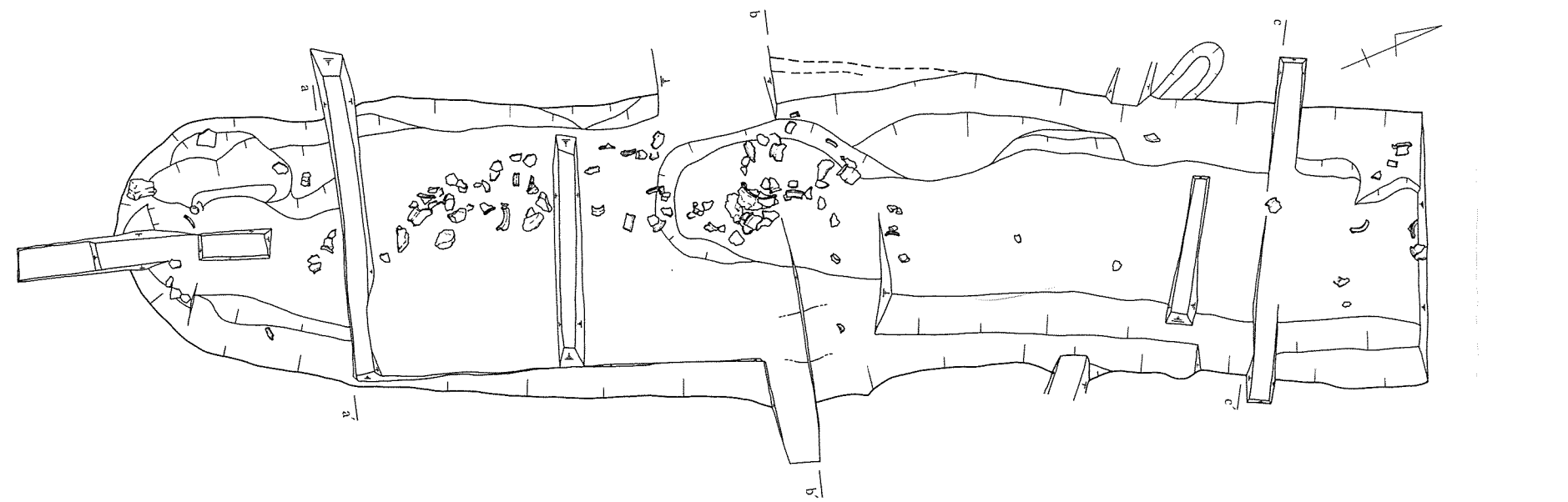


第7図 SK-32出土遺物実測図

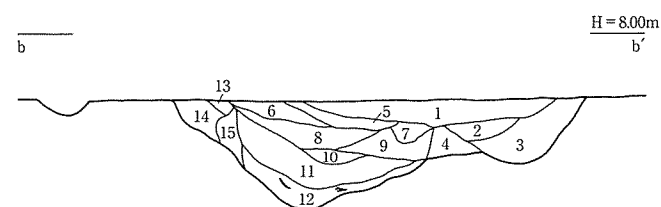
SD-34(第8・11・12図)

主軸をN-21°-Eにとる。南端は終息するが北端は調査地外へと延びる。長大な土坑の可能性もある。検出長は9.14m、溝幅は169~219cmを測り、深さは検出面から55~70cm、底面の標高は7.0~7.16cmである。部分的に平坦面を有する。断面観察から大きく3回程度の埋没回数が窺える。遺物は埋土下半より平均的に出土するが南端から中央にかけて集中する傾向がある。

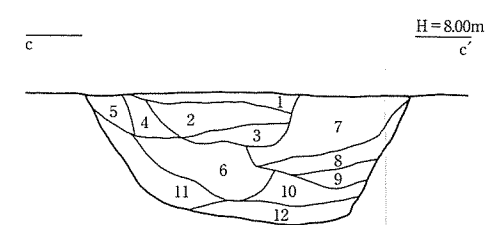
(1~5)は壺、(6~12)は甕。(1)を除き口縁部は全て「繰上げ口縁」を有し、端部には2~4条の凹線が周回する。(1)は内湾して上方へ立ち上がり、端部は肥厚して面を有する。口径は(2)が23.6cmと若干大きくなるが、他は11~16cm程度である。調整は外面にヘラ磨き(1・3・5・6・8~10・12)、内面にヘラ磨き(1・3・10・12)を有するものがある。内面は(1・2)を除き、基本的には頸部以下にヘラ削りを有する。(5)には竹管文を2ヶ所に有する。(13~15)は比較的扁平であり、脚台部を欠失す



1. 暗灰黄色シルト2.5Y5/2(濁る、マンガン、鉄分含む)
2. 暗灰黄色シルト2.5Y5/2~6/2(マンガン、鉄分含む)
3. 黄褐色シルト2.5Y5/3(鉄分含む)
4. 黄灰色粘質シルト2.5Y5/1(灰色を帯びる、鉄分含む)
5. 暗灰黄色シルト2.5Y5/2~5/1(マンガン、鉄分含む)
6. 黄褐色シルト2.5Y5/3(鉄分含む)
7. 灰黄色シルト質極細砂2.5Y6/2~5/2(黄灰色粘質シルト2.5Y5/1ブロック3%含む、鉄分含む)



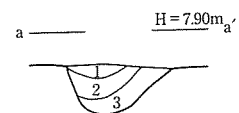
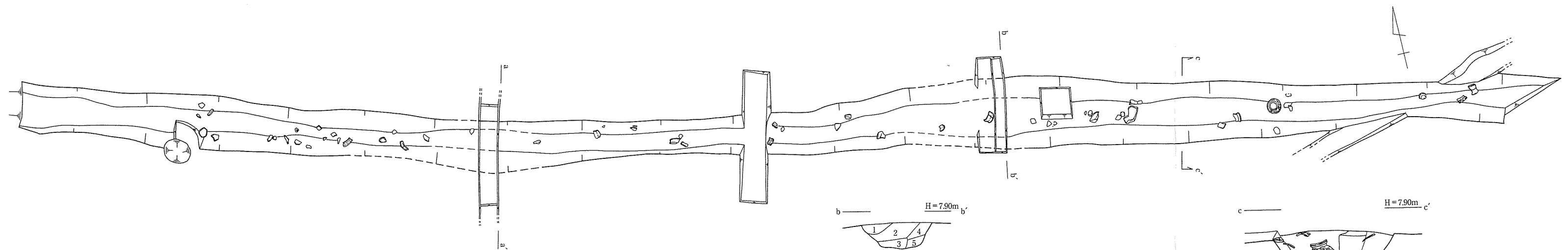
1. 黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/3(極僅かに炭化物含む)
2. 黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/4(極僅かに炭化物含む)
3. 黄褐色粘質シルト質極細砂2.5Y5/3(僅かに炭化物含む)
4. 黄褐色粘質シルト質極細砂2.5Y5/3(僅かに炭化物含む)
5. 暗灰黄色シルト質極細砂2.5Y5/2(炭化物含む)
6. 黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/3
7. 暗灰黄色シルト質極細砂2.5Y5/2(炭化物多く含む)
8. 黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/3(炭化物含む)
9. 黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/3(褐灰色粘質土10YR4/1ブロック1%含む、鉄分含む)
10. におい黄色シルト質極細砂2.5Y6/3
11. 黄褐色粘質シルト2.5Y5/3
12. 褐灰色砂混粘質土10YR4/1(炭化物含む)
13. におい黄褐色シルト質極細砂10YR5/3
14. 黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/4(僅かに炭化物含む)
15. 黄褐色粘質シルト質極細砂2.5Y5/3(僅かに炭化物含む)



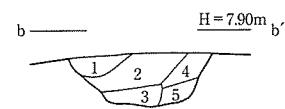
1. 灰黄褐色粘質シルト10YR5/2(鉄分含む)
2. 灰黄褐色シルト10YR4/2(黒色を帯びる、鉄分、炭化物含む)
3. 暗灰黄色シルト質極細砂2.5Y5/2(黄褐色粘質シルト2.5Y5/1ブロック10%含む、鉄分含む)
4. 暗灰黄色シルト質極細砂2.5Y5/2(灰黄褐色シルト10Y4/2ブロック15%含む、鉄分含む)
5. 黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/2(濁る、鉄分含む)
6. 暗灰黄色シルト質極細砂2.5Y5/2~5/3(鉄分含む、極僅かの炭化物含む)
7. 暗灰黄色シルト2.5Y5/2~6/2(鉄分含む)
8. 黄灰色粘質シルト2.5Y5/1(鉄分含む)
9. 黄灰色粘質シルト2.5Y4/1~5/1(鉄分含む)
10. 暗灰黄色極細砂2.5Y5/1
11. におい黄色粘質シルト2.5Y6/3~6/2(僅かに鉄分含む)
12. 黄灰色粘質シルト2.5Y5/1~5/2(極僅かに鉄分含む)



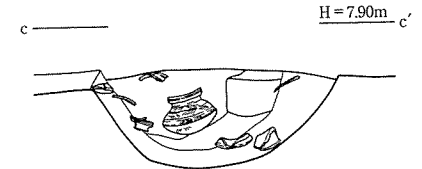
第8図 SD-34実測図



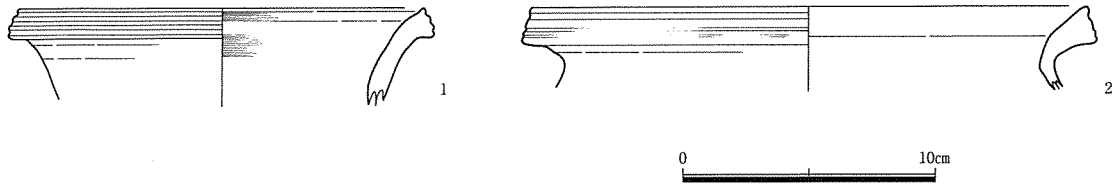
1. 暗灰黄色粘質シルト2.5Y5/2(鉄分、マンガン含む)
2. 灰黄褐色砂混粘質土10YR5/2(マンガン、鉄分含む)
3. 黄灰色粘質シルト2.5Y5/3(マンガン、鉄分少々含む)



1. 暗灰黄色粘質シルト2.5Y5/2(鉄分、マンガン含む)
2. 灰黄褐色砂混粘質土10YR5/2(マンガン、鉄分含む)
3. 黄灰色粘質シルト2.5Y5/1(マンガン含む)
4. 暗灰黄色粘質シルト2.5Y5/2(黄灰色粘質シルト2.5Y5/1ブロック1%、マンガン含む)
5. 褐灰色粘質土10YR4/1(暗灰黄色粘質シルト2.5Y5/2混じる、マンガン、鉄分含む)



第9図 SD-35実測図



第10図 SD-32出土遺物実測図

るが台付鉢と考えられる。(13・15)は「繰上げ口縁」。端部に(13)は1条、(15)は3条の凹線を有する。(14)の口縁部は内湾し、端部は外方に肥厚する。推定口径は(13)が13.4cm、(14・15)は概ね16.0cmとなる。(16~18)は脚台部、脚部は「ハ」字状に開き、端部で肥厚して端面を有する。(18)は大きく開く。(16・17)は端面に2条の凹線を有する。(19)は手捏ね土器。口径5.7~6.2cm、器高4.0cm、底径4.1cmを測る。

SD-35(第9・13図)

主軸をN-78°-Wにとる。概ね直線的で両端共に調査地外へ延びる。検出長は17.0m、溝幅は37~81cm測り、深さは検出面から15~29cm、底面の標高は7.42~7.59mで、東から西に向かって微妙に傾斜する。その比高差は17cmである。遺物は全体的に散在する。埋土下位からの出土が多い。

(1・2)は壺。(1)は「繰上げ口縁」、端面に4条の凹線を有す。(2)の口縁部は外反して端部に面を有する。推定口径は11.6cmとなる。(3)は台付壺。複合口縁、複合台部を有し、体部は算盤玉状に中位が突き出す。口縁端面にはヘラ状工具による5条の沈線を有する。体部中位には工具による円弧状の刺突文を「ハ」字状に施し、3条、1条の沈線で区画する。また、2重圏スタンプ文を2段施す。脚端面にはヘラ状工具による5条の沈線を有する。頸部に円孔2ヶ1対を内側から穿孔、2方に施す。(4~9)は甕の口縁部。(4)は「く」の字状口縁、口縁部は短く外傾して端部は丸く納める。(5~7)は「繰上げ口縁」、端面に2・3条の凹線を有する。(8・9)は複合口縁、共に端面には4条の沈線を有する。口径は概ね17cm程度であるが、(6)は12.8cmと小さく、(7)は19.8cmと大きい。(10)は平底の底部。

第3節 中世期の遺構・遺物

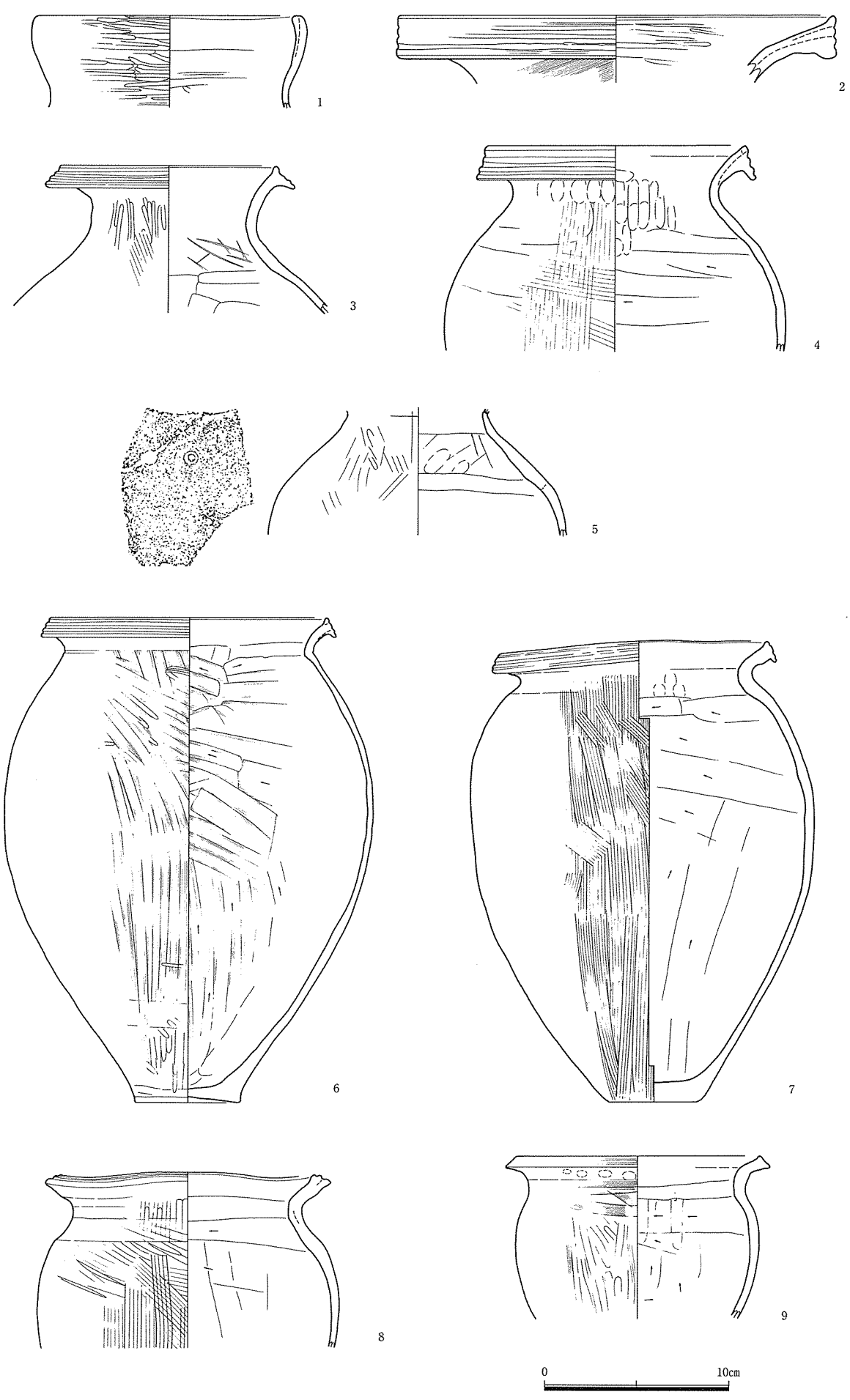
中世期の遺構は調査地のほぼ全域から検出されるが北端付近と南半西側は希薄である。当遺跡の中心的な時代が当時期に該当する為、明確に時期を特定できない遺構もこの時代に含めている。検出した遺構は掘立柱建物10棟、土坑39基、溝状遺構60条、柱穴1,269基、総数1,368を数える。時間と紙数の制約により本書においては、図や一覧表の多くを割愛せざるを得なかった。また、遺物を伴い時期を特定できるものや性格を想定できるものなどの特徴的な遺構についてのみ簡単に説明することとした。

1. 掘立柱建物

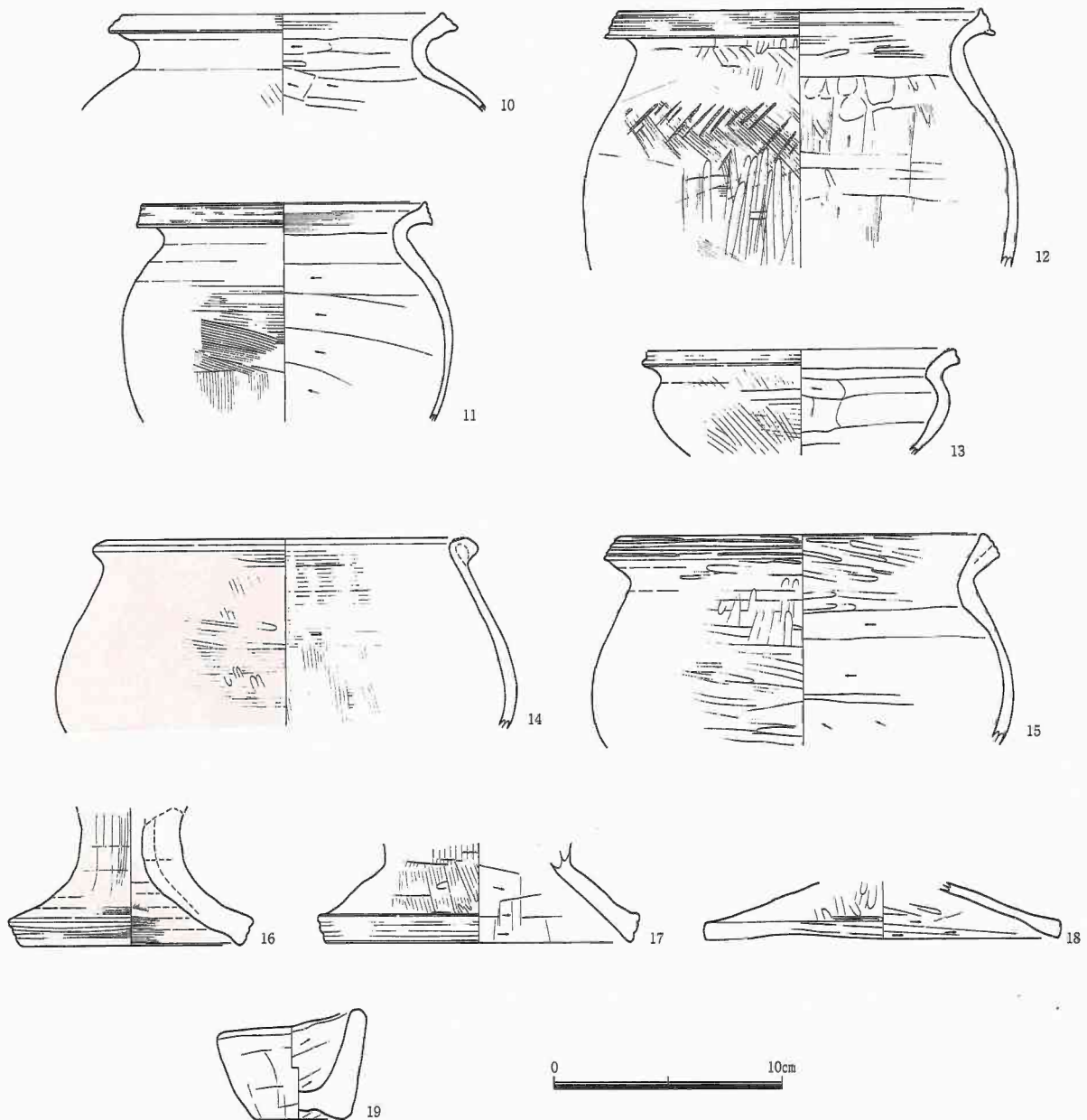
SB-01(第14図)

南半の中央やや北東側に位置する。桁行4間、梁行3間の建物である。主軸をN-22°-Eにとる。建物の平面形は長方形を呈し、桁行4間が7.04m、梁行3間が7.52mを測り、面積は52.9m²となる。柱間寸法は桁行が159~191cm、梁行が221~259cmを測り、平均すると、桁行174cm、梁行247cmとなる。柱穴の平面形は全て円形。根石を有する柱穴P-208、P-251、P-862、P-920、柱根が遺存するP-906がある。根石は長さ20~30cmの比較的扁平な石の平滑な面を上にして、ほぼ水平に据えている。柱根は径12cmを測る。断面観察により柱痕跡を確認できる柱穴も5基存在し、その径は12~19cm程度である。

P-906に遺存していた柱根を放射性炭素年代測定(14C)した結果AD. 1039±38年という結果を得てい



第11图 SD-34出土遺物実測図(1)



第12図 SD-34出土遺物実測図(2)

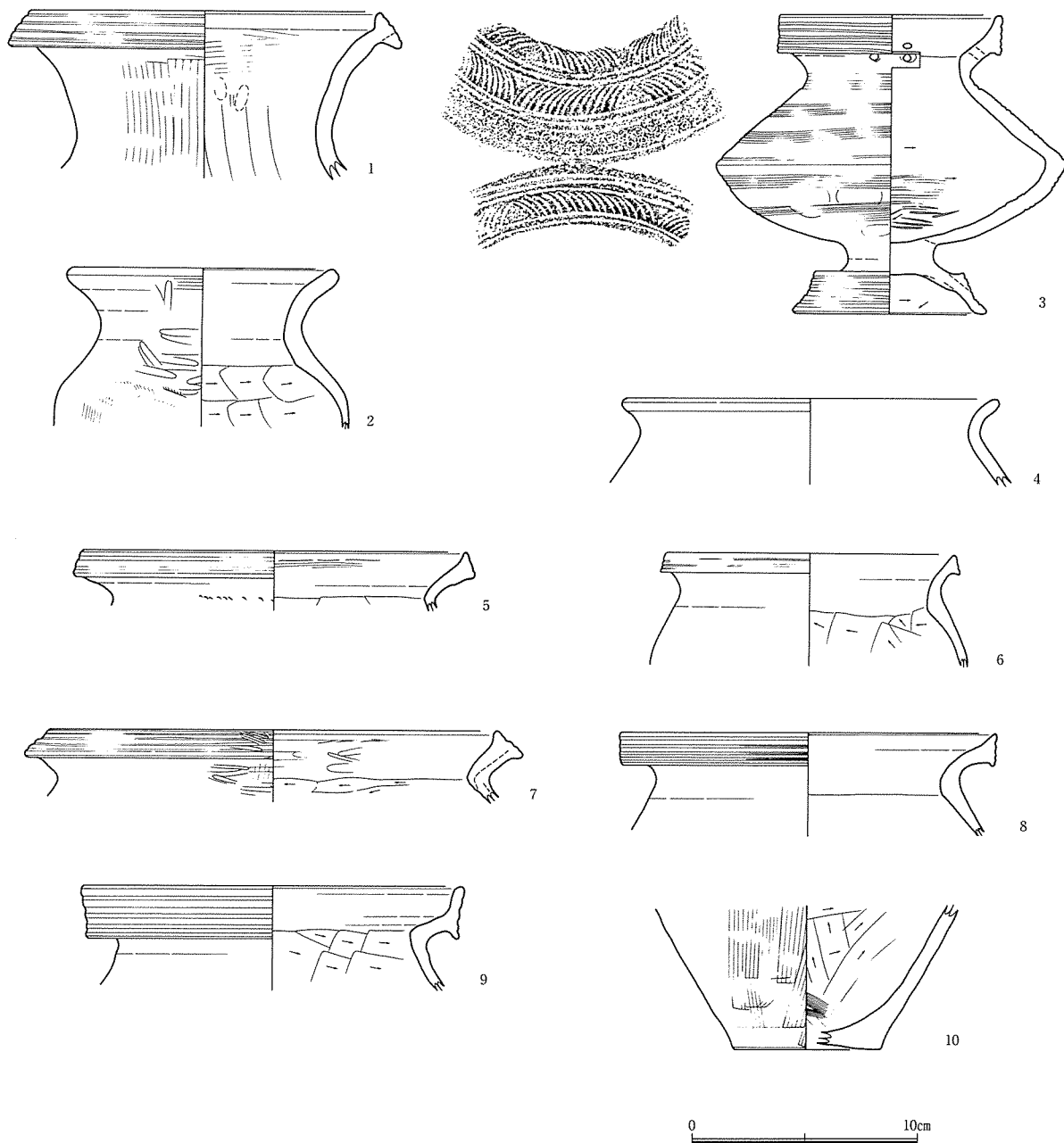
る。樹種はスギ。

SB-02(第15図)

南半の中央やや北東側、SB-01の北側に位置する。桁行2間、梁行2間の建物である。主軸をN-22°-Eにとる。建物の平面形は長方形を呈し、桁行2間が4.80m、梁行2間が3.54mを測り、面積は17.0m²となる。柱間寸法は桁行が207~246cm、梁行が150~188cmを測り、平均すると、桁行236cm、梁行175cmとなる。柱穴の平面形は全て円形。根石を有する柱穴にP-247、P-285がある。根石の大きさは長さ23~25cm程度である。断面観察により柱痕跡を確認できる柱穴も4基存在し、その径は11~18cm程度である。

SB-03(第16図)

南半の北東端、SB-02の東側に位置する。現状で桁行2間、梁行1間の建物である。桁行の東端は調査地外に延びる可能性もある。主軸をN-19°-Eにとる。建物の平面形は長方形を呈し、桁行2間が3.61m、梁行1間が2.11mを測り、面積は7.2m²となる。柱間寸法は桁行が176~185cm、梁行が211cmを測



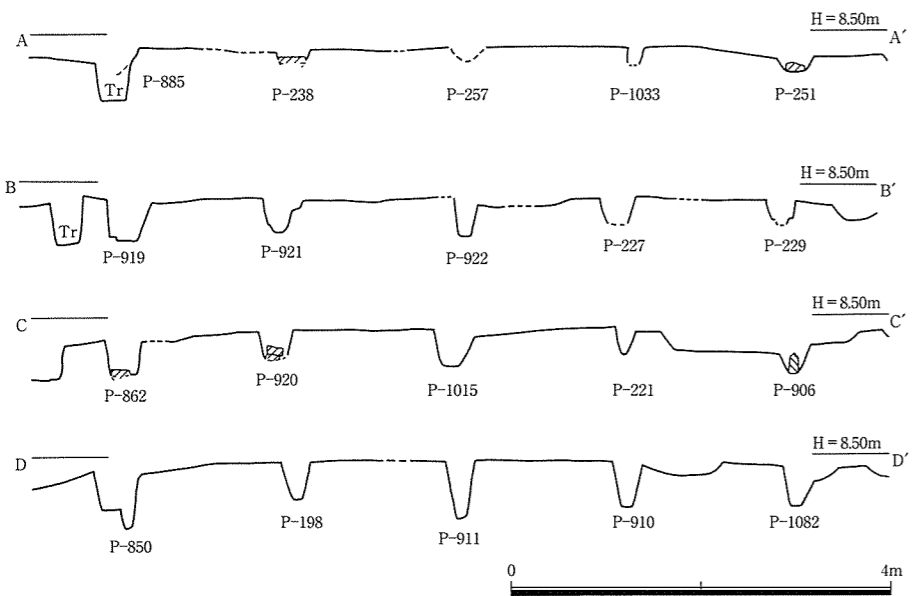
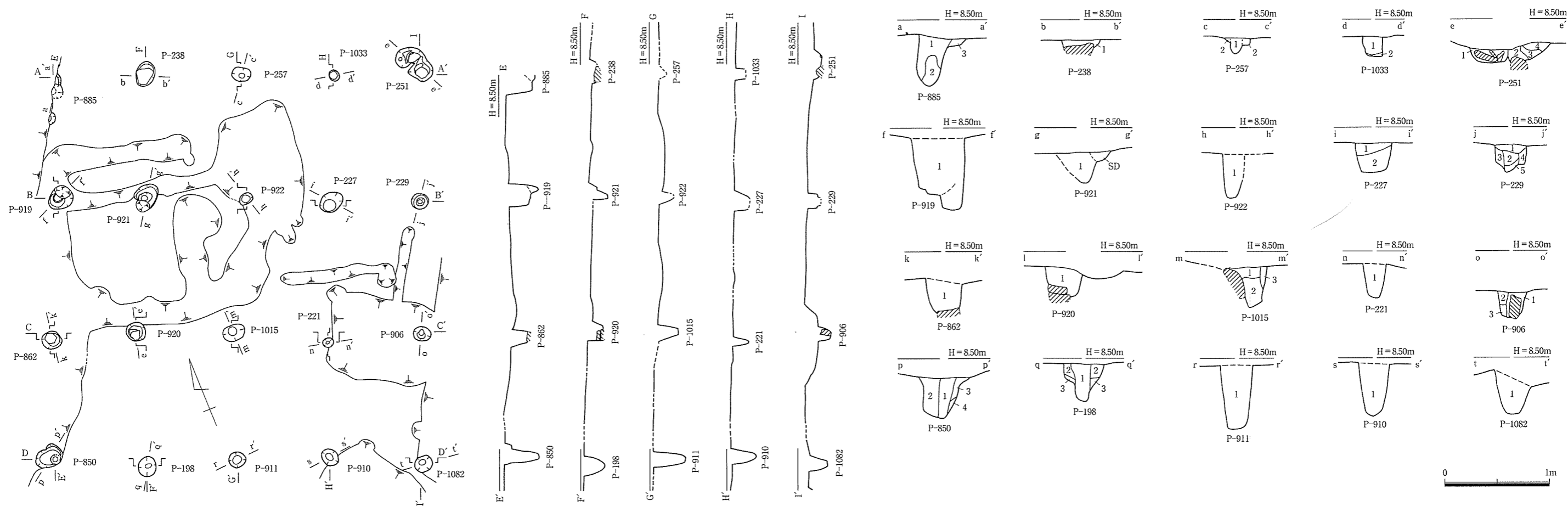
第13図 SD-35出土遺物実測図

る。桁行の平均は181cmとなる。柱穴の平面形は全て円形。4基の柱穴に根石を有する。根石の大きさは長さ19~29cm程度である。柱痕跡を確認できるものはなかった。

SB-04(第17・18図)

南半の中央やや西側、SB-01の西側に位置する。現状で桁行3間、梁行4間の建物である。主軸をN-11°-Eにとる。建物の平面形は長方形を呈し、桁行3間が10.37m、梁行4間が9.65mを測り、面積は100.1㎡となる。SK-10、SD-06・07・08と重複する為、検出できなかった柱穴も多く、柱列(C)と柱列(D)の間は、P-477、P-528を除き検出できなかった。P-477・P-528は柱列(H)上に存在するが柱間寸法が短く当建物に伴わない可能性もある。検出した柱穴の柱間寸法は桁行が252~273cm、梁行が220~250cmを測り、平均すると桁行259cm、梁行233cmとなる。柱穴の平面形は全て円形。断面観察により柱痕跡を確認できる柱穴も4基存在し、その径は19~24cm程度である。

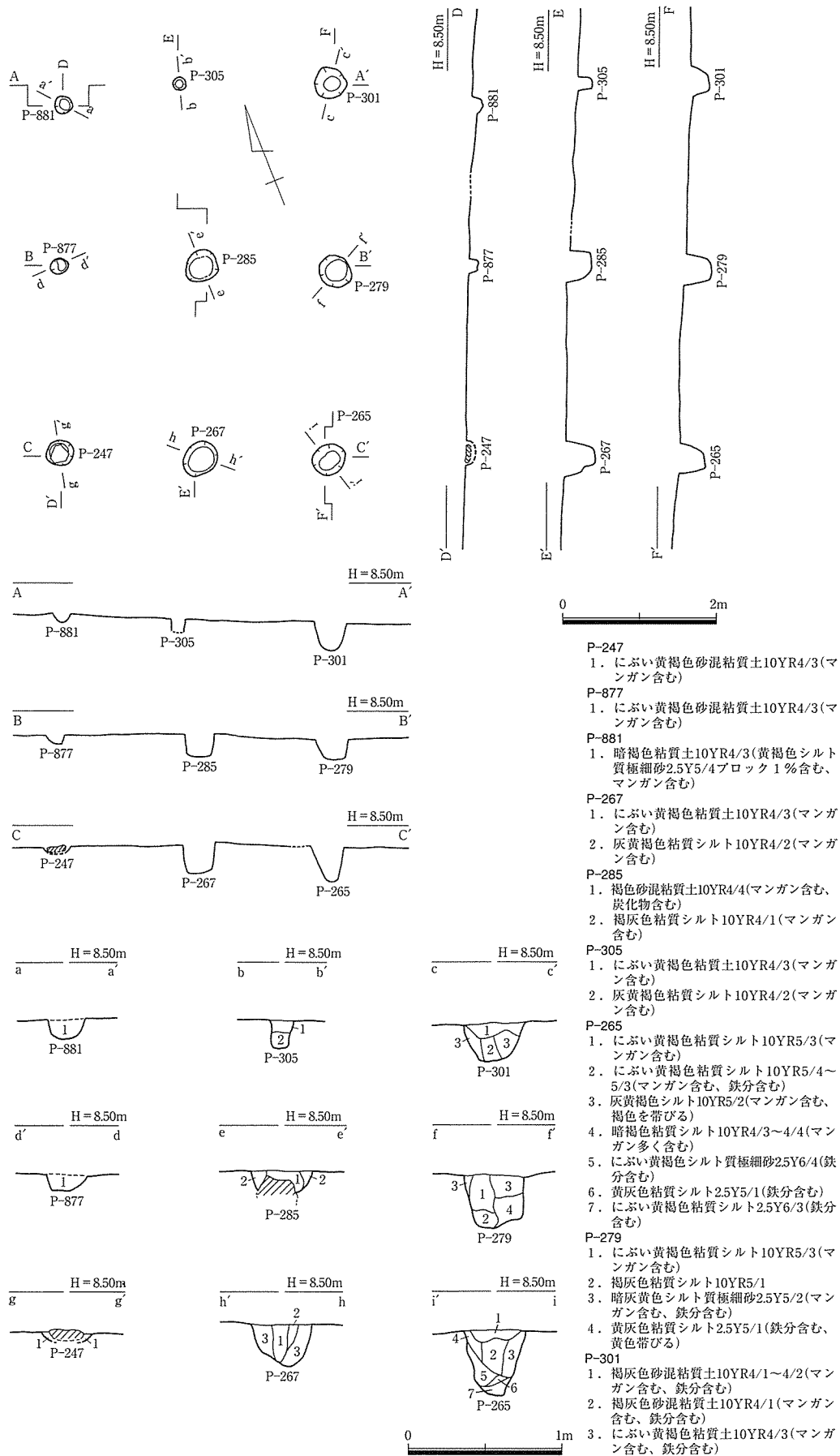
柱列(D)を柵列等で除外すると、桁行4間、梁行2間の建物が想定できる。この場合の面積は51.1㎡



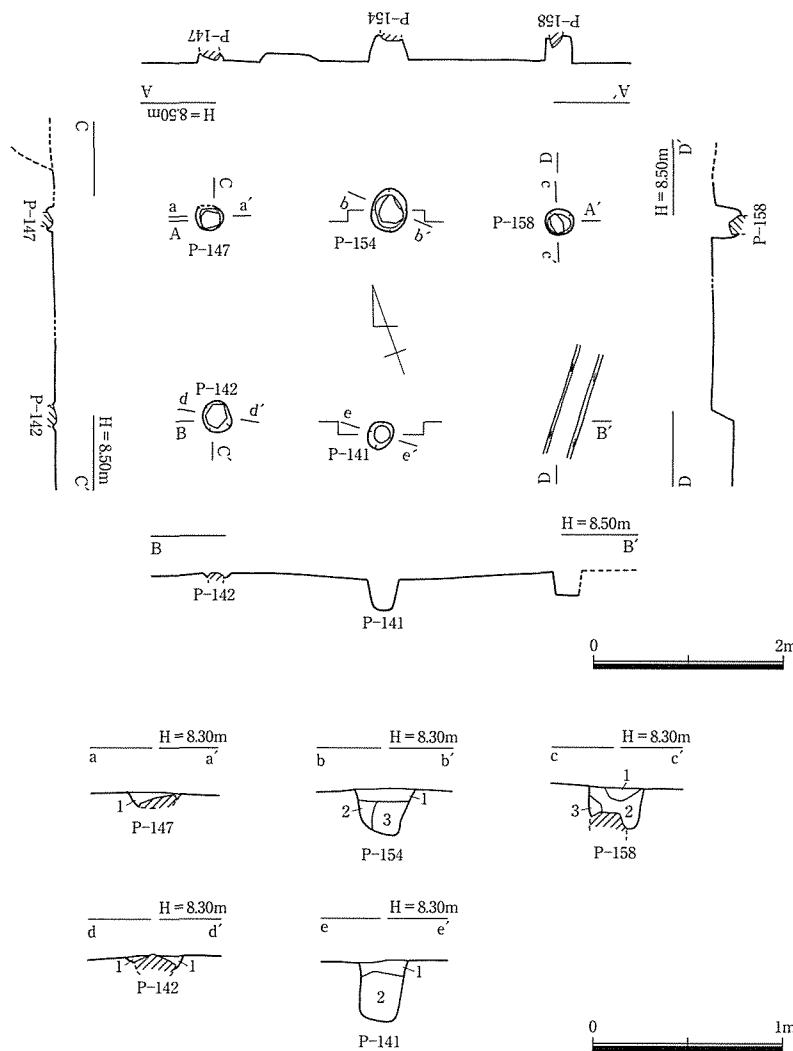
- P-251
 1. 暗褐色砂混粘質土7.5YR3/3(マンガン多く含む)
 2. 暗褐色粘質シルト10YR4/3(マンガン含む)
 3. 暗灰黄色粘質シルト2.5Y5/1
 4. 暗褐色砂混シルト7.5YR3/4(灰黄色シルト質極細砂2.5YR6/2ブロック含む、鉄分含む、マンガン含む)
- P-229
 1. 暗褐色砂混粘質土7.5YR3/3(マンガン多く含む)
 2. にぶい黄褐色粘質シルト10YR4/3(マンガン含む)
 3. 暗灰黄色粘質シルト2.5Y5/1
 4. にぶい黄褐色粘質シルト10YR4/3
- P-906
 1. 灰粘質土7.5YR4/1(にぶい橙色粘質シルト7.5YR6/4ブロック2%、マンガン含む)
 2. 黒褐色粘質シルト7.5YR3/2
 3. 黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/4
- P-1082
 1. 灰褐色粘質土7.5YR4/2
- P-1033
 1. にぶい黄褐色砂混粘質土10YR4/3(マンガン含む)
 2. 灰黄褐色粘質シルト10YR4/2(マンガン含む)
- P-227
 1. 暗褐色砂混粘質土7.5YR3/3(マンガン多く含む)
 2. 暗褐色砂混シルト7.5Y3/4(灰黄褐色シルト質極細砂2.5Y6/2ブロック含む、鉄分含む、マンガン含む)
- P-221
 1. 暗褐色砂混粘質土7.5YR3/3(マンガン多く含む)
 2. 暗褐色砂混シルト7.5Y3/4(灰黄褐色シルト質極細砂2.5Y6/2ブロック含む、鉄分含む、マンガン含む)
- P-910
 1. 褐色土7.5YR4/3(鉄分含む、炭化物含む)
- P-257
 1. にぶい黄褐色砂混粘質土10YR4/3(マンガン含む)
 2. 灰黄褐色粘質シルト10YR4/2(マンガン含む)

- 1. にぶい黄褐色砂混粘質土10YR4/3(マンガン含む)
- 2. 灰黄褐色粘質シルト10YR4/2(マンガン含む)
- P-922
 1. にぶい黄褐色粘質土10YR5/3(黄褐色粘質土10YR5/6ブロック含む)
- P-1015
 1. 暗褐色砂混粘質土7.5YR3/3(マンガン多く含む)
 2. 褐色粘質シルト10YR4/1
 3. にぶい黄褐色粘質土10YR5/3
- P-911
 1. 暗褐色粘質土10YR3/3(マンガン含む、炭化物含む)
- P-198
 1. 暗褐色砂混粘質土7.5YR3/3(マンガン多く含む)
 2. 暗灰黄色砂混シルト2.5YR6/2(鉄分含む、マンガン含む)
 3. にぶい黄褐色シルト質極細砂10YR5/4(マンガン含む、灰色帯びる)
- P-885
 1. 黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/3(マンガン含む)
 2. 黄褐色シルト質極細砂2.5YR5/4(マンガン含む)
 3. 黒褐色粘質土10YR3/2(マンガン含む)
- P-919
 1. にぶい黄褐色粘質土10YR4/3(黄褐色シルト質極細砂2.5Yブロック2%含む、マンガン多く含む、炭化物含む)
- P-862
 1. 土色なし
- P-850
 1. 黒褐色粘質土7.5YR3/2(炭化物含む、マンガン含む)
 2. にぶい黄褐色砂混粘質土10YR4/3(マンガン含む)
 3. 黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/4(黒褐色粘質土10YR3/2ブロック2%含む)
 4. 灰黄褐色粘質土10YR4/2(マンガン含む)

第14図 SB-01実測図



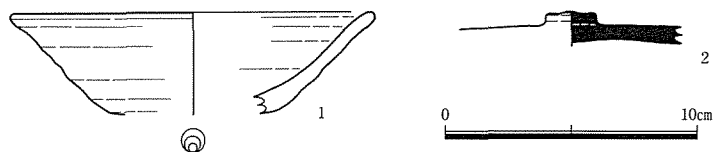
第15図 SB-02実測図



- P-141
1. 灰黄褐色粘質シルト10YR5/2(マンガン含む、鉄分含む)
 2. にぶい黄褐色粘質土10YR5/3(マンガン含む、鉄分含む)
- P-142
1. にぶい黄褐色粘質土10YR5/3(マンガン含む、鉄分含む)
- P-147
1. 灰黄褐色粘質土10YR4/2
- P-154
1. 灰黄褐色粘質シルト10YR4/2(マンガン含む、鉄分含む)
 2. 褐灰色粘質シルト10YR4/1(マンガン含む、鉄分含む)
 3. 灰黄褐色砂混粘質シルト10YR5/2(マンガン含む、鉄分含む)
- P-158
1. 暗灰黄色粘質シルト2.5Y5/2(鉄分含む)
 2. 灰黄褐色砂混粘質土10YR5/3(マンガン含む、鉄分含む)
 3. にぶい黄褐色粘質土10YR5/3(マンガン含む、鉄分含む)

第16図 SB-03実測図

となり、柱間寸法の平均は桁行237cm、梁行261cmとなる。柱列(I)も柵列等で除外すると、桁行3間、梁行2間の建物が想定でき、面積は38.2㎡となり、柱間寸法の平均は桁行240cm、梁行259cmとなる。

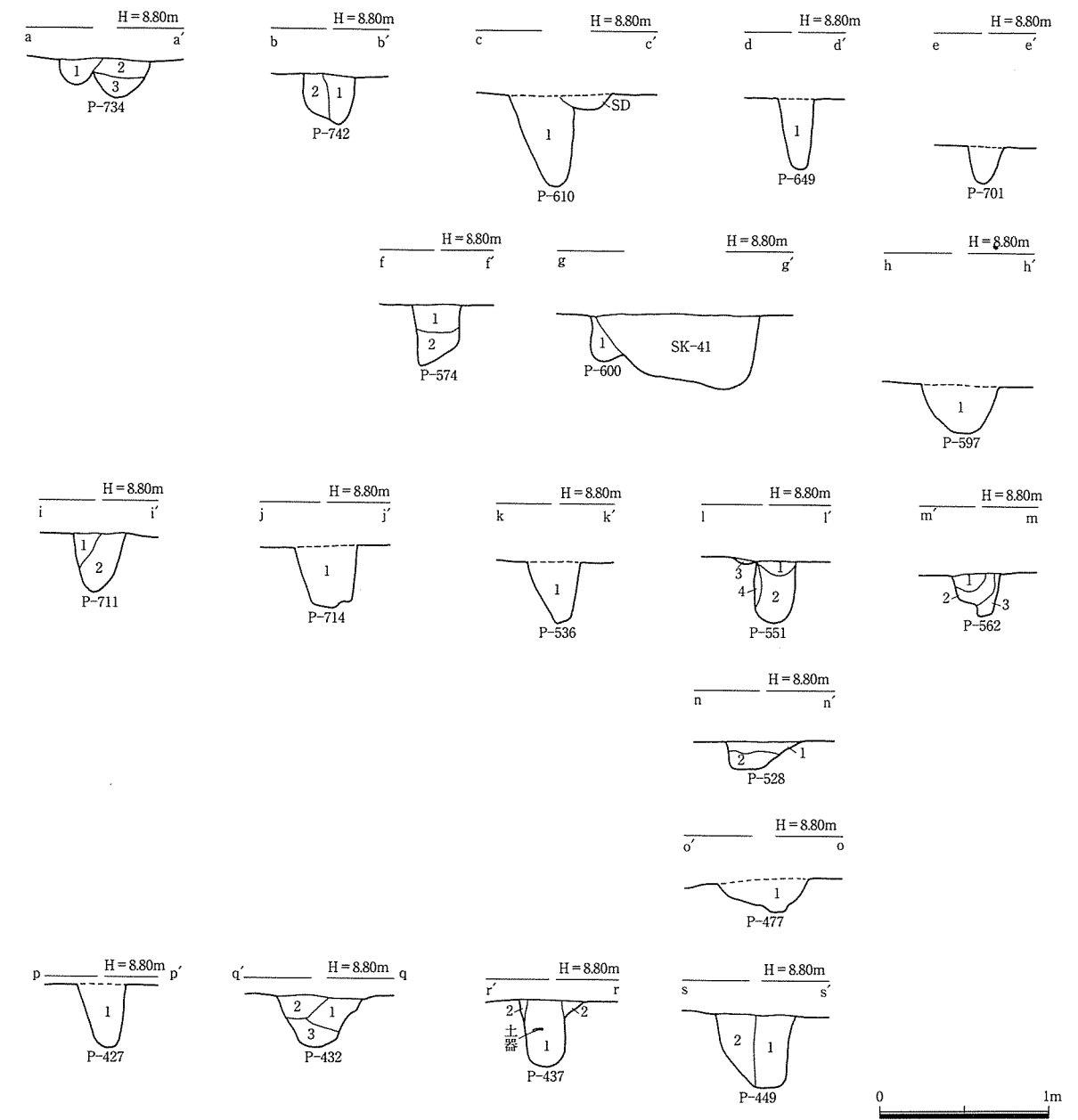
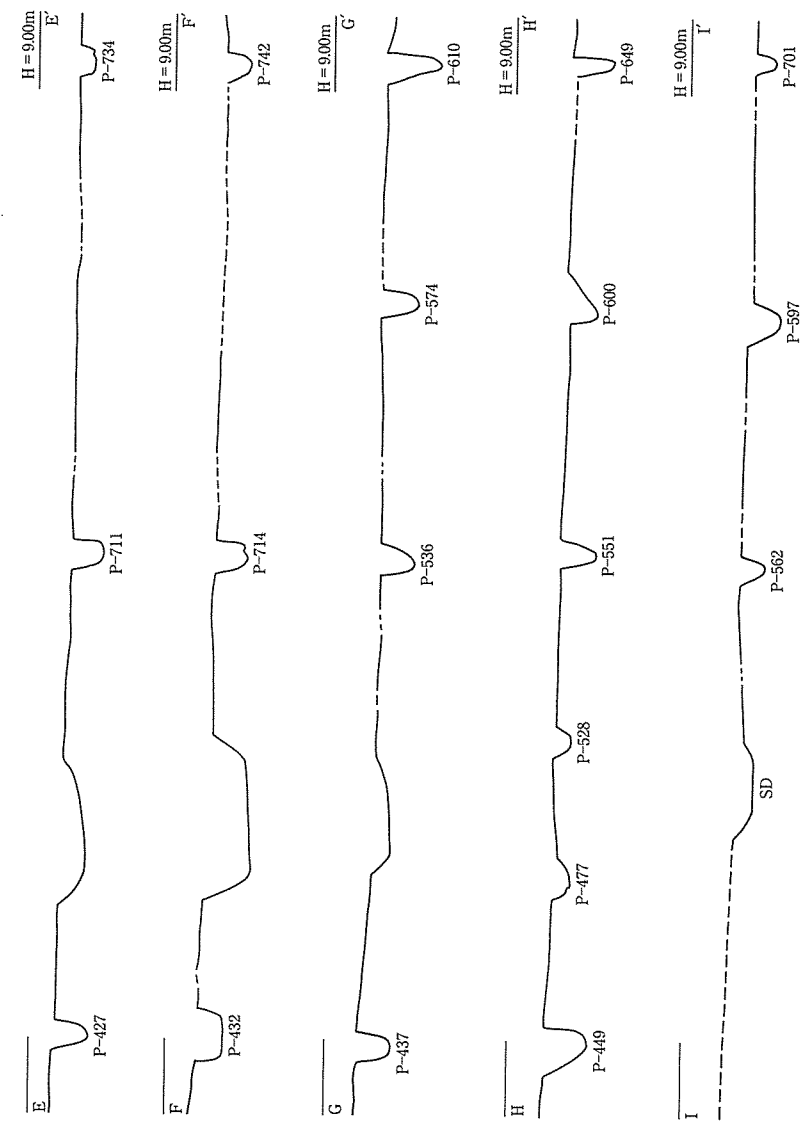
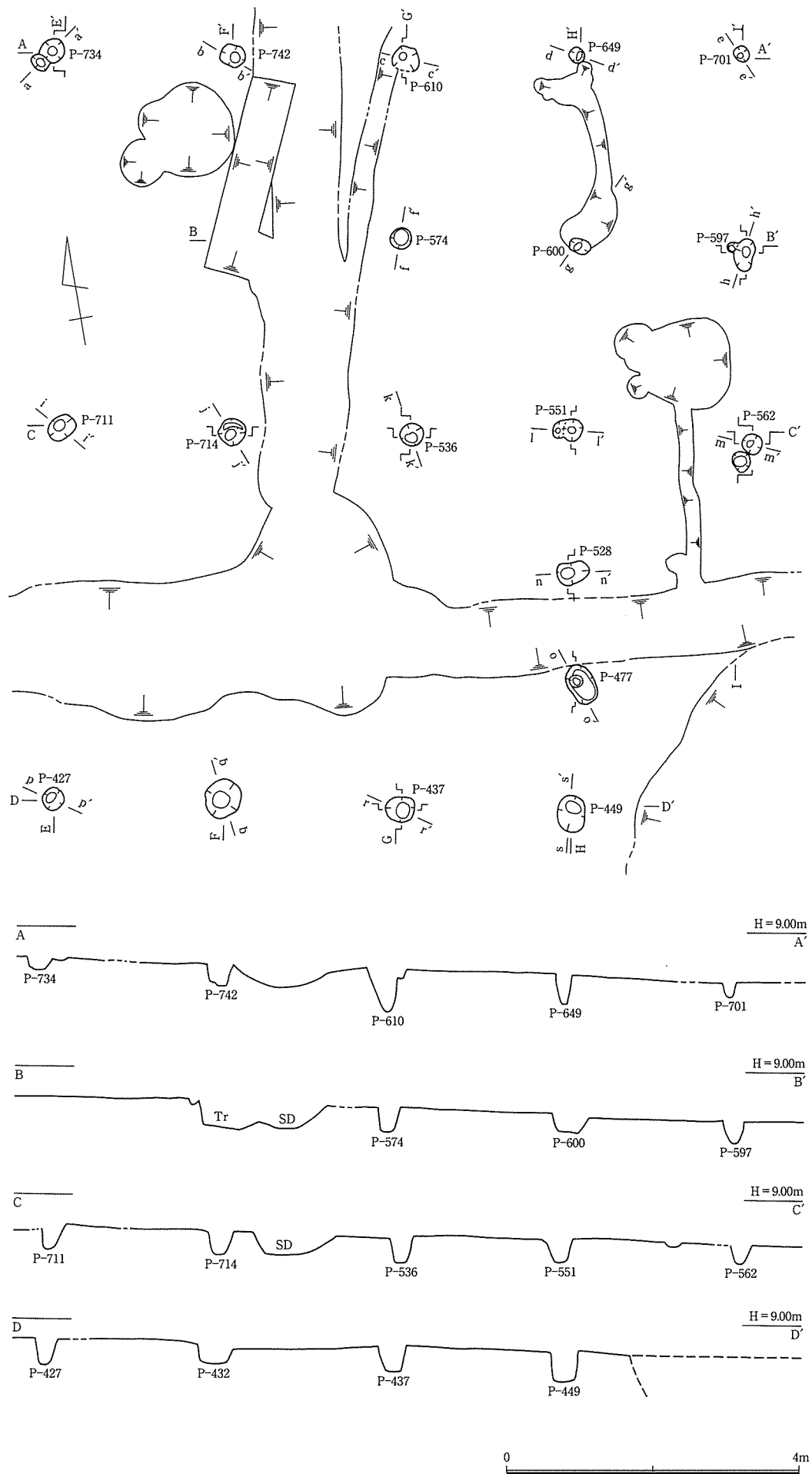


第17図 SB-04出土遺物実測図

遺物はP-437より土師質土器の杯(1)、須恵器の蓋(2)が出土している。

SB-05(第19図)

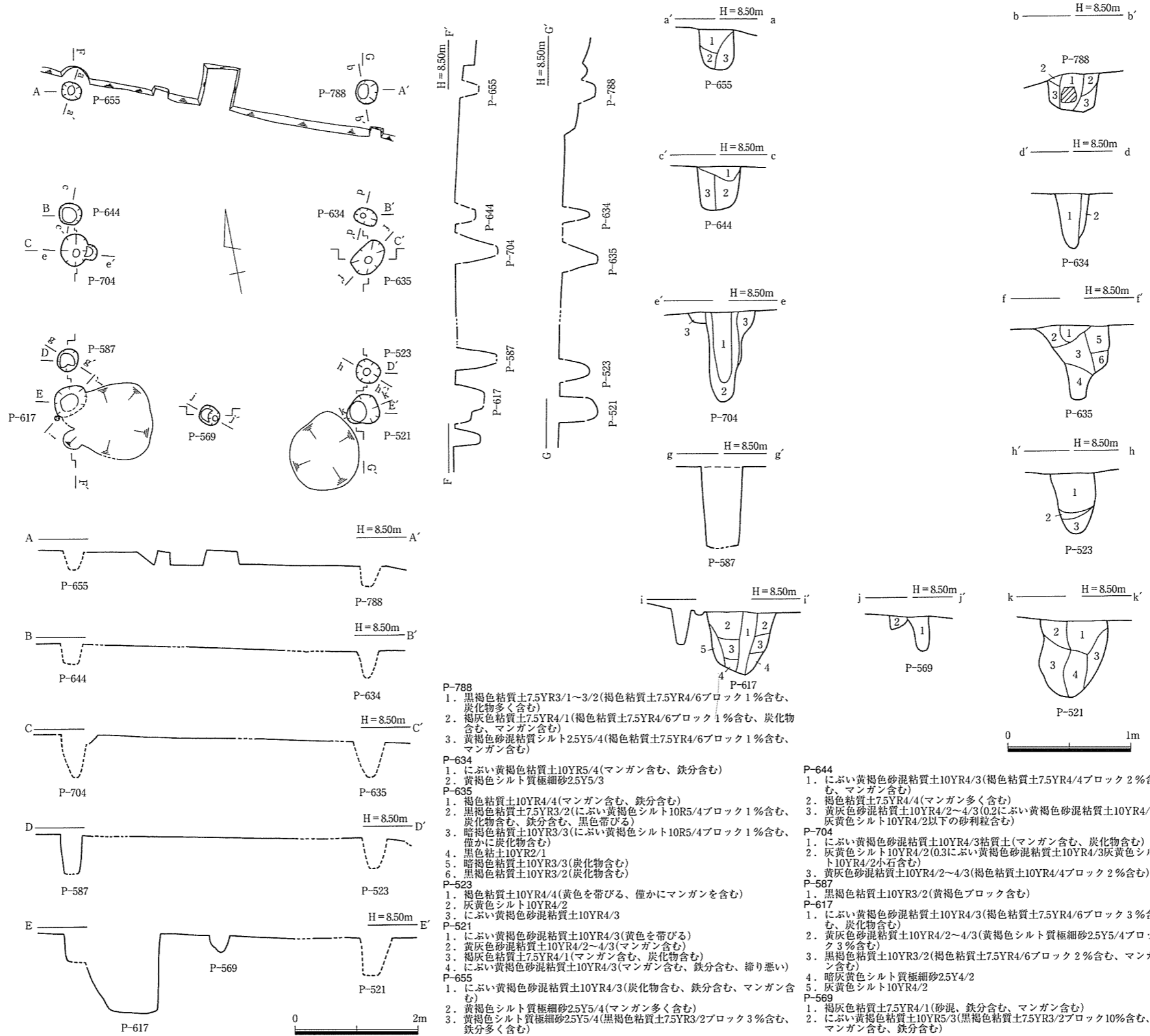
南半の中央やや西側、SB-01の西側に位置し、SB-04と重複する。現状で桁行2間、梁行2間の建物である。主軸をN-11°-Eにとる。北側は後世の削平を受けていると考えられ、柱穴の検出が困難であった為、桁行の北端は更に延びる可能性がある。建物の平面形は長方形を呈する。建替え、若しくは南側に拡張が行われていると考えられ、建替えを想定すると、桁行2間は4.93m、4.56m、梁行4.70mを測り、面積は23.2㎡、21.4㎡となる。柱間寸法は、桁行が236~272cm、200~256cm、梁行234cmを測り、平均は桁行253cm、224cm、梁行は234cmとなる。拡張を想定すると、柱列(E)と柱列(C)は廂と考えら



- P-649
 1. 黒褐色粘質土7.5YR3/2(褐色シルト10YR4/4~5/4ブロック 2%, マンガン含む、炭化物含む、砂混じる)
- P-600
 1. 褐色粘質土10YR4/4(黄褐色粘質土10YR5/3ブロック 3%含む、マンガン含む、炭化物含む)
- P-551
 1. 黒褐色砂混粘質土10YR3/2(褐色シルト10YR4/4~5/4ブロック 3%含む、マンガン含む、炭化物含む)
 2. 黒褐色粘質土7.5YR3/2(マンガン含む、炭化物含む)
 3. 黒褐色粘質土7.5YR3/2
 4. 褐色シルト10YR4/4~5/4(地山ブロック 3%含む)
- P-528
 1. 暗褐色粘質シルト10YR3/4(マンガン含む、炭化物含む、鉄分含む)
 2. 黒褐色砂混粘質土10YR3/2(褐色シルト10YR4/4~5/4ブロック 3%含む、マンガン含む、鉄分含む)
- P-477
 1. 灰黄褐色粘質土10YR4/2~4/3(黒褐色粘質土7.5YR3/2ブロック 3%含む、マンガン含む、鉄分含む)
- P-449
 1. 暗褐色粘質土10YR3/3(マンガン含む、炭化物含む)
 2. 褐色粘質土10YR4/4~4/3(黄褐色粘質土10YR5/6ブロック 僅かに含む、マンガン含む、炭化物含む)
- P-610
 1. 黒褐色粘質土7.5YR3/2(灰色土ブロック含む)
- P-574
 1. 黒褐色粘質土7.5YR3/2(褐色シルト10YR4/4~5/4ブロック 1%含む、鉄分含む、炭化物含む)
 2. 黒褐色粘質土7.5YR3/2(僅かに炭化物含む)
- P-536
 1. 黒褐色粘質土7.5YR3/2(褐色粘質土7.5YR4/6ブロック 2%含む、マンガン含む、炭化物含む)
- P-437
 1. 灰褐色砂混粘質土7.5YR4/2(マンガン含む、鉄分含む、炭化物含む)
 2. 灰黄色砂混粘質土10YR4/3(マンガン含む、炭化物含む)
- P-742
 1. 黒褐色粘質土10YR3/2(褐色粘質土7.5YR4/4ブロック 3%含む、マンガン含む)
 2. 暗褐色粘質土10YR3/3(褐色粘質土7.5YR4/4ブロック 3%含む、マンガン含む)

- P-714
 1. 黒褐色粘質土7.5YR3/2(炭化物含む、0.5cm以下の礫含む)
- P-432
 1. 褐灰色砂混粘質土7.5YR4/2(マンガン含む、炭化物含む、鉄分含む)
 2. 褐灰色粘質土7.5YR4/1(マンガン含む、鉄分含む)
 3. 暗褐色砂混粘質土10YR3/3
- P-735
 1. 暗褐色粘質土10YR3/3(炭化物含む、0.3cm以下の礫含む)
 2. にぶい黄褐色粘質土10YR4/3(炭化物含む、マンガン含む)
 3. 褐色粘質土7.5YR4/5(炭化物含む、マンガン含む、黄色を帯びる)
- P-711
 1. 灰褐色粘質土10YR4/2(マンガン含む、鉄分含む)
 2. にぶい黄褐色粘質土10YR4/3(マンガン含む、炭化物多く含む)
- P-427
 1. 褐灰色砂混粘質土7.5YR4/2(マンガン含む、鉄分含む、炭化物含む)
- P-562
 1. 灰褐色粘質土7.5YR5/2(鉄分含む)
 2. 灰褐色粘質土7.5YR5/2(マンガン含む、褐色帯びる)
 3. 黒褐色粘質土7.5YR3/2
- P-701
 1. 暗褐色砂混粘質土10YR3/3~3/2(褐色粘質土ブロック 1%含む)
- P-596
 1. にぶい黄褐色砂混粘質土10YR4/3~4/2(灰色粘質土ブロック含む)

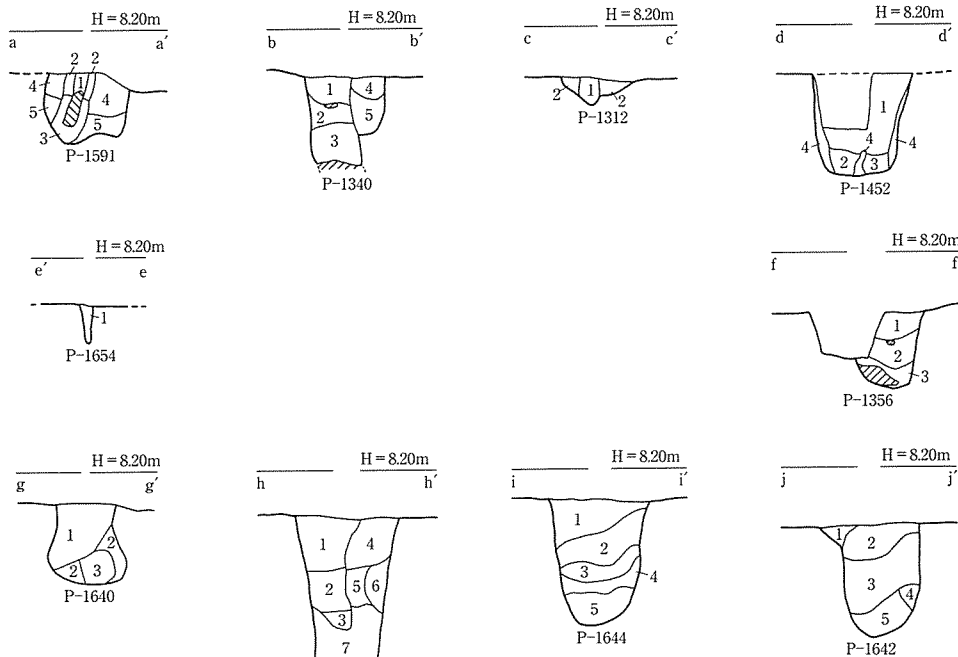
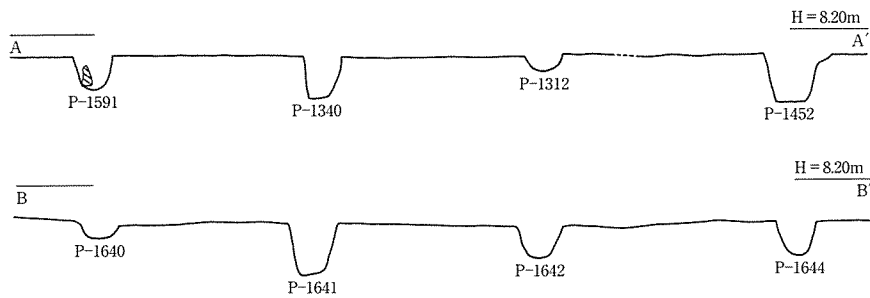
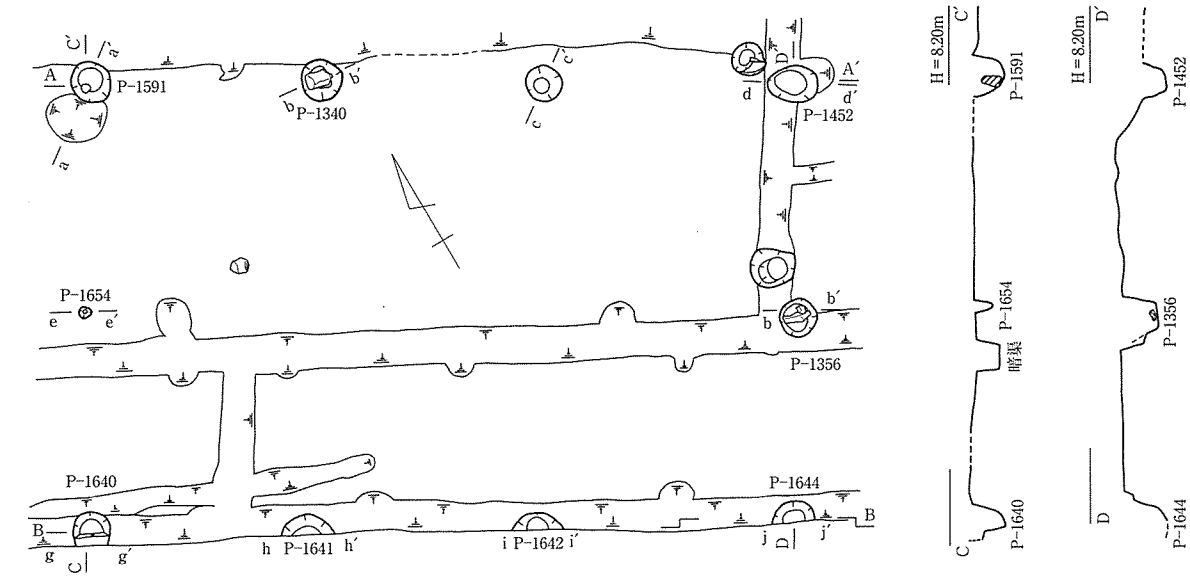
第18図 SB-04実測図



- P-788**
1. 黒褐色粘質土7.5YR3/1~3/2(褐色粘質土7.5YR4/6ブロック1%含む、炭化物多く含む)
 2. 褐色粘質土7.5YR4/1(褐色粘質土7.5YR4/6ブロック1%含む、炭化物含む、マンガン含む)
 3. 黄褐色砂混粘質シルト2.5Y5/4(褐色粘質土7.5YR4/6ブロック1%含む、マンガン含む)
- P-634**
1. にぶい黄褐色粘質土10YR5/4(マンガン含む、鉄分含む)
 2. 黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/3
- P-635**
1. 褐色粘質土10YR4/4(マンガン含む、鉄分含む)
 2. 黒褐色粘質土7.5YR3/2(にぶい黄褐色シルト10R5/4ブロック1%含む、炭化物含む、鉄分含む、黒色帯びる)
 3. 暗褐色粘質土10YR3/3(にぶい黄褐色シルト10R5/4ブロック1%含む、僅かに炭化物含む)
 4. 黒色粘土10YR2/1
 5. 暗褐色粘質土10YR3/3(炭化物含む)
 6. 黒褐色粘質土10YR3/2(炭化物含む)
- P-523**
1. 褐色粘質土10YR4/4(黄色を帯びる、僅かにマンガンを含む)
 2. 灰黄色シルト10YR4/2
 3. にぶい黄褐色砂混粘質土10YR4/3
- P-521**
1. にぶい黄褐色砂混粘質土10YR4/3(黄色を帯びる)
 2. 黄灰色砂混粘質土10YR4/2~4/3(マンガン含む)
 3. 褐色粘質土7.5YR4/1(マンガン含む、炭化物含む)
 4. にぶい黄褐色砂混粘質土10YR4/3(マンガン含む、鉄分含む、縞り悪い)
- P-655**
1. にぶい黄褐色砂混粘質土10YR4/3(炭化物含む、鉄分含む、マンガン含む)
 2. 黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/4(マンガン多く含む)
 3. 黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/4(黒褐色粘質土7.5YR3/2ブロック3%含む、鉄分多く含む)

- P-644**
1. にぶい黄褐色砂混粘質土10YR4/3(褐色粘質土7.5YR4/4ブロック2%含む、マンガン含む)
 2. 褐色粘質土7.5YR4/4(マンガン多く含む)
 3. 黄灰色砂混粘質土10YR4/2~4/3(0.2にぶい黄褐色砂混粘質土10YR4/3灰黄色シルト10YR4/2以下の砂利粒含む)
- P-704**
1. にぶい黄褐色砂混粘質土10YR4/3粘質土(マンガン含む、炭化物含む)
 2. 灰黄色シルト10YR4/2(0.3にぶい黄褐色砂混粘質土10YR4/3灰黄色シルト10YR4/2小石含む)
 3. 黄灰色砂混粘質土10YR4/2~4/3(褐色粘質土10YR4/4ブロック2%含む)
- P-587**
1. 黒褐色粘質土10YR3/2(黄褐色ブロック含む)
- P-617**
1. にぶい黄褐色砂混粘質土10YR4/3(褐色粘質土7.5YR4/6ブロック3%含む、炭化物含む)
 2. 黄灰色砂混粘質土10YR4/2~4/3(黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/4ブロック3%含む)
 3. 黒褐色粘質土10YR3/2(褐色粘質土7.5YR4/6ブロック2%含む、マンガン含む)
 4. 暗灰色シルト質極細砂2.5Y4/2
 5. 灰黄色シルト10YR4/2
- P-569**
1. 褐色粘質土7.5YR4/1(砂混、鉄分含む、マンガン含む)
 2. にぶい黄褐色粘質土10YR5/3(黒褐色粘質土7.5YR3/2ブロック10%含む、マンガン含む、鉄分含む)

第19図 SB-05実測図



P-1312

1. 暗黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/2
2. 灰黄褐色砂混粘質土10YR5/2(黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/4ブロック3%含む、マンガ、炭化物含む)

P-1642

1. 灰黄色粘質細砂シルト2.5Y5/2(灰黄褐色土ブロック及び、無機質分多く含む、0.5cm以下の礫及び炭片含む)
2. 黄灰色粘質土2.5Y5/1(炭片及び無機質分含む)
3. 黒褐色粘質土10YR3/1(炭片多く含む)
4. 褐灰色粘土10YR4/1(黄褐色土ブロック含む)
5. 褐灰色粘土10YR4/1(4より明)

P-1644

1. 黄灰色細砂シルト2.5Y6/1
2. 灰黄褐色細砂シルト10YR5/2(灰黄褐色細砂シルトブロック及び無機質分を含む、やや粘質がある)
3. 黒褐色粘質土10YR3/1(炭片含む)
4. 灰黄褐色粘質細砂シルト10YR5/2(2よりやや明、無機質分含む)
5. 褐灰色粘土10YR5/1(炭片多く含む)

P-1654

1. におい黄褐色粘質土10YR5/3(マンガ、鉄分含む)

P-1640

1. におい黄褐色粘質細砂2.5Y6/4(灰黄褐色土ブロック含む、無機質分含む)
2. 灰黄褐色粘質土10YR5/2(無機質分点在)
3. 灰黄褐色粘質土10YR5/3(鉄分含む)
4. 黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/4(マンガ、鉄分含む)

P-1452

1. 黒褐色粘質土7.5YR3/1(炭化物多く含む)
2. 暗黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/2(鉄分含む)
3. 黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/3(鉄分含む)
4. 黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/4(マンガ、鉄分含む)

P-1356

1. 褐灰色粘質土7.5Y4/1(マンガ、鉄分含む)
2. におい黄褐色シルト質極細砂10YR5/3(マンガ、鉄分含む)
3. 黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/4(マンガ、鉄分含む)

P-1340

1. におい黄褐色シルト質極細砂10YR5/3(マンガ、鉄分含む)
2. 褐灰色砂混粘質土10YR4/1(マンガ、鉄分含む、炭化物含む、鉄分含む)
3. 褐灰色粘質土7.5YR4/1(マンガ、鉄分含む、炭化物含む)
4. 灰黄褐色砂混粘質土10YR4/2(マンガ、鉄分含む、炭化物含む)
5. におい黄褐色シルト質極細砂10YR5/3(灰黄褐色砂混粘質土10YR4/2ブロック僅かに含む)

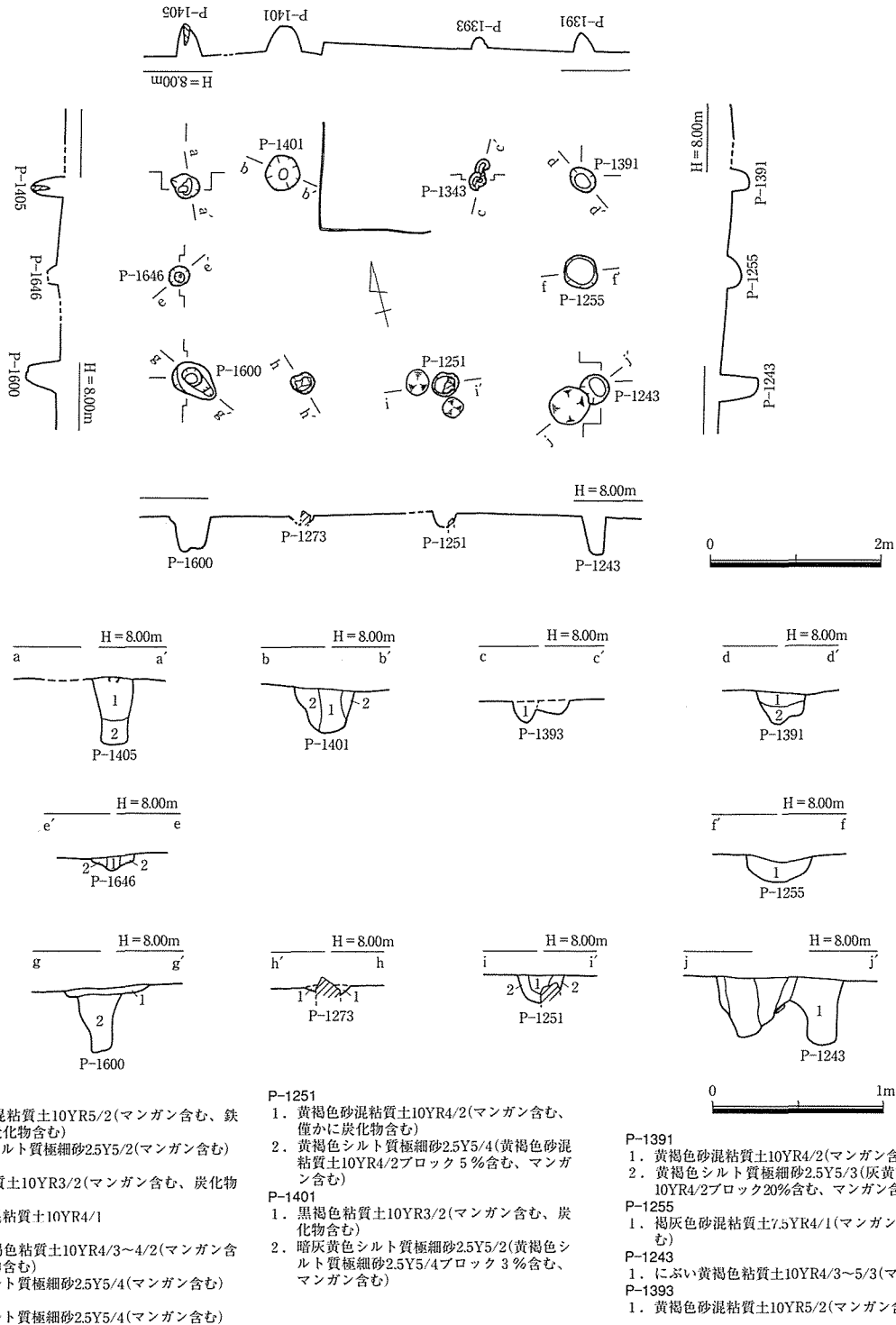
P-1641

1. におい黄褐色粘質細砂シルト2.5Y6/3(マンガ、鉄分及び暗黄褐色粘質土ブロック含む)
2. におい黄褐色粘質土10YR5/3(しまっていない)
3. におい黄褐色粘質土10YR5/3(2よりやや暗、マンガ沈着で硬くしめる)
4. におい黄褐色粘質細砂シルト2.5Y6/4(1より明、灰黄褐色土ブロックを密に含む、炭片及び鉄分僅かに含む)
5. 暗黄褐色粘土2.5Y5/2(鉄分含む)
6. 暗黄褐色粘土2.5Y5/2(5よりやや明、鉄分及びマンガ沈着でしめる)
7. 灰色粘土5Y5/1(暗黄褐色粘土ブロック含む)

P-1591

1. におい黄褐色シルト10YR5/3~5/2(僅かにマンガ含む)
2. 灰黄褐色シルト10YR5/2(マンガ含む)
3. 褐灰色シルト10YR4/1(0.3cm以下の礫を含む)
4. におい黄褐色粘質土10YR5/4~5/6(黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/4ブロック2%含む、マンガ、鉄分含む)
5. 灰黄褐色粘質シルト10YR5/2(黄褐色シルト質極細砂10YR5/6ブロック3%含む、マンガ、鉄分含む、炭化物含む)

第20図 SB-06実測図

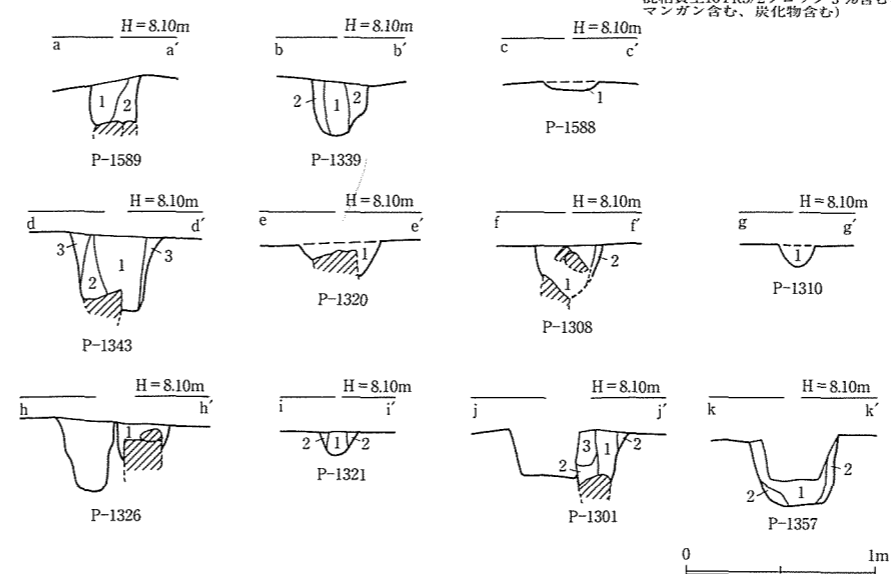
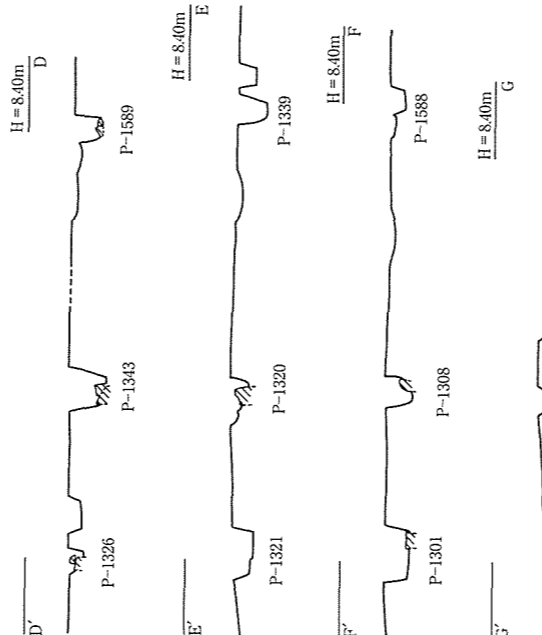
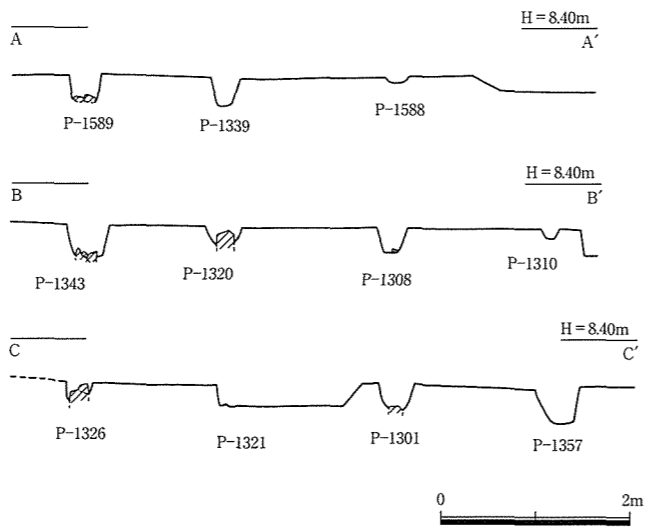
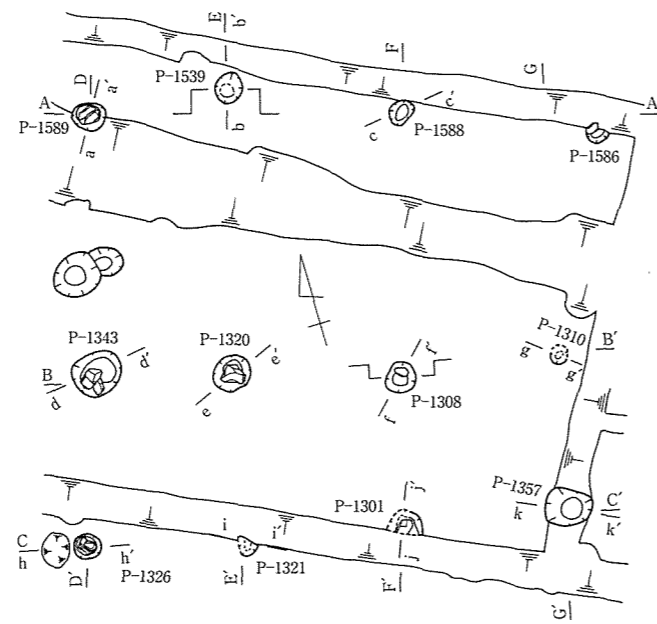


第21図 SB-08実測図

れ、拡張前の規模は梁行1間が2.01mとなり、面積は9.4m²となる。廂柱間寸法は55~72cmを測り、平均は62cmとなる。柱穴の平面形は全て円形。断面観察により柱痕跡を確認できる柱穴も6基存在し、その径は13~21cm程度である。

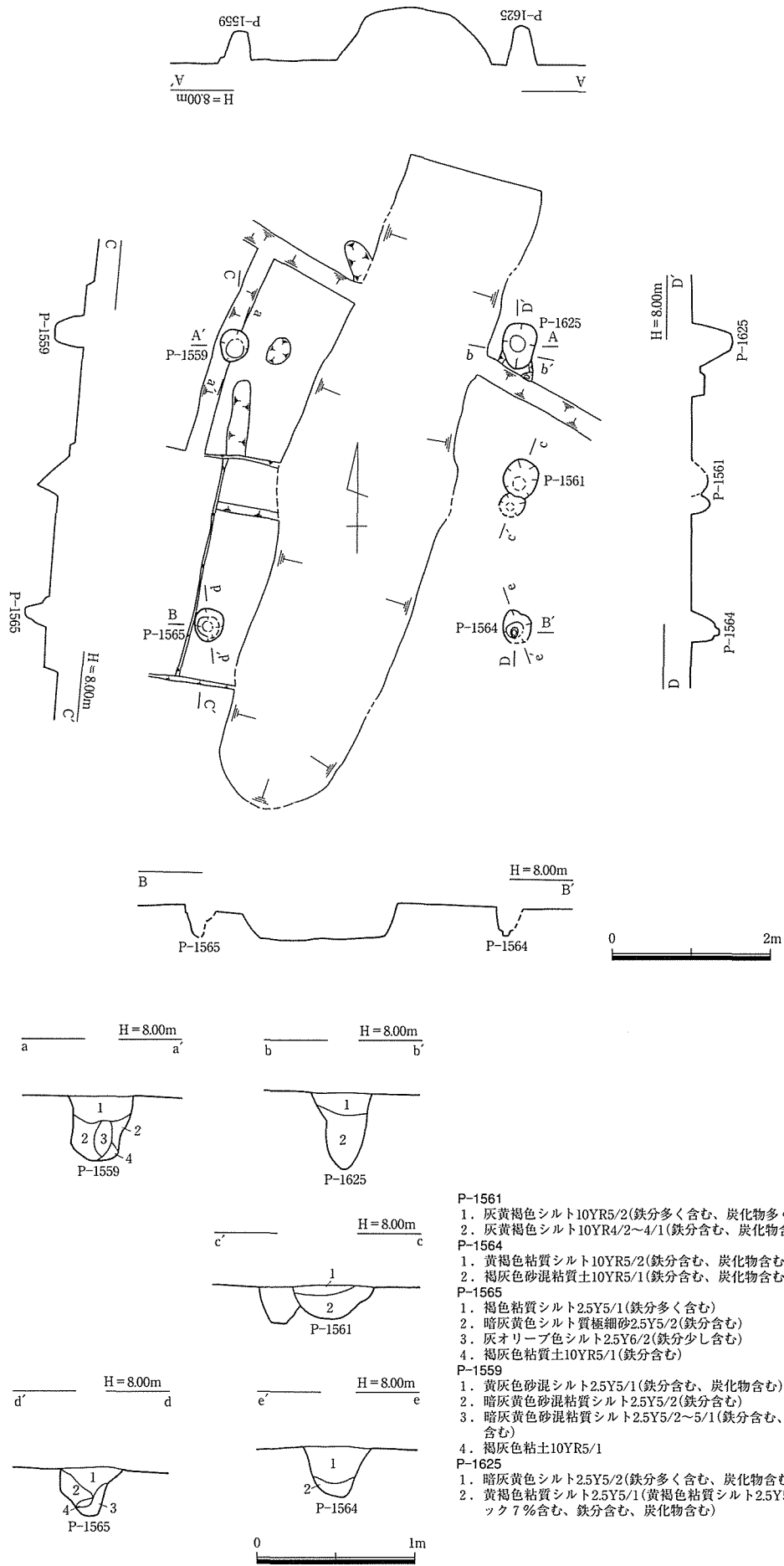
SB-06(第20図)

北半の東側、SB-05の北側に位置する。SB-07と重複する。現状で桁行3間、梁行2間の建物である。主軸をN-30°-Eにとる。北西側は用水路を保護する為、北半との間3mが未調査である。このため梁行の北西端は更に延びる可能性がある。建物の平面形は長方形を呈し、桁行3間が7.40m、梁行2間が4.70mを測り、面積は34.8m²となる。柱間寸法は桁行が230~265cm、梁行が211~247cmを測り、平均すると、桁行247cm、梁行232cmとなる。柱穴の平面形は全て円形。P-1591には径11cmの柱根が遺存していた。断面観察により柱痕跡を確認できる柱穴も4基存在し、その径は11~34cm程度である。

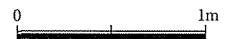
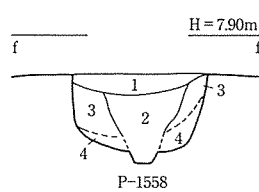
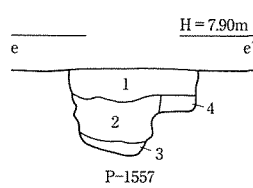
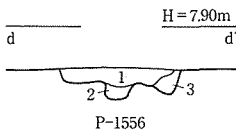
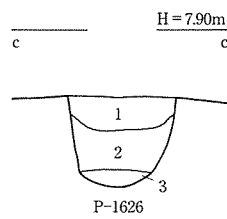
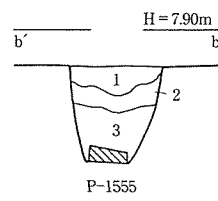
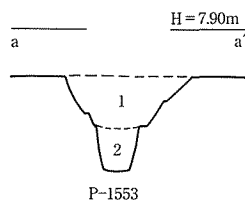
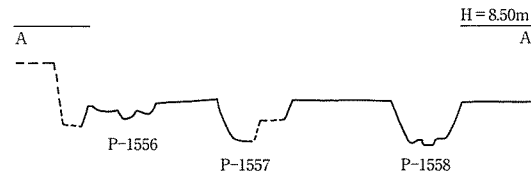
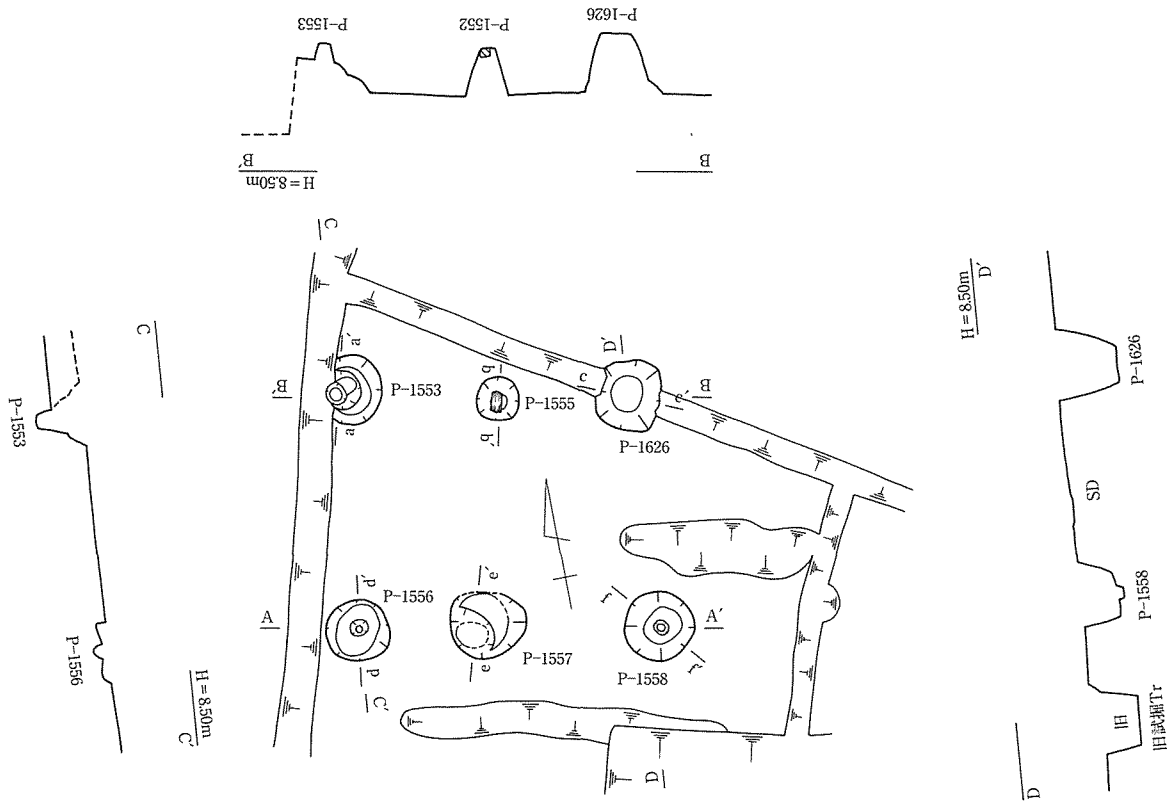


- P-1588
1. 黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/3-5/2(鉄分含む、炭化物含む)
- P-1308
1. 褐色砂混結質土10YR4/1(マンガン含む)
2. 灰黄褐色結質土10YR4/2
- P-1301
1. 褐色砂混結質土10YR4/1(黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/4ブロック1%含む)
2. 黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/4(マンガン含む)
3. 暗黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/2(マンガン含む)
4. 褐色砂混結質土10YR4/1(マンガン含む、炭化物含む、黒色帯びる)
- P-1339
1. 灰黄褐色結質土10YR4/2(マンガン含む、炭化物含む、鉄分含む)
2. 暗黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/2(マンガン含む)
- P-1320
1. 暗黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/2(黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/4ブロック5%含む、マンガン含む、鉄分含む)
- P-1321
1. 灰黄褐色結質土10YR5/2(マンガン含む、炭化物含む、鉄分含む)
2. にぶい黄褐色結質土10YR4/3(マンガン含む、炭化物含む)
- P-1589
1. 灰黄褐色結質シルト10YR4/1-4/2(マンガン多く含む)
2. にぶい黄褐色結質土10YR5/4(黒褐色結質土10YR3/2ブロック2%含む、鉄分含む)
- P-1343
1. 灰黄褐色結質土10YR5/2(マンガン含む、炭化物含む)
2. 灰黄褐色結質土10YR5/2(マンガン含む)
3. 黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/4(マンガン含む)
- P-1326
1. 黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/3(灰黄褐色結質土10YR4/2ブロック5%含む、鉄分含む)
- P-1357
1. 褐色砂混結質土10YR4/1(マンガン含む、炭化物含む、鉄分含む)
2. 暗黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/2(マンガン、鉄分含む)
- P-1310
1. 褐色砂混結質土10YR4/4(灰黄褐色砂混結質土10YR5/2ブロック5%含む、マンガン含む、炭化物含む)

第22図 SB-07実測図



第23図 SB-09実測図



P-1626

1. 黄灰色粘質シルト2.5Y5/1(鉄分含む、炭化物含む)
2. 黄灰色粘質シルト2.5Y4/1(鉄分含む)
3. 灰色粘土5Y4/1(僅かに鉄分含む)

P-1555

1. 黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/3(暗灰黄色シルト質極細砂2.5Y4/2ブロック3%含む、マンガン含む、鉄分含む)
2. 黄灰色シルト質極細砂2.5Y4/2(マンガン含む、鉄分含む、炭化物含む)
3. 暗灰黄色シルト質極細砂2.5Y4/2(マンガン含む、鉄分含む、炭化物含む)

P-1553

1. 黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/3(黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/6ブロック3%含む、炭化物含む、鉄分含む)
2. 黄灰黄色粘質土2.5Y4/2

P-1558

1. 黄灰色シルト2.5Y5/1(鉄分含む、マンガン含む)
2. 暗灰黄色粘質シルト2.5Y4/2~4/1(鉄分含む、炭化物含む)
3. 暗灰黄色粘質シルト2.5Y5/2(マンガン含む、鉄分含む、炭化物含む)
4. 暗灰黄色シルト質極細砂2.5Y5/2(鉄分含む)

P-1557

1. 黒褐色粘質シルト10YR3/2(鉄分含む、炭化物含む)
2. 暗灰黄色粘質シルト2.5Y5/1(鉄分含む)
3. 黄褐色シルト2.5Y5/4(僅かに鉄分含む)
4. 黄灰色粘質シルト2.5Y5/1~5/2(鉄分含む)

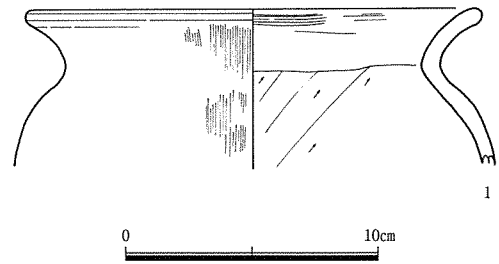
P-1556

1. 灰黄褐色シルト10YR5/2(鉄分含む、マンガン含む)
2. 灰黄褐色粘質シルト10YR5/2(鉄分含む)
3. 暗灰黄色粘質シルト2.5Y5/2(鉄分含む)

第24図 SB-10実測図

SB-07(第22図)

北半の東側、SB-05の北側に位置する。SB-06と重複する。現状で桁行3間、梁行2間の建物である。主軸をN-15°-Eにとる。建物の平面形は長方形を呈し、桁行3間が5.03m、梁行2間が4.72mを測り、面積は23.7m²となる。柱間寸法は桁行が144~184cm、梁行が149~175cm、275~298cmを測り、平均すると、桁行165cm、梁行167cm、285cmとなる。柱穴の平面形は全て円形。根石を有する柱穴にP-1301、P-1308、P-1320、P-1326、P-1343、P-1589がある。根石の大きさは長さ15~26cm程度である。断面観察により柱痕跡を確認できる柱穴も5基存在し、その径は11~27cm程度である。



第25図 SB-10出土遺物実測図

SB-08(第21図)

北半の東側、SB-07の北東に位置する。桁行3間、梁行2間の建物である。主軸をN-14°-Eにとる。建物の平面形は長方形を呈し、桁行3間が4.78m、梁行2間が2.54mを測り、面積は12.1m²となる。柱間寸法は桁行が113~223cm、梁行が100~138cmを測り、平均すると、桁行156cm、梁行119cmとなる。柱穴の平面形は全て円形。柱根が遺存するP-1405がある。柱根は径8cmを測る。断面観察により柱痕跡を確認できる柱穴も3基存在し、その径は8~15cm程度である。

P-1405に遺存していた柱根を放射性炭素年代測定(14C)した結果AD. 1332±36年という結果を得ている。樹種はマツ属。

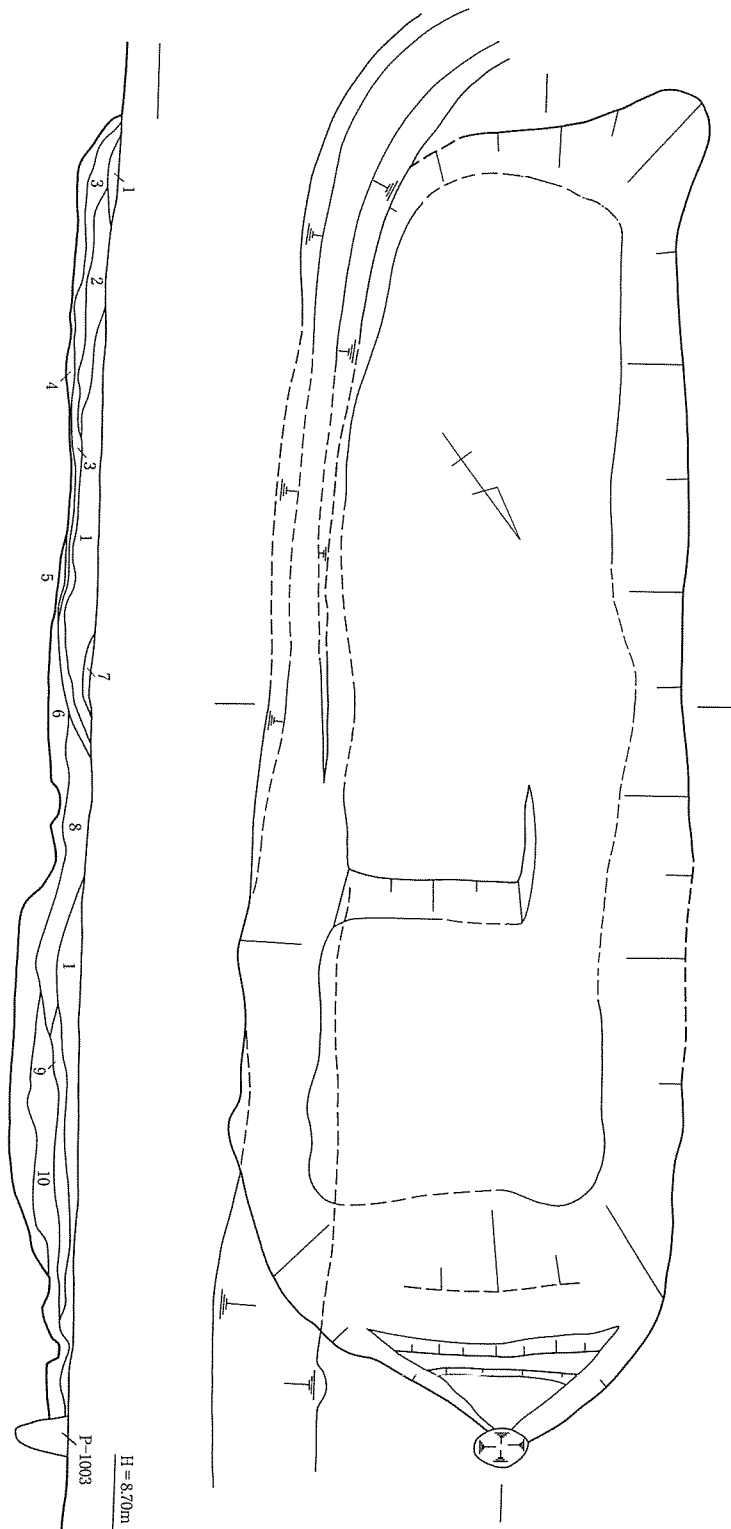
SB-09(第23図)

北半の西端に位置する。桁行2間、梁行2間と考えられる建物である。SD-34と重複する為、検出できなかった柱穴も多い。主軸をN-5°-Eにとる。建物の平面形はほぼ正方形を呈し、桁行2間が3.89m、梁行2間が3.57mを測り、面積は7.8m²となる。柱間寸法は桁行が171cm、186cmを測り、平均すると179cmとなる。柱穴の平面形は全て円形。断面観察により柱痕跡を確認できる柱穴はなかった。

SB-10(第24・25図)

北半の西端に位置する。桁行2間、梁行1間の建物である。主軸をN-6°-Eにとる。建物の平面形はほぼ正方形を呈し、桁行2間が3.20m、梁行1間が2.44mを測り、面積は13.9m²となる。柱間寸法は桁行が115~205cm、平均すると156cmとなる。梁行は244cmを測る。柱穴の平面形は全て円形であるが、径が50~70cmと比較的大きい。断面観察により柱痕跡を確認できる柱穴も3基存在し、その径は15~22cm程度である。P-1555の底面には、長さ22cm、幅11cm、厚さ7cmの板材が据えられていた。

遺物はP-1557より土師器の甕(1)が出土している。

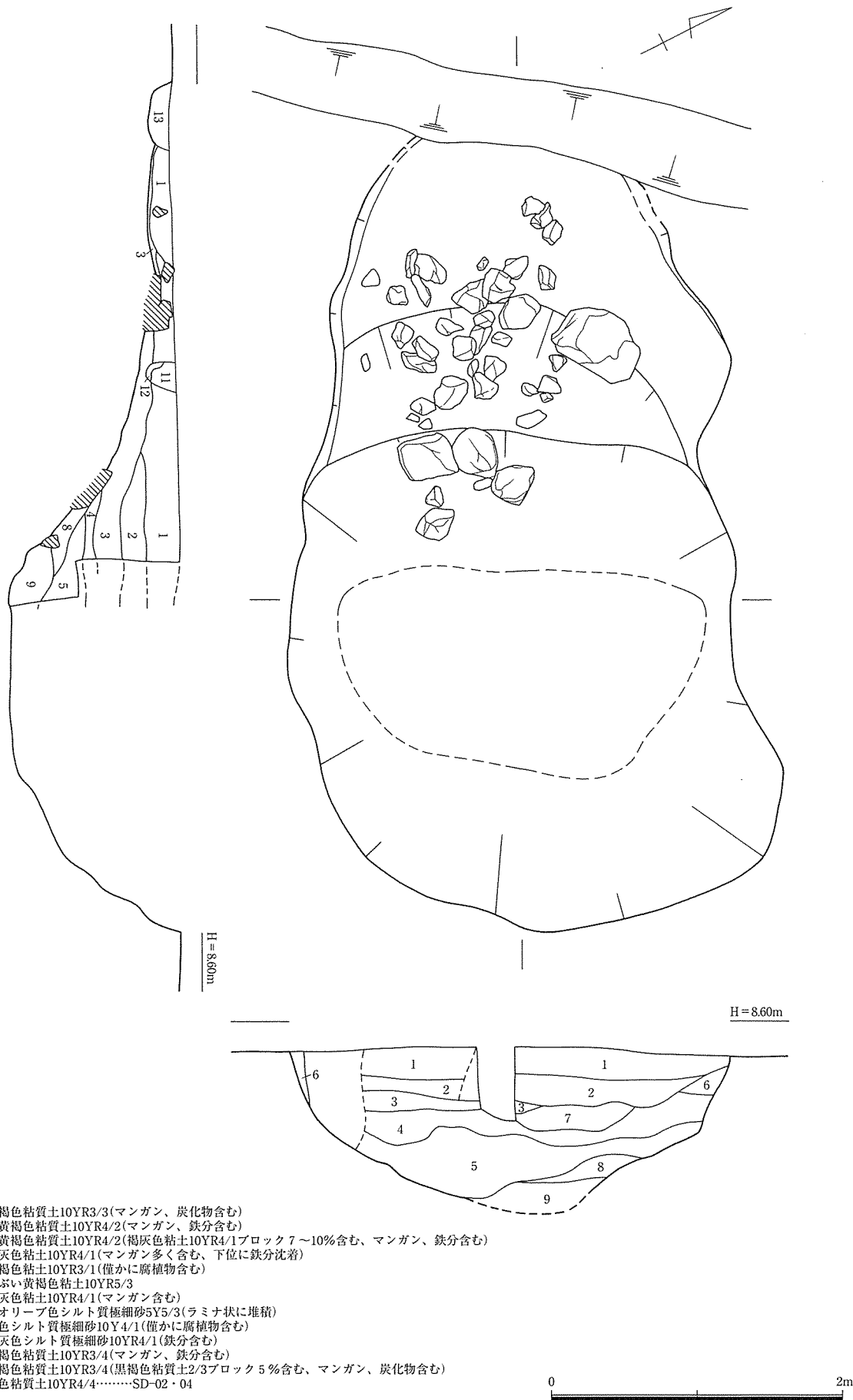


1. 褐色粘質土7.5YR4/4(マンガン含む)
 2. 暗褐色細砂7.5YR3/3(灰黄褐色粘質土10YR5/2ブロック2%含む、マンガン、鉄分含む)
 3. 灰黄褐色シルト質極細砂10YR5/2
 4. 灰褐色砂混粘質土10YR5/1
 5. におい黄褐色粘質シルト10YR5/4(におい黄色粘質シルト2.5YR6/3ブロック10%、マンガン含む)
 6. におい黄褐色砂混粘質土10YR4/3(灰色帯びる、マンガン含む)
 7. 褐色粘質土7.5YR4/4(灰黄褐色シルト質極細砂10YR5/2ブロック2%含む、マンガン含む)
 8. 褐色砂混粘質土7.5YR4/4(灰黄褐色シルト質極細砂10YR5/2ブロック2%含む、マンガン、鉄分含む)
 9. におい黄褐色粘質土10YR4/3(灰色帯びる、マンガン含む)
 10. におい黄褐色粘質土10YR4/3(鉄分含む、黄色帯びる)
- P-1003
灰褐色粘質土7.5YR4/2(マンガン含む)
- SD-02
におい黄褐色粘質土7.5YR4/6(におい黄褐色粘質シルト10YR5/3ブロック7%含む、マンガン含む)

H = 8.70m

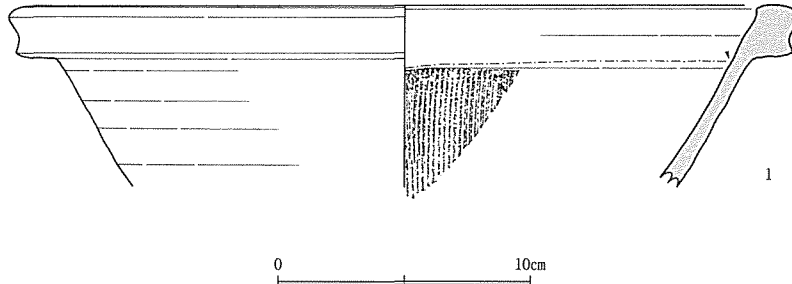


第26図 SK-01実測図



1. 暗褐色粘質土10YR3/3(マンガン、炭化物含む)
2. 灰黄褐色粘質土10YR4/2(マンガン、鉄分含む)
3. 灰黄褐色粘質土10YR4/2(褐灰色粘土10YR4/1ブロック7~10%含む、マンガン、鉄分含む)
4. 褐灰色粘土10YR4/1(マンガン多く含む、下位に鉄分沈着)
5. 黒褐色粘土10YR3/1(僅かに腐植物含む)
6. にぶい黄褐色粘土10YR5/3
7. 褐灰色粘土10YR4/1(マンガン含む)
8. 灰オリーブ色シルト質極細砂5Y5/3(ラミナ状に堆積)
9. 灰色シルト質極細砂10Y4/1(僅かに腐植物含む)
10. 褐灰色シルト質極細砂10YR4/1(鉄分含む)
11. 暗褐色粘質土10YR3/4(マンガン、鉄分含む)
12. 暗褐色粘質土10YR3/4(黒褐色粘質土2/3ブロック5%含む、マンガン、炭化物含む)
13. 褐色粘質土10YR4/4……………SD-02・04

第27図 SK-02実測図



第28図 SK-01出土遺物実測図

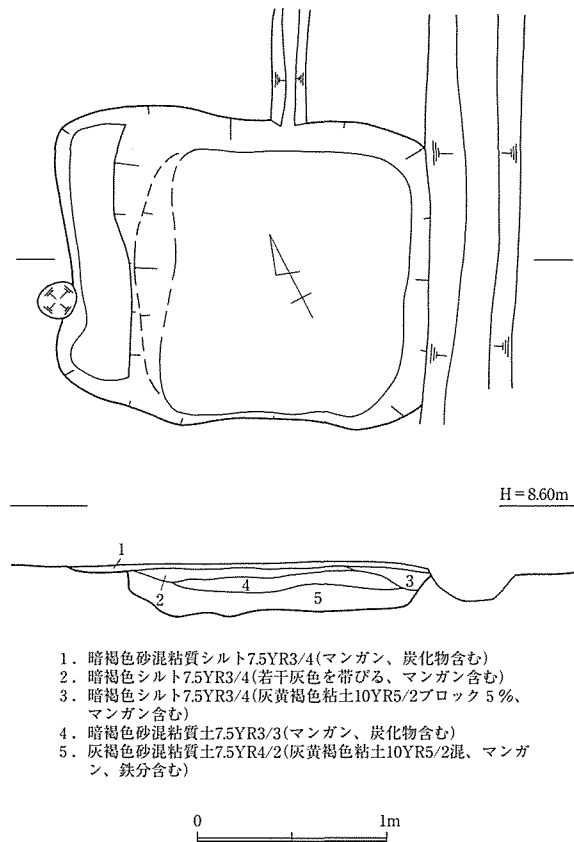
2. 土坑

SK-01(第26・28図)

南半の東側に位置する。SK-02を切り、SD-02(04)に切られる。SD-03との新旧関係は不明である。平面形は不整長楕円形を呈する。長さは7.17m、幅2.42mを測り、主軸をN-29°-Eにとる。深さは均一ではなく、南西側2/3が26cm、北東側1/3は38cmを測り、北東側が10cm余り深い。遺物は埋土中から陶器の播鉢(1)が出土している。近世以降の牛ノ戸焼。SD-03を伴う水利施設かとも考えられるが詳細は不明である。

SK-02(第27・30図)

南半の東側、SK-01の東側に位置する。SK-01、SD-02(04)に切られる。平面形は不整楕円形を呈する。検出長は5.47m、幅3.42mを測り、主軸をN-71°-Wにとる。深さは均一ではなく、西側約半分が11~39cm、東側は114cmを測る。西側には10~60cmの石が最深部に向かって散乱している。遺物は埋土中から瓦質土鍋(1)、陶器(2・3)、青磁碗(4)、土錘(5)、漆器碗(6)などが出土している。(3)は備前系。(4)は崩れた雷文を有する。溜井戸などの水利施設か。15世紀頃。



第29図 SK-03実測図

SK-03(第29図)

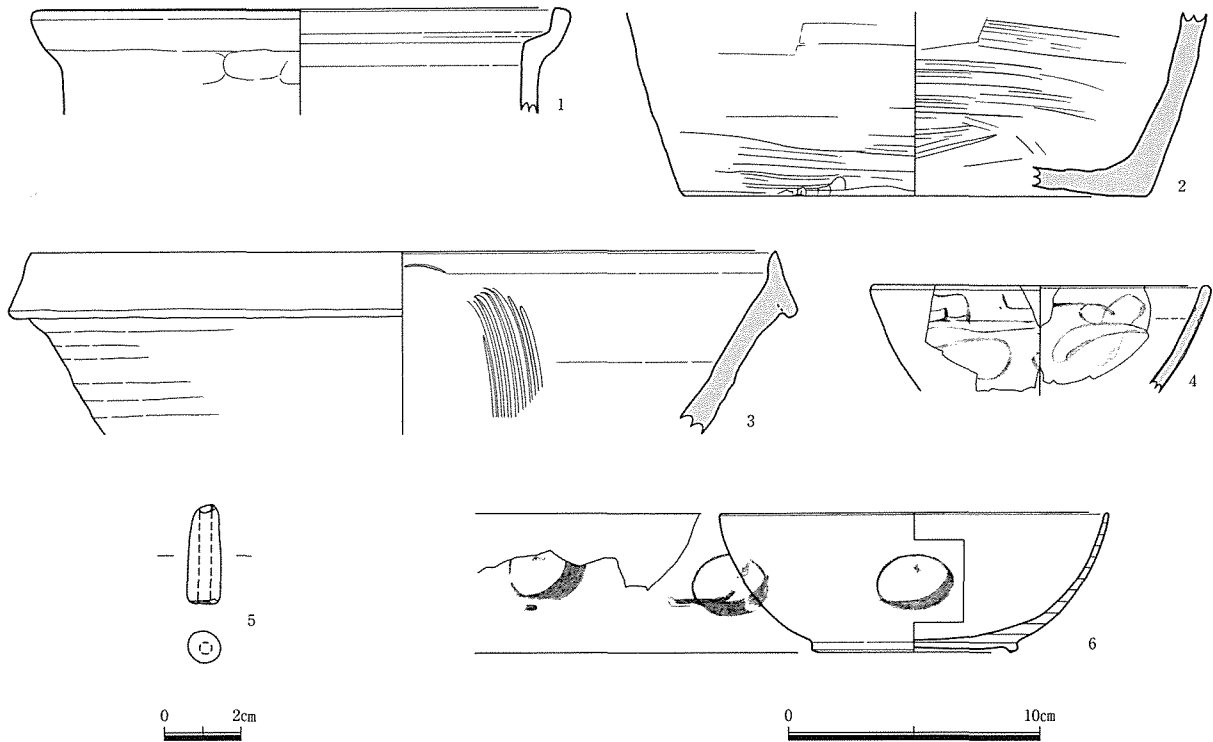
南半の東側、SK-01の北側に位置する。SD-04(02)に切られる。SD-46との新旧関係は不明である。平面形は長方形を呈す。検出長は1.98m、幅1.72m、深さは28cmを測る。主軸はN-62°-Wにとる。時期、性格等は不明である。

SK-04(第31図)

南半の東側、SK-03の北東に位置する。SD-54に切られる。平面形は不整楕円形を呈する。長さ2.84m、幅1.88mを深さは38cmを測る。主軸はN-16°-Wにとる。埋土上位中央には5~20cm大の角礫が密に含まれていた。時期、性格等は不明である。

SK-05(第32・33図)

南半の東側、SK-04の北に位置する。SK-06と重複するが新旧関係は不明である。また北端は現代の用水路に切られる。平面形は不整楕円形を呈す。検出長は2.64m、幅1.75mを深さは79cmを測る。主軸



第30図 SK-02出土遺物実測図

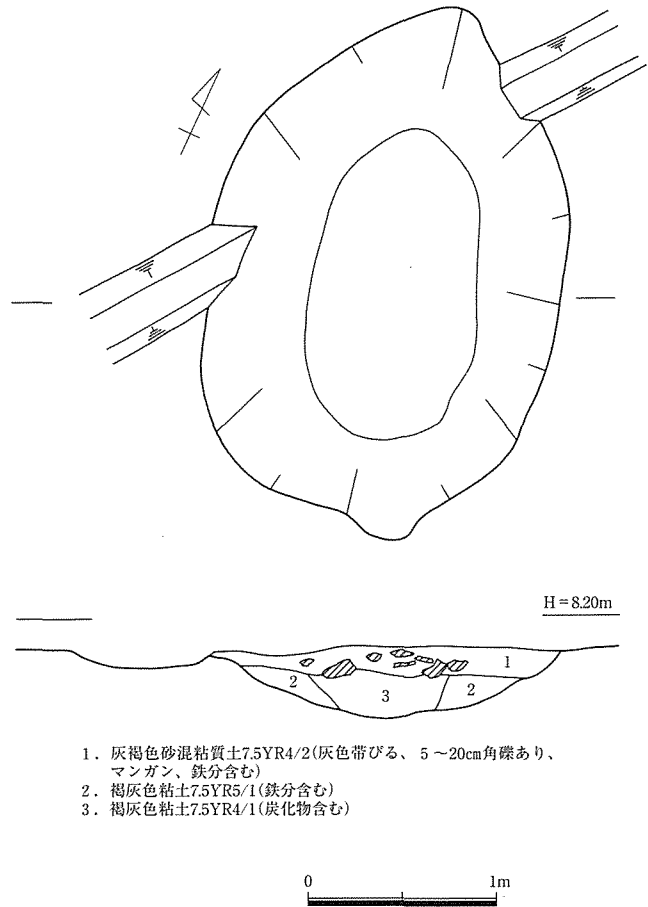
はN-9°-Eにとる。遺物は埋土中から須恵器の鉢(1)が出土している。性格等は不明である。

SK-06(第34・35図)

南半の東側、SK-04の北に位置する。SK-05と重複するが新旧関係は不明である。北西端は現代の用水路に切られる。平面形は不整長楕円形を呈す。検出長は4.44m、幅2.88mを深さは102cmを測る。主軸はN-81°-Wにとり、SK-05とほぼ直交する。出土遺物は埋土中から天目茶碗(1)、陶器搗鉢(3)、白磁碗(鉢)(4)、青磁(5)、土錘(7)などが出土している。(1)は瀬戸産、(4・5)は輸入陶磁器。14世紀後半。性格等は不明である。

SK-07(第36図)

南半の西側、南端付近に位置する。平面形は不整円形を呈す。長さ1.52m、幅1.27m、深さ152cmを測る。主軸はN-10°-Wにとる。底面から長さ47cm、幅30cm、厚さ16cmの比較的扁平な石が出土した。時期、性格等は不明である。



1. 灰褐色砂混粘質土7.5YR4/2(灰色帯びる、5~20cm角礫あり、マンガン、鉄分含む)
2. 褐灰色粘土7.5YR5/1(鉄分含む)
3. 褐灰色粘土7.5YR4/1(炭化物含む)

第31図 SK-04実測図

SK-08(第37・38図)

南半の西側、中央やや西側に位置する。平面形は不整形円形を呈す。長さ2.53m、幅2.39m、主軸をN-85°-Eにとる。底面は深さ114~132cmから更に径63~76cmの不整形円形に掘り込まれる。最深部の深さは169cmを測る。遺物は土師器皿(1)、白磁(2・3)、刀子(4)などが出土している。中央部分に井筒が据えられていたと仮定すれば、井戸の可能性もある。

SK-09(第39・40図)

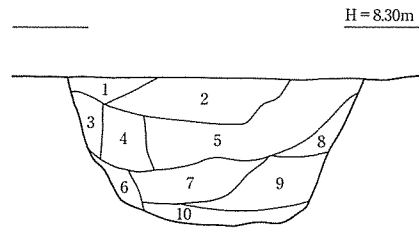
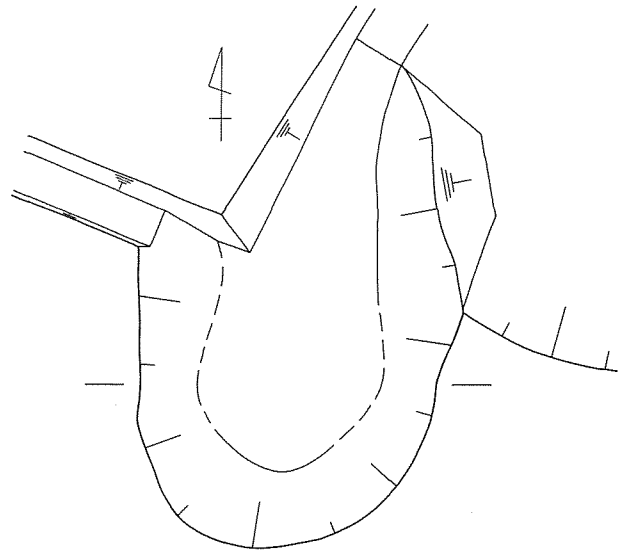
南半の西側中央、SK-08の北東に位置する。北端をSD-08に切られる。平面形は不整形円形を呈す。長さ5.21m、幅5.19m、主軸をN-3°-Eにとる。底面は深さ109~117cmから更に径95~122cmの不整形楕円形に掘り込まれる。最深部の深さは153cmを測る。遺物は瓦質の土鍋(1)、漆器椀(4・5)、下駄(6・7)などが出土している。SK-08同様、中央部分に井筒が据えられていたと仮定すれば、井戸の可能性もある。

SK-10(第41・43・45図)

南半の中央やや西側、SK-10の北西に位置する。北半分をSD-07に切られる。SD-06・08との新旧関係は不明である。平面形は不整形長楕円形を呈す。長さ3.06m、幅1.93m、深さ106cmを測る。主軸をN-5°-Eにとる。遺物は土師器杯(1・2)、瓦質羽釜(3)、瓦質甕(4)、埋土下位からは下駄(5)、板状木製品(6)が出土している。(4)は勝間田系か。溜井戸などの水利施設かと考えられる。

SK-11(第42・46図)

南半の中央やや西側、SK-09の北側に位置する。西端をP-557、P-617に切られる。SD-09との新旧関係は不明である。平面形は不整形円形を呈す。長さ1.29m、幅1.23m、深さ127cmを測る。主軸をN-85°-Wにとる。遺物は土師器甕(1)、天目碗(3)などが出土している。性格等は不明である。

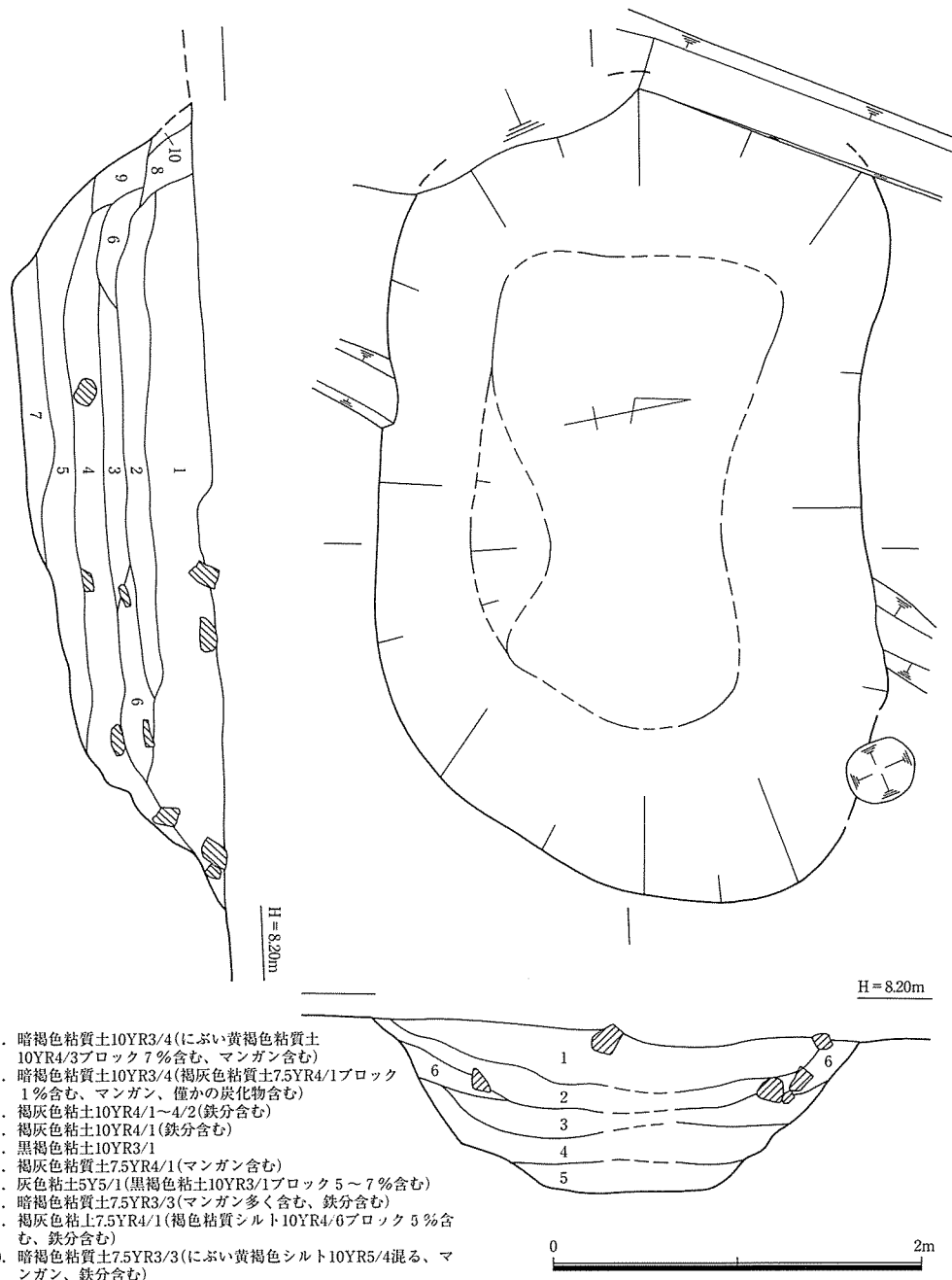


1. 暗褐色粘質土10YR3/4(にぶい黄褐色粘質土10YR4/3ブロック3%含む、鉄分、マンガンを含む)
2. 黄褐色粘質シルト2.5YR5/3~5/4(にぶい黄褐色粘質土10YR4/1ブロック10%含む、マンガンを、鉄分含む)
3. 褐色粘質土10YR4/4(暗褐色粘質土10YR3/4ブロック2%含む、マンガンを多量に含む)
4. 褐灰色粘質土10YR4/1(黄褐色粘質土2.5YR5/3混じる、鉄分、マンガンを含む)
5. 黄褐色粘質土2.5YR5/3(黄褐色粘質土10YR5/6ブロック2%含む、鉄分、マンガンを含む)
6. 褐灰色粘土7.5YR4/1(暗灰黄色粘土2.5YR5/2~5/3ブロック1塊含む、鉄分、マンガンを含む)
7. 灰黄褐色粘土10YR4/2(黄褐色粘質土10YR5/6ブロック20%含む、マンガンを含む)
8. 褐灰色粘質土7.5YR4/1(にぶい黄褐色粘質土10YR4/3~4/4混じる、マンガンを含む)
9. 黄褐色粘土2.5Y4/1(暗灰黄色粘土2.5Y5/2~5/3ブロック3%含む、鉄分を含む)
10. 褐灰色粘土10YR4/4

第32図 SK-05実測図



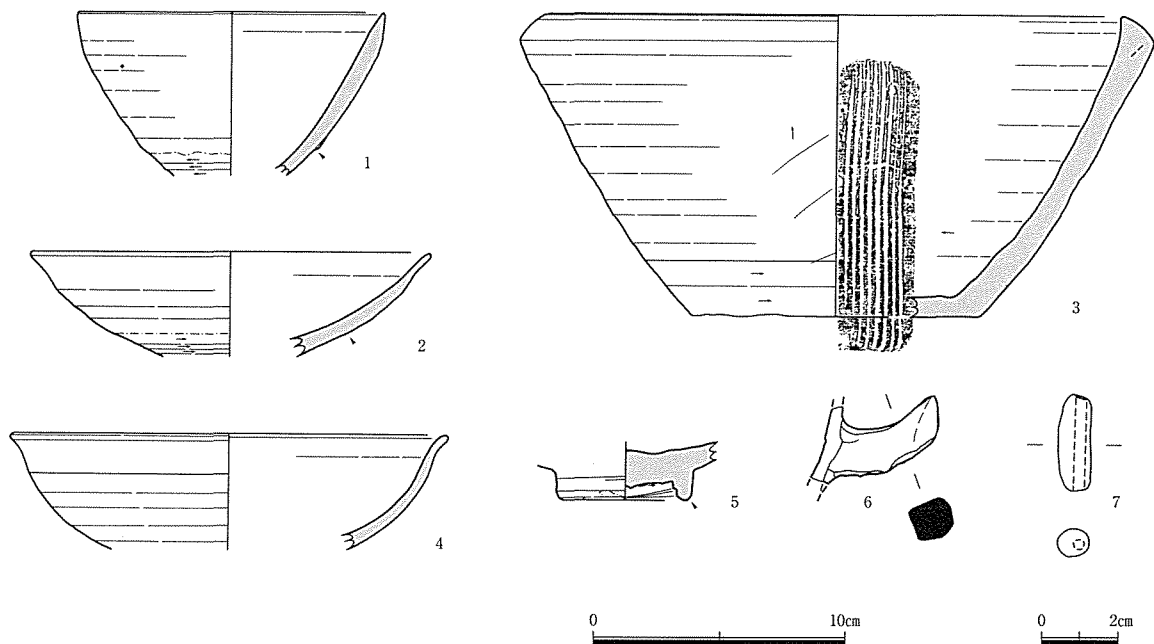
第33図 SK-05出土遺物実測図



第34図 SK-06実測図

SK-12(第44・49図)

南半の中央、SK-11の東側に位置する。平面形は不整円形を呈す。長さ1.22m、幅1.17m、深さ116cmを測る。主軸をN-20°-Eにとる。遺物は埋土中より取瓶もしくは埴塙と考えられる小皿(1)、中央の埋土下位より20cm大の石、底面から20cm浮いた位置に網籠に入った状態の鉄釘塊、底面から華瓶(5)、五鈷鈴(6)などが出土している。(1)は口径7.7cmを測り、内面には溶融物が付着する。鉄釘塊は角釘を主とするが鋸や工具状のものも混ざる。銹化または熔着して塊化しており重さは約2kg。個々に分離することは不可能である。一部外れた鉄製品(2・3・4)がある。網籠は底板(7)の大きさが長さ21.1cm、幅15cmを測り、孔から編上げたと考えられる。籠部は鉄釘塊に付着して分離は不可能。華瓶(5)、五鈷鈴(6)はいずれも銅製と思われる。いずれも完存。これらの出土遺物から宗教的な埋納遺構や特別な廃棄土坑などと考えられるが詳細は不明である。時期は室町期頃か。



第35図 SK-06出土遺物実測図

SK-13(第47・50図)

南半の西側、SK-10の北側に位置する。平面形は不整楕円形を呈す。長さ1.35m、幅1.17m、深さ109cmを測る。主軸はN-51°-Wにとる。遺物は埋土中より瓦質の土鍋(1)、白磁の底部(3)などが出土している。性格等は不明である。

SK-14(第48・51図)

南半の西側、SK-13の北東側に位置する。平成12年度に実施した試掘調査のトレンチに切られる。SD-07・15・16と重複するが新旧関係は不明である。平面形は不整形円形を呈す。長さ2.20m、幅1.99m、深さ143cmを測る。主軸はN-8°-Eにとる。遺物は埋土中より瓦質土鍋(1・2)、青磁(3)、曲物底板(4)などが出土している。性格等は不明である。

SK-15(第52図)

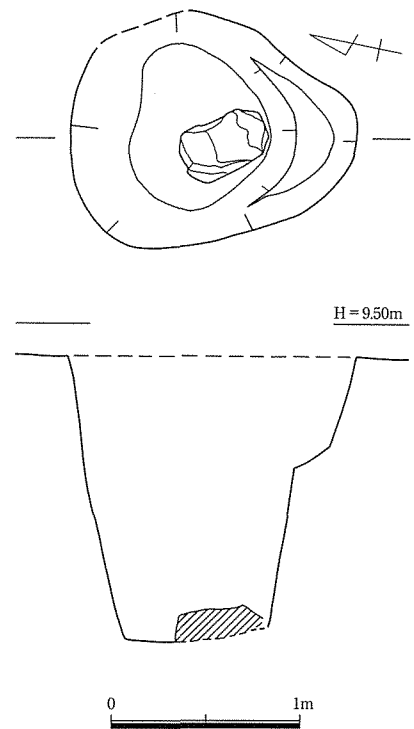
南半の西端付近に位置する。平面形は隅丸方形を呈す。長さは1.53m、幅1.47m、深さ54cmを測る。主軸はN-69°-Wにとる。時期、性格等は不明である。

SK-16(第53図)

南半の西端付近、SK-15の西側に位置する。平面形は不整形長円形を呈す。長さ1.50m、幅1.13m、深さ42cmを測る。主軸はN-60°-Wにとる。SK-15と同様の時期、性格と考えられるが詳細は不明である。

SK-17(第54・60図)

南半の西端付近、SK-16の南西側に位置する。平面形は不整楕円形を呈す。中央部分がピット状に若干凹む。長さ1.31m、幅1.07m、深さ58cmを測る。主軸はN-83°-Wにとる。遺物は陶器の鉢(1)などが出土している。SK-15・16と同様の時期、性格と考えられるが詳細は不明である。



第36図 SK-07実測図

SK-18(第55・63図)

南半の西端付近、SK-17の北西に位置する。南西側は調査地外となる。平面形は隅丸(長)方形を呈すると考えられる。検出長1.31m、幅1.29m、深さ105cmを測る。現状での主軸はN-39°-Eにとる。遺物は五輪塔の空風輪(1)、陶器製の軒平瓦(2)などが出土している。(2)は近世以降のもの。性格等は不明である。

SK-19(第56・66図)

北半の東端に位置する。南西側約1/3を暗渠に切られる。北端をSK-24に切られる。平面形は不整楕円形を呈す。長さ1.32m、検出幅1.06m、深さ56cmを測る。主軸はN-29°-Wにとる。時期、性格等は不明である。

SK-20(第64図)

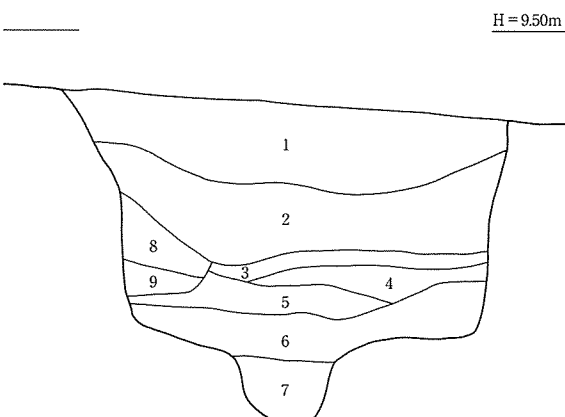
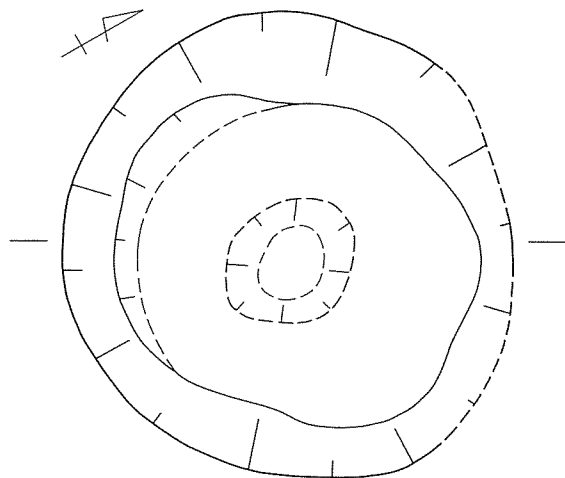
北半の東端、SK-19の南西側に位置する。南半は現代の用水路とそれを保護するために設けた控えにより未調査である。検出長は1.44mを測るが、全体の規模などは不明である。調査中、崩落が著しく用水路の保護の為、調査続行を断念せざるを得なかった。遺物は木製容器の蓋(1)が出土している。時期、性格等は不明である。

SK-21(第57図)

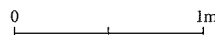
北半の東側、SK-20の北側に位置する。上位を暗渠に切られる。平面形は不整円形を呈す。径は1.02~1.06m、深さ95cmを測る。時期、性格等は不明である。

SK-22(第58図)

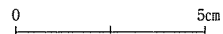
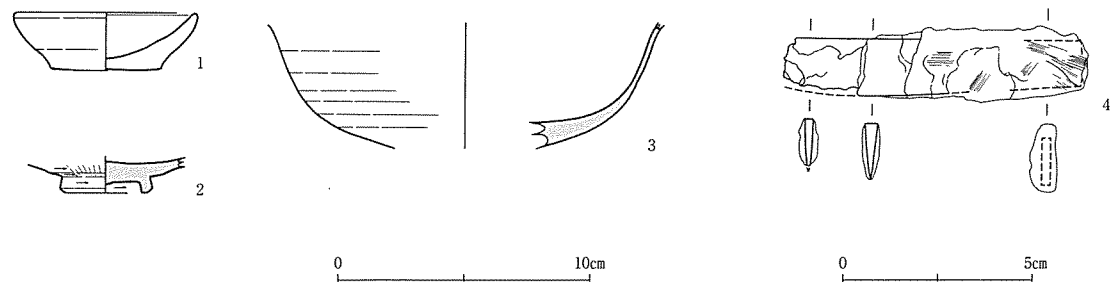
北半の東端、SK-19の東側に位置する。北側の一部を暗渠に切られる。平面形は不整円形を呈す。長さ1.58m、幅1.35m、深さ64cmを測る。主軸はN-66°-Wにとる。時期、性格等は不明である。



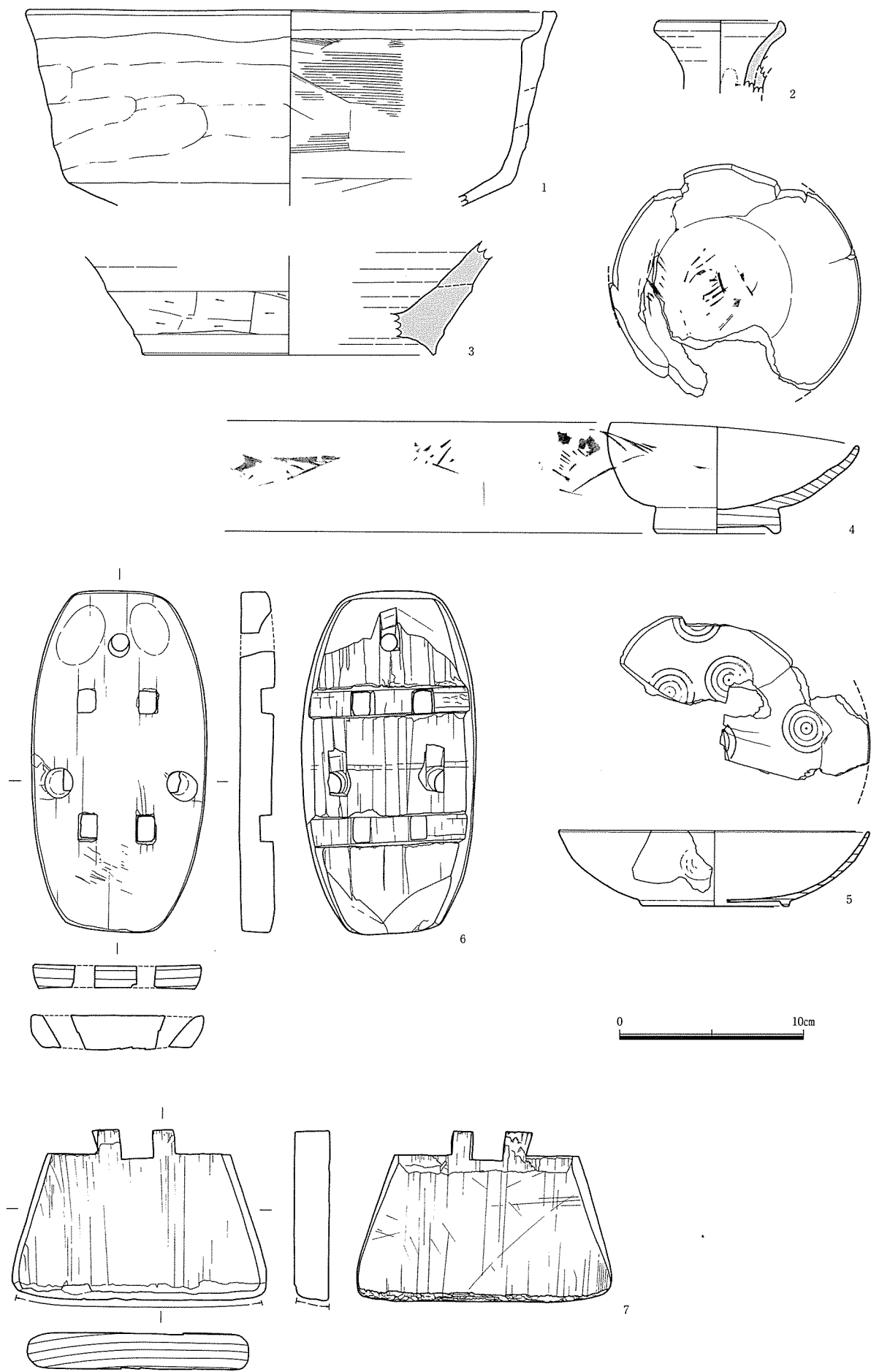
- 1. 褐色砂混粘質シルト7.5YR4/4(0.5~5cmの地山岩2%含む、マンガ、炭化物含む)
- 2. にぶい褐色砂混粘質土7.5YR5/3(5~20cmの地山岩2%含む、マンガ、鉄分含む)
- 3. にぶい褐色砂混粘質土7.5YR5/4(鉄分沈着、マンガン含む)
- 4. 灰色砂混粘土10Y5/1
- 5. 灰色砂混粘土5Y4/
- 6. 灰色粘土5Y4/1
- 7. 灰色砂混粘土10Y5/1(腐植物含む)
- 8. 灰黄褐色砂混粘質土10YR5/2(マンガ、鉄分含む)
- 9. 灰褐色砂混粘質土10YR5/1(マンガン含む)



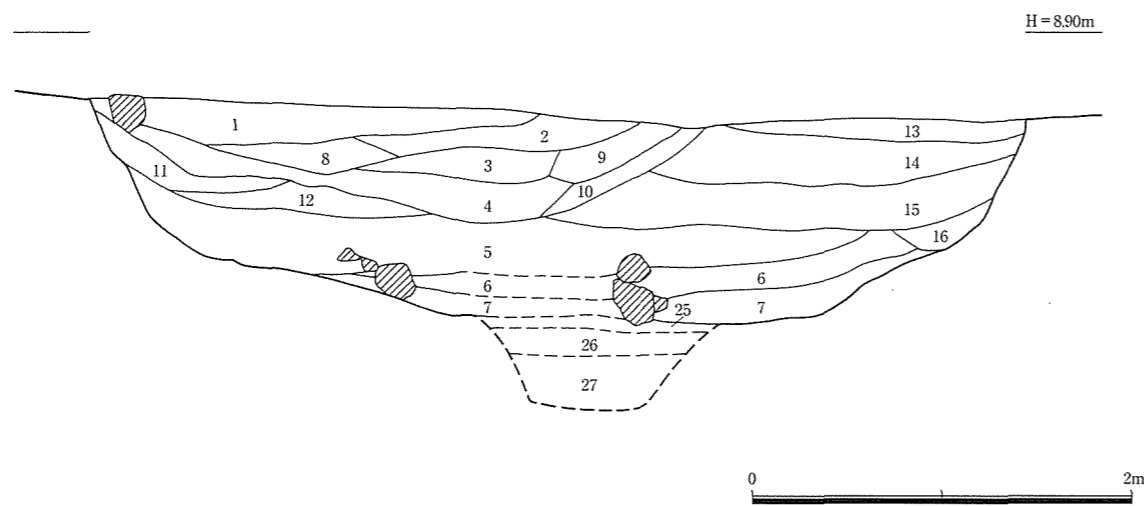
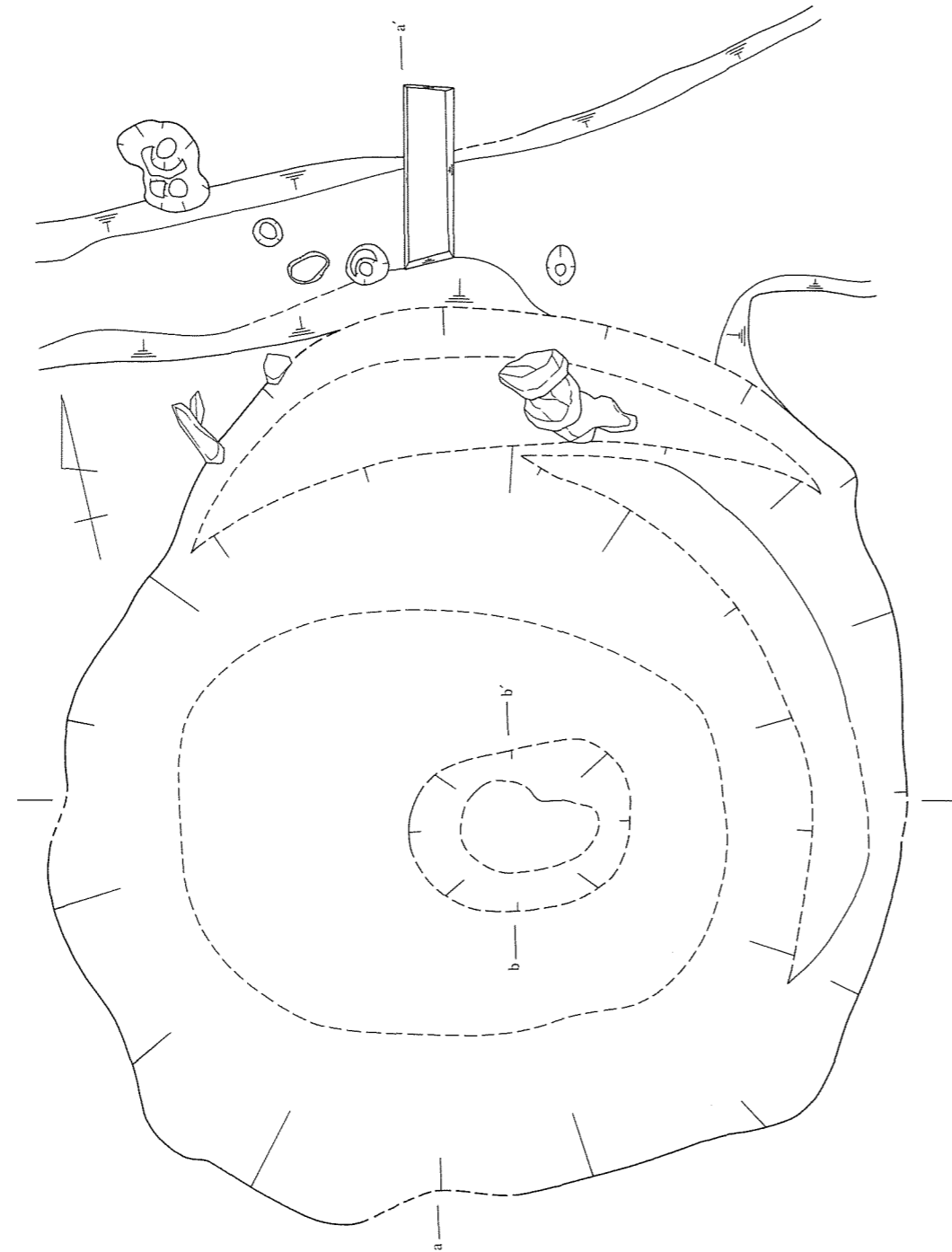
第37図 SK-08実測図



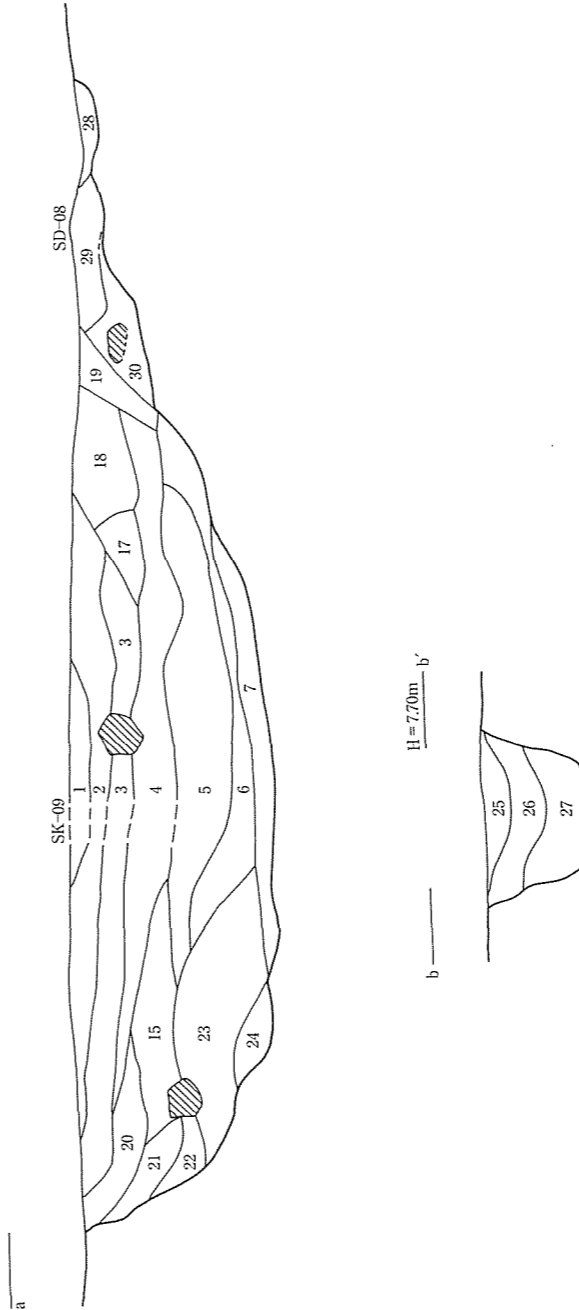
第38図 SK-08出土遺物実測図



第39图 SK-09出土遗物实测图

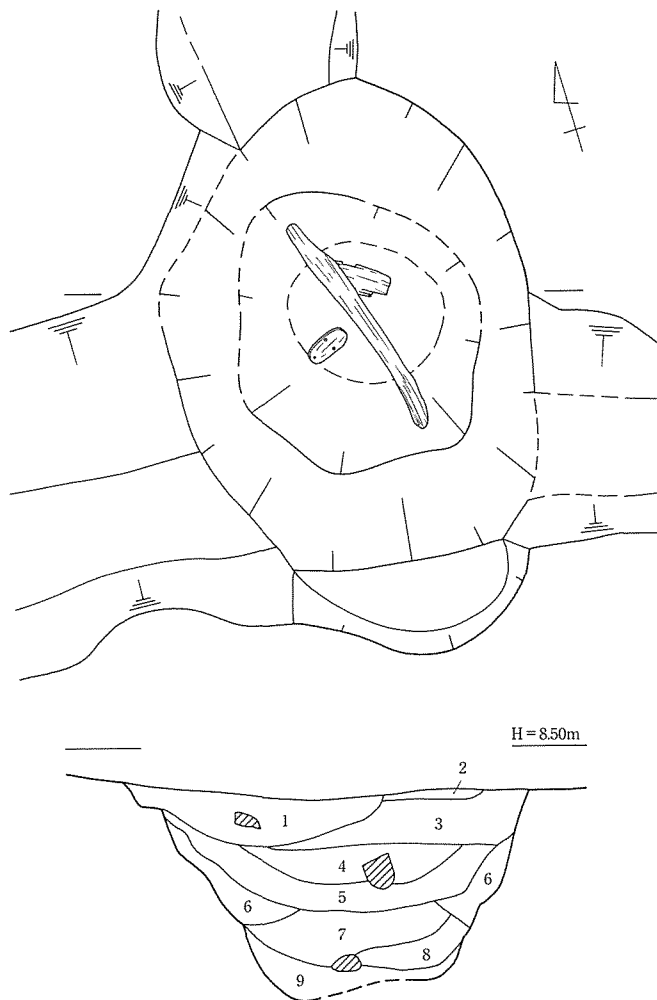


H = 8.90m



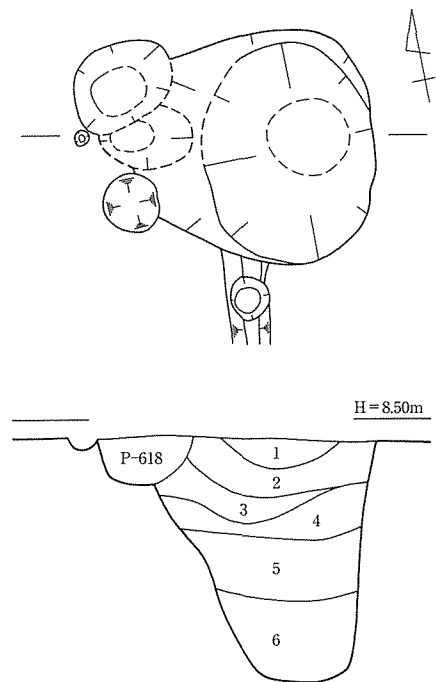
1. 褐色砂混粘質土10YR4/4(鉄分、マンガン、炭化物含む、0.5cm以下の砂粒を多く含む)
2. 褐色砂混粘質土10YR4/4(明赤褐色砂混粘質土2.5YR5/6ブロック(20×8)cm1片含む、マンガン、炭化物含む)
3. 暗褐色砂混粘質土7.5YR3/4(マンガン、炭化物含む、1cm以下の砂粒を含む)
4. 暗褐色砂混粘質土10YR3/4(褐色砂混粘質土10YR4/6混じる、鉄分沈着、炭化物、マンガン含む)
5. 褐灰色粘質土7.5YR4/1(10cm以下の軟岩1%含む)
6. 黒褐色砂混粘質土7.5YR3/1~4/1(腐植物含む)
7. 灰色粘土5Y4/1
8. 褐色砂混粘質土10YR4/4(マンガン、炭化物含む、明赤褐色砂混粘質土2.5YR5/6 5cm以下のもの2片含む濁る、0.5cm以下の砂粒を多く含む)
9. におい黄褐色粘質土10YR5/4~5/6(マンガン、鉄分含む)
10. 褐色砂混粘質土10YR4/4~4/3(鉄分、マンガン含む、2cm以下の軟岩ブロックを1%含む)
11. 灰褐色砂混粘質土7.5YR4/2~4/1(鉄分、マンガン含む、1cm以下の砂粒多く含む、炭化物含む)
12. 黒褐色砂混粘質土7.5YR3/1~4/1(マンガン含む、1cm以下の砂粒多く含む)
13. 褐色粘質土10YR4/4~4/3(鉄分、マンガン含む、5cm以下の軟岩ブロックを1%含む)
14. におい黄褐色粘質土10YR4/3~3/3(マンガン、鉄分含む、10cm以下の軟岩ブロックを1%含む)
15. におい黄褐色粘質土10YR5/3~5/2(マンガン含む、3~5cmの鉄分沈着6cmの軟岩ブロックを1片含む)
16. 褐灰色粘質土7.5YR4/1(におい黄褐色粘質シルト10YR5/3ブロック1%含む、鉄分、マンガン含む)
17. 黒褐色砂混粘質土7.5YR3/2~4/2(炭化物含む)
18. 暗褐色砂混粘質土7.5YR3/3~3/2(灰褐色粘土7.5YR5/2ブロック3%含む、炭化物含む)
19. 褐色砂混粘質土7.5YR4/3(鉄分、マンガン含む)
20. におい黄褐色砂混粘質土10YR4/3~3/3(マンガン、炭化物含む)
21. におい褐色砂混粘質土7.5YR5/3~5/2(炭化物、鉄分少量づつ含む)
22. 灰褐色砂混粘質土7.5YR4/2(灰褐色粘土7.5YR5/2ブロック10%含む、マンガン含む)
23. 褐灰色粘土7.5YR4/1(褐灰色粘土5YR4/1ブロック3%含む、腐植物含む)
24. 灰色粘土10Y4/1
25. 黒褐色粘土10YR3/1(灰色粘土5Y4/1 5%混じる)
26. 褐灰色粘土10YR4/1(炭化物、腐植物含む)
27. オリーブ黒色粘土5Y3/1(腐植物含む、灰色粘土4/1 2cm以下のブロック5%混じる)
28. におい黄褐色粘質土10YR4/3~3/3(マンガン、鉄分、1cm以下の砂利含む)
29. におい黄褐色粘質土10YR4/3~3/3(焼土、炭化物、マンガン、鉄分、1cm以下の砂利含む)
30. 褐色粘質土10YR4/4(鉄分、マンガン含む、濁る)

第40図 SK-09実測図



1. 黄灰色粘質土2.5Y4/1(褐色を帯びる、マンガン、鉄分多く含む)…SD-07埋土
2. におい黄褐色粘質土10YR4/3(褐色を帯びる、マンガン多く含む)
3. 黒(暗)褐色粘質土7.5YR3/2~3/3(マンガン多く含む)
4. 黒(暗)褐色粘質土10YR3/2~3/3(マンガン多く含む)
5. 黒褐色粘質土7.5Y3/1(褐色を帯びる、マンガン、鉄分、炭化物含む)
6. 黒褐色粘質土7.5Y3/1(黄褐色粘質シルト2.5Y5/3ブロック10~15%含む、マンガン、鉄分含む)
7. 黒褐色粘土10YR3/1
8. 黒褐色粘土10YR3/1(暗オリーブ灰色粘土2.5GY4/2ブロック 3%含む)
9. 灰色粘土7.5Y4/2(黒褐色粘土10YR3/1混、緑色を帯びる)

0 1m
第41図 SK-10実測図



1. 灰褐色粘質土7.5YR5/2(マンガン、鉄分、僅かの炭化物含む)
2. 褐色粘質土7.5YR4/4(7mm以下の砂粒を含む、鉄分、少量のマンガン含む)
3. におい橙色粘質土7.5YR6/4(5mm以下の砂粒、マンガン、鉄分を含む)
4. におい褐色砂混粘土7.5YR5/3~5/2(マンガン、僅かな炭化物含む、下に鉄分沈着)
5. 褐灰色粘土7.5YR4/1(鉄分多量に含む、マンガン含む)
6. 灰色粘土7.5Y4/1

0 1m

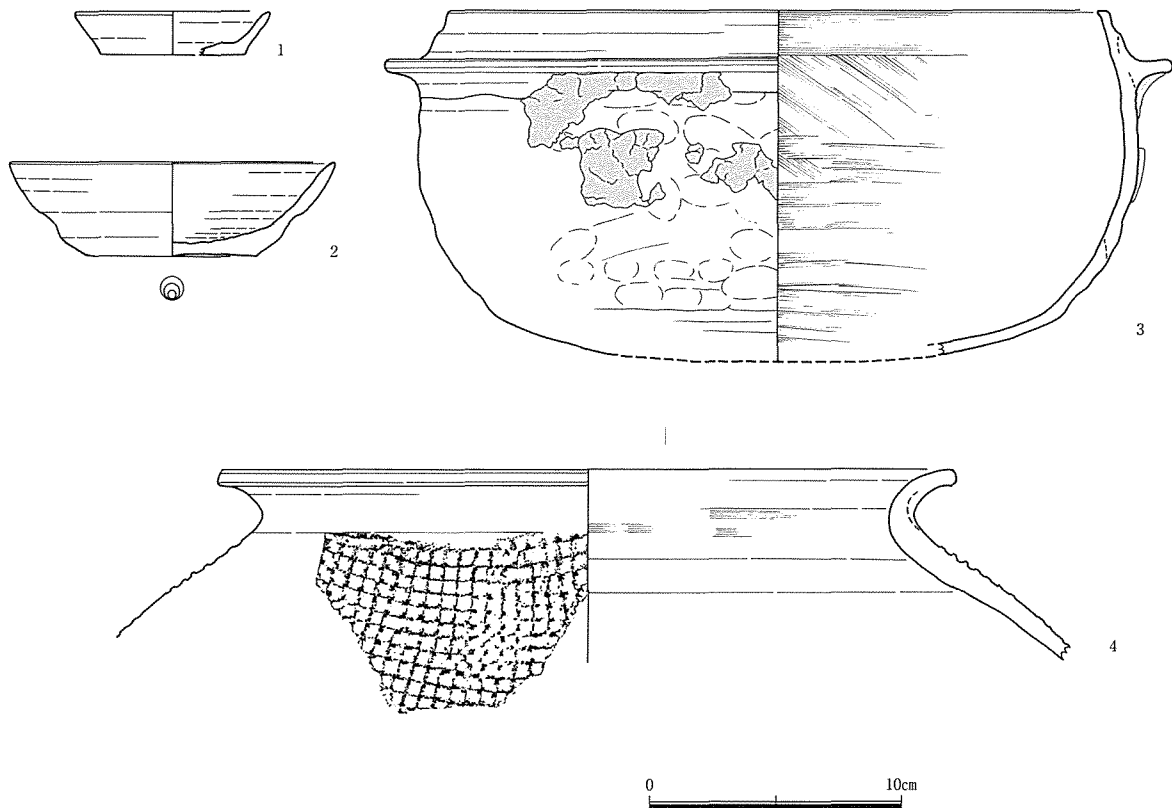
第42図 SK-11実測図

SK-23(第59・65図)

北半の東側、SK-21の北西側に位置する。上位を暗渠に切られる。平面形は不整円形を呈す。径は1.13~1.15m、深さ74cmを測る。遺物は瓦質の鉢(1)が出土している。性格等は不明である。

SK-24(第61・67図)

北半の東端に位置する。SK-19の北端を切る。平面形は不整形を呈する。長さ1.06m、幅0.56m、深さ7cmを測る。主軸はN-36°-Wにとる。陶器の底部(1)が出土している。性格等は不明である。



第43図 SK-10出土遺物実測図(1)

SK-25(第62図)

北半の東端、SK-20の北東側に位置する。上位を暗渠に切られる。平面形は楕円形を呈す。検出長0.87m、幅0.72m、深さ83cmを測る。主軸はN-23°-Wにとる。時期、性格等は不明である。

SK-26(第68~71図)

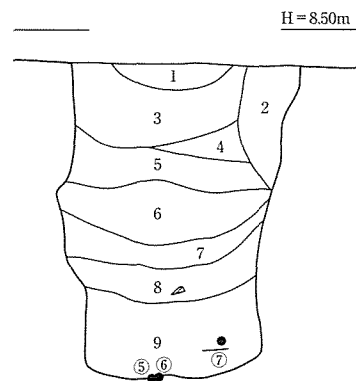
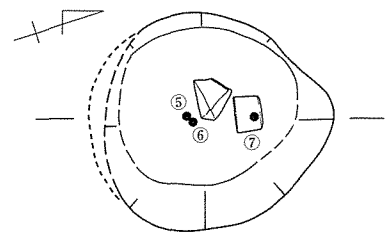
北半の東側に位置する。上位極僅かを攪乱坑に切られる。平面形は不整楕円形を呈す。長さ2.58m、幅1.97m、深さ149cmを測る。主軸はN-63°-Eにとる。遺物は土師器灯明皿(1)、青磁(3)、砥石(4)、曲物底板(6)、漆器椀(8)、銭貨(9)などが出土している。(9)は1174年を初鑄年とする「淳熙元寶」か。規模などから井戸とも考えられるが詳細は不明である。

SK-27(第72図)

北半の中央付近、SK-26の西側に位置する。平面形は不整円形を呈す。径は0.84~0.86mを測る。調査途中で崩落した為、深さは不明である。時期、性格等は不明である。

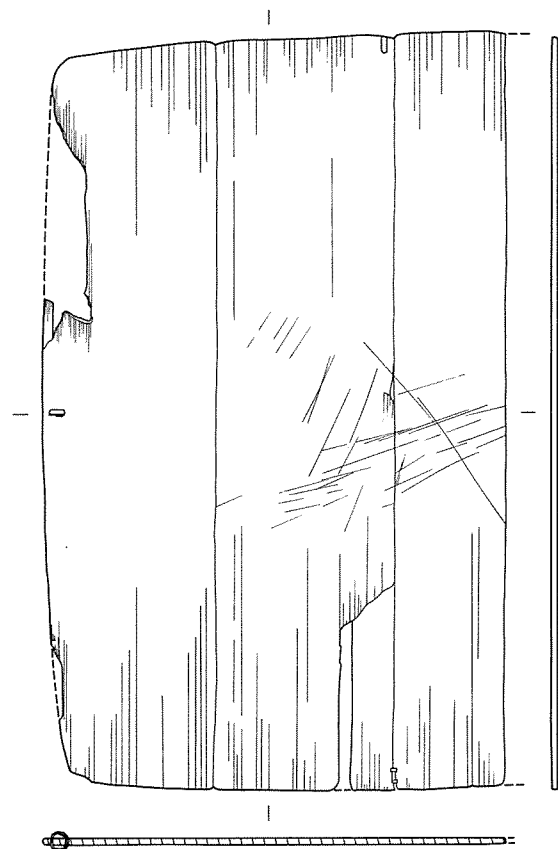
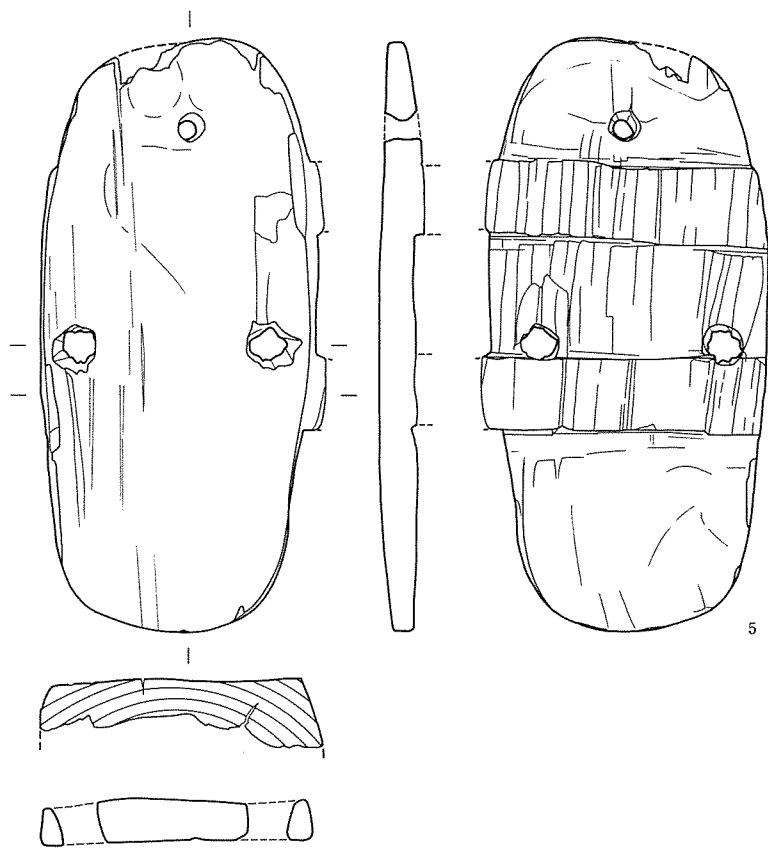
SK-28(第73図)

北半の北東端に位置する。平面形は不整円形を呈す。長さ0.77m、幅0.75m、深さ35cmを測る。主軸はN-65°-Wにとる。時期、性格等は不明である。



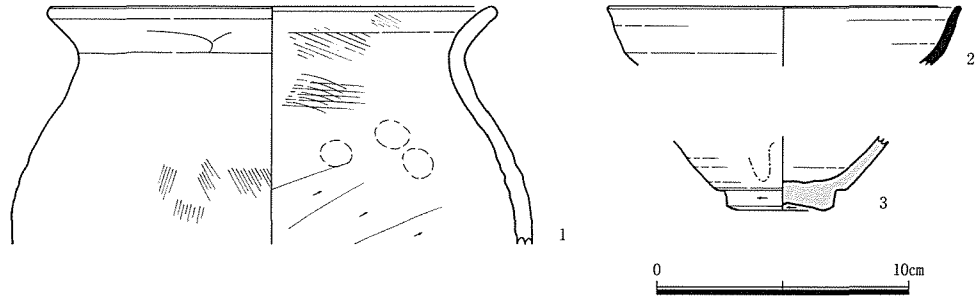
1. 暗褐色粘質土10YR3/3~5/3(マンガン、炭化物、鉄分含む)
2. にぶい黄褐色粘質土10YR5/3(マンガン、少量の鉄分含む)
3. 褐色粘質土10YR4/4(マンガン、少量の鉄分含む)
4. 灰黄褐色砂混粘質土10YR5/2(鉄分、少量のマンガン含む)
5. にぶい黄褐色砂混粘質土10YR5/3~5/4(下に厚さ3~8cm程度の鉄分沈着)
6. 褐灰色粘土10YR4/1
7. 灰色粘土7.5Y4/1
8. 灰色粘土10Y4/1
9. オリーブ黒色粘土10Y3/2

第44図 SK-12実測図

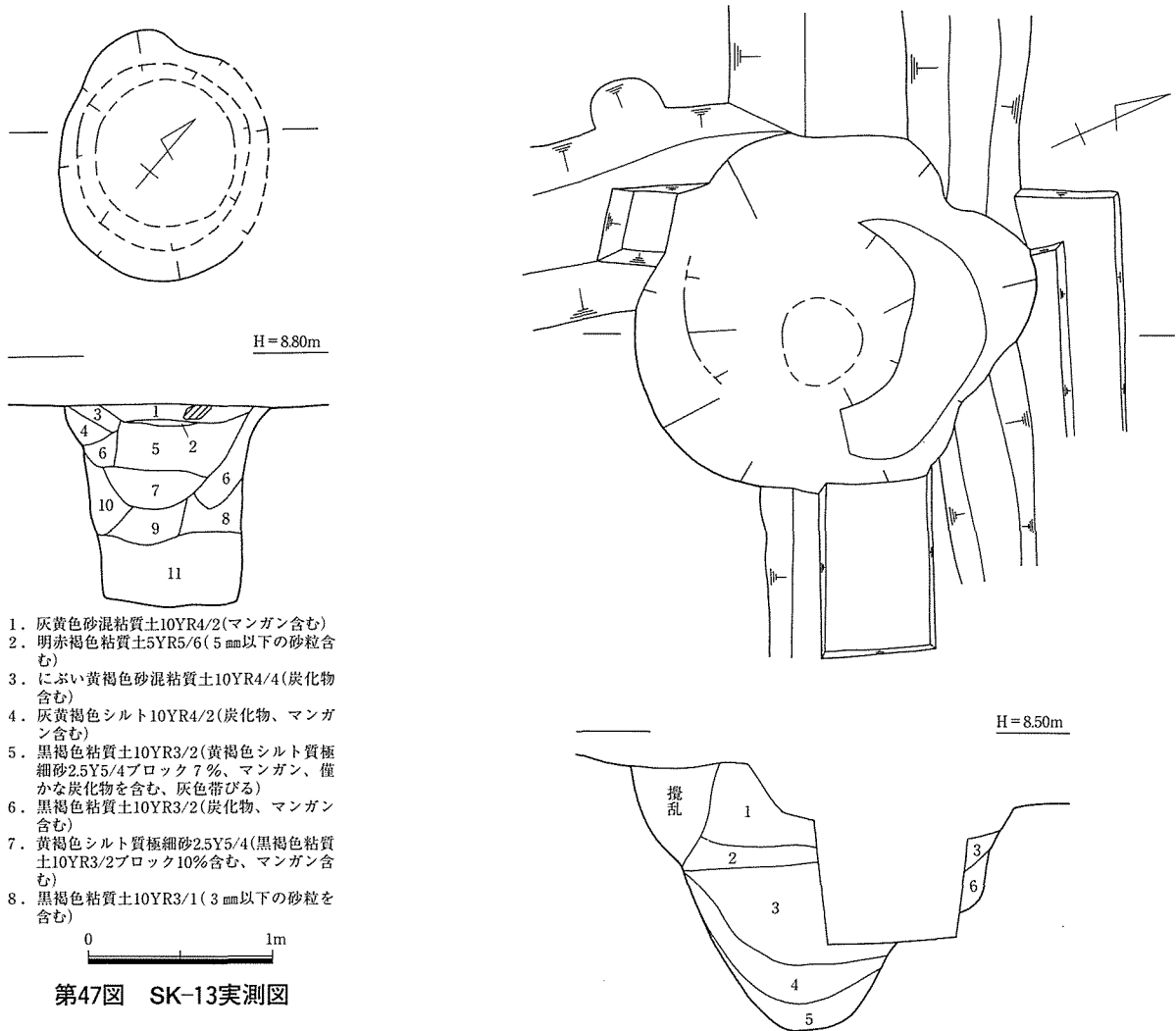


0 10cm

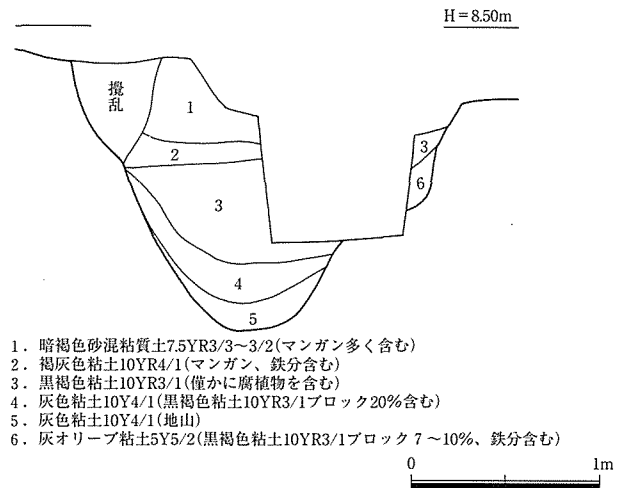
第45图 SK-10出土遺物実測図(2)



第46図 SK-11出土遺物実測図



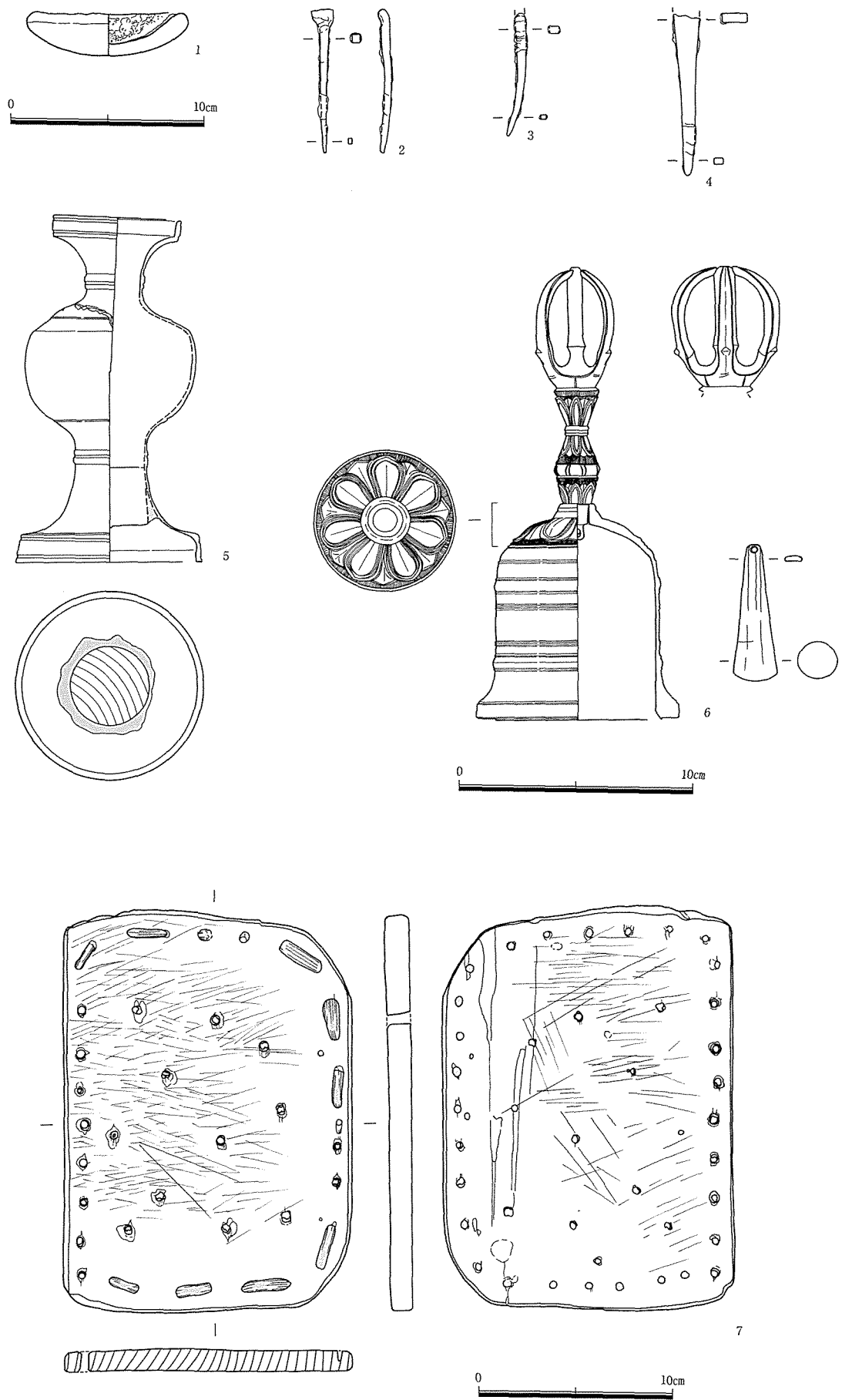
第47図 SK-13実測図



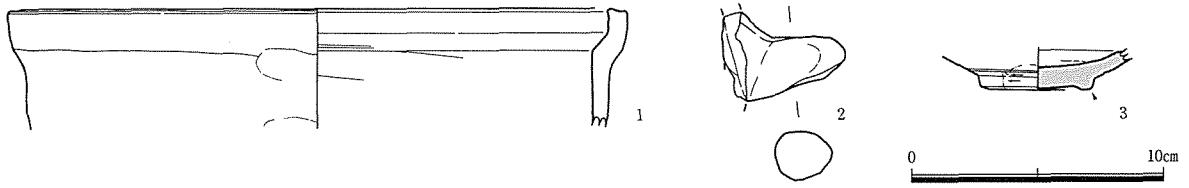
第48図 SK-14実測図

SK-29(第74・75図)

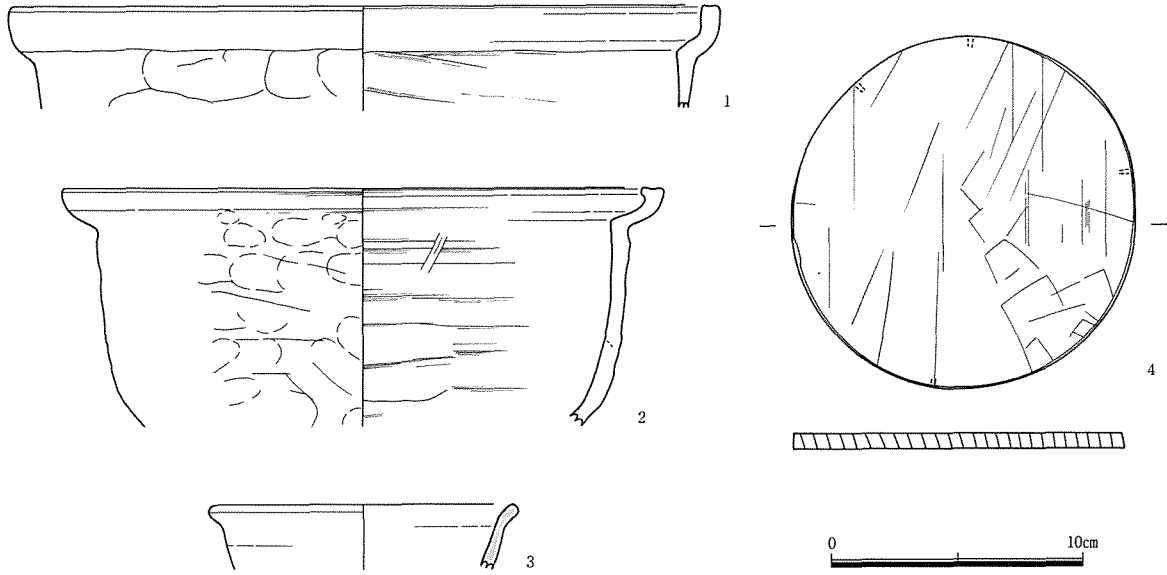
北半の中央付近に位置する。平面形は円形を呈す。径1.81m、深さ140cmを測る。断面形は若干オーバーハングしており、袋状を呈す。遺物は箱状木製品(1)などが出土している。時期、性格等は不明である。



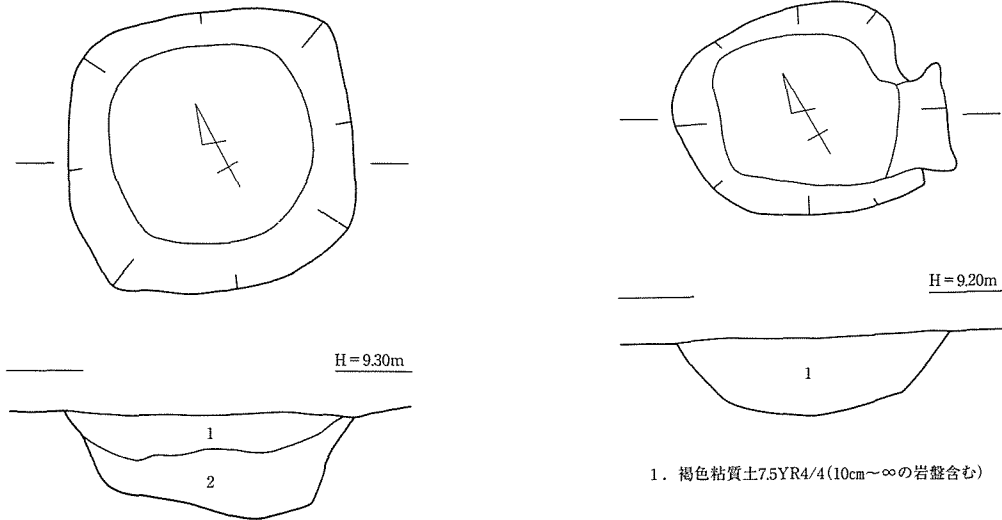
第49图 SK-12出土遗物实测图



第50図 SK-13出土遺物実測図

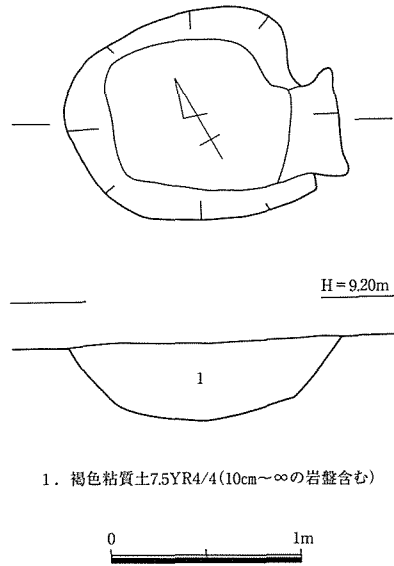


第51図 SK-14出土遺物実測図



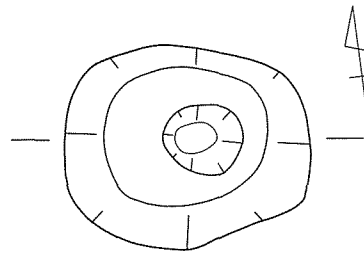
1. にぶい黄褐色粘質土10YR4/3~5/3(褐色シルト10YR4/6ブロック10%含む)
2. 褐色砂混粘質土7.5YR4/4~4/6(1cm~∞の岩盤ブロック5%含む)

第52図 SK-15実測図

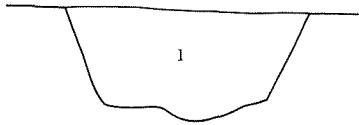


1. 褐色粘質土7.5YR4/4(10cm~∞の岩盤含む)

第53図 SK-16実測図



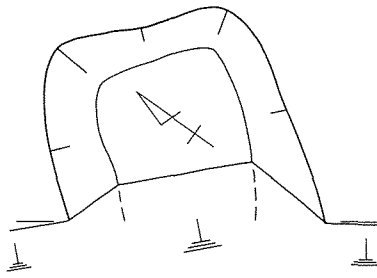
H=9.40m



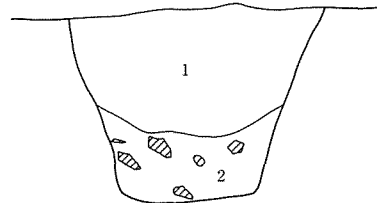
1. 褐色粘質土7.5YR4/4(10cm~∞の岩盤含む)



第54図 SK-17実測図



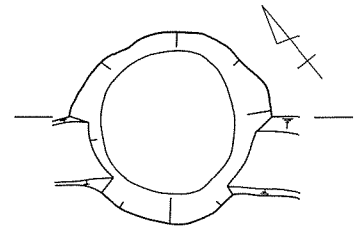
H=9.70m



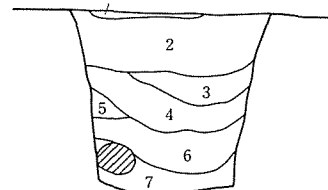
1. におい黄褐色砂混粘質土10YR5/4 (褐色粘質土7.5YR4/6マンガン含むブロック3%、腐植物、鉄分含む)
2. におい黄褐色粘質土10YR5/3~5/2 (3cm~∞の岩盤15%含む)



第55図 SK-18実測図



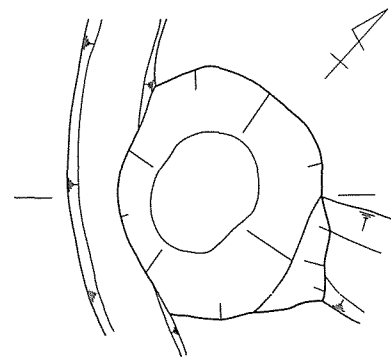
H=8.20m



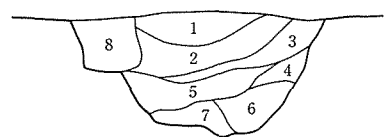
1. 暗褐色シルト7.5YR3/3(マンガン含む、鉄分沈着)
2. 褐灰色粘質シルト7.5Y5/1(マンガン多く含む)
3. 褐灰色粘質土7.5Y4/1(灰黄褐色シルト質極細砂10YR6/2ブロック7%、マンガン多く含む)
4. 褐灰色粘質シルト7.5Y4/1(マンガン含む)
5. 褐灰色粘質シルト7.5Y4/1(褐色を帯びる、マンガン含む)
6. 黄灰色粘土2.5Y4/1
7. 黄灰色粘土2.5Y4/1(灰色粘土7.5Y4/1ブロック10%含む)



第57図 SK-21実測図



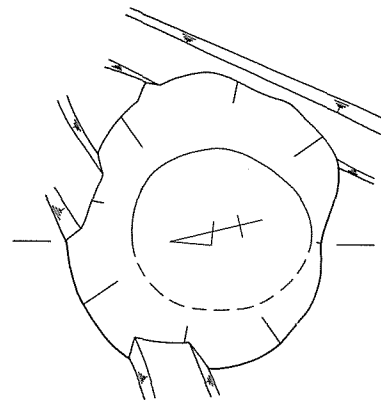
H=8.00m



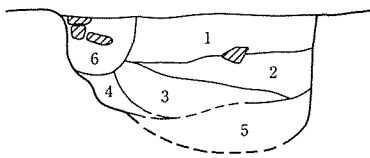
1. 褐色シルト10YR4/4(マンガン、鉄分含む)
2. 暗褐色シルト7.5Y3/3(灰黄褐色シルト質極細砂10YR6/2ブロック5%含む、マンガン含む)
3. 黒褐色シルト7.5YR3/2(灰色を帯びる、マンガンを含む)
4. 褐色シルト10YR4/4~4/3(マンガン多く含む)
5. 褐灰色粘質シルト10YR4/1(灰黄褐色シルト質極細砂10YR6/2ブロック3%、僅かに炭化物含む)
6. 暗灰黄色シルト質極細砂10YR6/3(マンガン、鉄分含む)
7. におい黄色シルト質極細砂10YR6/3(マンガン、鉄分含む)
8. におい黄褐色粘質土10YR5/3~4/3(マンガン含む)…暗渠



第56図 SK-19実測図



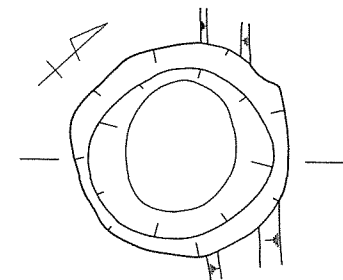
H=8.10m



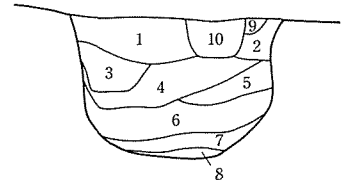
1. におい黄褐色砂混シルト10YR4/3(灰色を帯びる、マンガン多く含む)
2. 黄灰色粘土2.5Y5/1(鉄分、マンガン含む)
3. 黄灰色粘土2.5Y5/1(部分的に鉄分多く含む)
4. 褐灰色砂混粘質土7.5YR4/1(マンガン、鉄分含む)
5. 褐灰色粘土7.5YR4/1~3/1(僅かに腐植物含む)
6. 暗褐色砂混粘質土7.5YR3/4(10~15cm程の小石20%含む)…暗渠



第58図 SK-22実測図



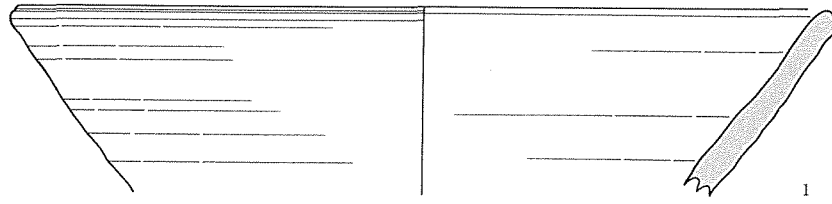
H=8.00m



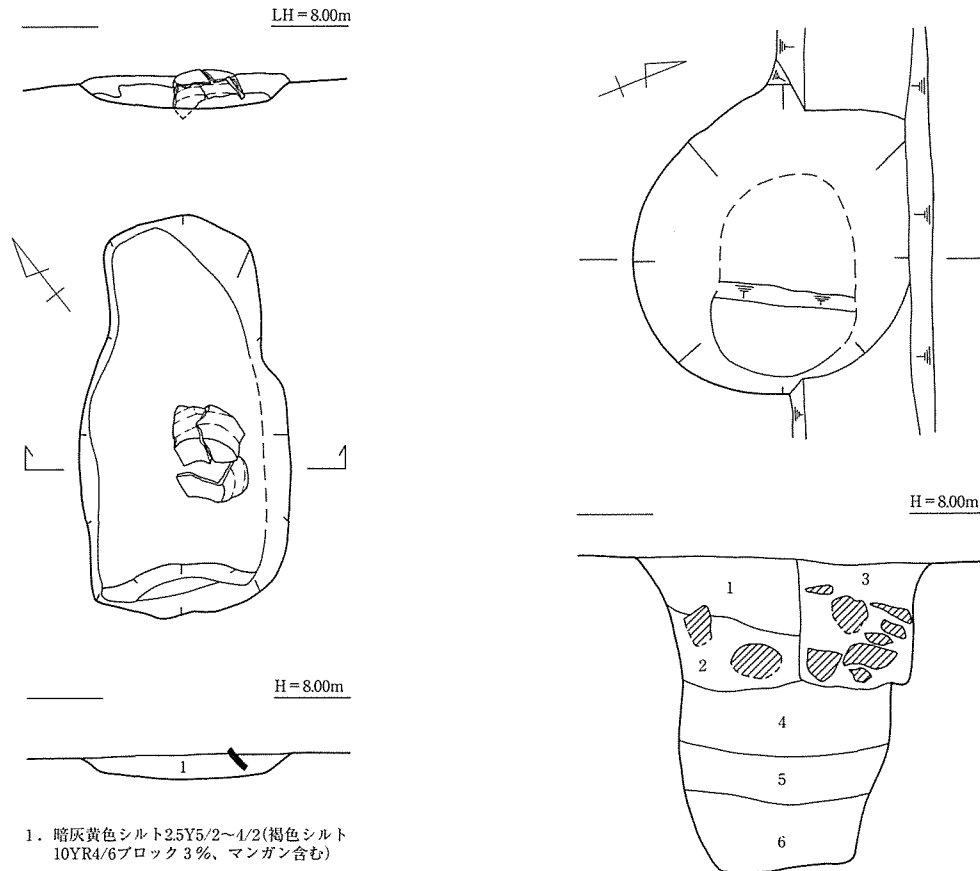
1. におい黄褐色粘質土10YR4/1~4/2(におい黄褐色粘質土10YR5/4ブロック3%含む、マンガン含む)
2. 灰黄褐色粘質土10YR4/2(オリーブ褐色細砂2.5Y5/3ブロック5%含む)
3. 褐灰色粘質土10YR4/1~4/2(におい黄褐色粘質土10YR5/4ブロック2%含む、マンガン含む)
4. 褐灰色粘質土10YR4/1~4/2(黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/3ブロック3%含む、マンガン含む)
5. 黒褐色粘質土10YR3/1(黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/3ブロック5%含む、マンガン含む)
6. 黒褐色粘質土10YR3/1~3/2(黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/3ブロック15%、マンガン含む)
7. 黄灰色砂混粘土2.5Y4/1
8. 暗黄灰色砂混粘土2.5Y4/2
9. 灰黄褐色粘質土10YR5/2(鉄分多く含む)…暗渠
10. 灰黄褐色粘質土10YR4/2(10cm以下の小石50%含む)…暗渠



第59図 SK-23実測図



第60図 SK-17出土遺物実測図



1. 暗灰黄色シルト2.5Y5/2~4/2(褐色シルト10YR4/6ブロック3%、マンガン含む)

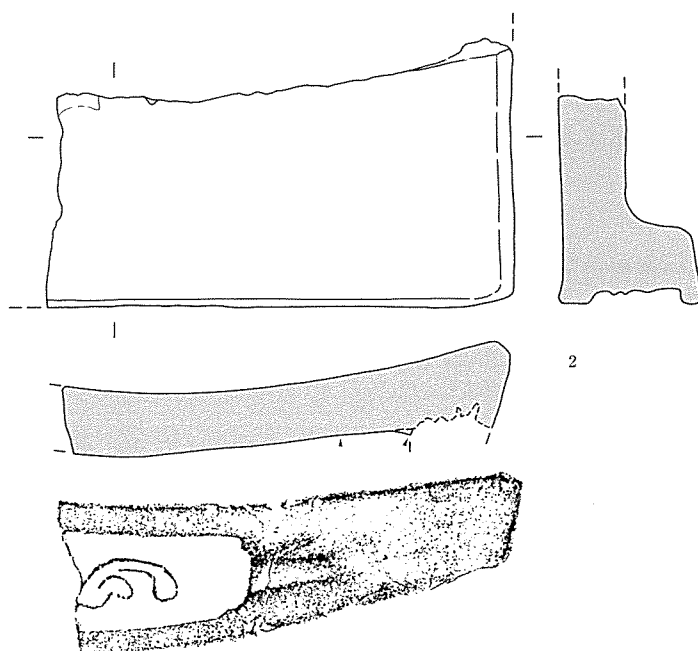
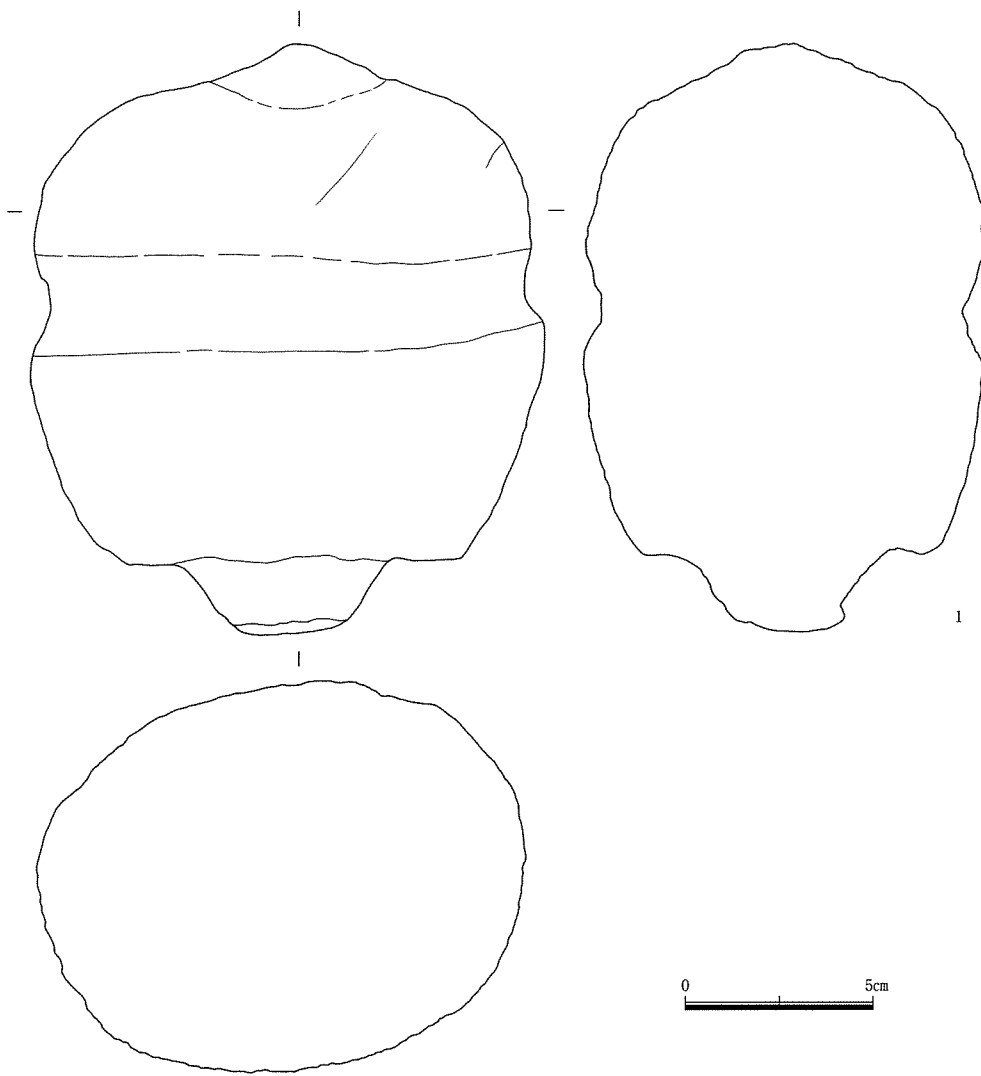
1. 黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/4(黒褐色粘質土7.5YR3/1ブロック1%、マンガン多く含む)
2. 黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/4(マンガン多く含む)
3. 暗灰黄色シルト質極細砂2.5Y5/2(マンガン多く含む)
4. 褐灰色粘質土10YR4/1(マンガン含む)
5. 黄灰色粘土2.5Y4/1~3/1
6. 暗灰黄色シルト質極細砂2.5Y5/2(鉄分含む)

第61図 SK-24実測図

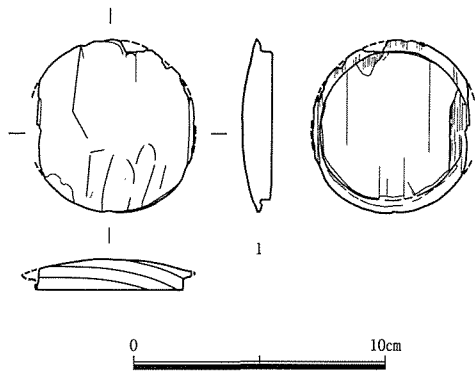
第62図 SK-25実測図

SK-30(第78・81図)

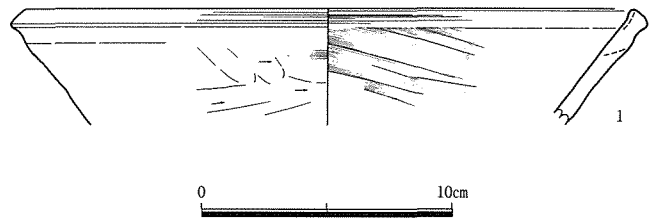
北半の東端、SK-28の南側に位置する。SD-22と接する。平面形は円形を呈す。径3.41~3.48m、深さ182cmを測る。中央部分が径60cm程度の範囲で若干凹む。埋土には最大長90cm以上もある石が投棄されていた。遺物は土師皿(1)、瓦質の土鍋(2)、羽釜(3)、木製品(5・6)などが出土している。中央部分に井筒が据えられていたと仮定すれば、井戸の可能性もあるが詳細は不明である。



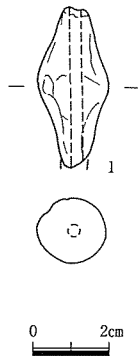
第63图 SK-18出土遺物実測図



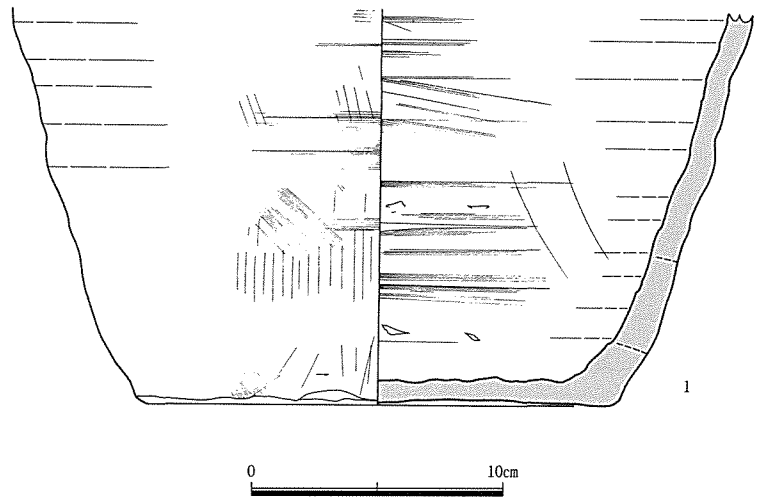
第64図 SK-20出土遺物実測図



第65図 SK-23出土遺物実測図



第66図 SK-19出土遺物
実測図



第67図 SK-24出土遺物実測図

SK-33(第76図)

北半の北東端、SK-30の北東側に位置する。平面形は隅丸方形を呈す。一辺131~139cm、深さ17cmを測る。時期、性格等は不明である。

SK-34(第77図)

南半の東側、南寄りに位置する。平面形は円形を呈す。径は0.58~0.60m、深さ36cmを測る。時期、性格等は不明である。

SK-35(第79・82図)

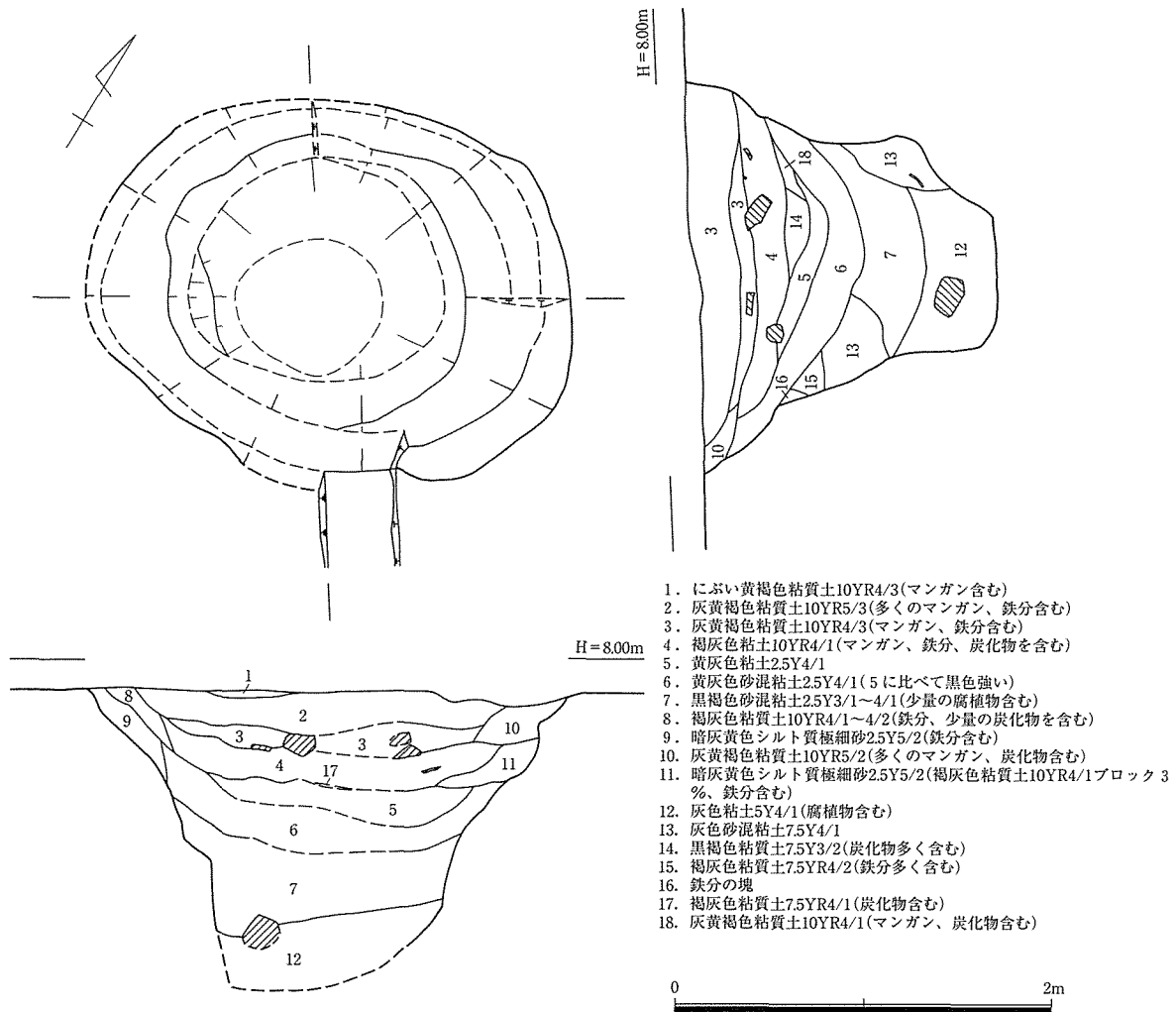
南半の東側、SK-35の東側に位置する。平面形は不整円形を呈す。長さ0.78m、幅0.69m、深さ46cmを測る。主軸はN-31°-Eにとる。遺物は製塩土器(1)、須恵器杯(2)が出土している。性格等は不明である。

SK-36(第80図)

南半の東側、SK-35の北東側に位置する。平面形は不整円形を呈す。長さ0.71m、幅0.64m、深さ49cmを測る。主軸はN-32°-Eにとる。時期、性格等は不明である。

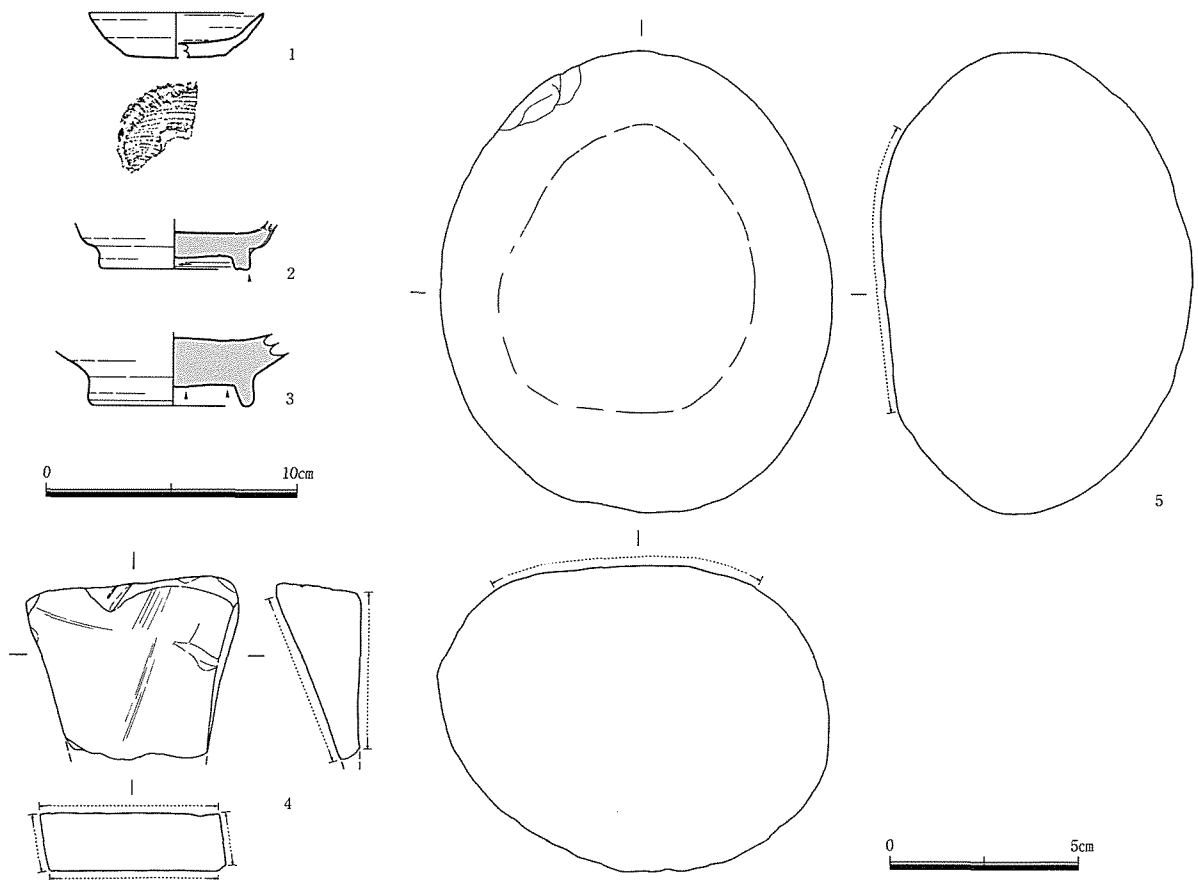
SK-37(第83図)

南半の東側、SK-36の北東側に位置する。平面形は不整円形を呈す。長さ0.93m、幅0.81m、深さ72cmを測る。主軸はN-82°-Wにとる。時期、性格等は不明である。



1. にぶい黄褐色粘質土10YR4/3(マンガン含む)
2. 灰黄褐色粘質土10YR5/3(多くのマンガン、鉄分含む)
3. 灰黄褐色粘質土10YR4/3(マンガン、鉄分含む)
4. 褐灰色粘土10YR4/1(マンガン、鉄分、炭化物を含む)
5. 黄灰色粘土2.5Y4/1
6. 黄灰色砂混粘土2.5Y4/1(5に比べて黒色強い)
7. 黒褐色砂混粘土2.5Y3/1~4/1(少量の腐植物含む)
8. 褐灰色粘質土10YR4/1~4/2(鉄分、少量の炭化物を含む)
9. 暗灰黄色シルト質極細砂2.5Y5/2(鉄分含む)
10. 灰黄褐色粘質土10YR5/2(多くのマンガン、炭化物含む)
11. 暗灰黄色シルト質極細砂2.5Y5/2(褐灰色粘質土10YR4/1ブロック3%、鉄分含む)
12. 灰色粘土5Y4/1(腐植物含む)
13. 灰色砂混粘土7.5Y4/1
14. 黒褐色粘質土7.5Y3/2(炭化物多く含む)
15. 褐灰色粘質土7.5YR4/2(鉄分多く含む)
16. 鉄分の塊
17. 褐灰色粘質土7.5YR4/1(炭化物含む)
18. 灰黄褐色粘質土10YR4/1(マンガン、炭化物含む)

第68図 SK-26実測図



第69図 SK-26出土遺物実測図(1)



第70図 SK-26出土遺物実測図(2)

SK-38(第84図)

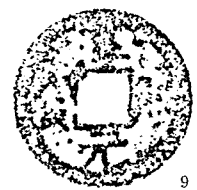
南半の東側、SK-01の南東側、SK-37の北側に位置する。平面形は楕円形を呈す。長さ0.91m、幅0.78m、深さ62cmを測る。主軸はN-34°-Wにとる。時期、性格等は不明である。

SK-39(第85図)

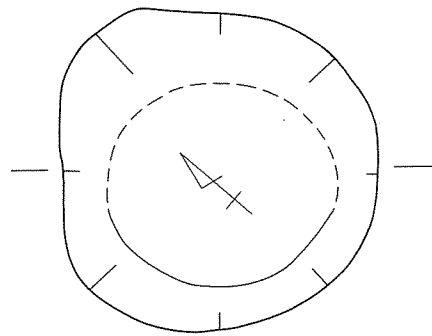
南半の東側、SK-04の北東側に位置する。平面形は円形を呈す。径は0.81~0.85m、深さ13cmを測る。時期、性格等は不明である。

SK-40(第86・87図)

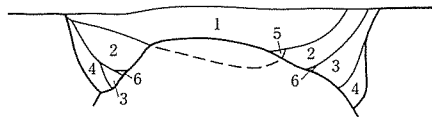
南半の東側、SK-04の東側に位置する。平面形は円形を呈す。長さ0.71m、幅0.64m、深さ22cmを測る。遺物は須恵器杯(1)が出土している。性格等は不明である。



第71図 SK-26出土
銭貨拓影



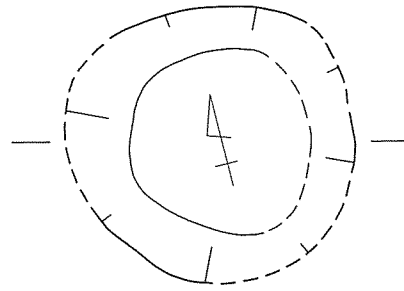
H = 8.20m



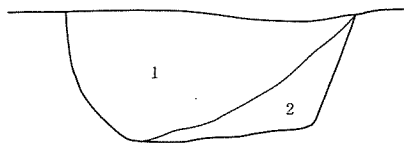
1. におい黄褐色粘質土10YR5/3~5/2(10cm以下の軟岩ブロック15%含む、マンガン、鉄分、炭化物を含む)
2. 褐灰色砂混粘質土10YR4/1(マンガン、炭化物含む)
3. 黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/3(褐灰色砂混粘質土10YR2/1ブロック 3%含む、鉄分含む)
4. 黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/3(鉄分多く含む)
5. におい黄褐色粘質土10YR5/3(黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/3ブロック 5%含む、マンガン含む)
6. 暗灰黄色細砂2.5Y5/2(濁る)



第72図 SK-27実測図



H = 7.70m



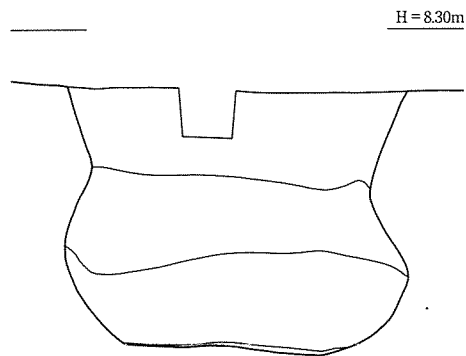
1. 黄褐色砂混粘質土2.5Y5/1(黄褐色シルト質極細砂2.5Y5/4ブロック20%、マンガン、鉄分含む)
2. 黄褐色砂混粘質土2.5Y5/1(マンガン、鉄分含む)



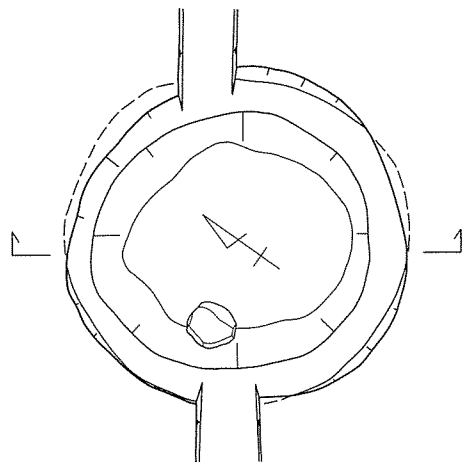
第73図 SK-28実測図

SK-41 (第88図)

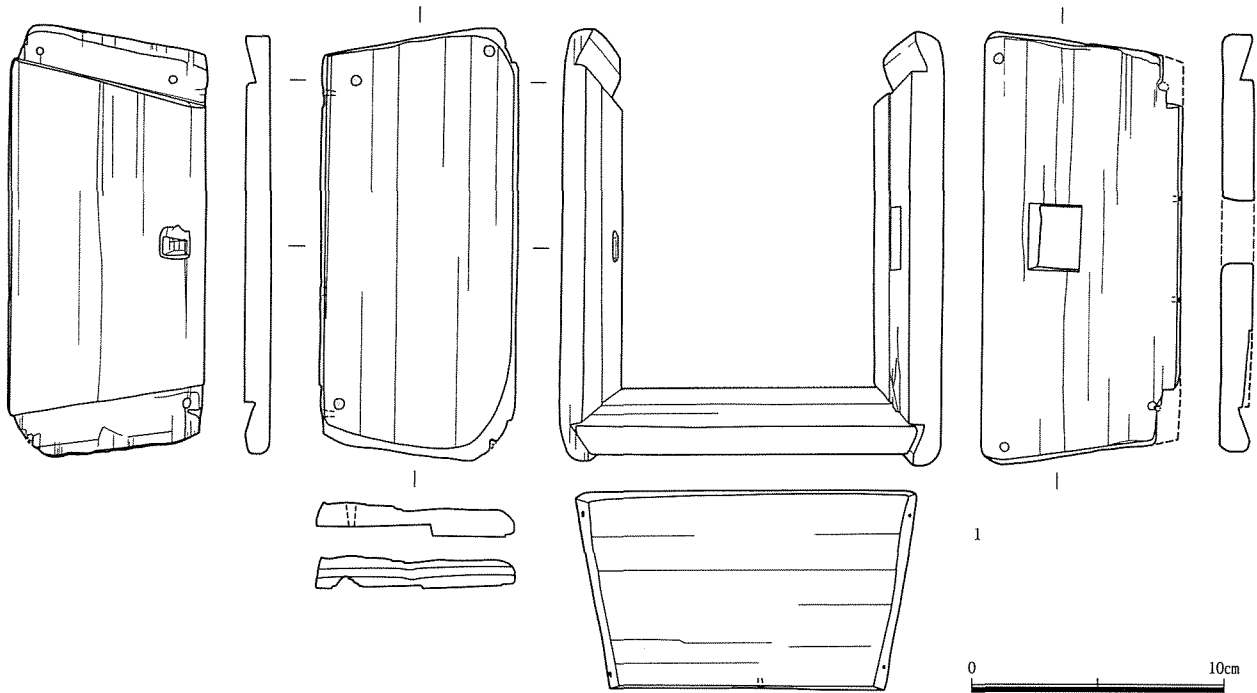
南半の西側中央付近、SK-11の北側に位置する。南西端をP-600に切られる。SD-12と重複するが新旧関係は不明である。平面形は不整楕円形を呈す。長さ0.98m、幅0.59m、深さ44cmを測る。時期、性格等は不明である。



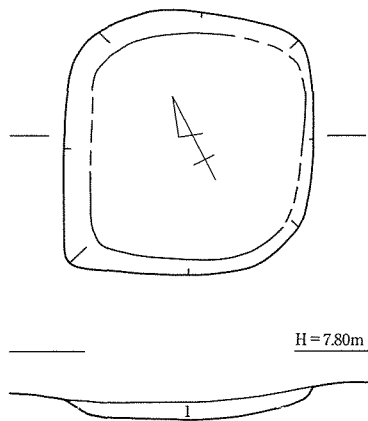
H = 8.30m



第74図 SK-29実測図



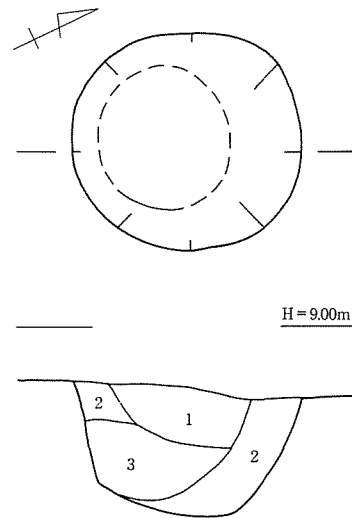
第75図 SK-29出土遺物実測図



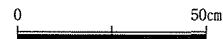
1. 灰黄褐色砂混粘土10YR5/2~5/1(マンガン含む、鉄分沈着)



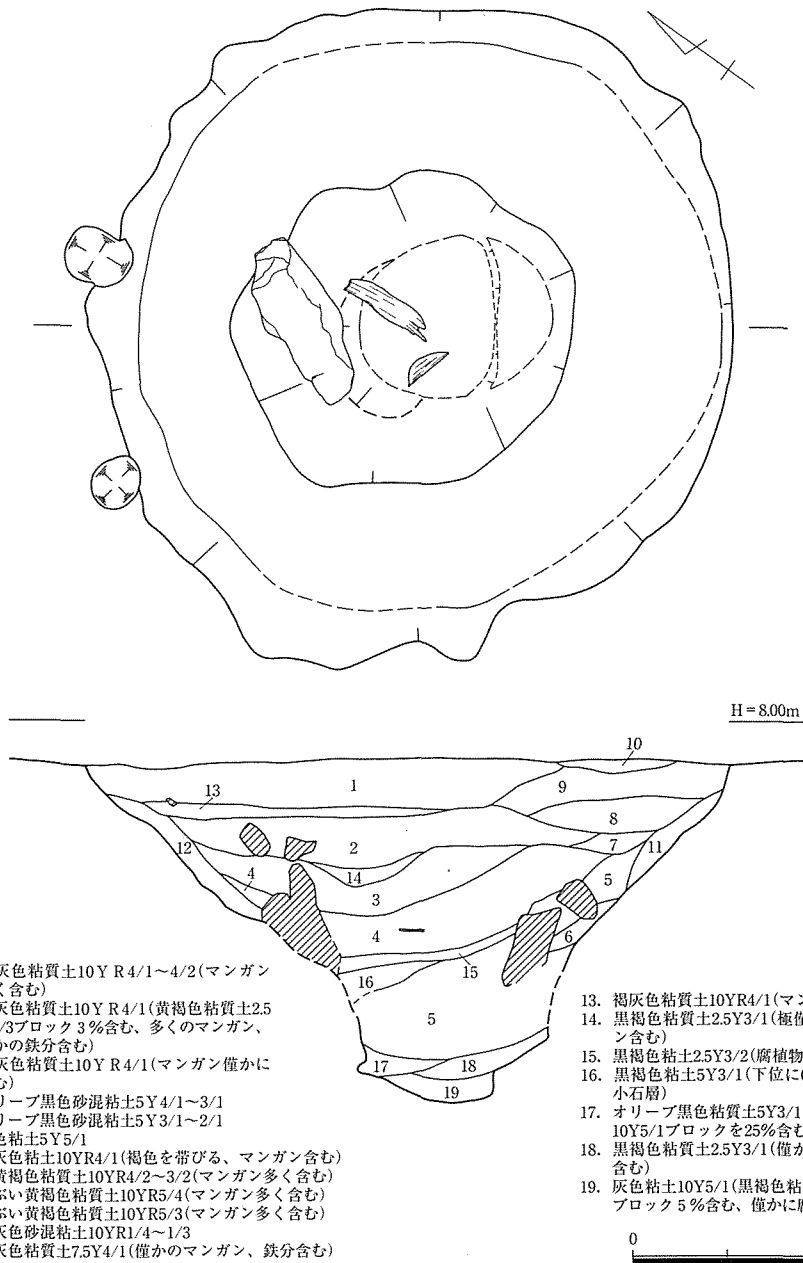
第76図 SK-33実測図



1. におい黄褐色粘土10YR5/3(鉄分含む)
 2. におい黄褐色粘土10YR5/3(鉄分含む、褐色を帯びる)
 3. におい黄褐色粘土10YR5/3(鉄分、マンガン含む)

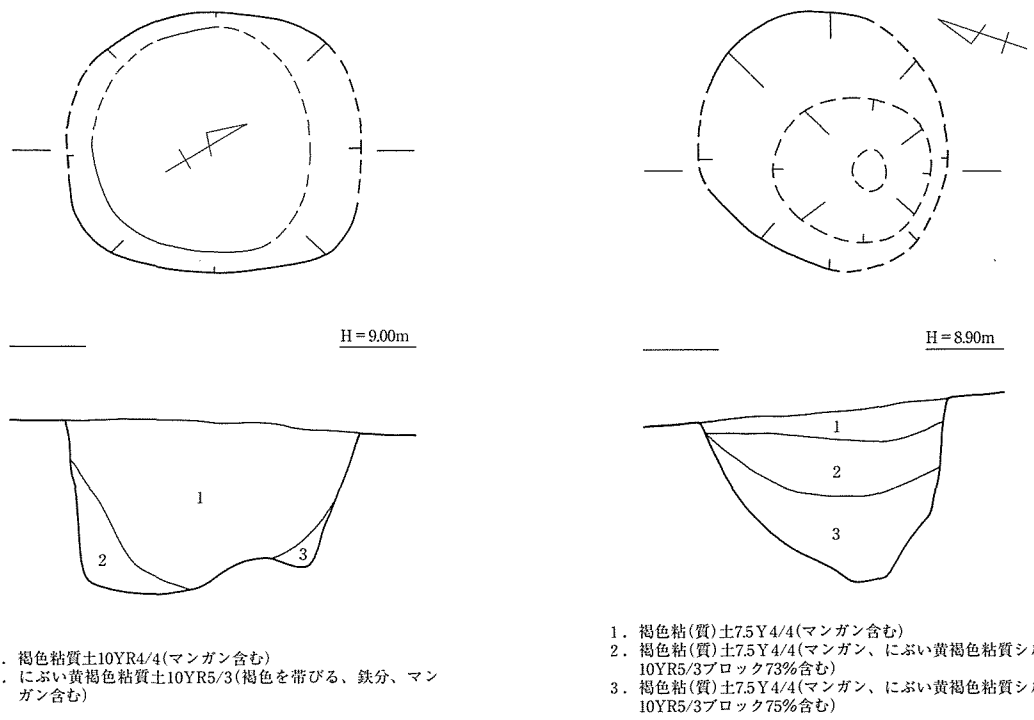


第77図 SK-34実測図



- | | |
|--|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 褐灰色粘質土10Y R 4/1~4/2(マンガン多く含む) 2. 褐灰色粘質土10Y R 4/1(黄褐色粘質土2.5Y 5/3ブロック3%含む、多くのマンガン、僅かの鉄分含む) 3. 褐灰色粘質土10Y R 4/1(マンガン僅かに含む) 4. オリーブ黒色砂混粘土5Y 4/1~3/1 5. オリーブ黒色砂混粘土5Y 3/1~2/1 6. 灰色粘土5Y 5/1 7. 褐灰色粘土10Y R 4/1(褐色を帯びる、マンガン含む) 8. 灰黄褐色粘質土10Y R 4/2~3/2(マンガン多く含む) 9. におい黄褐色粘質土10Y R 5/4(マンガン多く含む) 10. におい黄褐色粘質土10Y R 5/3(マンガン多く含む) 11. 褐灰色砂混粘土10Y R 1/4~1/3 12. 褐灰色粘質土7.5Y 4/1(僅かのマンガン、鉄分含む) | <ol style="list-style-type: none"> 13. 褐灰色粘質土10Y R 4/1(マンガン含む) 14. 黒褐色粘質土2.5Y 3/1(極僅かにマンガン含む) 15. 黒褐色粘土2.5Y 3/2(腐植物含む) 16. 黒褐色粘土5Y 3/1(下位に0.5~1.0cmの小石層) 17. オリーブ黒色粘質土5Y 3/1(灰色粘質土10Y 5/1ブロックを25%含む) 18. 黒褐色粘質土2.5Y 3/1(僅かに腐植物を含む) 19. 灰色粘土10Y 5/1(黒褐色粘質土2.5Y 3/1ブロック5%含む、僅かに腐植物含む) |
|--|--|
- 0 1m

第78図 SK-30実測図

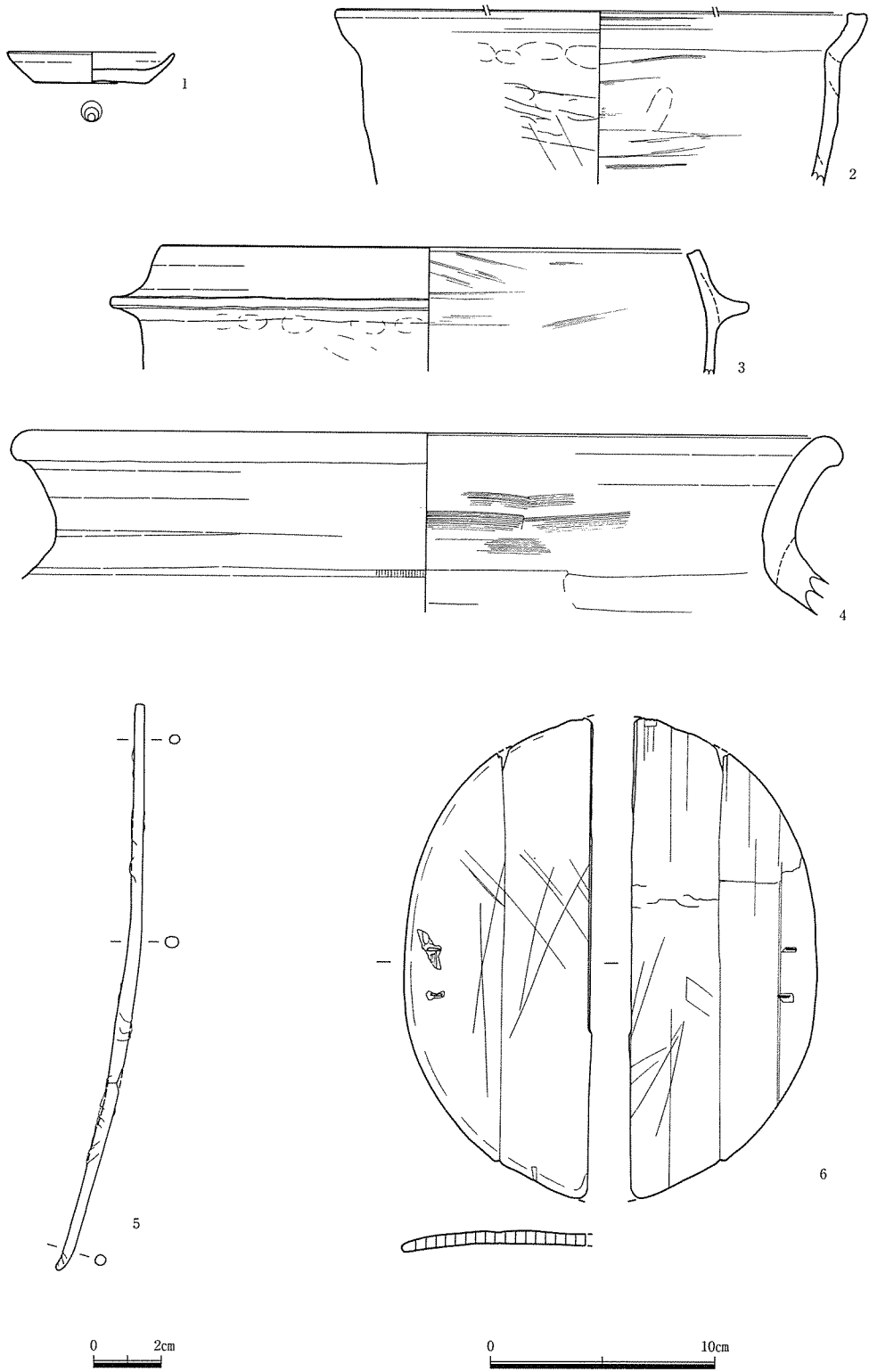


- | | |
|--|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 褐色粘質土10Y R 4/4(マンガン含む) 2. におい黄褐色粘質土10Y R 5/3(褐色を帯びる、鉄分、マンガン含む) | <ol style="list-style-type: none"> 1. 褐色粘(質)土7.5Y 4/4(マンガン含む) 2. 褐色粘(質)土7.5Y 4/4(マンガン、におい黄褐色粘質シルト10Y R 5/3ブロック73%含む) 3. 褐色粘(質)土7.5Y 4/4(マンガン、におい黄褐色粘質シルト10Y R 5/3ブロック75%含む) |
|--|--|

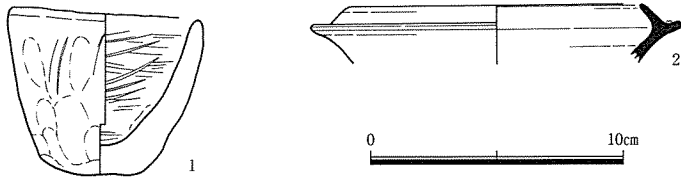
0 50cm
0 50cm

第79図 SK-35実測図

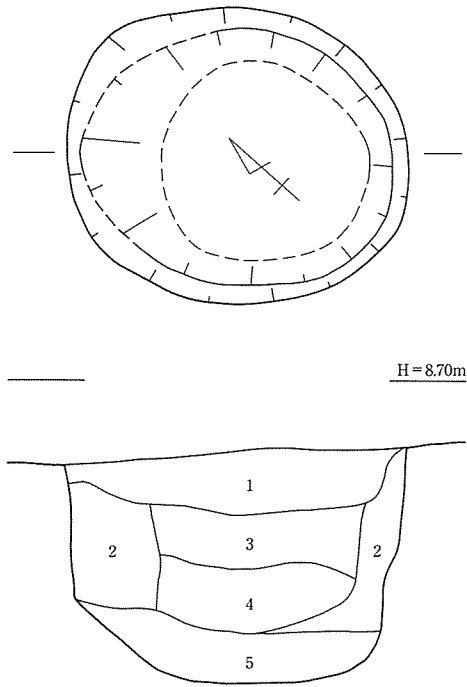
第80図 SK-36実測図



第81图 SK-30出土遗物实测图



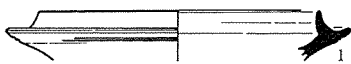
第82図 SK-35出土遺物実測図



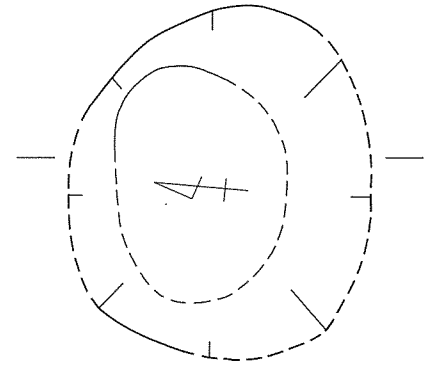
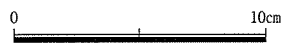
1. 褐色砂混粘(質)土7.5YR4/4(マンガン含む)
2. 褐色砂混粘質土7.5YR4/6~4/4(鉄分多く含む)
3. 褐色粘質土7.5YR4/3(マンガン含む)
4. 褐灰色砂混粘(質)土7.5YR4/1(マンガン、鉄分含む)
5. 褐灰色砂混粘土10YR4/1(下に鉄分沈着)



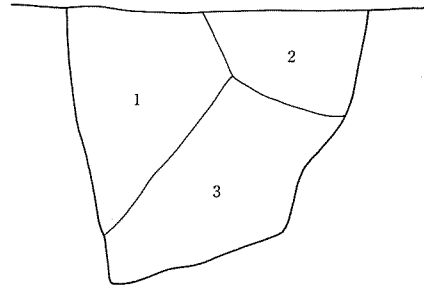
第84図 SK-38実測図



第86図 SK-40出土遺物実測図



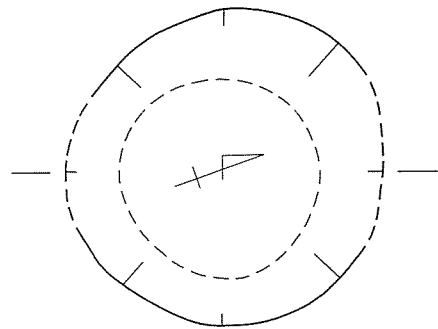
H=8.90m



1. 褐色粘(質)土7.5YR4/4(マンガン含む、にぶい黄褐色粘質シルト10YR5/3ブロック5%含む)
2. 褐色砂混粘質土7.5YR4/3(マンガン含む)
3. 褐色砂混粘質土7.5YR4/4(マンガン含む)

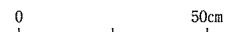


第83図 SK-37実測図

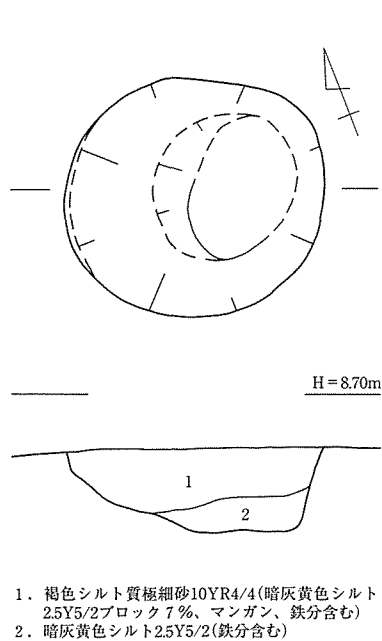


H=8.30m

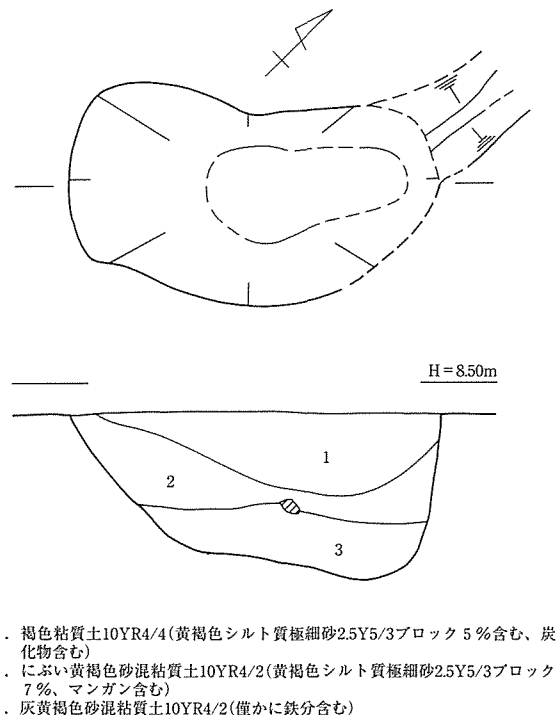
1. 褐色シルト質極細砂10YR4/4(暗灰黄色シルト2.5YR5/2ブロック7%、マンガン、鉄分含む)



第85図 SK-39実測図



第87図 SK-40実測図



第88図 SK-41実測図

3. 溝状遺構

当時期の溝状遺構は57条を検出した。明らかに近現代の暗渠と考えられるものは省略している。また、遺構番号を付けたなかにも暗渠や耕作痕などが含まれており、それらについては説明等を割愛している。

SD-02(04) (第89図)

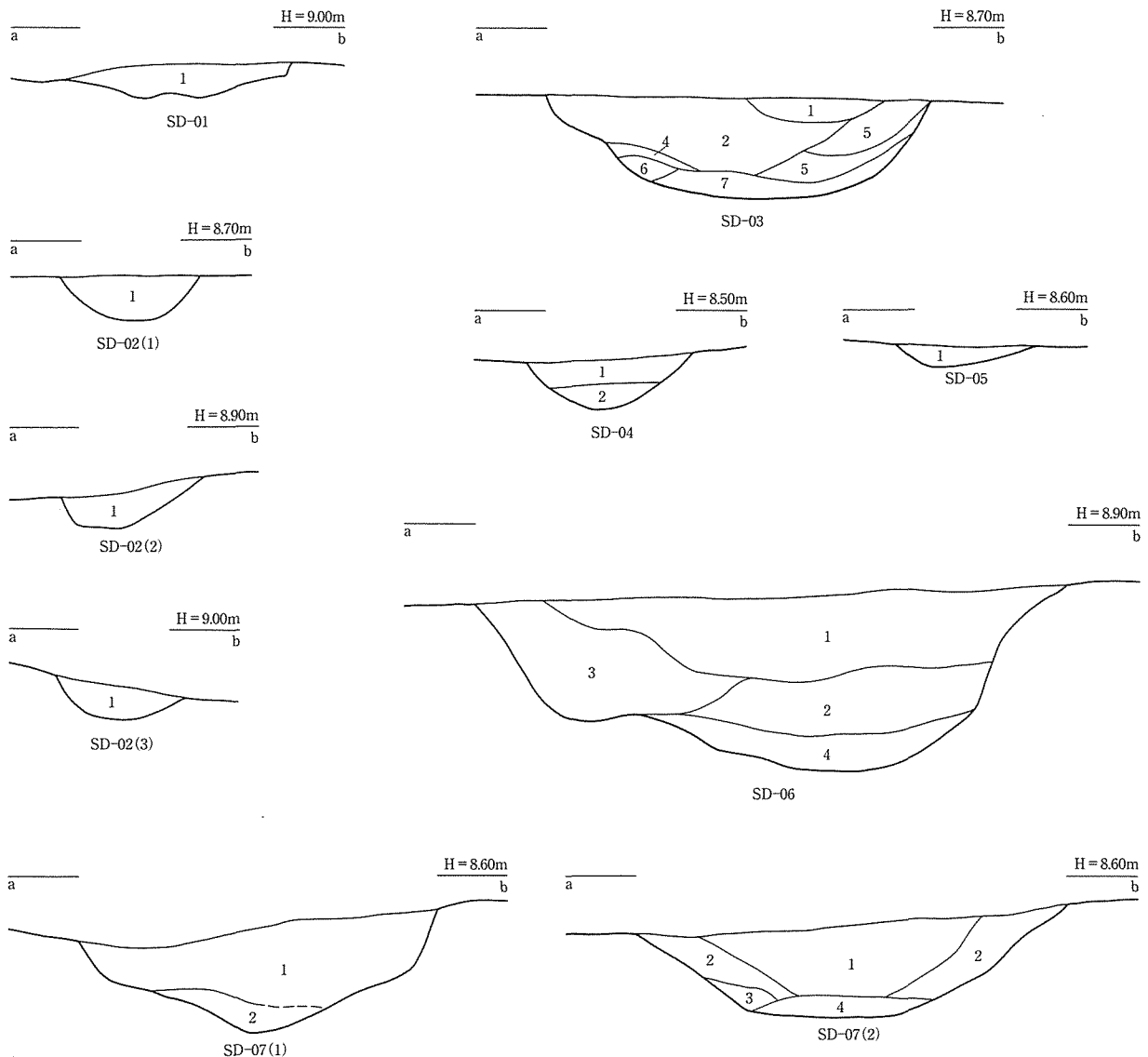
南半の中央から北側に位置する。東西から南北方向に屈曲する。便宜上、東西方向をSD-02、南北方向をSD-04としている。主軸をN-73°-Wにとる。溝幅は概ね0.4m、深さは15cm程度である。北西端に向かい次第に浅くなり、消滅する。南東端はSK-01の南隅で屈曲する。屈曲後の主軸はN-24°-Eにとり、約100°開く。北東端は調査地外へと延びる。SK-01・02・03より降る時期と考えられる。区画溝等も考えられるが、詳細は不明である。

SD-03(10) (第89・90図)

南半の中央に位置する。北東側を中心に東から北へ湾曲する。便宜上、SK-01からSD-08との交点までをSD-03、交点から北端までをSD-10としている。東端はSK-01と重複する。新旧関係は不明である。北端はSD-15に切れ、消滅する。溝幅は1.09~1.31m、深さ18~29cmを測る。北へ向かって幅が増し、浅くなる傾向がある。遺物は土師器甕(1)、土錘(2~5)などが出土している。SK-01を水利施設と考えると導水路とも考えられるが詳細は不明である。

SD-06(08) (第89・91・93・96図)

南半の西側に位置する。便宜上、SK-10より西側をSD-06、東側をSD-08としている。西端は調査地外へと延びる。東端はSD-10と合流するが新旧関係は不明である。主軸はN-82°-Wにとる。溝幅0.58~1.68m、深さ13~53cmを測り、西に向かって幅も増し、深くなる。SD-06から輸入青磁(1)、SD-08から須恵器甕(1)が出土している。区画溝、SK-10を水利施設と考えると導水路とも考えられるが詳細



- SD-01
 1. 暗褐色粘質土7.5YR3/3~4/4(灰黄褐色粘土10YR5/2ブロック5%、炭化物2%含む)
- SD-02(1)
 1. 暗褐色砂混粘質土10YR3/3
- SD-02(2)
 1. 褐色粘質土10YR5/4
- SD-02(3)
 1. 褐色粘質土10YR5/4
- SD-03
 1. 暗褐色粘質土7.5YR3/4~4/4(1cm程度の軟岩1%含む、鉄分、マンガン含む)
 2. 褐色粘質土10YR4/4(にぶい黄褐色粘質土10YR5/4ブロック下位に7%含む、マンガン含む)
 3. にぶい黄褐色シルト質極細砂10YR5/4~4/4(マンガン、鉄分含む)
 4. にぶい黄褐色粘質土10YR4/3(マンガン、鉄分含む)
 5. 灰黄褐色粘質土10YR5/2(褐色粘質土10YR4/4ブロック2%含む、鉄分、マンガン含む)
 6. 褐色粘質土10YR4/4(にぶい黄褐色粘質土10YR4/3混じる、鉄分含む)
 7. 灰褐色粘質土10YR4/1~4/2(鉄分、マンガン含む)
- SD-04
 1. 褐色シルト7.5YR4/4~3/4(マンガン含む)
 2. 灰黄褐色粘質シルト10YR5/2(褐色帯びる、マンガン含む)

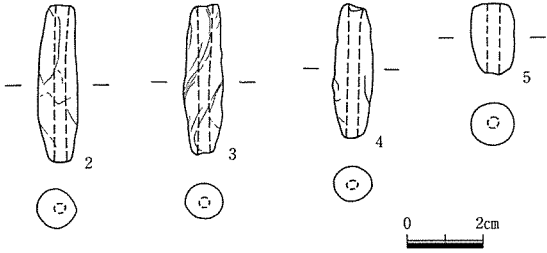
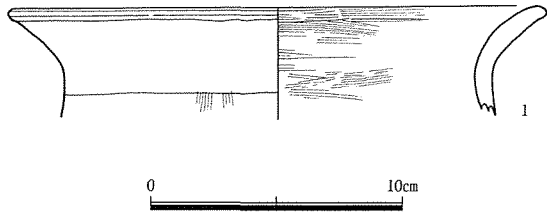
- SD-05
 1. にぶい黄褐色粘質シルト10YR4/3(炭化物、マンガン含む)
- SD-06
 1. 褐色砂混粘質土10YR4/4(鉄分、マンガン含む、10cm以下の軟岩ブロック10%含む、濁る)
 2. にぶい黄褐色砂混粘質土10YR5/3~4/3(マンガン含む)
 3. にぶい黄褐色砂混粘質土10YR4/3(マンガン含む)
 4. 褐灰色粘土4/1
- SD-07(1)
 1. 灰黄褐色粘質土10YR4/2~4/3(マンガン、炭化物、3cm以下の礫を含む)
 2. 灰黄褐色粘質土10YR4/2(マンガン含む)
- SD-07(2)
 1. 褐色粘質土10YR4/4~3/4(炭化物、鉄分含む)
 2. にぶい黄褐色粘質土10YR5/3(炭化物、鉄分含む)
 3. にぶい黄褐色シルト質極細砂10YR5/4(マンガン、鉄分含む)
 4. 灰褐色粘質シルト7.5YR4/2(鉄分含む)

第89図 SD-01~07断面実測図

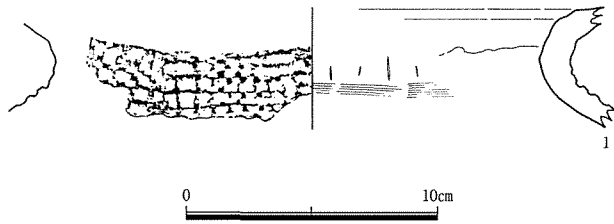
は不明である。

SD-07(第89・92図)

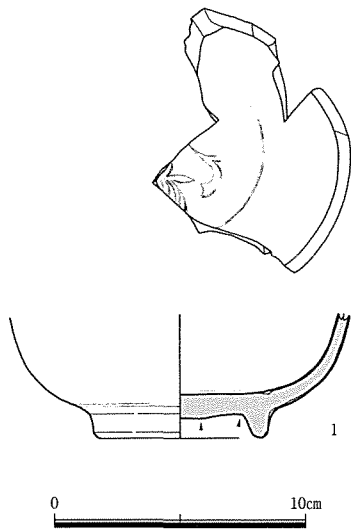
南半の西側に位置する。SK-10を切るが、更に南に延びないことからSD-06(08)と合流すると考えられる。北端はSK-14、SD-15に切られ、消滅する。主軸はN-11°-Eにとる。溝幅1.02~1.22m、深さ32~36cmを測る。出土遺物は砥石(1)などがある。SD-06(08)同様、区画溝、導水路などが考えられるが詳細は不明である。



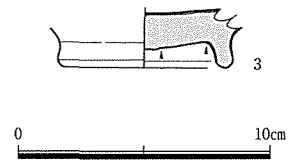
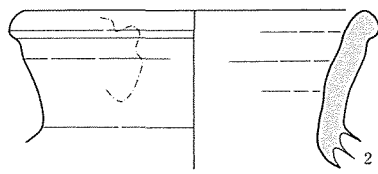
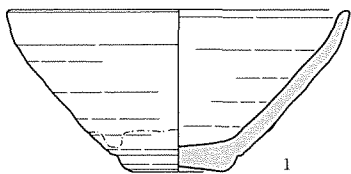
第90图 SD-03出土遺物実測図



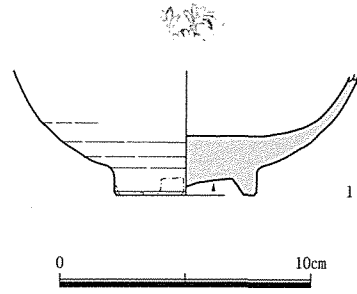
第93图 SD-08出土遺物実測図



第94图 SD-13出土遺物実測図



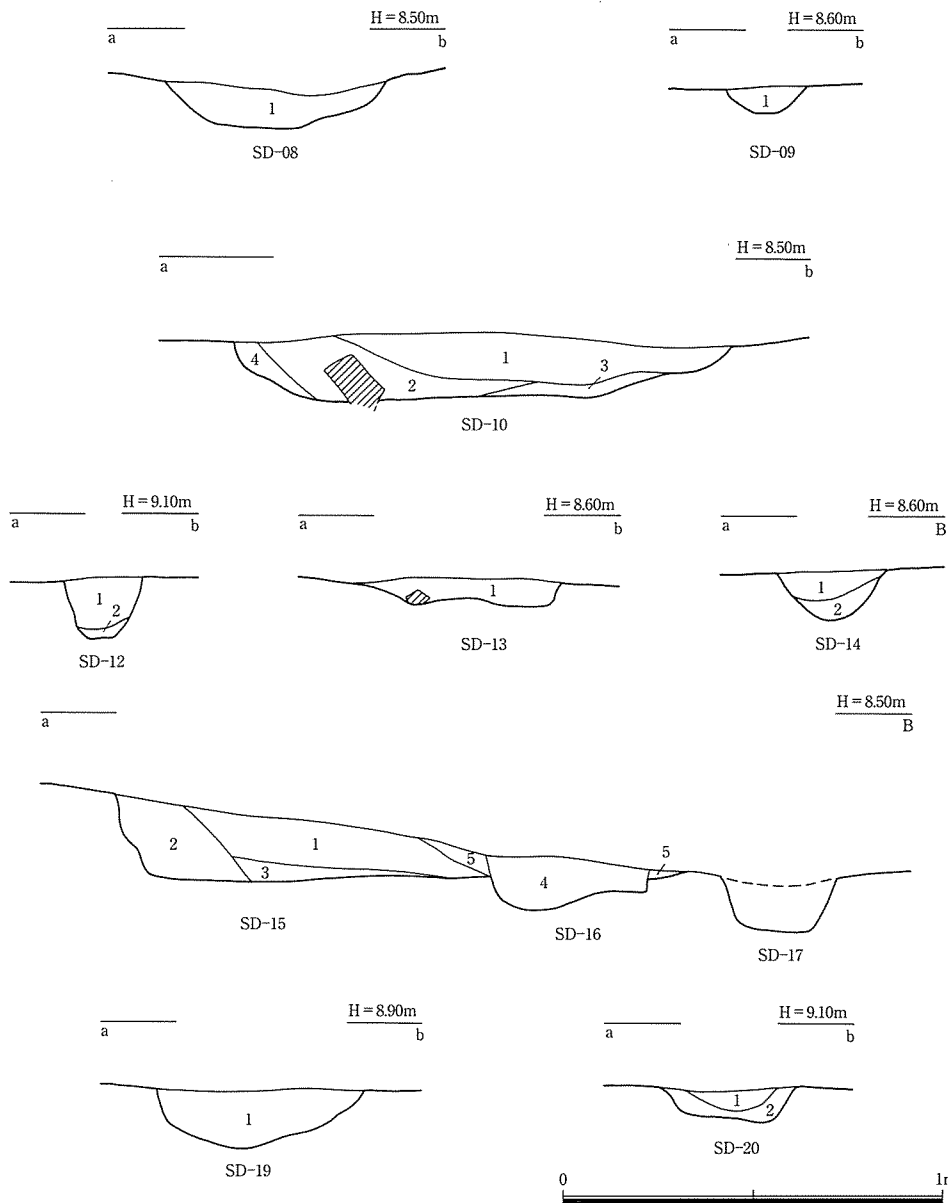
第95图 SD-21出土遺物実測図



第91图 SD-06出土遺物実測図



第92图 SD-07出土遺物実測図

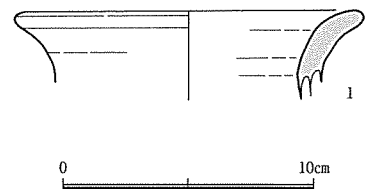


- SD-08
1. におい黄褐色粘質土10YR4/3~4/4(マンガン、鉄分含む、1cm以下の砂粒を含む)
- SD-09
1. 黒褐色粘質土10YR3/2(炭化物、マンガン含む、0.5cm以下の砂粒を含む)
- SD-10
1. 褐色粘質土10YR4/4(鉄分、炭化物含む)
2. 褐色砂混粘質土7.5YR4/1(鉄分、炭化物含む)
3. 灰黄褐色シルト極細砂10YR5/2(僅かに炭化物含む)
4. におい黄褐色粘質土10YR4/3(鉄分含む)
- SD-12
1. 暗褐色砂混粘質土10YR3/3~3/2(褐色粘質土7.5YR4/6ブロック10%含む、僅かに炭化物、マンガン含む)
- SD-13
2. オリーブ褐色シルト4/3(マンガン含む)
- SD-13
1. におい黄褐色砂混粘質土10YR4/3
- SD-14
1. におい黄褐色砂混粘質土10YR4/3(マンガン多く含む)
2. 灰黄褐色シルト10YR4/2(マンガン含む)
- SD-15
1. におい黄褐色砂混粘質土10YR4/3(マンガン、鉄分含む)
2. 褐色粘質土10YR4/4(鉄分、マンガン含む)
3. 灰黄褐色砂混粘質土10YR4/2~3/2(マンガン含む)
4. 灰黄褐色シルト10YR4/2(濁る)
- SD-16
4. 灰黄褐色シルト10YR4/2(鉄分含む)
- SD-17
暗渠
- SD-19
1. におい黄褐色粘質土10YR5/3~5/2(粘り強、0.5cm以下の砂粒を含む、鉄分、マンガン含む)
- SD-20
1. 暗褐色粘質土10YR3/3(0.5cm以下の小石、マンガン含む)
2. におい黄褐色砂混粘質土10YR4/3(0.5cm以下の小石を含む、僅かに鉄分含む)

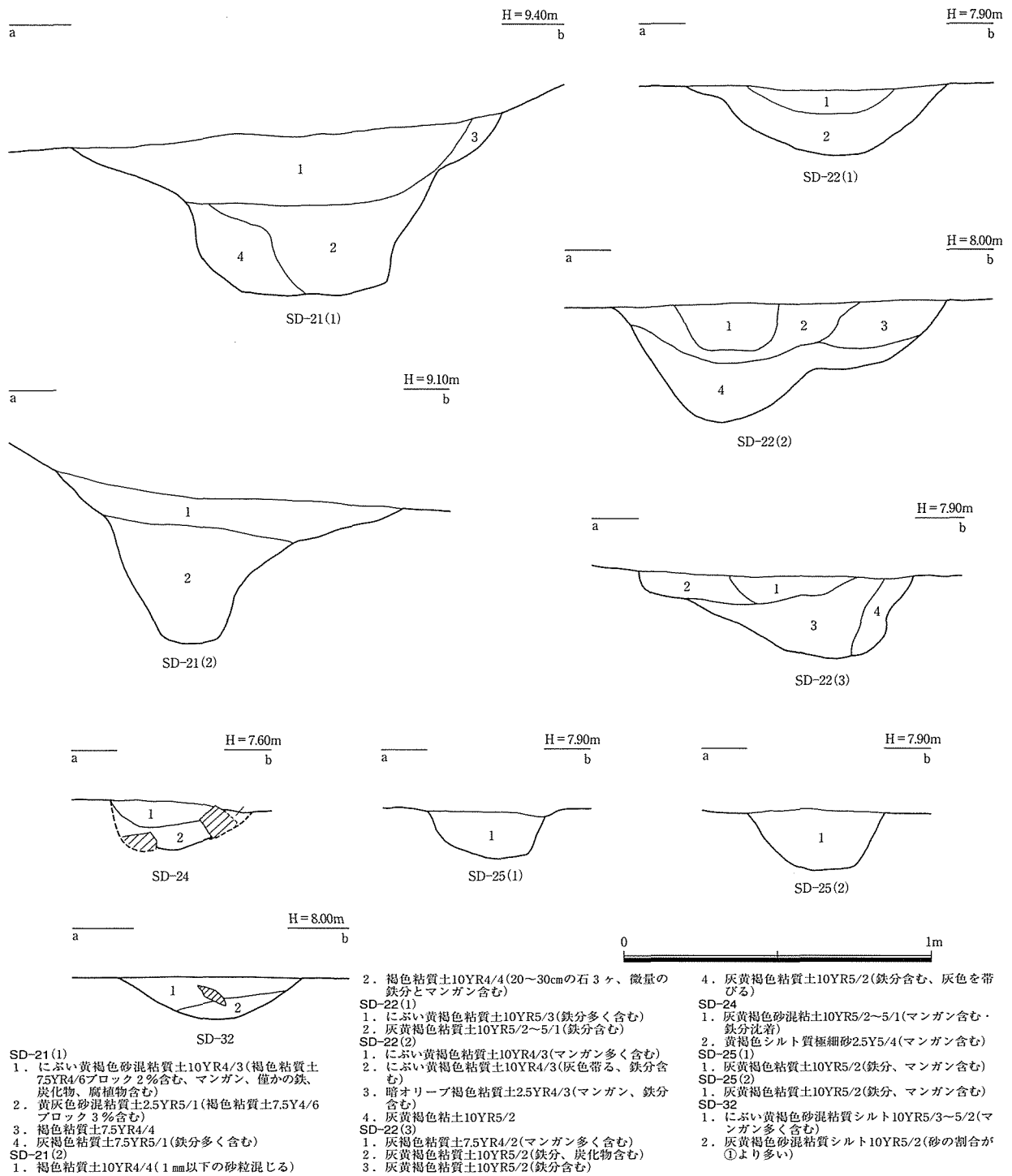
第96図 SD-08~10・12~17・19・20断面実測図

SD-21 (第95・98図)

南半の西端に位置する。南東側を中心に南西から東に湾曲する。南西端は調査地外へと延び、東端は現代の用水路とそれを保護するために設けた控えにより未調査である。溝幅は1.12~1.40m、深さ56~59cmを測る。遺物は瀬戸産天目碗(1)、陶器壺(2)、輸入青磁(3)などが出土している。性格等は不明である。



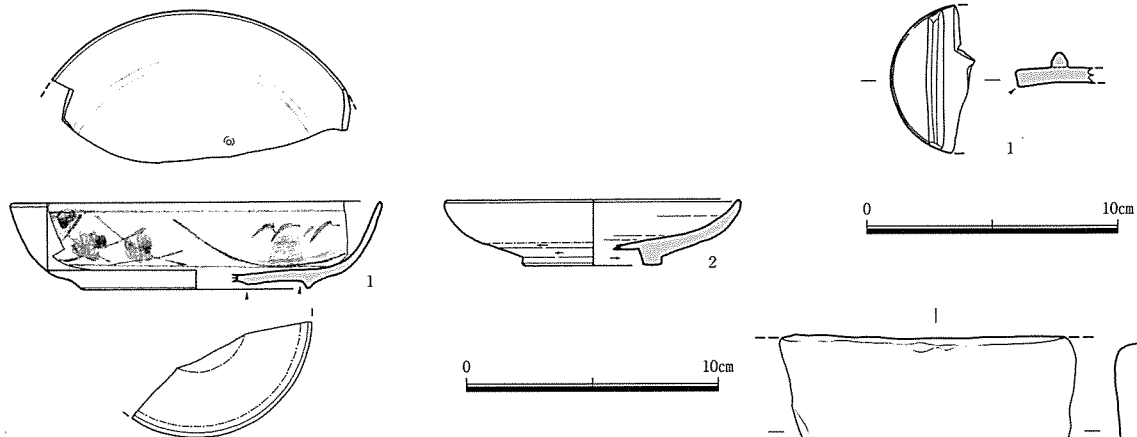
第97図 SD-21出土遺物実測図



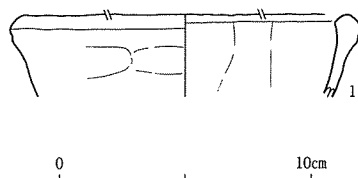
第98図 SD-21・22・24・25・32断面実測図

SD-40

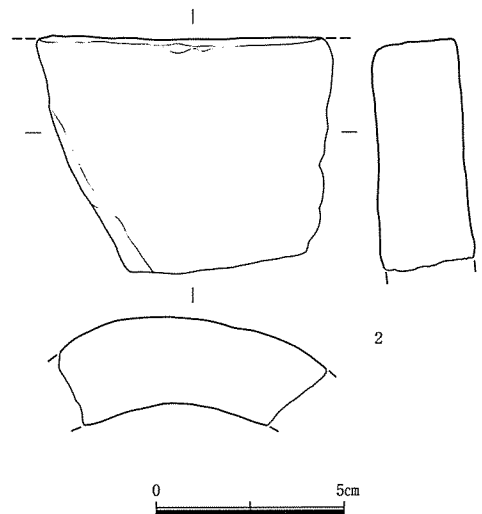
北半の西端、SD-34の西側に位置する。西端は終息するが、東端は平成12年度に実施された試掘トレンチに切られて消滅する。主軸はN-82°-Wにとる。幅0.34m、深さ8cmを測る。SB-10とほぼ同軸であることからSB-10に伴う溝である可能性もあるが詳細は不明である。



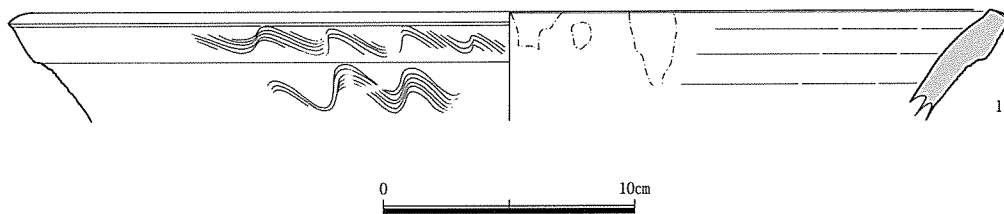
第99図 SD-22出土遺物実測図



第101図 SD-39出土遺物実測図



第100図 SD-25出土遺物実測図



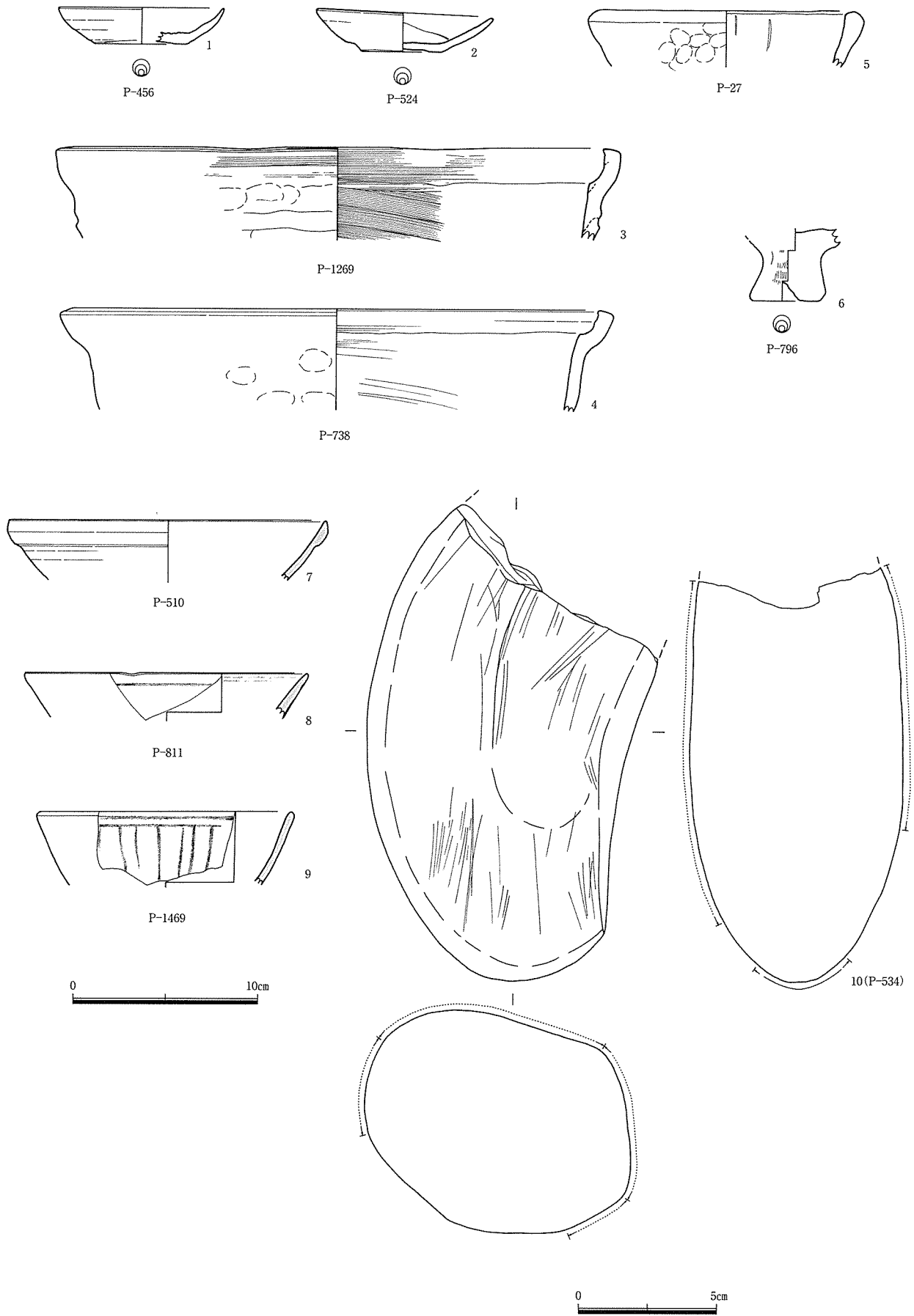
第102図 SD-54出土遺物実測図

4. 遺構外遺物(第105~109図)

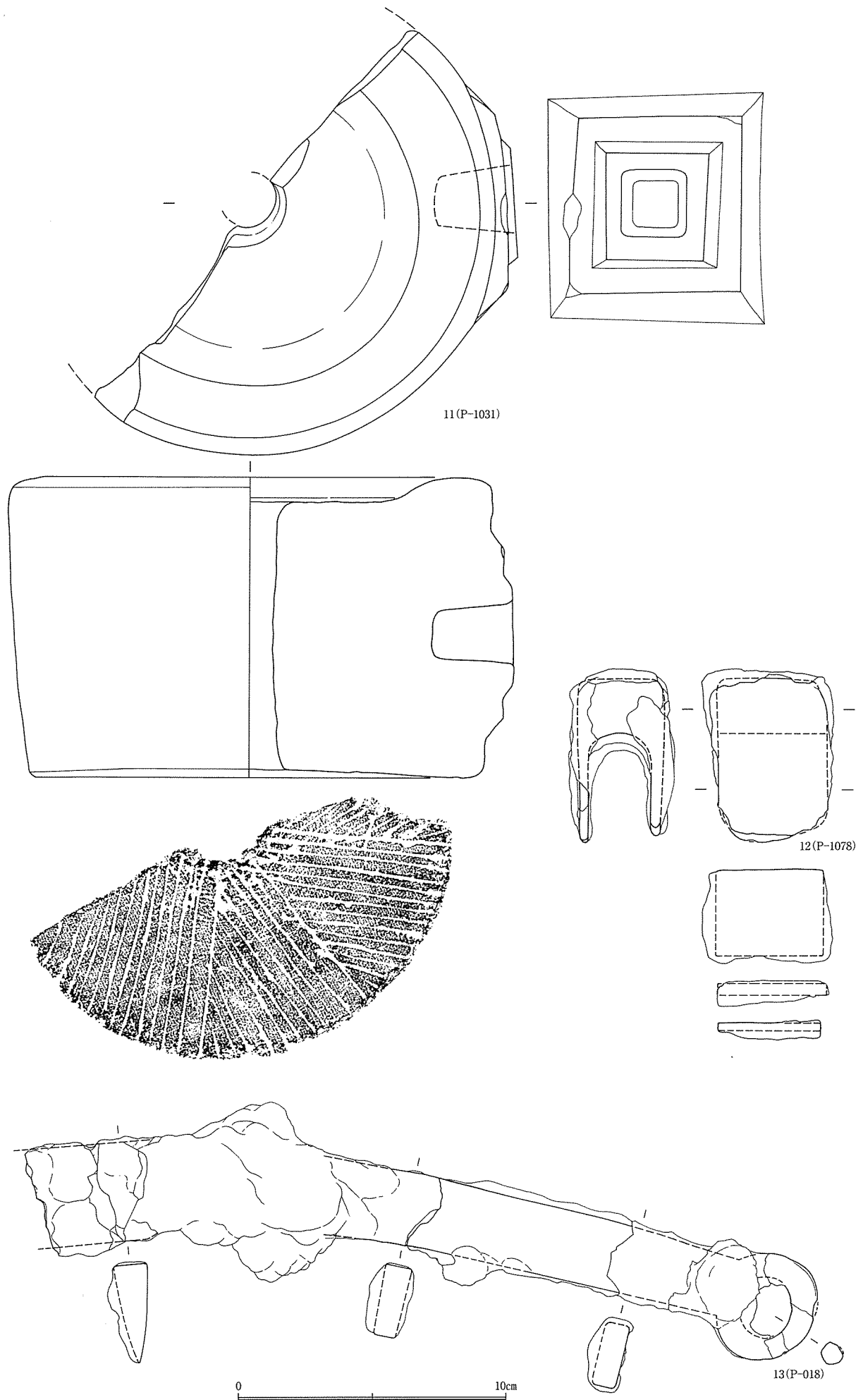
(1~4)は縄文土器。(1~3)は鉢の口縁部、所謂「突帯文土器」。(1)は直立、(2)は内傾、(3)は外傾し、端部で外方へ肥厚する。(1)は突帯に刻み目、(2)は押圧を施す。(4)は体部片。内外面共に工具による条痕が認められる。平成11年度の試掘調査において、隣接する字段木から同類の突帯文土器が数片出土している。

弥生土器(5・6)は壺、(7・8)は甕、(9)は鉢、(10)は器台である。(5)の口縁部は大きく外反し、水平気味に納める。外方に凹端面を有する。口縁内面に櫛描波状文と櫛描半円文を有する。(6・7・8・9)は「繰上げ口縁」。(6)は口縁端部下方突出部に刻み目、頸部には指頭圧痕貼付突帯を有する。(7)は口縁端部上方に丸く納める。(8)は口縁端部外下方に大きくつまみ出す。端面には3・4条の凹線を有する。(6・7・9)は体部外面上半にハケ目、中位に刺突文、下半はヘラ磨き。(10)は復元口径28.8cm、器高29.1cmを測る。口縁端面に4条の凹線を有す。赤彩。

(11~14)は土師質土器。(11)は土鍋、(12)は手捏ね土器、(13・14)は杯。(14)は高台付。(15・16)は製塩土器。(17)は竈。(18~22)は須恵器。(18)は蓋、(19~21)は杯、(22)は高杯。(23・24)は陶器。

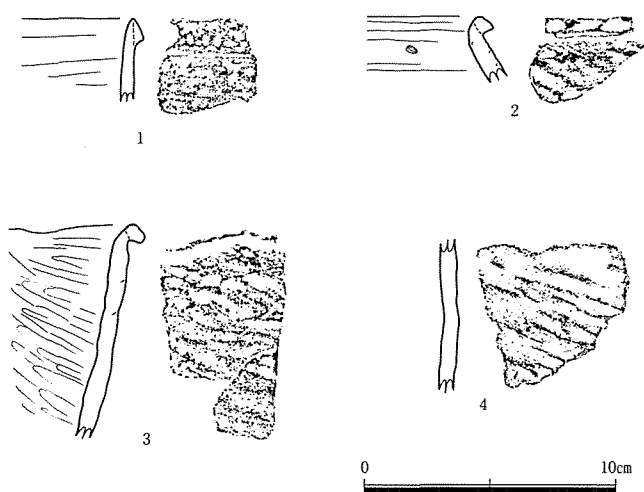


第103図 ピット内出土遺物実測図(1)



第104図 ピット内出土遺物実測図(2)

(23)は蓋、オリーブ黄色の釉が観察できるが須恵器である可能性もある。(24)は備前系播鉢、復元口径28.1cm、器高9.5cmを測る。内面7条単位の播目を有する。(25)瓦質火鉢の脚部。



第105図 遺構外出土遺物実測図(1)

第4節 まとめにかえて

初めに本高円ノ前遺跡の時期について出土遺物を概観すると、弥生時代後期、平安時代末期から鎌倉時代(11世紀末～14世紀前半)、室町時代前半(14世紀後半～15世紀)に大別できる。これら以外にも縄文時代晩期の突帯文土器、古墳時代後期の須恵器、近世陶磁器なども若干出土するがそのほとんどは遺構外から出土している為、当遺跡の主要な時期と捉えることはできない。

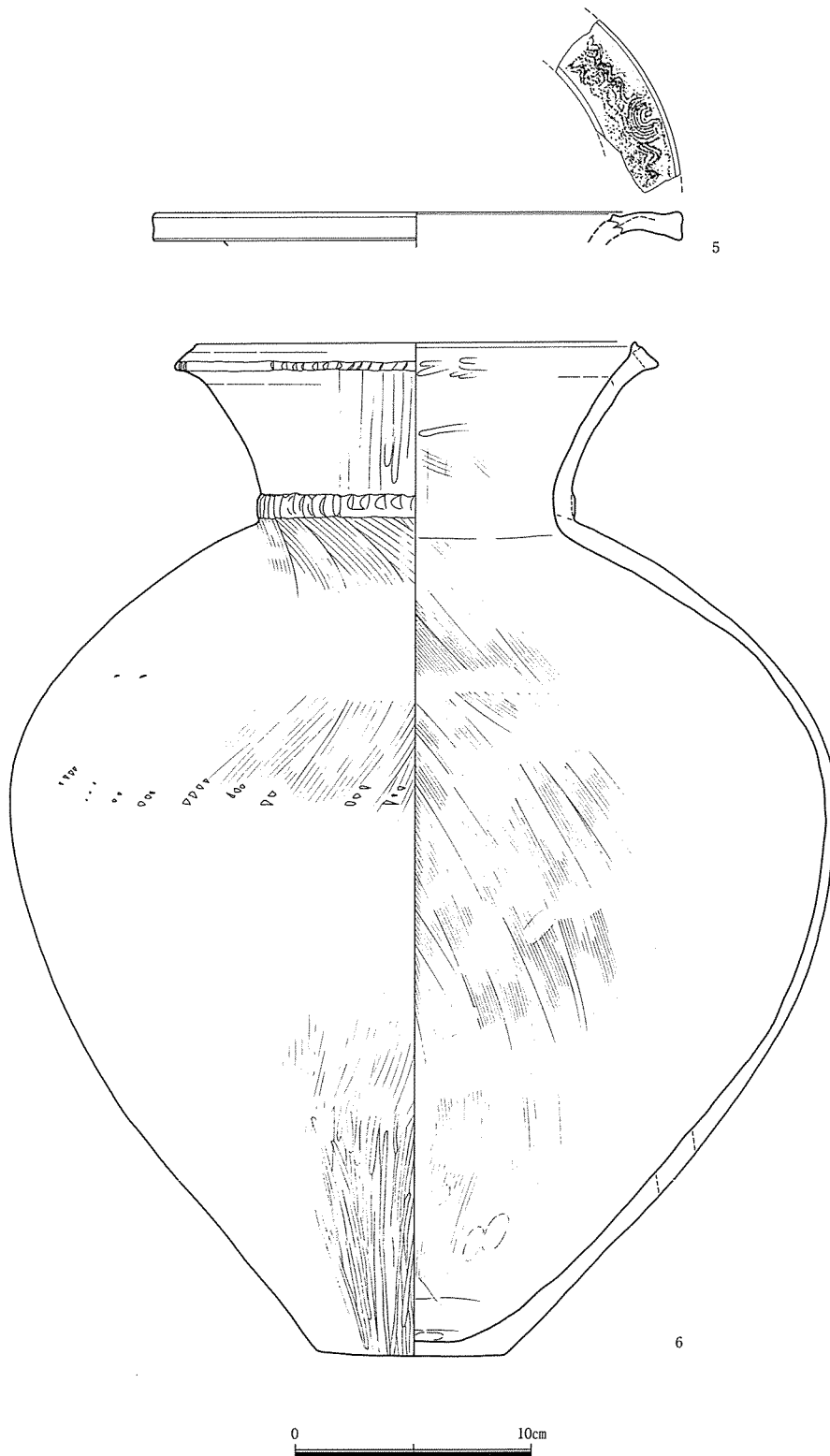
弥生時代の遺構は北半の西側からの検出に限定され数は少ない。このことは、当該期の遺跡の中心は今回の調査地から外れるものと考えられ、西側の字段木においても平成11年度の試掘調査において顕著な遺構が確認されなかったことから、北側を流れる有富川方向へ広がるものと考えられる。SD-34・35からはIV-3からV-1様式⁽¹⁾、概ね後期初頭に比定できる一括土器が出土する。SB-10は柱間寸法や柱穴の規模、主軸などが他の建物と異質であり、当時期に該当する可能性もある。

中世期の遺構の特徴に掘立柱建物が挙げられる。この度、想定できた建物は10棟を数えるが、柱穴は1,300基近く検出しており、本来は相当数の建物が存在したと考えられる。規模は4間×3間が2棟、3間×2間が3棟、2間×2間が3棟、2間×1間が2棟と比較的小規模である。このことは柱痕跡の大半が20cm前後、大きいものでも30cm程度であることと矛盾しない。主軸はN-5°-E前後が2棟、N-11°-Eが4棟、N-20°-E前後が3棟、N-30°-Eが1棟である。主軸からは3・4時期が考えられる。建物の時期を柱穴から出土する僅少な細片から限定することは困難であるが重複関係からSB-04はSD-06(08)・07、SK-13の室町期に先行すると考えられる。更に想像を逞しくすれば、同軸のSB-05、SB-07、SB-08が同時期と考えられる。この場合、SB-04、SB-05が重複し矛盾が生じるがSB-04のプランは縮小の可能性もあるので大過はない。SB-08の柱穴P-1405の柱根を放射性炭素(14C)年代測定したところAD.1332±36の年代を得ている。これらの結果から鎌倉時代末期(14世紀中頃)の所産と考えられる。SB-01も柱穴P-906の柱根を年代測定した結果、AD.1039±38年が比定できる。同軸のSB-02・03も同様、平安時代後半(11世紀末)と考えることもできる。SB-06、SB-09についての時期は不明である⁽²⁾。

土坑は大半の性格が不明である。なかには井戸など水利施設的な性格が考えられるものがあるが井戸枠や井筒が確認されていない為、断定はできない。これらの土坑からは漆器や下駄などの木製品が良好に遺存する。特徴的な土坑としてはSK-12から五銚鈴や華瓶などの銅製仏具、取瓶もしくは埴塙と考えられる小皿、鉄釘塊などが出土しており、宗教的な埋納遺構や特別な廃棄土坑などの可能性が考えられる。仏具の形態等から室町期の所産と考えられる⁽³⁾。

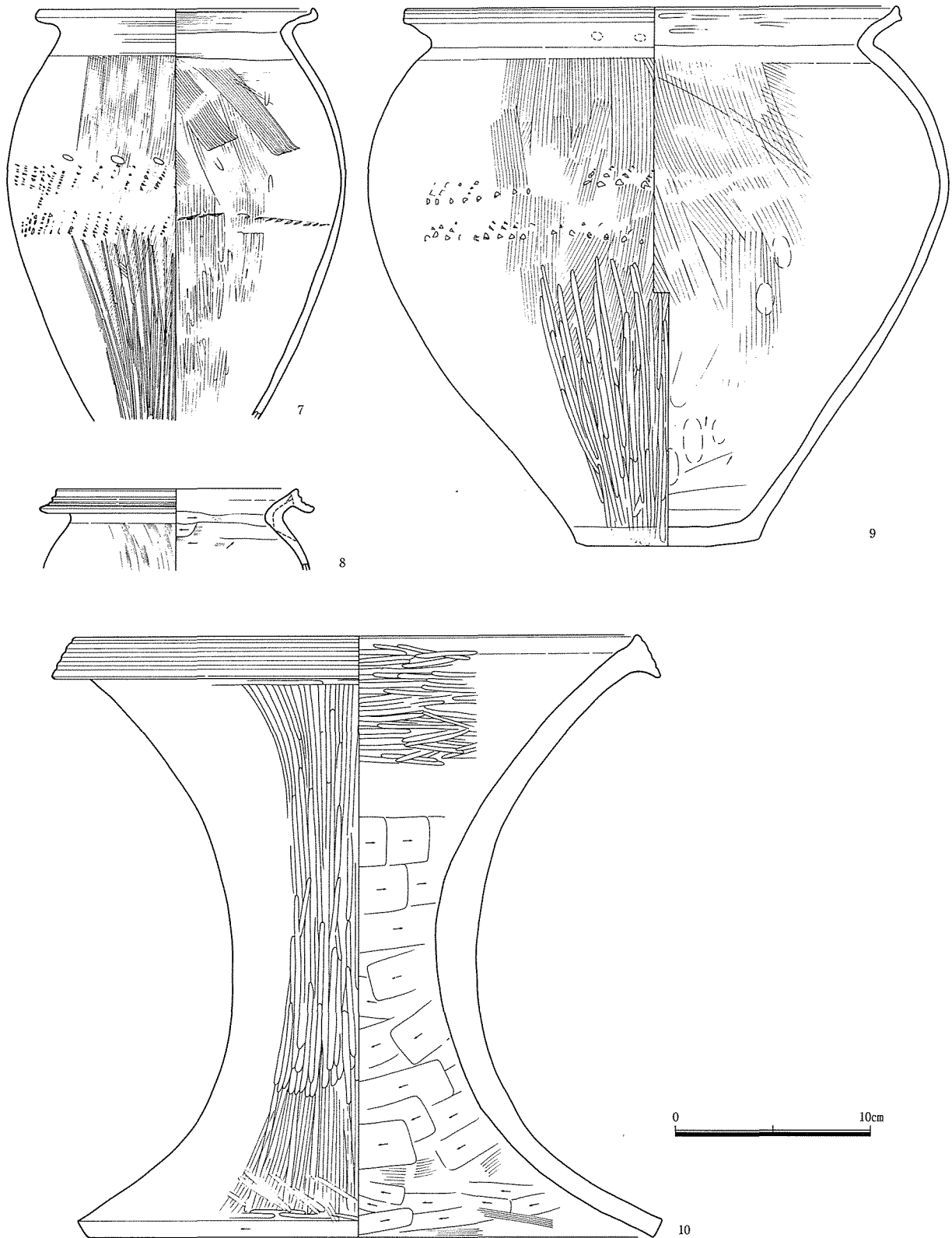
溝状遺構についても大半の性格は不明である。暗渠や耕作痕も含まれている。井戸等の水利施設に付帯する導水路や区画溝などの性格が考えられるが詳細は不明である。

中近世期の遺物は土師質土器、瓦質土器、須恵器、陶磁器類、木製品、鉄製品などがある。土師質土器は杯、皿を主とするが鍋も少しばかり出土している。量的には12・13世紀代のものよりは13・14世紀



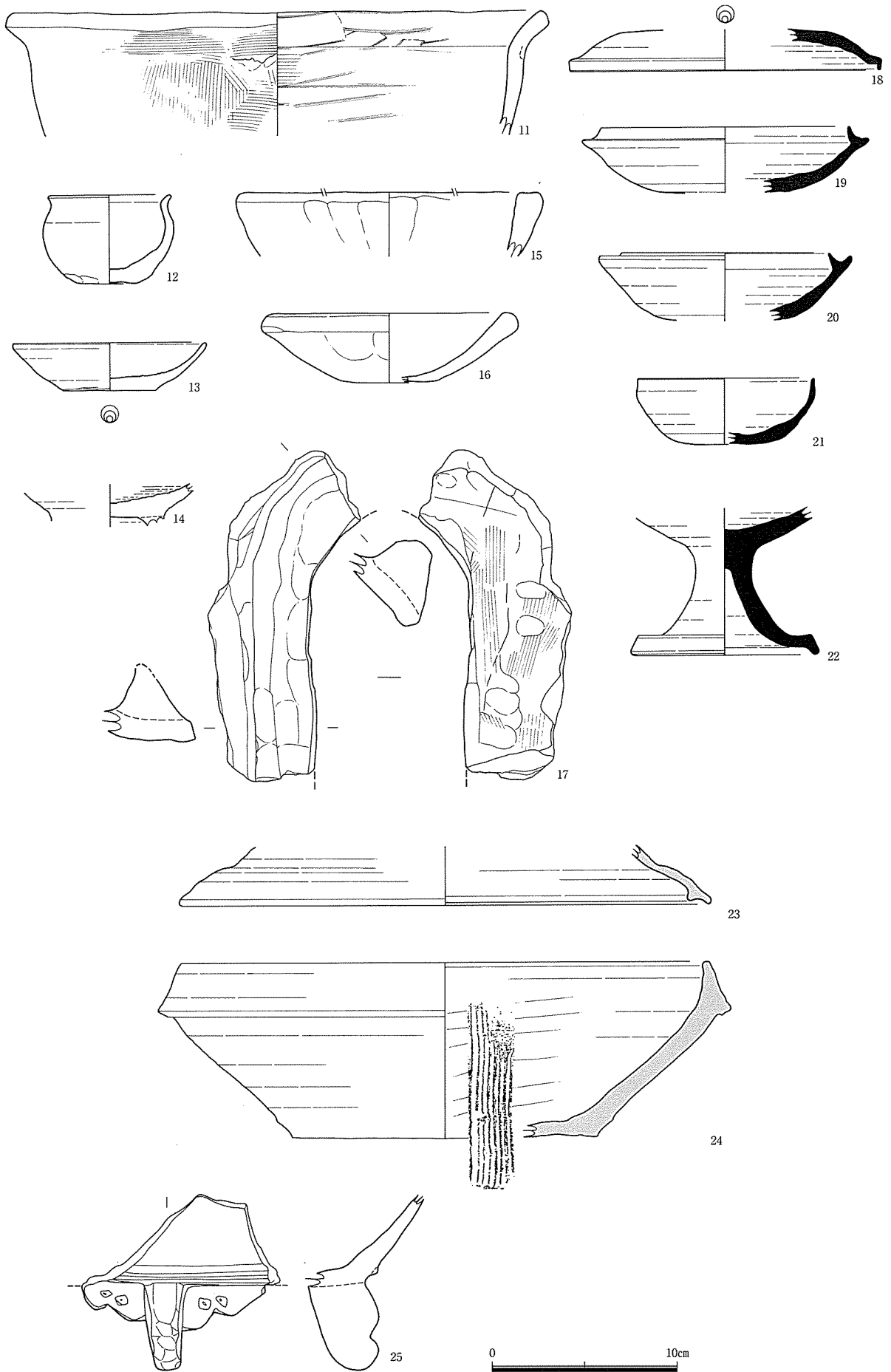
第106図 遺構外出土遺物実測図(2)

代のものが多い。なかには11世紀代に遡る杯もある。瓦質土器は「受け口」状の口縁を有する鍋、羽釜を主体に出土量は比較的多い。火鉢片も出土している。ほとんどが14・15世紀代と考えられる。須恵器は壺甕類、鉢類で占める。壺甕類の外面には大きめの格子タタキが特徴的であり、勝間田系かと考えられている。鉢類は東播系か。陶器は備前系と考えられる播鉢、小型の壺甕類で占める。なかには瀬戸産と考えられる天目碗が数点出土している⁽⁴⁾。磁器は白磁、青磁、染付があるが、白磁と青磁は碗類を主と



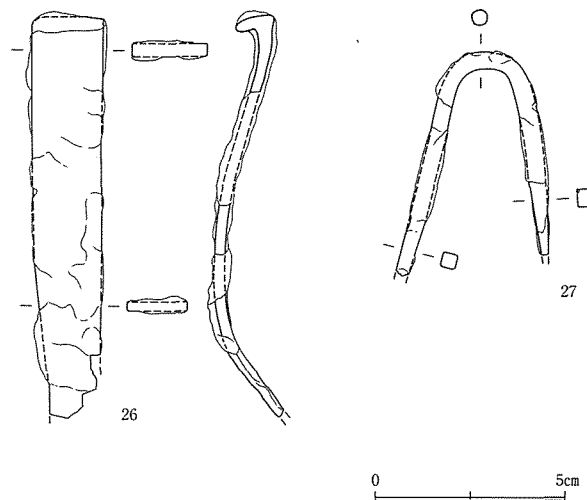
第107図 遺構外出土遺物実測図(3)

し、全てが輸入品である。白磁は口縁部が端反り、玉縁の2種類がある。青磁は全て14世紀以降のものである。剣先蓮弁文、雷文、見込みのスタンプ文が主流であり、無文のものも多い。染付は近世のなます皿、目跡が残ることから在地産の可能性もある。このように中世遺跡の典型的な器種、産地構成である。



第108图 遺構外出土遺物実測図(4)

本高円ノ前遺跡は鎌倉時代末期から室町時代前半(14・15世紀)を盛期とする集落遺跡と考えられるが、五鈷鈴や華瓶などの密教法具が埋納もしくは廃棄されていた土坑の存在や輸入陶磁器が比較的多いことなど、やや特殊な性格も有していると考えられる。墨書土器や木簡などの文字資料は出土しておらず、瓦葺建物も存在していなかったようで寺社などとは直接的な関係は見出せないが、「釣山」の北西に位置する菖蒲廃寺(後の座光寺)の存在は気になるところである。また、16世紀以降は集落そのものが放棄され、耕地化していることも興味深い。有富川を挟んだ対岸の菖蒲、山ヶ鼻遺跡とも時期的に重なり、その関係も今後の課題である。



第109図 遺構外出土遺物実測図(5)

最後に若干ではあるが縄文時代晩期の突帯文土器や古墳時代の須恵器が出土していることから周辺には当該時期の遺構も存在する可能性を指摘しておきたい。

註

- (1) 『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社 1992年
- (2) P-906、P-1045内に遺存する柱根の放射性炭素(14C)年代測定をバリノ・サーヴェイ株式会社に業務委託。
- (3) 京都国立博物館 久保 智康氏のご教示による。
- (4) 愛知学院大学 藤澤 良祐氏の写真鑑定による。

掘立柱建物一覧表

遺構名	調査区	規 模			平均柱間 (cm)		主軸方向	時 期
		桁×梁(間)	全長(m)	面積(m ²)	桁行	梁間		
SB-01	A区(南半)	4×3	7.52	52.9	174	247	N-22°-E	AD. 1039±38年
SB-02	A区(南半)	2×2	4.80	17.0	236	175	N-22°-E	平安時代後半
SB-03	A区(南半)	2×1	3.61	7.1	181	211	N-19°-E	平安時代後半
SB-04	A区(南半)	3×4	10.37	100.1	259	233	N-11°-E	鎌倉時代末期
		4×2	9.65	51.1	237	261		
		3×2	7.22	38.2	240	259		
SB-05	A区(南半)	2×2	4.93	23.2	253	234	N-11°-E	鎌倉時代末期
			4.70	21.4	224	234		
		2×1	4.70	9.4	234	201		
SB-06	B区(北半)	3×2	7.40	34.8	247	232	N-30°-E	—
SB-07	B区(北半)	3×2	5.03	23.7	165	167 285	N-15°-E	鎌倉時代末期
SB-08	B区(北半)	3×2	4.78	12.1	156	119	N-14°-E	AD. 1332±36年
SB-09	B区(北半)	2×2	3.89	7.8	179		N- 5°-E	—
SB-10	B区(北半)	2×1	3.20	13.9	156	244	N- 6°-E	弥生時代後期?

出土遺物観察表

—記載事項について—

挿図番号 遺構ごとの実測番号、図版番号、付図内表示番号を統一して示す。

器種 土器は形態的特長から、壺・甕・器台・鉢・杯・皿等の呼称を用い須恵器は、蓋・蓋杯・杯身・高杯・甕・鉢等の従来の呼称を用いた。部分名称の場合は()で表示。鉄製品は形態、使用痕等の観察から、鉄刀・刀子・鉄釘の名称を用いた。石製品は形態、使用痕等の観察から、砥石・敲石・磨石等の名称を用いた。

法量 土器……口径：① 底径：② 最大胴径：③ 器高：④をcmで示す。なお、()は復元値。〈 〉は推定値。ただし目安として径の残存が7分の1以下を推定値とした。

石製品・鉄製品……長さ：L 幅：W 厚さ：Tをcmで表す。()は現存値。

形態・手法の特徴 主要部分について記述した。土器については口縁部の内外ヨコナデ調整を特別な場合以外は省略した。

胎土・焼成・色調

①胎土 砂粒の大きさとその量を示す。

②焼成 良好(堅緻)・良(普通)・やや不良(やや軟)・不良(軟)の4段階に分けた。陶磁器については硬質・軟質で表した。

③色調 主として外面の色調を示すが、内外面が異なる場合(内)・(外)で表示。

陶磁器の場合は断面・施釉・露胎を(断)・(釉)・(露)で表示。

備考 朱、黒斑、煤、炭化物、粉痕の有無を記載。鉄・石製品は重量を記載。()は現存値。陶磁器は産地を記載。

遺物登録番号 出土地を調査区分の通し番号で表示。遺物台帳登録番号。

—遺物実測図中における表示—

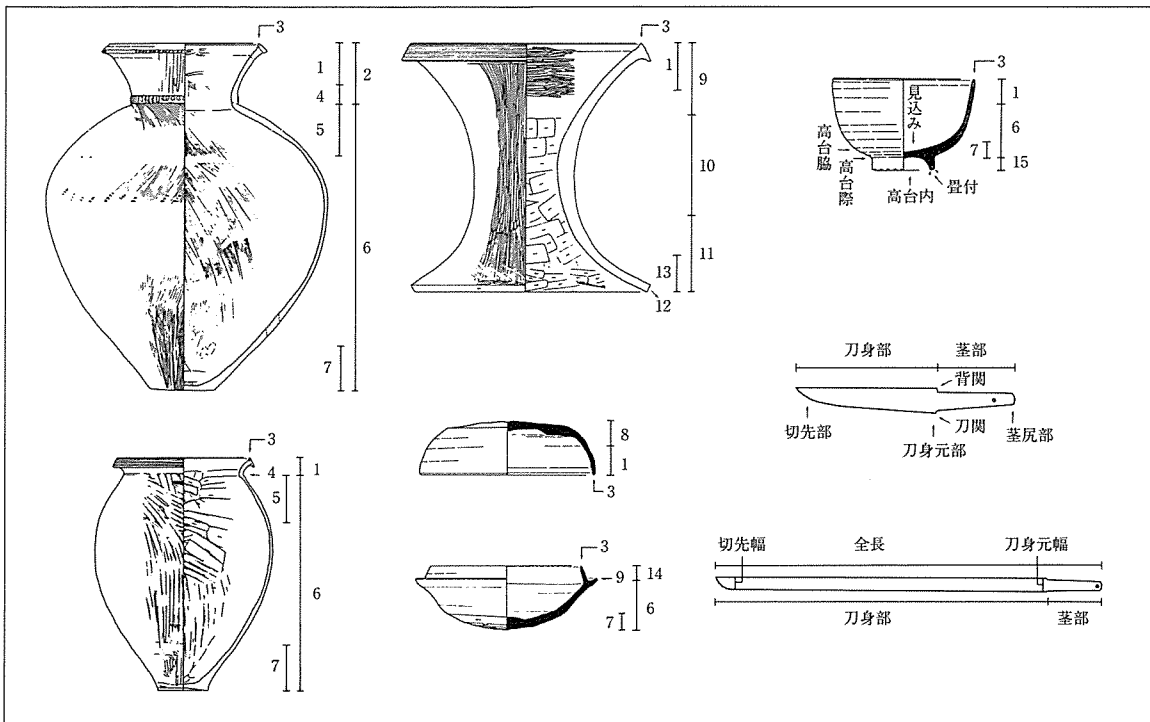
須恵器：黒塗り 土器回転糸切り：(⊙) 陶磁器：(■)

その他 煤附着部分、粘土、目釘、通紐部分：(■) 土器実測図のヨコナデ調整による稜：(---)

遺物使用痕範囲：(←→) 石製品実測図摩滅範囲：(←-----→) 陶磁器釉の範囲：(---) ←

—土器の部分名称について— 部分名称を略す場合は頭文字を()で表示。

- 1：口縁部 2：口頸部 3：口縁端部 4：頸部 5：肩部 6：体部 7：底部 8：天井部
9：受部 10：筒部 11：脚(台)部 12：脚(台)端部 13：裾部 14：立上がり 15：高台部



土器・鉄製品細部名称図

本高円ノ前遺跡

SB-04(第17図)

挿図 番号	器種	法量(cm) ①口径 ②底径 ③最大胴径 ④器高	形態・手法の特徴		①胎土 ②焼成 ③色調	残存状況	備考	遺物 登録 番号
1	土師器杯	①(14.1)	口縁部は外傾して開き端部で丸く納める。	(内外)ヨコナデ。 (外)底部糸切り痕。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③(外)橙色 (内)暗褐色	1/6		81
2	須恵器蓋	つまみ2.1	つまみは扁平。	(内外)ヨコナデ。 (外)つまみ貼付後周縁部をヨコナデ。 (内)ナデ。	①1~2mmの砂粒を多く含む ②良好 ③灰色	つまみ完存 (天)一部		116

SB-10(第25図)

1	土師器甕	①(17.6)	くの字状口縁。 口縁部は外反し端部で丸く納める。	(外)口縁部ハケ目後所々ナデ。体部ハケ目。 (内)口縁部横斜位ハケ目後軽くナデ。 頭部ナデ。体部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を多く含む 3~4mmの砂礫有 ②良 ③(外)橙色 (内)暗褐色	(口)1/6 (肩)1/15	黒斑有 煤・炭化物 付着	226
---	------	---------	-----------------------------	---	--	-------------------	--------------------	-----

SK-01(第28図)

1	陶器播鉢	①×28.6>	口縁部は外傾して開き端部で外側に肥厚させ下方に稜をつまむ。 上端は凸面とする。	(外)口縁部ヨコナデ。 (内)体部重複する櫛描目。後口縁部ヨコナデ。 (内外)口縁部施釉。	①1mm前後の砂粒を多く含む 3.5mmの砂粒有 ②やや軟質 ③(釉)茶褐色 (断)(露)にぶい黄褐色	(口)1/15	炭化物?付着	2
---	------	---------	--	---	---	---------	--------	---

SK-02(第30図)

1	瓦質鍋	①×20.3>	受け口状の口縁部。	(外)口縁部指成形後ナデ。 (内)体部ナデ。	①1~2mmの砂粒を多く含む ②良好 ③暗灰色	(口)一部		1
2	陶器(底部)	②(18.3)		(外)体部ナデ。底部ハケ目痕。底面工具ナデ。 (内)体部ハケ目後ナデ。底部粗なナデ、工具痕。	①1mm前後の砂粒を多く含む 4~4.5mmの砂礫有 ②やや軟質 ③(外)にぶい赤褐色 (内)赤灰色 明褐色 (断)赤灰色	(底)1/6		1
3	陶器播鉢	①×29.6>	口縁部は外傾して開き端部で上下に肥厚して面をもつ。	(外)口縁下端部横方向へのナデ。体部粗なヨコナデ後一部ナデ。 (内)ヨコナデ後8条の単位の櫛描目。	①1mm前後の砂粒を多く含む 5mmの砂礫有 ②硬質 ③(外)(断)にぶい赤褐色 (内)褐色	(口)1/12		2
4	青磁碗	①×13.3>	口縁部は内湾気味に立ち上がり端部で丸く納める。	(内外)ヨコナデ後陰刻後施釉。 (外)口縁部崩れた雷文。	①緻密 ②硬質 ③(素)淡灰色 (釉)オリブ灰色	(口)1/12	貫入有	4
5	土製錘	L 2.6 W 0.8 T 0.8	円筒状。	指成形後ナデ。	①0.5mm前後の砂粒を多く含む ②良 ③橙色	完存	1.6g	1
6	木製品漆器椀	①(15.4) ②7.6 ④5.6	口縁部は内湾気味に立ち上がり端部は丸い。	(内外)挽き調整後黒漆塗布。 (外)杯部4方向に赤漆にて筆描文。		(口)1/4 (底)1	榎目材 広葉樹	6

SK-05(第33図)

1	須恵器鉢	①×32.0>	口縁部は外傾し端部で内側に肥厚、端面をもつ。	(外)体部指ナデ。成形時の指頭圧痕。 (内)体部横方向の工具ナデ。	①0.5mm前後の砂粒を多く含む、2mmの砂粒有 ②不良 ③淡灰色	(口)1/12		1
---	------	---------	------------------------	--------------------------------------	---	---------	--	---

SK-06(第35図)

挿図番号	器種	法量(cm) ①口径 ②底径 ③最大胴径 ④器高	形態・手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	残存状況	備考	遺物登録番号	
1	陶器 天目碗	①(12.1)	天目茶碗。 口縁部は直線的に開き端部は細る。	(内外)施釉により調整不明瞭。 (外)底部へラ削り。釉溜り有。	①精緻 ②軟質 ③(断)(露)黄灰色 (釉)黒と褐色が縦方向に斑、禾目風	(口)1/4	貫入無	3
2	陶器碗	①×15.8)	口縁部は外傾し端部で細る。	(内外)ヨコナデ後施釉。 (外)底部へラ削り。	①精緻 ②やや軟質 ③(断)黄灰色 (釉)明緑灰色 (露)橙色	(口)1/13 (体)1/8	貫入有	3
3	陶器搗鉢	①×22.6) ②(11.4) ④12.1	口縁部は外傾し端部で肥厚、内上方へつまみ出す。底部は平底。	(内外)ヨコナデ。 (外)口縁一部、底部へラ削り。体一部ナデ。底面粗なナデ。 (内)体部8条単位の櫛描目を放射線状に施すが使用頻度激しく摩滅する。底部ナデ。	①1mm前後の砂粒を多く含む 4~7mmの砂礫有 ②やや軟質 ③(断)橙褐色 (素)暗橙褐色 橙色	(口)1/12 (体)1/6 (底)1/5		36
4	白磁鉢	①×17.2)	口縁部は外反し端部は丸い。	(内外)施釉。 (外)体部へラ削り。 (内)ヨコナデ。	①精緻 ②硬質 ③(断)灰色 (釉)灰白色	(口)1/19 (体)1/9	貫入無	6
5	青磁 (高台部)	②5.0	削り出し高台。 脚部は直下に下る。		①緻密0.5mmの砂粒を含む ②硬質 ③(釉)明緑色 (露)灰色 (素)淡灰色	(底)1/2	貫入有	2
6	須恵器 把手			手捏ね成形後ナデ。	①1~2mmの砂粒を多く含む 5mmの砂礫有 ②良好 ③灰色			3
7	土 錘	L 2.5 W 0.8 T 0.7	円筒状。	ナデ。	①0.5mmの砂粒を多く含む ②良 ③淡橙褐色	完存	1.5g	6

SK-08(第38図)

1	土師器皿	①(7.2) ②4.3 ④2.3	口縁部は外傾し端部は丸い。 底部は平底。	(内外)ヨコナデ。 (外)底部ナデ。 (内)体部ナデ。	①精緻1.5mmの砂粒有 ②良 ③橙褐色	(口)1/6 (底)1/2	黒斑有	3
2	陶器 (高台部)	②3.2	削り出し高台。	(外)底部へラ削り後放射線状のハケ目。高台部ヨコナデ。 (内)底部ヨコナデ?後施釉。高台部へラ削り。高台中央に兜巾が残る。	①精緻1mm以下の砂粒有 ②軟質 ③(断)(露)黄褐色 (釉)黄白色		貫入有	3
3	白磁			(内外)体部ヨコナデ後施釉。	①精緻 ②硬質 ③(断)(露)灰白色 (釉)灰白色		貫入無	3

SK-09(第39図)

1	瓦質鍋	①(27.6)	受け口状の口縁部。 体部は内下方へ下り底部で屈曲する。	(外)体部指成形後ナデ。 (内)体部ハケ目後原体不明のナデ。	①1mm以下の砂粒を含む 5~7mmの砂礫有 ②良 ③(外)暗灰色 (内)灰白色	(口)2/5	煤多く付着	10
2	陶器 (口縁部)	①(6.6)	口縁部は外傾し端部で上方へ丸く納める。	(内外)ヨコナデ後自然釉? (外)口縁一部に釉溜り。	①緻密 ②硬質 ③(断)灰色暗灰色 (釉)オリブ灰色 (露)灰色	(口)1/3		1
3	陶器 (底部)	②(15.7)	上げ底状の底部。	(内外)ヨコナデ。 (外)体部下半へラ削り。	①1mm前後の砂粒を多く含む 2~4mmの砂粒有 ②やや軟質 ③(外)にふい赤褐色 (断)黒灰色 (内)にふい赤褐色	(底)1/6		11
4	木製品 漆器碗	①最大 (13.8) ②6.6 ④5.9		風化著しく変形する。 内外面挽き調整後黒漆塗布。外面杯部、内面底部に赤漆にて筆描するが剥落部多く不明瞭。		(口)1/4 (底)3/4	榎目材 広葉樹 全体歪	13

挿図 番号	器種	法量(cm) ①口径 ②底径 ③最大胴径 ④器高	形態・手法の特徴		①胎土 ②焼成 ③色調	残存状況	備考	遺物 登録 番号
5	木製品 漆器碗	①×16.8> ②(7.8) ④4.2	口縁部は外傾し端部は丸い。	内外面挽き調整後黒漆塗布。高台内は漆なし。 残存部外面杯部、内面底部に赤漆筆描きの五重同心円文。		(口)一部 (底)1/2	柁目材 広葉樹	2
6	木製品 服飾具 下駄	L 18.7 W 9.5 T 1.9	上面形は両端部丸みをもち俵形。 鼻緒孔3は両面穿孔。方形孔4は片面穿孔。	表面の右足親指部分が明瞭に凹み使用頻度が高い。 裏面は長軸に垂直な2条の溝を削り、工具先幅0.9cmの使用により方形孔をつくり歯を組み使用したと思われる。表面、側面及び裏面両端部は刀による調整。 鼻緒孔径1.1~1.7cm。方形孔1.0~1.6cm。		完存	板目材 針葉樹	7
7	木製品 服飾具 下駄	L 9.3 W 13.9 T 2.0		上部2ヶ所を方形状に削り出し片面に下駄を組み込んで使用した痕跡が残る。接地面は使用頻度が高く斜めに擦り減る。左右両側面は面取り成形。		完存	6と一緒に 出土している が接点なし	7

SK-10(第43・45図)

1	土師器杯	①×7.6> ②(5.8) ④1.7	口縁部は底面から外傾して開き端部は丸い。 平底。	(内外)ヨコナデ。 (外)底部不明瞭。糸切りか?	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③(外)橙褐色 (内)にぶい橙色	(口)1/7 (底)1/4		8
2	土師器杯	①(12.8) ②6.8 ④3.8	口縁部は底面から外傾し端部は細る。 平底。	(内外)ヨコナデ。 (外)底部回転糸切り後接地外縁ナデ。 (内)底部軽いナデ。	①精緻 ②良 ③橙褐色	(口)1/6 (底)2/3		8
3	瓦質羽釜	①(25.4)	口縁部は内湾して上方に納め端面をもつ。 鐙は横位に巡る。	(外)体部ナデ。成形時の指頭圧痕が帯状に残る。底部ナデ。口縁部に鐙貼付後ヨコナデ。 (内)口縁部横ハケ目後ヨコナデ。体部原体不明の丁寧なナデ。	①0.5mm前後の砂粒を多く含む 2mmの砂粒有 ②やや不良 ③(外)乳褐灰色 淡灰色 (内)淡灰色	(口)1/5 (体)1/4 (底)1/5	煤多く付着 炭化物付着	5
4	瓦質甕	①×29.0>	口縁部は外反して開き端部に面をもつ。	(外)肩部叩き目後頸部ヨコナデ。 (内)頸部ハケ目後頸部ヨコナデ。肩部ヨコナデ。体部ナデ。	①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③(外)灰白色 暗灰色 (内)暗灰色	(口)1/11 (肩)1/7		7
5	木製品 服飾具 下駄	L 23.7 W 11.3 T (2.8)	両端部丸みをもち楕円状。 中央部に最大幅をもつ。 鼻緒孔3は両面穿孔。	表面の右足親指部分が凹み使用頻度が高い。 裏面は長軸に垂直な2条の歯を削り出し調整する。 鼻緒孔径1.0~1.7cm。		(歯裾)欠	針葉樹	1
6	木製品 底板	L 30.0 W 18.5 T 0.3	平面の2角は隅丸を呈し一側部は割れ欠失。	風化して縦割れする。 両面丁寧な調整。使用傷残る。3側辺の中央に小孔2を一組とする綴孔の可能性。二組に樹皮紐が一重に残る。			柁目材 広葉樹	3

SK-11(第46図)

1	土師器甕	①×17.6>	口縁部は外傾し端部は丸い。	(外)頸部ヨコナデ。肩部煤付着により不明瞭。体部縦斜位ハケ目。 (内)頸部はハケ目後口縁部ヨコナデ。体部へら削り後体部ナデ。指頭圧痕。	①1~2mmの砂粒を多く含む 4mmの砂礫有 ②良 ③橙褐色 褐色	(口)1/9 (肩)1/6	煤多く付着	1
2	須恵器 (口縁部)	①(13.9)	口縁部は外傾し端部は丸い。	(内外)ヨコナデ。	①1mm以下の砂粒を多く含む 2.5mmの砂粒有 ②良 ③灰色	(口)1/6		1
3	天目茶碗 (底部)	②3.5	削り出し高台。	ヨコナデ後内面施釉。 外面一部に釉溜り有。	①精緻②やや軟質 ③(断)淡黄灰色 (釉)黒色 茶褐色 (露)橙褐色	(底)1	貫入有	1

SK-12(第49図)

挿図番号	器種	法量(cm) ①口径 ②底径 ③最大胴径 ④器高	形態・手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	残存状況	備考	遺物登録番号
1	取瓶	①7.7 ④2.7	(外)手捏ね成形後ナデ。 (内)金属溶融物付着により不明瞭。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	ほぼ完形	金属溶融物付着	1
7	木製品 容器底板	L 21.1 W 15.0 T 1.4	平面形はD字状。 2角は角を丸める。	両面丁寧な調整。使用傷が残る。 側辺に小孔2を一組とする。	完存	榎目材 針葉樹	6

SK-13(第50図)

1	瓦質鍋	①×23.4>	受け口状の口縁部。 端部に凹面をもつ。	(外)口縁部指成形後ナデ。 (内)口縁部ナデ。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②良 ③(外)暗灰色(内)灰白色	(口)1/24		2
2	土師器 把手			指成形後ナデ。	①1~2mmの砂粒を多く含む ②良 ③橙色	1		2
3	白磁 (底部)	②4.4	削り出し高台。	(内外)ヨコナデ後施釉。 (外)高台脇に1条の圈線。 (内)1条の圈線。	①緻密 ②硬質 ③(断)(釉)(露)灰白色	(底)1	貫入無	2

SK-14(第51図)

1	瓦質鍋	①×27.0>	受け口状の口縁部。 端部に凹面をもつ。	(外)頸部指成形後ナデ。 (内)体部ハケ状工具によるナデ。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良好 ③(外)暗灰色 (内)淡灰色	(口)1/9	煤多く付着	2
2	瓦質鍋	①×22.3>	受け口状の口縁部。 口縁部は外方へ大きく張り出し端部に凹面をもつ。	(外)口縁端面ハケ目痕。頸部ナデ、指口縁部は外方へ大きく張り出し端部に凹面をもつ。 指口縁部は外方へ大きく張り出し端部に凹面をもつ。 (内)体部原体不明の工具のナデ。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む 3~6mmの砂礫有 ②やや不良 ③(外)暗灰色 灰褐色 (内)暗青灰色 暗灰色	(口)1/7 (体)1/9	煤・炭化物付着	2 4
3	青磁 (口縁部)	①×11.9>	口縁部は外反し端部は凸状。	(内外)ヨコナデ後施釉。	①緻密 ②硬質 ③(断)灰白色 (釉)明緑色	(口)1/13	貫入無	2
4	木製品 容器底板	外L 14.1 T 0.7 目釘径 0.25	平面形は凹形。	1面刀調整痕。 側縁部不均等な4方向に目釘孔。		完存	榎目材 広葉樹 漆塗りか?	1

SK-17(第60図)

1	陶器鉢	①×32.0>	口縁部は外傾して開き端部に凸面をもつ。	(外)口縁端面に1条の沈線後ヨコナデ。 (内)ヨコナデ後口縁部ナデ。	①1mm以下の砂粒を多く含む 4mmの砂礫有 ②やや軟質 ③にぶい橙褐色 (断)黒褐色	(口)1/9		1
---	-----	---------	---------------------	---------------------------------------	---	--------	--	---

SK-18(第63図)

1	五輪塔 (空風輪)	L 15.5 W 13.5 T 10.4		中位を溝状に成形し空・風輪とする。 風輪下位は台形状円錐に成形して火輪に接合し易くする。	③褐色	完存	2,805g	2
2	陶器 軒平瓦	L (7.0) W (12.3) T (3.8)		条溝を入れ瓦当を接合後施釉。	①精緻1mm前後の砂粒有 ②良 ③(素)褐色 (断)灰黄褐色 にぶい黄褐色 (釉)茶褐色			1

SK-19(第66図)

挿図番号	器種	法量(cm) ①口径 ②底径 ③最大胴径 ④器高	形態・手法の特徴		①胎土 ②焼成 ③色調	残存状況	備考	遺物登録番号
1	土 鍾	L (4.2) W 1.8 T 1.7	紡錘形状。	指成形後ナデ。	①0.5mm前後の砂粒を多く含む ②良 ③淡褐色	ほぼ完存	赤彩 8.9g	3

SK-20(第64図)

1	木製品 容器蓋	L (6.3) W 6.9 T 1.2	平面円形状。 上面中央部は丸く盛り上がる。	周縁部は丁寧な面取り成形。 裏面周縁部に沿って断面直角に削り調整する。		周縁部一部欠	板目材 針葉樹	1
---	------------	---------------------------	--------------------------	--	--	--------	------------	---

SK-23(第65図)

1	瓦質鉢	①×24.2>	口縁部は外傾して開き端部に面をもつ。	(外)口縁端面ハケ目後ヨコナデ。粗なヨコナデ。下半指頭圧痕。ナデ。砂の動きが残る。 (内)口縁部原体不明のナデ。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②やや不良 ③淡灰色 暗灰色	1/13		1
---	-----	---------	--------------------	---	-------------------------------------	------	--	---

SK-24(第67図)

1	陶器 (底部)	②(18.4)	平底。	(外)体部粗なヨコナデ。後縦斜位方向の粗なナデ。成形時の条痕がかすかに残る。底部砂の動きが残る。底面粗なナデ。 (内)体部原体不明工具による粗なヨコナデ後斜位ナデ。底部指ナデがしっかり残る。工具痕あり。	①1mm以下の砂粒を多く含む 6~9mmの砂礫有 ②やや硬質 ③(断)にぶい赤褐色(釉)にぶい黄褐色(露)暗青灰色 淡灰色	3/8	自然釉	1
---	------------	---------	-----	--	--	-----	-----	---

SK-26(第69・70図)

1	土師器 燈明皿	①(7.0) ②(4.0) ④1.8	口縁部は底部から外傾して開き端部は細る。	(内外)ヨコナデ後底部ナデ。 (外)底面静止糸切り後外周一部をナデ。	①0.5mm以下の砂粒を含む 1~2mmの砂粒有 ②やや不良 ③褐色 (断)橙褐色	1/3	煤付着	1
2	青磁 (底部)	②(5.9)	削り出し高台。	(内外)ヨコナデ後施釉。 (外)高台壘付けヘラ削り。	①精緻 ②硬質 ③(断)灰白色 橙褐色(釉)オリープ灰色(露)橙褐色	1/2	貫入有	1
3	青磁 (高台部)	②(6.2)		(内外)ヨコナデ後施釉後高台内蛇の目釉剥ぎ。	①精緻 ②硬質 ③(断)灰色(釉)オリープ灰色(露)橙褐色	(底)ほぼ1	貫入有 煤?付着 焼成不十分	4
4	砥石	L (4.8) W 5.6 T 2.2		一端は自然肌、他端割れ。 長軸4面に研ぎ痕。	③オリープ灰色	一端部	66g	3
5	磨石	L 12.2 W 10.3 T 8.0		自然石の1面に磨り痕。	③灰白色	完存	1,378g	3
6	木製品 容器底 板	L 28.2 W (1.0) 目釘径 0.3	平面は円形の可能性。	側面斜位の削り。 側縁部3方向に目釘孔。		1/2	板目材 広葉樹	5
7	木製品 桶側片	L 18.1 W 10.6 T 0.8		丸太材を削り抜き内外面調整痕、内面は年輪突出部を削る。		側板1		5
8	木製品 漆器椀	①(15.8) ②7.7 ④7.9	口縁部は外傾し端部で細る。	内外面挽き調整後黒漆塗付。高台内漆なし。後赤漆にて山野風景を筆描する。外面は一風景を繰り返して2風景。 内面杯底部は中心に木その周縁は不明瞭ながら風景か?		(口)1/3 (底)1	板目材 広葉樹 全体至	6 7

SK-29(第75図)

挿図番号	器種	法量(cm) ①口径 ②底径 ③最大胴径 ④器高	形態・手法の特徴		①胎土 ②焼成 ③色調	残存状況	備考	遺物登録番号
1	木製品箱	上縁径 17.1×13.6 下縁径 15.0×11.0 高さ 8.0 厚さ 1.2 目釘径 (大)0.4 (小)0.2	側縁は斜位の面取成形。 長辺の側板内面の両端に溝を設け、短辺の側板をはめ込み使用。側板の4隅と底部分に目釘孔が残る。 長辺の側板一枚に方形孔、相対する側板内に方形孔を削り出し棒状の柄を差し込んで使用したと思われる。			側板3	板目材 針葉樹	1 3

SK-30(第81図)

1	土師器皿	①7.3 ②最大5.1 最小4.9 ④1.4	口縁部は外傾し端部は細る。 平底。	(内外)ヨコナデ。 (外)底部回転糸切り。 (内)底部一部ナデ。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良好 ③暗橙褐色	(口)1/2 (底)1		10
2	瓦質鍋		受け口状の口縁部。端部に凹面をもつ。	(外)口縁端面横ハケ目痕。体部指成形後ナデ。 (内)頸部横ハケ目後体部ナデ。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む ②やや不良 ③(内)淡灰色 (外)灰色		煤付着	4
3	瓦質羽釜	①×23.8>	口縁部は内湾して上方に納め凹端面をもつ。 鏝は横位に巡る。	(外)体部ナデ。成形時の指頭圧痕が带状に残る。 口縁部に鏝貼付後ヨコナデ。 (内)口縁部原体不明のナデ後ナデ。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②やや不良 ③暗灰色	(口)1/8 (体)1/6	煤付着	4
4	瓦質甕	①×35.5>	口縁部は外傾し端部で肥厚して丸く納める。	(外)口縁端部ナデ。口縁部ハケ目後ヨコナデにより消える。 (内)体部ナデ。頸一部ハケ目。	①1~2mmの砂粒を多く含む ②良好 ③(内)暗灰色 (外)灰白色	(口)1/7	炭素吸着	1 5
6	木製品容器蓋	L 31.4 W (8.4) T 0.6 孔径 0.1×0.4 0.1×0.5	平面形は半円状。	風化して縦割れする。両面に斜位の多条痕。 上面黒漆塗布。 側縁に面取り成形。周縁部に通孔2を一組として一方向に通紐が残る。		1/2	板目材 広葉樹	8

SK-31(第6図)

1	縄文土器鉢	①(21.5)	口縁部はほぼ直立し端部で外方へつまみだす。	(内外)ヘラ状工具によるナデ。 (外)口縁端部に貼付突帯、ナデ後刻み目。	①1mm前後の砂粒を多く含む 2.5mmの砂粒有 ②良 ③(内)淡橙褐色 (外)暗橙褐色 淡橙褐色	(口)1/6 (杯)1/10	煤付着	1 2
2	弥生土器(口縁部)	①×13.6>		(内外)ヨコナデ。 (外)口縁端面3条の凹縁後ヨコナデ。	①1mm以下の砂粒を多く含む 4mmの砂礫有 ②良 ③(内)黄褐色 (外)橙褐色	1/8		1

SK-32(第7図)

1	弥生土器甕	①×13.2> ③24.8	口縁部は短く外傾し端部で肥厚して面をもつ。	(外)体部ハケ目後下半ヘラ磨き。 (内)頸部剥落不明瞭。体部ハケ目。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③(内)黄褐色(外)橙褐色	(口)1/7 (体)1/7	煤付着	1
---	-------	------------------	-----------------------	---------------------------------------	------------------------------------	------------------	-----	---

SK-35 (第82図)

挿図 番号	器種	法量(cm) ①口径 ②底径 ③最大胴径 ④器高	形態・手法の特徴		①胎土 ②焼成 ③色調	残存状況	備考	遺物 登録 番号
1	製塩土器	①7.4 ②3.5 ④6.4	口縁部は外傾して立ち上がり端部は丸い。	(外)指成形後ナデ。工具痕。 (内)ヘラ削り後軽いナデ。	①1mm前後の砂粒を多く含む 2~3mmの砂粒有 ②やや不良 ③淡橙褐色	(口)2/3 (底)1		4
2	須恵器 杯身	①×(12.4) 受(14.8)	立ち上がりは内傾し端部は丸い。	(内外)ヨコナデ。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③淡灰色 (断)セピア色	(口)1/8 (受)1/6		4

SK-40 (第86図)

1	須恵器 杯身	①×(11.2) 受×(13.8)	立ち上がりは内傾気味に直立し端部は丸い。	(内外)ヨコナデ。 (外)体部に2条の沈線。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③淡灰色	(口)1/8 (受)1/7		38
---	-----------	----------------------	----------------------	---------------------------	---------------------------	------------------	--	----

SD-03 (第90図)

1	土師器甕	①(20.6)	口縁部は外傾して開き端部は丸い。	(外)頭部ハケ目後口縁部ナデ。 (内)ハケ目。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②良 ③灰褐色	(口)1/6	煤付着	1
2	土 錘	L 4.1 W 1.0 T 1.0	筒型。	指成形後ナデ。	①0.5mm以下の砂粒を含む 1mmの砂粒有 ②良 ③黄褐色	完存	3.4g	1
3	土 錘	L 3.9 W 1.0 T 0.9		風化著しい。 粘土の巻付方向が確認される。	①0.5mm以下の砂粒を含む 2mmの砂粒有 ②やや不良 ③橙色 乳橙色	完存	2.7g	1
4	土 錘	L 3.5 W 1.0 T 0.9		指成形後ナデ。	①0.5mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡橙褐色	完存	2.4g	1
5	土 錘	L 1.8 W 1.1 T 1.1	俵型。		①1mm前後の砂粒を多く含む ②良 ③淡黄褐色	完存	2.2g	1

SD-06 (第91図)

1	青磁碗	②5.4	削り出し高台。	(内外)ヨコナデ後陰刻後施釉。 (外)底部ヘラ削り。釉溜り有。 (内)杯底部に花文。高台内中央に兜巾有。	①1mm以下の砂粒を含む ②硬質(底部軟質) ③(断)灰色 (釉)緑色 (露)黄褐色	(底)2/3		2
---	-----	------	---------	--	--	--------	--	---

SD-07 (第92図)

1	砥 石	L 17.3 W 5.7 T 4.5		長軸4面に砥ぎ痕。一面は使用頻度が高く凹状となる。	③淡灰色	完存	532g	2
---	-----	--------------------------	--	---------------------------	------	----	------	---

SD-08 (第93図)

1	須恵質甕			(外)頭部平行叩き目後残存部上半ヨコナデ。 (内)頭部ナデ。工具痕。残存部下半ハケ目、後のヨコナデにより消えかかる。	①1~2mmの砂粒を含む 3mmの砂粒有 ②良 ③灰白色 灰色	(頸)1/7		3
---	------	--	--	---	--	--------	--	---

SD-13(第94図)

挿図番号	器種	法量(cm) ①口径 ②底径 ③最大胴径 ④器高	形態・手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	残存状況	備考	遺物登録番号
1	青磁碗	②(6.6)	(内外)ヨコナデ後陰刻後施釉。 (外)高台内蛇の目釉剥ぎ。高台脇に2重圏線。 (内)見込みに一重圏線、花文?を施す。	①緻密②硬質 ③(断)白色(釉)緑色(露)にぶい橙色褐色	(底)1/3		1

SD-17(第97図)

1	陶器 口縁部	①×13.2>	口縁部は外反し端部は丸い。	(内外)ヨコナデ後施釉。 (外)自然釉?	①1mm前後の砂粒を多く含む ②硬質 ③(断)灰色(釉)内)暗褐色(外)暗緑色	1/8		1
---	-----------	---------	---------------	-------------------------	--	-----	--	---

SD-21(第95図)

1	陶器 天目碗	①(13.5) ②4.2 ④6.5	口縁部は外傾して開き端部で上方へ丸く納める。底部は平底。	(内外)ヨコナデ後施釉。 (外)底部回転ヘラ切り。釉溜り有。	①精緻2~3mmの砂粒を含む ②軟質 ③(断)灰褐色(釉)黒色 口縁部辺黒と茶の斑、禾目風(露)褐色	(口)1/4 (底)1		3
2	陶器 壺	①×13.5>	口縁部は外傾し端部で肥厚して丸く納める。	(内外)ヨコナデ。 (外)施釉? (内)頸部ナデ。口縁一部釉垂れ。	①1mm前後の砂粒を含む ②やや軟質 ③(断)黄灰色(釉)暗緑色(露)内)オリーブ灰色 外)赤褐色	(口)1/11		1
3	青磁 (高台部)	②6.4		(内外)ヨコナデ後施釉。 (内)高台内蛇の目釉剥ぎ。	①精緻 ②硬質 ③(断)白色(釉)緑色(露)黄褐色	2/3	貫入有	1

SD-22(第99図)

1	磁器 染付皿	①(14.6) ②(9.2) ④3.4	口縁部は外傾し端部は丸い。削り出し高台。	(内外)ヨコナデ。染付け後施釉。 (内)口縁端部と底部にそれぞれ2重圏線、間に海と鳥文、斜格子に花文を染め付ける。見込み残存部に砂目跡1を観察。高台内蛇の目釉剥ぎ。	①緻密 ②硬質 ③(断)白色(釉)無色透明(淡緑かかる) (露)白色	1/3		1
2	陶器 皿	①×11.6> ②(5.4) ④2.6	口縁部は内湾気味に立ち上がり端部で上方へ丸く納める。削り出し高台。	(内外)ヨコナデ後施釉。 (外)底部ヘラ削り。 (内)見込み残存部に砂目跡1を観察。	①精緻 ②硬質 ③(断)灰色(釉)緑色(露)茶褐色	(口)1/9 (底)1/4	見込みに砂目跡	2

SD-25(第100図)

1	陶器 蓋	L (6.0) W (3.4) T 0.7 つまみ 1.2	縦位のつまみ。	上面持ち手部貼付、側縁部ヨコナデ後施釉。下面周縁部ハケ状工具による周回するナデ後中央ナデ。	①精緻 ②軟質 ③(釉)黄褐色(露)橙色	2/5		2
2	土師器 丸瓦	L (6.2) W (7.6) T 2.4		剥落不明瞭。 (外)叩き目?	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③淡橙褐色	一部		4

SD-32(第10図)

1	弥生土器 壺	①×16.1>	縁上口縁。口縁部は外傾し端部で下方に肥厚させ稜をもつ。	(外)口縁部ヨコナデ後端面に3条の凹線を巡らす。頸部ナデ。 (内)口縁部ハケ目後ナデ。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②やや不良 ③淡褐色	(口)1/8		2
2	弥生土器 甕	①×22.1>	縁上口縁。口縁部は短く外傾し端部で肥厚して面をもつ。	(外)口縁端面に3条の凹線。後口頸部ヨコナデにより凹線消えかかる。 (内)剥落不明瞭。	①1mm前後の砂粒を多く含む 2.5mmの砂粒有 ②やや不良 ③淡橙灰色	(口)1/9	煤付着	2

SD-34(第11・12図)

挿図 番号	器種	法量(cm) ①口径 ②底径 ③最大胴径 ④器高	形態・手法の特徴		①胎土 ②焼成 ③色調	残存状況	備考	遺物 登録 番号
1	土師器壺	①<13.5>	口縁部は内湾して立ち上がり端面をもつ。	(外)ヘラ磨き。 (内)ナデ。ヘラ磨き痕。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③淡橙褐色	(口) 1/10 (頸) 1/12		35
2	弥生土器壺	①(23.6)	線上口縁。 口縁部は外傾して開き端部で肥厚して面をもつ。	(外)口縁端面に3条の凹線後軽いヨコナデ。口縁部ハケ目後ナデ。 (内)ヘラ磨き。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③(内)淡橙褐色 淡黄褐色 (外)淡橙褐色	(口) 1/5		50
3	弥生土器壺	①11.6	線上口縁。 口縁部は外傾し端部で肥厚、下方に稜をつまむ。端面をもつ。	内外面に鉄分がしっかり付着して不明瞭部分が多い。 (外)口縁端面に凹線を3~4回周回させる。頸部ヘラ磨き。 (内)頸部に無数の工具痕。ヘラ磨き? 肩部ヘラ削り後工具ナデ。成形時の圧痕。	①2mm以下の砂粒を多く含む 3mmの砂粒有 ②やや不良 ③黄褐色 暗褐色	(口) 3/5	鉄分付着	12 15
4	弥生土器壺	①(14.0)		風化剥落不明瞭。 (外)口縁端面に3条の凹線。頸部指頭圧痕。体部多面状の成形痕。横ハケ目後縦ハケ目。 (内)体部ヘラ削り後工具ナデ。頸部指頭ナデ。指頭圧痕が带状に残る。	①1~2mmの砂粒を多く含む 4.5mmの砂粒有 ②やや不良 ③暗褐色 灰褐色	(口) 1/4 (体) 1/2	黒斑有 炭化物付着	4 11 14 17
5	弥生土器(肩部)			(外)ヘラ磨き後残存部に竹管文2を観察。 (内)ナデ。成形時の指頭圧痕、絞り目が残る。	①1~2mmの砂粒を多く含む 4mmの砂粒有 ②やや不良 ③(内)暗褐色 (外)褐色	1/5	鉄分付着	13
6	弥生土器甕	①15.0 ②5.7 ③20.1 ④26.5	線上口縁。 口縁部は短く外傾し端部で肥厚、下方に稜をつまむ。 体部は中位に最大径をもち卵型。 底部は平底。	(外)口縁端面に3条の凹線。体部ハケ目後所々ヘラ磨き。後頸部ヨコナデ、1条の工具痕有。底部ナデ、工具痕。 (内)体部ヘラ削り後軽い工具ナデ。頸部、底部ナデ。	①1~2mmの砂粒を多く含む 3.5~6mmの砂粒有 ②良 ③(内)暗橙褐色 灰褐色 暗灰褐色 (外)暗橙褐色 灰褐色 濃橙褐色 暗灰褐色	(口) 5/8 (肩) 1/4 (体) 1/2 (底) 1	煤・炭化物 付着	5 6 13 16 17 ~ 19 28 52
7	弥生土器甕	①14.5 最大14.9 ②4.7 ③18.7 ④25.3		(外)口縁端面に3条の凹線。体部ハケ目後頸部軽いヨコナデ、底部ナデ。底面ハケ目 (内)頸部ナデ。成形時の指頭圧痕。体部上半横方向のヘラ削り、下半縦方向へのヘラ削り後軽くナデ。底部ナデ。	①2~3mmの砂粒を多く含む 4~6mmの砂粒有 ②良 ③橙色 褐色 灰褐色	ほぼ完形	煤多く付着 炭化物付着 口縁歪	30
8	弥生土器甕	①13.7 ③16.5	線上口縁。 口縁部は短く外傾し端部で肥厚して面をもつ。	風化剥落著しい。 (外)口縁端面2条の凹線。体部ハケ目後上半軽いナデ。後頸部縦後斜位ヘラ磨き後ナデ。強いヘラ磨きにより所々が凹む。 (内)口頸部ナデ。体部ヘラ削り後丁寧なナデ。	①1mm以下の砂粒を多く含む 2mmの砂粒有 ②良 ③橙色 淡褐色 淡橙褐色	(口) 1/2 (肩) 1/2	煤付着	29 31 37
9	弥生土器甕	①(13.2) ②(13.3)		風化剥落著しい。 (外)肩部横ハケ目。体部縦ハケ目後ヘラ磨き。頸部成形時の指頭圧痕。 (内)体部上半左方向のヘラ削り、下半上方向のヘラ削り後のナデ。頸部ナデ。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②やや不良 ③(内)淡橙褐色 乳灰色 (外)灰褐色 暗褐色	(口) 1/4 (肩) 1/4	黒斑有 煤多く付着	35
10	弥生土器甕	①(13.9)		風化剥落著しい。 (外)口縁端面に2条の凹線痕。頸部ヨコナデ。肩部ヘラ磨き痕。 (内)頸部工具ナデ後ヘラ磨き。体部ヘラ削り。	①2mm前後の砂粒を多く含む 3~4mmの砂粒有 ②良 ③(内)濃橙褐色 (外)濃橙褐色 橙褐色	(口) 1/2	黒斑有 煤付着	6 18

挿図 番号	器種	法量(cm) ①口径 ②底径 ③最大胴径 ④器高	形態・手法の特徴		①胎土 ②焼成 ③色調	残存状況	備考	遺物 登録 番号
11	弥生土器 甕	①12.4 ②14.5		風化剥落著しい。 (外)口縁端面に3条の凹線。体部ハケ目後上位ナデ。頸部ヨコナデ (内)口縁部ハケ目後端部ヨコナデ。頸部ナデ。体部ヘラ削り後軽くナデ。	①2mm前後の砂粒を多く含む ②良 ③(内)橙色 淡橙色灰褐色 (外)橙色 濃橙色 暗褐色	(口)1/2 (肩)1/2	黒斑有 煤・炭化物 付着	45 48
12	弥生土器 甕	①(16.0) ③(19.0)	縁上口縁。 口縁部は短く外傾し端部で肥厚、下方に稜をつまむ。	(外)口縁端面に3条の凹線後上位2条をヨコナデ。体部ハケ目。後頸部ヘラ磨き後軽いヨコナデ。体部下半縁ヘラ磨き。ハケ状工具による連続刺突文。 (内)頸部ハケ目後ヘラ磨き。体部ヘラ削り後ヘラ磨き。後にナデ、上位に成形時の圧痕。	①1mm前後の砂粒を多く含む 3~5mmの砂礫有 ②良 ③(内)淡橙褐色 淡灰色 (外)淡黄褐色 褐色 暗橙褐色	(口)1/2 (体)1/4	煤多く付着	39
13	弥生土器 (口縁部)	①×13.4	縁上口縁。 口縁部は短く外傾し上端部を欠く。	(外)口縁端面に1条の凹線。体部ハケ目後上位ナデ。後頸部ヨコナデ。 (内)頸部ナデ。体部ヘラ削り後指ナデ。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む ②やや不良 ③(内)淡橙褐色 (外)乳灰色	1/8	黒斑有	52
14	弥生土器 台付鉢	①×15.9 ③(20.4)	口縁部は内湾し端部で外方に肥厚させ上端部を欠く。	(外)体部ハケ目後ヘラ磨き。 (内)体部上半横ハケ目後縦ハケ目後所々ナデ。	①1mm以下の砂粒を多く含む 3mmの砂礫有 ②良 ③(内)橙褐色 淡橙褐色 (外)褐色	(口)1/11 (体)1/6	黒斑有 朱	24
15	弥生土器 台付鉢	①(16.0) ③×8.6	縁上口縁。 口縁部は短く外傾し端部で肥厚して面をもつ。	(外)口縁端面3条の凹線後ヘラ磨き。体部工具ナデ後ヘラ磨き。ハケ目痕。後頸部軽いヨコナデ。 (内)口縁部工具ナデ後ヘラ磨き。体部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を多く含む 2~3mmの砂粒有 ②良 ③濃橙褐色	(口)1/4 (肩)1/4 (体)1/8	朱痕	5 34 36
16	弥生土器 脚台部	②(9.6)	脚部はハの字状に開き端面をもつ。	(外)脚柱部ハケ目後ナデ。裾部ヨコナデ、ヨコハケ目痕。端面に2条の凹線後軽くナデ。 (内)脚柱部絞り目後ナデ。裾部ヨコナデ後ハケ目。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む 2mmの砂粒有 ②良 ③(内)淡橙褐色 (外)乳褐灰色 淡灰色	1/2	朱	22
17	弥生土器 脚台部	②(13.4)		(外)ハケ目後ヘラ磨き。工具痕。端面に2条の凹線。 (内)ヘラ削り後上半軽くナデ。	①1mm以下の砂粒を多く含む 2.5mmの砂粒有 ②良 ③濃橙褐色 橙褐色	1/4		34
18	弥生土器 脚台部	②(15.6)	口縁部は大きくハの字状に開き端部で肥厚し面をもつ。	(外)ヘラ磨き。端面ナデ。 (内)ヘラ削り後一部ヘラ磨き。工具痕。	①1~2mmの砂粒を多く含む ②やや不良 ③乳褐灰色	1/5	黒斑有	31
19	手捏ね 土器	①6.2 最小5.7 ②4.0 ④4.1	上げ底の底部。	(内外)手捏ね成形後指ナデ。	①1mm以下の砂粒を多く含む 2~2.5mmの砂粒有 ②やや不良 ③褐色	ほぼ完形	黒斑有	2

SD-35(第13図)

1	弥生土器 壺	①(15.6)	縁上口縁。 口縁部は外反気味に立ち上がり端部で上下に肥厚し面をもつ。	(外)口縁端面に4条の凹線。頸部ハケ目後所々ナデ、上半軽いナデ。 (内)頸部上半ハケ目後一部ナデ。下半指ナデ。 成形時の指頭圧痕。	①2mm前後の砂粒を多く含む 4~4.5mmの砂礫有 ②良 ③(内)淡橙褐色 (外)橙色	(口)1/6		9
2	弥生土器 壺	①×11.6	口縁部は外反して端部は面をもつ。	(外)口縁部横ハケ目後ヨコナデ。肩部ナデ後体部ハケ目。頸部ヘラ磨き。 (内)頸部ナデ。肩部ヘラ削り。	①2mm前後の砂粒を多く含む ②良 ③(内)褐色 淡黄褐色 橙色 (外)橙色	(口)1/16 (肩)1/5		10

挿図 番号	器 種	法量 (cm) ①口径 ②底径 ③最大胴径 ④器高	形 態 ・ 手 法 の 特 徴		①胎 土 ②焼 成 ③色 調	残存状況	備 考	遺物 登録 番号
3	弥生土器 台付壺	①9.8 ②8.5 ③15.7 ④13.4	複合口縁。体部算盤玉状に中位を突出させる。複合台部。	(外)口縁端面ヘラ工具による5条の沈線。体部中央は円弧状工具による連続刺突文をハの字状に施し1段4文様とし、1段と2、3段は文様が交互になる。2、3段は同一状文。後上段から3条、3条、3条、1条、3条、3条のヘラ描沈線で各段を区画する。体部中位の面には2重圏スタンプ文を2段施す。体部下位ナデ、多面状の成形痕。脚台部接合後ヨコナデ。脚端面ヘラ工具による5条の沈線。 (内)口縁部剥離不明瞭。径4mmの円孔2ヶ1対を内から穿孔、2方向に観察。頸部以下ヘラ削り後軽くナデ。体部下位ヘラ磨き。	①1mm前後の砂粒を多く含む 3~4mmの砂礫有 ②やや不良 ③(内)淡乳褐色 (外)淡乳褐色 淡灰色	(口)1/2 (口頭)1 (体)1 (脚台)1/2	黒斑有	1 2
4	弥生土器 甕	①(16.4)	くの字状口縁。口縁部は短く外傾し端部は丸い。	剥落不明瞭。 (外)口縁端部軽い刻み目か?	①2mm以下の砂粒を多く含む 5mmの砂礫有 ②良 ③(内)淡黄褐色 (外)橙褐色	(口)1/8		13
5	弥生土器 甕	①(17.1)	線上口縁。口縁部は短く外傾し端部で肥厚し面をもつ。	(外)口縁端面に2条の凹線後軽いヨコナデ。頸部工具痕。 (内)口縁部ハケ目後ヨコナデ。頸部ヘラ削り。	①1mm以下の砂粒を多く含む 2mmの砂粒有 ②やや不良 ③(内)灰白色 (外)灰褐色	(口)1/5	煤付着	14
6	弥生土器 甕	①(12.8)		剥落不明瞭。 (外)口縁端面に2条以上の凹線。 (内)体部ヘラ削り後ナデ。	①2mm以下の砂粒を含む 3.5mmの砂粒有 ②不良 ③黄褐色	(口)1/4 (肩)1/4	煤付着	17
7	弥生土器 甕	①(19.8)		(外)口縁端面に3条の凹線。一部ヘラ磨き痕。頸部ヨコナデ後ヘラ磨き。 (内)口縁部ハケ目後ナデ後ヘラ磨き。工具痕。頸部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を多く含む 4.5mmの砂礫有 ②良 ③(内)乳灰色 (外)淡橙褐色 乳灰色	(口)1/8		16
8	弥生土器 甕	①(16.7)	複合口縁。口縁部は直立し端部で上下に肥厚して面をもつ。	剥落不明瞭。 (外)口縁部ハケ目状工具によるヨコナデ後口縁端面に4条の沈線。	①1mm以下の砂粒を多く含む 2mmの砂粒有 ②やや不良 ③橙褐色 灰褐色	(口)1/4	煤付着	11
9	弥生土器 甕	①(16.9)	複合口縁。口縁部はほぼ直立し端部で上下につまみ出し端面をもつ。	(内外)ヨコナデ。 (外)口縁端面に4条の沈線。 (内)頸部ナデ。肩部ヘラ削り。	①1mm以下の砂粒を多く含む 2mmの砂粒有 ②やや不良 ③橙褐色	(口)1/5	煤付着	13
10	弥生土器 (底部)	②(6.4)	平底。	(外)体部ハケ目後底部ナデ。底面粗なナデ。 (内)体部ヘラ削り後所々ナデ。後に底部ハケ目。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②やや不良 ③(内)褐灰色 (外)褐灰色 灰褐色 橙褐色	(底)1/4	煤付着	15

SD-39(第101図)

1	製塩土器		口縁部は外傾し端部で肥厚し丸く納める。	(外)指成形後ナデ。 (内)工具ナデ後ナデ。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②良 ③橙褐色	(口)一部		1
---	------	--	---------------------	---------------------------	---------------------------	-------	--	---

SD-54(第102図)

挿入 番号	器 種	法量(cm) ①口 径 ②底 径 ③最大胴 ④器 高	形 態 ・ 手 法 の 特 徴		①胎 土 ②焼 成 ③色 調	残存状況	備 考	遺物 登録 番号
1	陶 器 (口縁部)	①<38.4>	口縁部は外傾し端部に面をもつ。	(内外)ヨコナデ後施釉。 (外)波状文を2段に施す。口縁端面に釉溜り有。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良好 ③灰白色	1/10		1

Pit(第103・104図)

1 P-456	土師器杯	①(8.9) ②(5.0) ④2.0	口縁部は外傾し端部は細る。	(内外)ヨコナデ。 (外)底面回転糸切り。糸掛け痕。 (内)底部ハケ目?	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③淡橙褐色	(口)1/6		91
2 P-524	土師器杯	①9.4 ②4.3 ④2.2	口縁部は直線的に開き端部は丸い。	(内外)ナデ? (外)底面回転糸切り。 (内)杯部に圧痕が残る。	①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡橙褐色	ほぼ完形		106
3 P-1269	瓦質鍋	①<28.6>	受け口状の口縁部。	(内外)口縁部横ハケ目後軽くナデ。 (外)体部指成形後ナデ。成形時の指頭圧痕。 (内)体部ハケ目。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③暗灰色 灰色	(口)1/11	煤付着	198
4 P-738	瓦質鍋	①<28.4>		風化剥落著しい。 (外)体部指成形後ナデ。成形時の指頭圧痕。 (内)ナデ。	①1mm以下の砂粒を多く含む 2mmの砂粒有 ②やや不良 ③淡灰色	(口)1/8 (体)1/8	煤付着 黒斑有	132
5 P-027	製塩土器	①<13.8>	口縁部は外傾し端部で肥厚して凸面をもつ。	(内外)指成形後ナデ。 (外)口縁部成形時の指頭圧痕。 (内)工具ナデ?	①1mm前後の砂粒を多く含む ②やや不良 ③(内)橙色 (外)橙褐色	(口)1/10		6
6 P-796	土師器 脚 部	②(3.6)		風化剥落不明瞭。 (外)ナデ後上位横ハケ目痕。一部縦ハケ目。底面回転糸切り痕。 (内)ナデ?ヨコナデ。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③淡橙褐色	(脚)1		151
7 P-510	白磁碗	①<17.1>	口縁部は外傾し端部は玉縁口縁。	(内外)ヨコナデ後施釉。	①緻密 0.5mmの砂粒有 ②硬質 ③(断) 白色(釉)灰白色	(口)1/8		38
8 P-811	青磁碗	①<15.3>	輪花状口縁。 口縁部は外傾し端部で細る。	(内外)ヨコナデ後施釉。 (外)口縁部に釉溜り有。 (内)口縁端部に陰刻による2重圈縁。	①緻密 0.5mmの砂粒有 ②硬質 ③(断)灰白色 (釉)灰オリーブ色	(口)1/8		155
9 P-1469	青陶碗	①(13.6)	口縁部は外傾し端部は丸い。	(内外)ヨコナデ後施釉。 (外)口縁部ヨコナデ後2条の陰刻圈縁、体部陰刻花文。後施釉。	①精緻 ②軟質 ③(断)にぶい橙色 (釉)オリーブ灰色	(口)1/6	貫入有	214
10 P-534	敲 石	L 16.5 W 10.0 T 7.6	自然石の一端を欠く。	長軸4面に砥ぎ痕。 1端部に敲打痕。	③黒褐色 灰褐色		1,656g	110
11 P-1031	石 白	W 18.8 T 11.1	上石白。	残存部は主溝3本により3区画に分割、1単位は副溝13本で構成。			3,020g	181

遺構外(第105・106・107・108図)

1	縄文土器 鉢		口縁部は直立し端部で外方に肥厚させ細る。	(内外)ヘラ状工具によるナデ。 (外)口縁端部に突帯貼付後ナデ。後にヘラ工具使用による刻み目を残存部に4観察。	①2mm前後の砂粒を多く含む 4mmの砂礫有 ②良 ③褐色	(口)一部		26
2	縄文土器 (口縁部)		口縁部は内傾し端部で外方につまみ出す。	(外)口縁端部ナデ、工具による押圧突帯。斜位ナデ後横位ナデ。 (内)工具ナデ。	①2mm前後の砂粒を含む 6mmの砂礫有 ②良 ③(内)淡橙褐色 (外)暗橙褐色	(口)一部	初痕	26
3	縄文土器 (口縁部)		口縁部は外傾し端部で肥厚する。	(外)口縁端部突帯貼付後指成形。体部斜位擦痕後工具ナデ。頸部軽いナデ。 (内)体部ヘラ状工具によるナデ。	①1mm前後の砂粒を僅かに含む 3~4mmの砂礫有 ②良 ③(内)淡褐色 橙色 (外)橙色	(口)一部		41

挿図 番号	器種	法量(cm) ①口径 ②底径 ③最大口径 ④器高	形態・手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	残存状況	備考	遺物 登録 番号
4	縄文土器 (体部)		(外)擦痕後工具状のナデ。 (内)剥落不明瞭。	①2～3mmの砂粒を多く含む ②やや不良 ③(内)明黄褐色 (外)灰黄褐色	(体)一部		41
5	弥生土器 壺 (口縁部)	①×22.2>	口縁部は外反し端部で水平気味に納める。外方に凹端面をもつ。	(外)風化剥落不明瞭。 (内)ヨコナデ後10条以上の櫛描波状文後櫛描半回転とする文を残存部に1観察。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②良 ③橙褐色 淡橙褐色	(口)1/9	48
6	弥生土器 壺	①(18.6) ②7.9 ③(35.2) ④(43.5)	縁上口縁。 口縁部は外反し端部で内外に肥厚して面をもつ。体部は中上位に最大径をもち大きく張り出す。底部は平底。	風化剥落著しい。 (外)口縁部ヨコナデ後下方突出部にヘラ工具による刻み目が連続する。以下ヘラ磨きか? 頸部指頭圧痕突帯貼付。体部ハケ目後胴部に連続刺突文を2段に施す、底部ヘラ磨き。底面ナデ。 (内)口縁部ヘラ磨き痕。頸部ナデ。体部ハケ目後底部ナデ。体部下所々に成形時の指頭圧痕が残る。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②やや不良 ③橙色 淡橙色 灰褐色	(口)1/2 (体)1/2 (底)1	1～3 6 8～12 15 16 18～22 24 26 30 31
7	弥生土器 甕	①14.0 ③17.4	縁上口縁。 口縁部は短く外傾し端部で屈曲、上方へ丸く納める。	(外)体部ハケ目後1/3上半横斜位ハケ目後縦ハケ目、下半縦斜位ハケ目後縦方向への工具ナデ。胴部は軽くナデ後連続刺突文を2段に施す。上位残存部には工具圧痕が4ヶ所以上? 頸部横ハケ目後軽いヨコナデ。 (内)口縁～肩部横ハケ目後口縁部軽いヨコナデ、頸部ナデ。体部1/3上半斜位ハケ目後所々ヘラ磨き。以下ケ目後所々ヘラ磨き。以下縦ハケ目後工具ナデ。砂の動きが残る。体部中に工具痕15～16が連続する。	①0.5mm前後の砂粒を多く含む 2mmの砂粒有 ②良 ③(内)淡褐色 灰褐色 (外)淡褐色 暗褐色	(口)1/2 (肩)3/4 (体)上半1/2 下半1/4	5 18 19 23 24 27 28 30 31
8	弥生土器 甕	①(12.3)	縁上口縁。 口縁部は短く外反し端部で外下方に大きくつまみ出す。	(外)口縁端面に3～4条の凹線。肩部工具ナデ後頸部ヨコナデ。 (内)頸部ナデ。肩部工具ナデ後軽くナデ。	①1～2mmの砂粒を多く含む 3mmの砂粒有 ②不良 ③暗褐色	(口)1/6 (肩)1/2	42
9	弥生土器 鉢	①(25.0) ②9.5 ③29.8 ④27.6	縁上口縁。 口縁部は短く外傾し端部で上方へ肥厚して丸く納める。体部は中上位に最大形をもつ。底部は平底。	(外)体部2/3上半縦ハケ目後斜位ハケ目。後胴部に連続刺突文を2段施す。体部1/2下半ヘラ磨き後底部横位ナデ。底面不定方向へのナデ。頸部ヨコナデ後口縁端面に1条の凹線を巡らす。頸部成形時の指頭圧痕。 (内)口縁部軽いヘラ磨き。頸部ヨコナデ。体部2/3上半ハケ目後下半丁寧なナデ。ヘラ磨き痕、成形時の指頭圧痕。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良好 ③淡褐色 淡橙褐色	(口)3/8 (肩)3/4 (体)1/2 (底)1	8 13 14 19 20 26 28 29 30 31
10	器台	①(28.8) ②29.1 ④30.9	端部は上下にハの字状に開き口縁部は上下に肥厚させ、両端面をもつ。	(外)台部ハケ目後受部筒部縦ヘラ磨き後上端横ヘラ磨き。 口縁端面に4条の凹線。台裾部ヘラ磨き後軽いナデ。 (内)受部1/3下半ナデ後2/3上半ヘラ磨き。筒部以下ヘラ割り後裾部軽いナデ後所々ハケ目。	①1～2mmの砂粒を多く含む ②やや不良 ③橙色 橙褐色	(口)1/3 (脚柱)1 (脚台)3/5	42
11	土鍋	①×28.5>	口縁部は短く外傾し端部に凸面をもつ。	(外)体部ハケ目後口縁部ナデ。端面に1条の沈線痕。 (内)口縁部はハケ目後原体不明のナデ。体部外面と同一ハケ目後原体不明の軽いナデ。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③暗褐色	(口)1/11	煤付着 27

挿図 番号	器 種	法量(cm) ①口径 ②底径 ③最大胴径 ④器高	形 態 ・ 手 法 の 特 徴	①胎 土 ②焼 成 ③色 調	残存状況	備 考	遺物 登録 番号	
12	手捏ね 土器	①(6.4) ②2.9 ③7.1 ④4.8	口縁部は短く外傾し端部で丸く納める。 体部は中上位に最大形をもつ。	(内外)手捏ね成形。 (外)軽いナデ。 (内)ナデ。	①0.5mm前後の砂粒を多く含む ②やや不良 ③(内)暗褐色 (外)褐色	(口)1/2 (底)ほぼ1	煤付着	25
13	土師器杯	①×10.4 ②5.0 ④2.6	口縁部は外傾して端部は丸い。	(内外)ヨコナデ。 (外)底面回転糸切り。 (内)底部ナデ、周囲する工具痕。	①0.5mm前後の砂粒を多く含む 1.5mmの砂粒有 ②良 ③橙色	(口)1/7 (底)1		7
14	土師器 高台付杯 (底 部)			(外)ヨコナデ。 (内)工具によるヨコナデ。	①0.5mm以下の砂粒を含む 2mmの砂粒有 ②良 ③淡褐色	(底)1		8
15	製塩土器		口縁部は直立気味に立ち上がり端部で肥厚し凹面をもつ。	(外)口縁部指成形後ナデ。 (内)工具ナデ後ナデ。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②良 ③橙色	(口)一部		1
16	製塩土器	①(12.3)	口縁部は外傾して開き端部で肥厚して凸面をもつ。	風化剥落不明瞭。 (外)体部手捏ね成形後ナデ? (内)口縁部ナデ。	①1mm以下の砂粒を含む 5mmの砂粒有 ②良 ③淡褐色	(口)1/5		1
17	甕			(外)指成形後ナデ。 (内)指成形後ハケ目。ナデ。	①2mm前後の砂粒を多く含む ②良 ③(内)淡褐色 (外)黄褐色 淡褐色	焚口部一部	黒斑有	49
18	須恵器蓋	①(16.6)	口縁部は膨らみをもって下り、端部で屈曲、下方へ短く納める。	(内外)ヨコナデ。 (外)天井部糸切り痕。 (内)天井部ナデ。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②良 ③淡灰色	(口)1/5		2
19	須恵器 蓋杯杯身	①(13.2) 受部径 (15.4)		(内外)ヨコナデ。 (外)底部回転ヘラ切り。 (内)底部ナデ。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②不良 ③(内)灰褐色 (外)褐色	(口)2/7		6
20	須恵器 蓋杯杯身	①(11.1) 受部径 (13.6)	立ち上がりは内傾し端部は細る。 体部は丸く受部は上外方へ丸く納める。	(内外)ヨコナデ。 (外)底部回転ヘラ切り。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③淡灰色	(口)1/5 (体)1/5		2
21	須恵器杯	①9.4 ④3.6	口縁部は直立し端部は丸い。	(内外)ヨコナデ。 (外)底部ヘラ切り後ナデ。 (内)ナデ。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②良 ③暗灰色	(口)2/3 (体)1/3		7
22	須恵器 高 杯	②9.6	脚部は基部から緩やかにハの字状に開き端部で屈曲、外下方へ丸く納める。	(内外)ヨコナデ。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②良 ③淡灰色	(杯底部) 1/3 (脚)1/2		7
23	陶器蓋	①×28.5	口縁部はハの字状に大きく開き端部にかえりをもつ。	(内外)ヨコナデ後施釉。	①0.5mm以下の砂粒を含む ②軟質 ③(断)灰色 (釉)オリブ黄色 (露)灰白色	(口)1/17		44
24	陶器插鉢	①(28.1) ②(16.5) ④9.5	口縁部は外傾し端部で外方に肥厚させ上部につまみ出す。 底部は平底。	(外)体部粗なヨコナデ後上位ハケ状工具によるナデ?ヘラ状工具痕。底部粗なナデ。 (内)体部横方向へのナデ後7条単位の櫛描目を施す。	①1~2mmの砂粒を多く含む 8~10mmの砂粒有 ②良 ③(断)灰色 (内外)にぶい橙色	1/6		44
25	瓦質火鉢 (脚 部)			(外)底部ナデ。後脚部接合後ナデ。脚部面取り成形。両側の刺突4は貫通しない。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③灰白色 暗灰色	一部		33

鉄製品

(単位) : cm

出土地	挿図番号	器種	全長	法 量						形態の特徴	残存状況	備考	遺物登録番号	
				刀 部		茎 部		断 面						
				長さ	断面形	長さ	断面形	計測部位	幅					厚さ
SK-08	第38図	刀 子	(7.8)		二等辺三角形			刀身中央部 茎 中央部	1.50 1.25	0.34 0.35	両関不明瞭。	切先部欠	(16.4) g 木質痕	5 2
SK-12	第49図	釘	4.9					上 位 下 位	0.30 0.14	0.30 0.20		ほぼ完存	(1.4) g	8
	第49図	釘	(4.1)					上 位 下 位	0.36 0.20	0.28 0.16		頭部欠	(1.0) g	8
	第49図	不 明	(5.5)					上 位 下 位	0.88 0.34	0.33 0.23		一端部欠	(3.3) g	8
SK-30	第81図	箸 ?	16.9					上 位 中 位 下 位	0.31 0.40 0.33	0.27 0.35 0.33		ほぼ完存	(10.5) g	16
P-1078	第104図	不 鉄 製 明 品	6.4					上 位 中位(手前) 中位(向側)	4.00 4.16 3.80	3.20 0.45 0.30		完存	320 g	187
P-018	第104図		(30.1)			(15.5)	長方形状	刀身元部 茎元部 茎中央部 茎尻部	3.70 2.62 2.50 0.80	1.30 1.12 0.95 0.77		切先部欠	(404) g	2 14
遺構外	第109図	不 鉄 製 明 品	(12.6)						0.40 0.43 0.40	0.47 0.44 0.40		一端部欠	(14.8) g	29
	第109図	不 鉄 製 明 品	(10.6)					上 位 下 位	2.00 1.60	0.34 0.25	鏽状。	一端部欠	(35.1) g 朱?付着	4

銅製品

(単位) : cm

出土地	挿図番号	器種	L(長さ) W(幅) T(厚さ) D(径)	形 態 の 特 徴	残存状況	備考	遺物登録番号
SK-12	第49図	密教法具 華 瓶	口径 4.4 底径 6.35 器高 11.9	素文式亜字形華瓶。全体に薄手。頸部、腰部には2本1組の紐を飾る。底部は木栓をし周縁を粘土で埋め底板とする。肩一部膨張しひび割れる。	完存		4
SK-12	第49図	密教法具 五 鈷 鈴	器高 15.5 最大幅 6.9	把手部・鈴鐘部・鈴別々に铸造。 中鈷は四角とし、脇鈷は緩やかに湾曲する。 把には蓮弁飾、紐を三線巡らし、中央には鬼目を飾る。 鈴身部には紐を巡らす素文。	完存		5
SK-26	第71図	銭 貨	D 2.4 T 0.1 方形孔 0.7	淳熙元寶?裏面文字無し。	完存	2.7 g	9

圖 版

調査地南半
全景（俯瞰）



調査地北半
全景（東から）





南半中央断面①
(北から)



南半中央断面②
(北から)



南半中央断面③
(北から)



(五鈎鈴)

6

(華瓶)

5



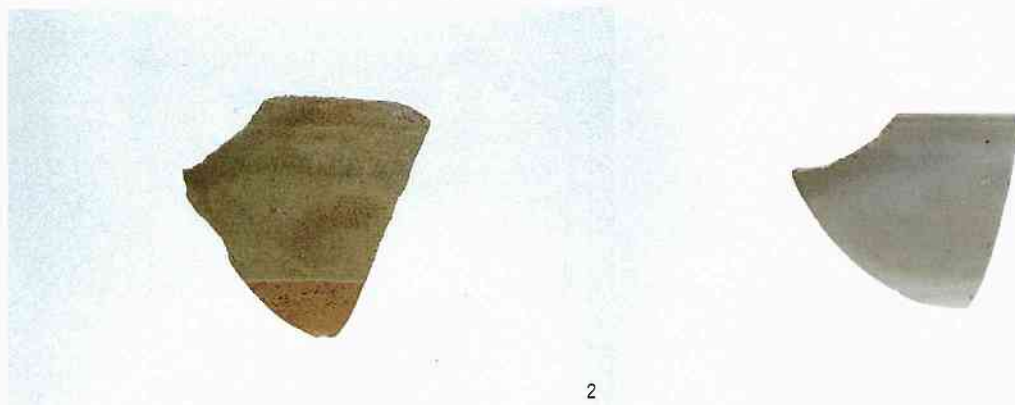


4

SK-02 出土遺物 (1)



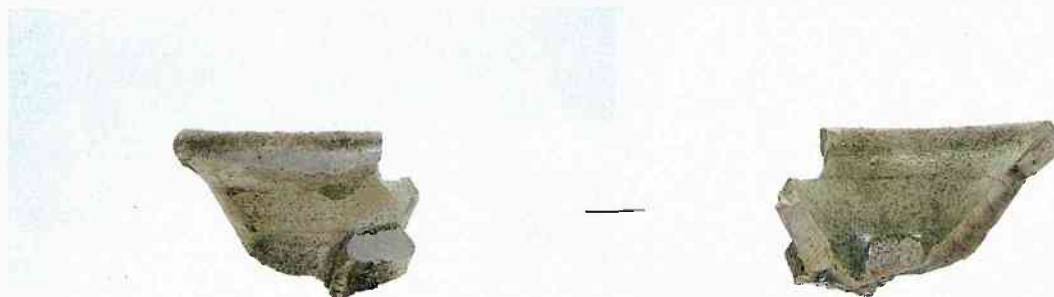
1



2

4

SK-06 出土遺物 (1)



2

SK-09 出土遺物 (1)



1

SK-12 出土遺物 (2)



3

SK-13 出土遺物 (1)



2

SK-26 出土遺物 (1)



1

SD-06 出土遺物

图版 6



SD-13 出土遺物 (2)

1



1

SD-21 出土遺物

1

SD-22 出土遺物

2



7

P-510 出土遺物



9

P-1469 出土遺物



6

SK-02 出土遺物 (2)



5

SK-09 出土遺物 (2)



4

SK-09 出土遺物 (3)



8

SK-26 出土遺物 (2)

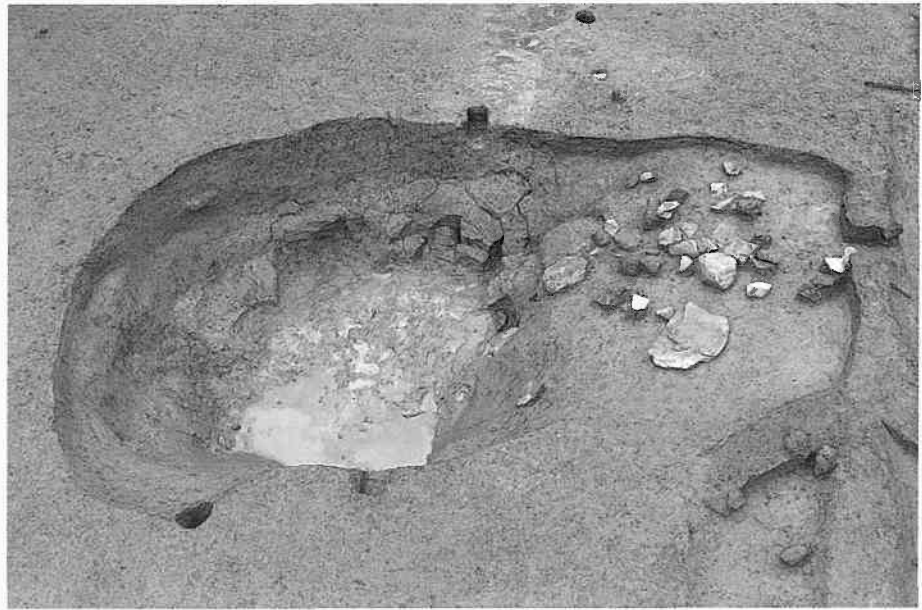
調査前（北西から）



SK-01
完掘状況（北東から）



SK-02
完掘状況（北から）

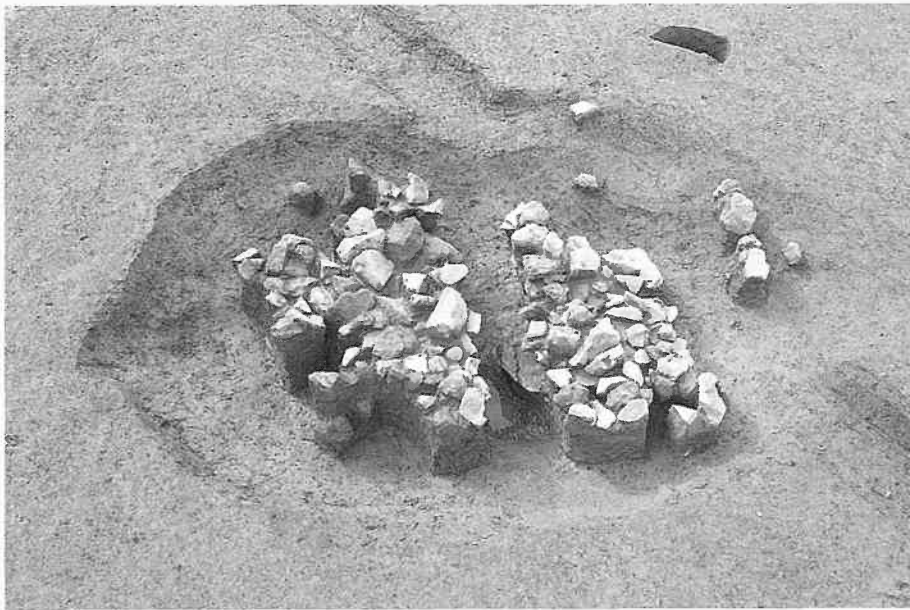


SK-03
断面（北東から）

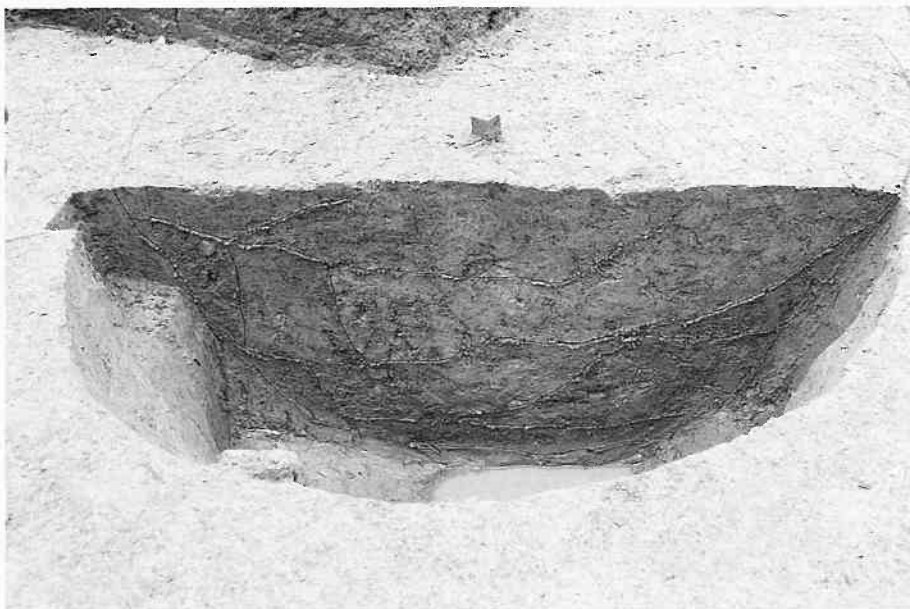


SK-03
完掘状況（北東から）





SK-04
検出状況（北東から）

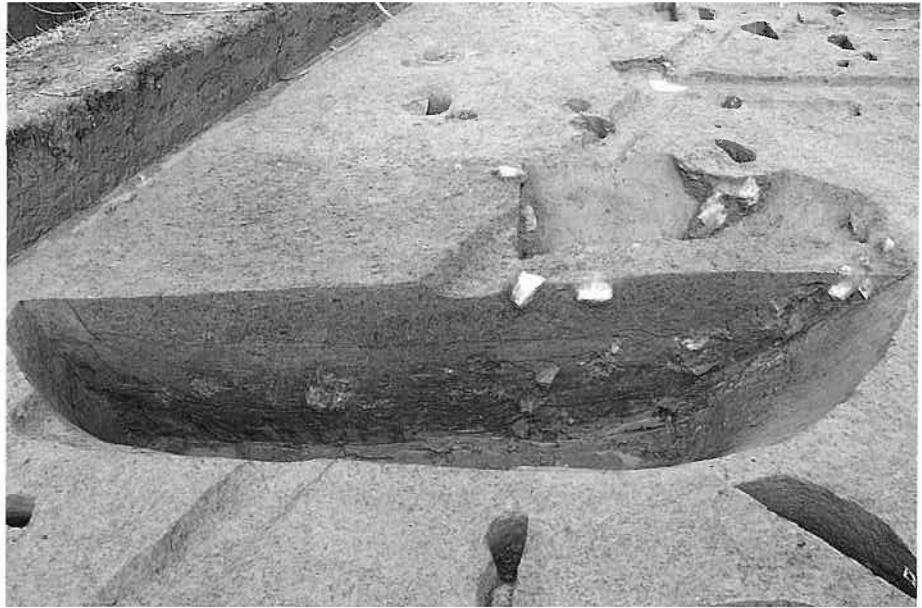


SK-05
断面（南から）

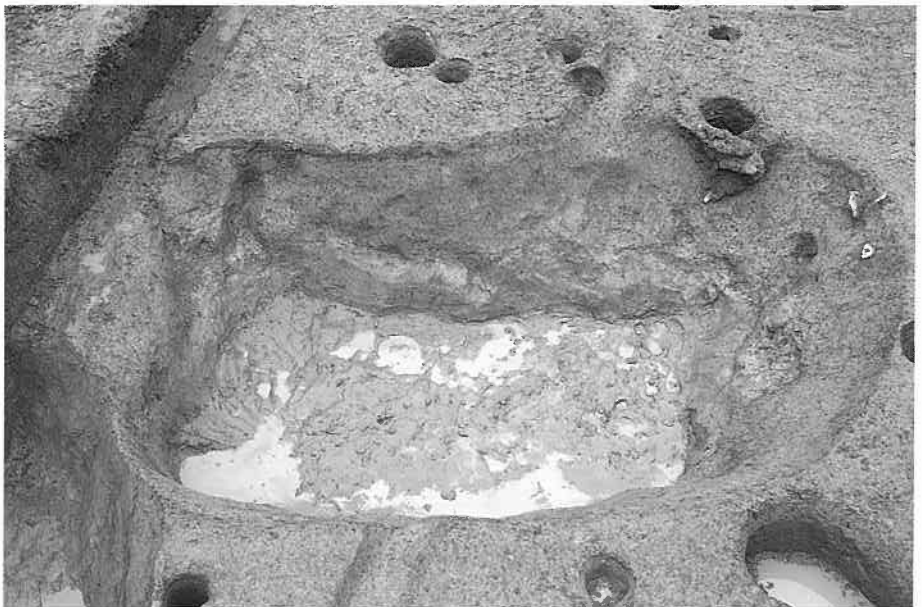


SK-05
完掘状況（西から）

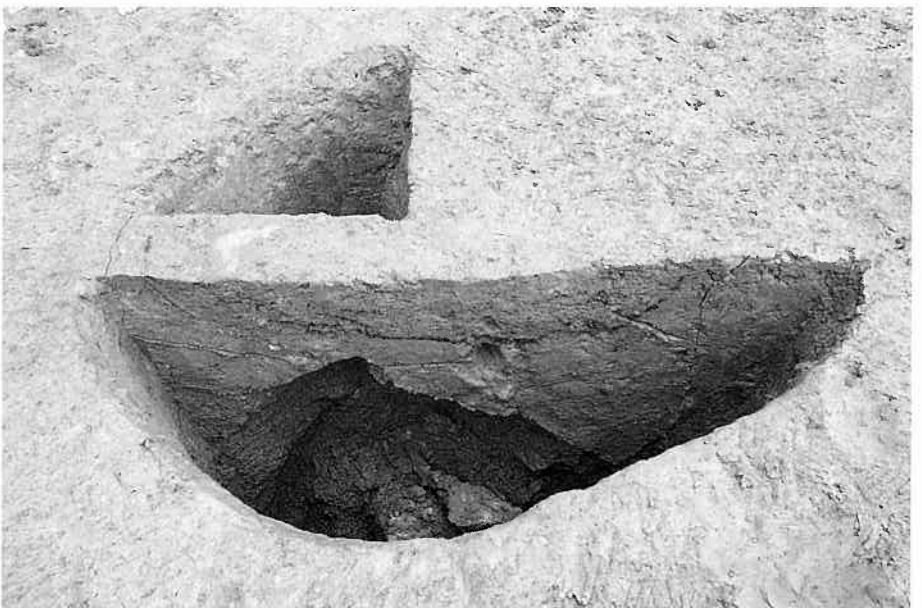
SK-06
断面 (南から)



SK-06
完掘状況 (南から)



SK-07
断面 (南東から)

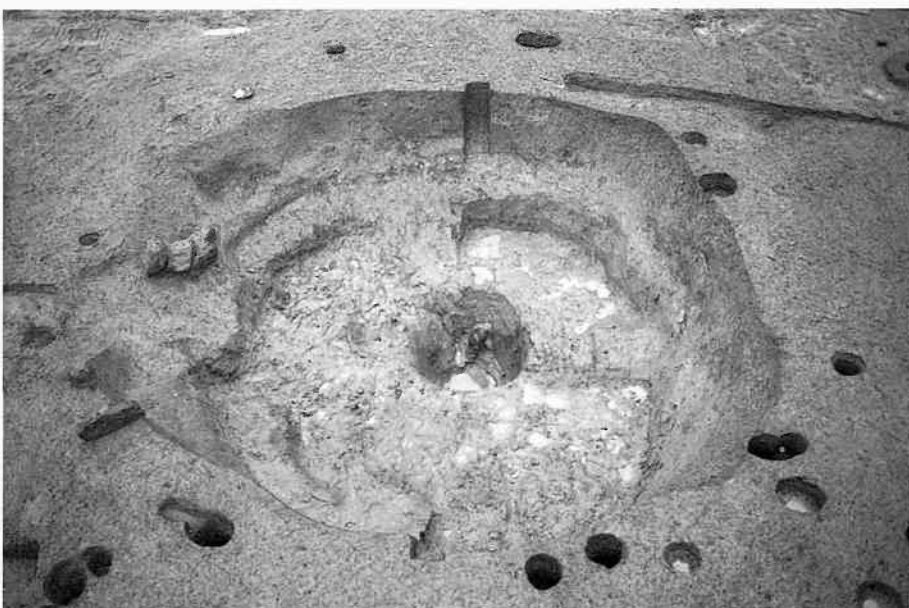




SK-08
完掘状況（北東から）



SK-09
断面（西から）



SK-09
完掘状況（西から）

SK-10
断面（南から）



SK-10
完掘状況（南から）



SK-11
断面（北東から）

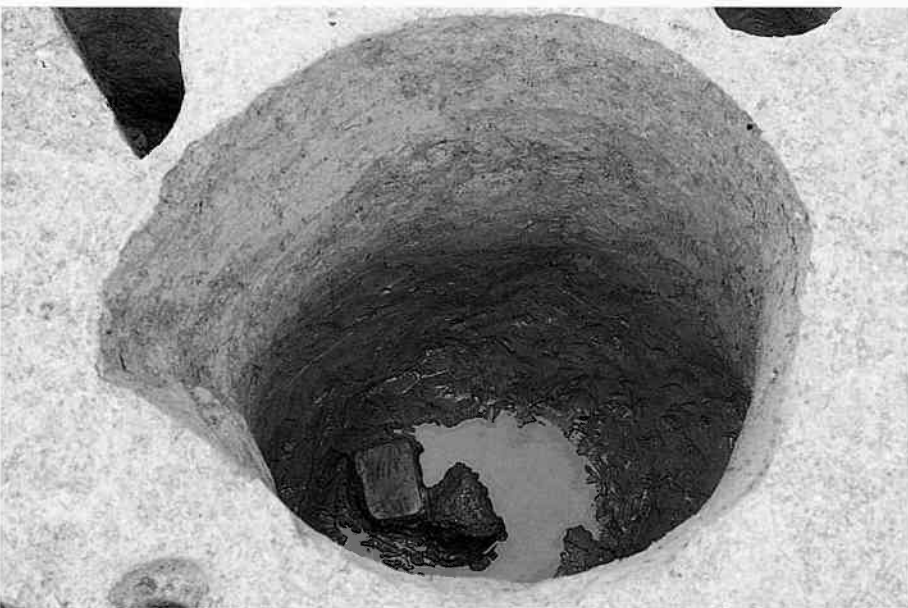




SK-11
完掘状況（南西から）

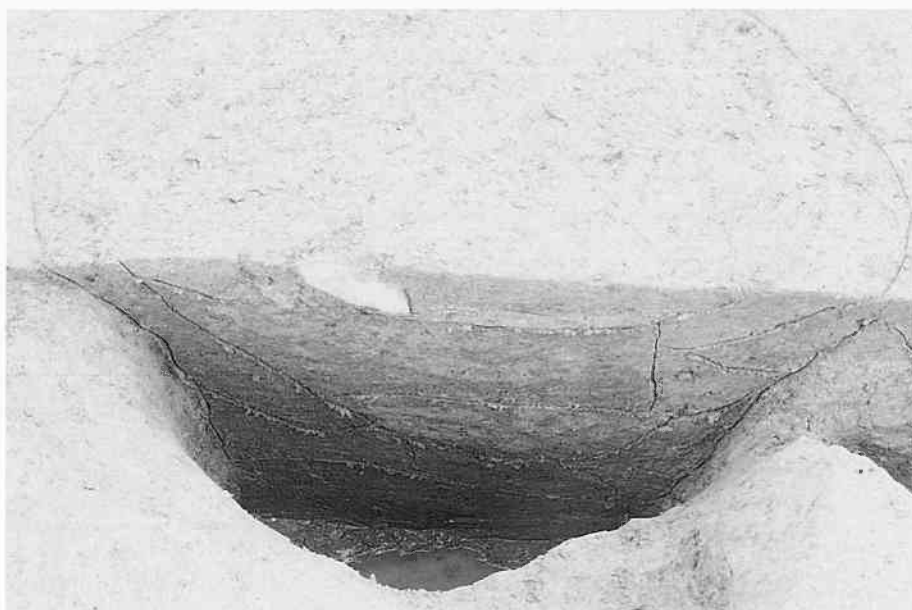


SK-12
断面（北西から）

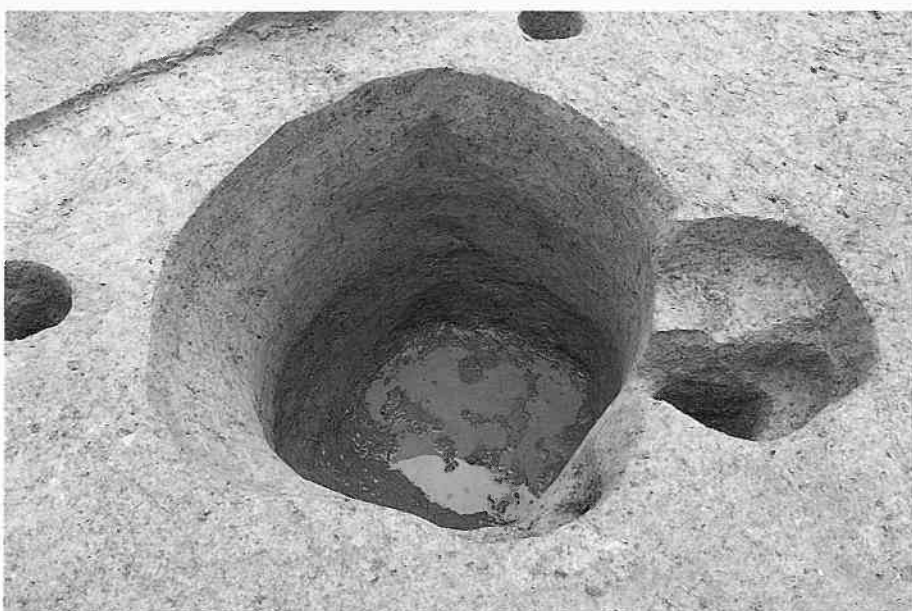


SK-12
検出状況（西から）

SK-13
断面（北西から）



SK-13
完掘状況（北西から）

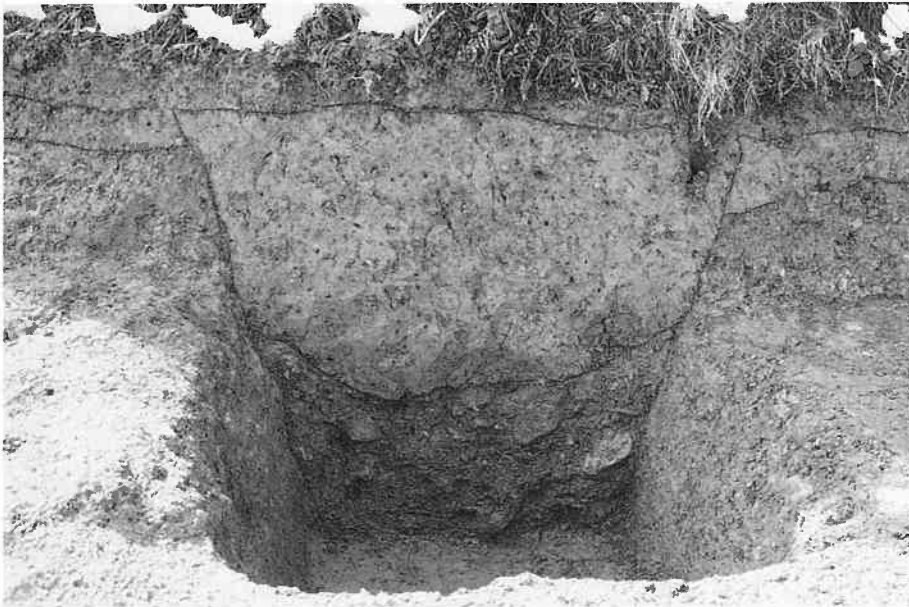


SK-16
断面（北から）

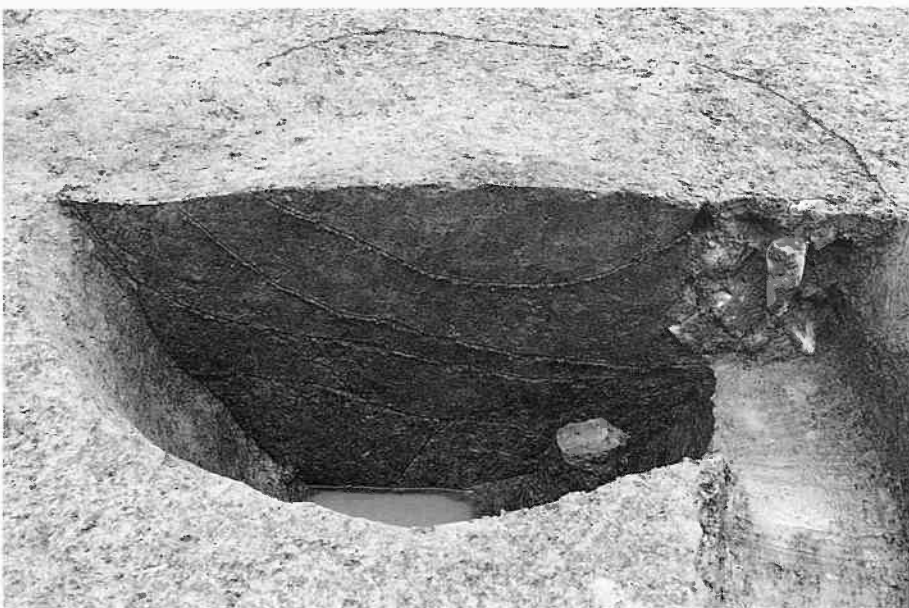




SK-17
断面（北から）



SK-18
断面（北東から）



SK-19
断面（東から）

SK-19
検出状況（西から）

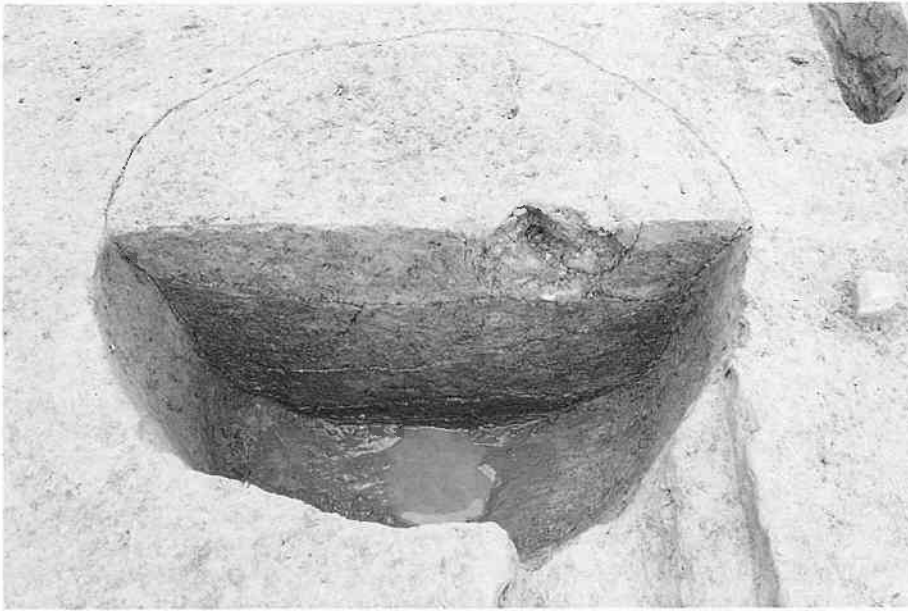


SK-21
断面（南西から）

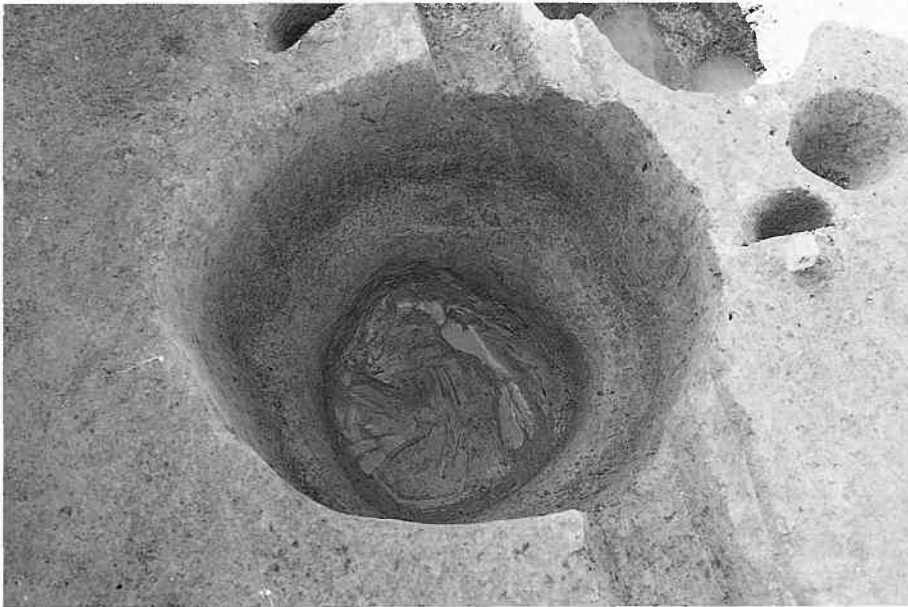


SK-21
完掘状況（北西から）

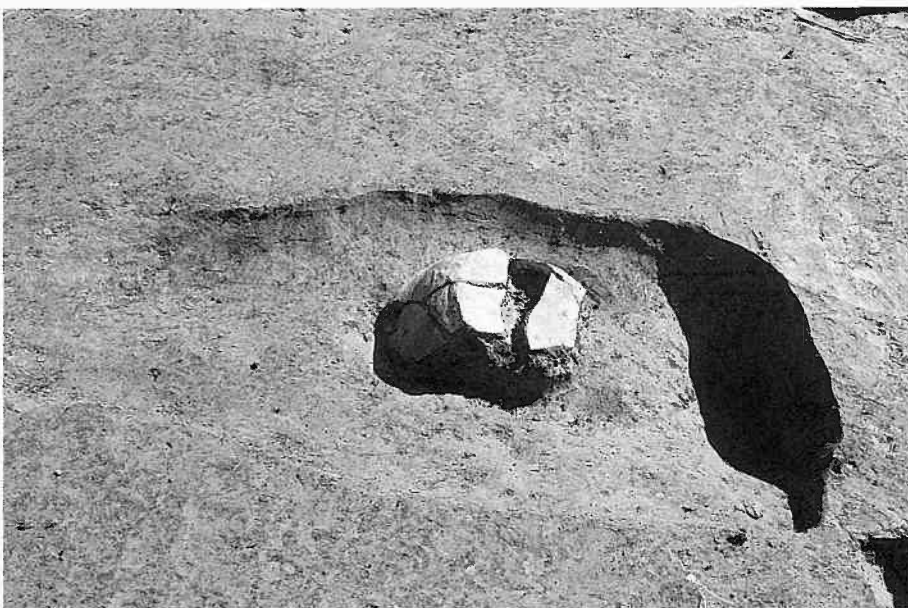




SK-23
断面（東から）



SK-23
完掘状況（南東から）



SK-24
検出状況（西から）

SK-25
断面（南東から）



SK-25
完掘状況（北東から）

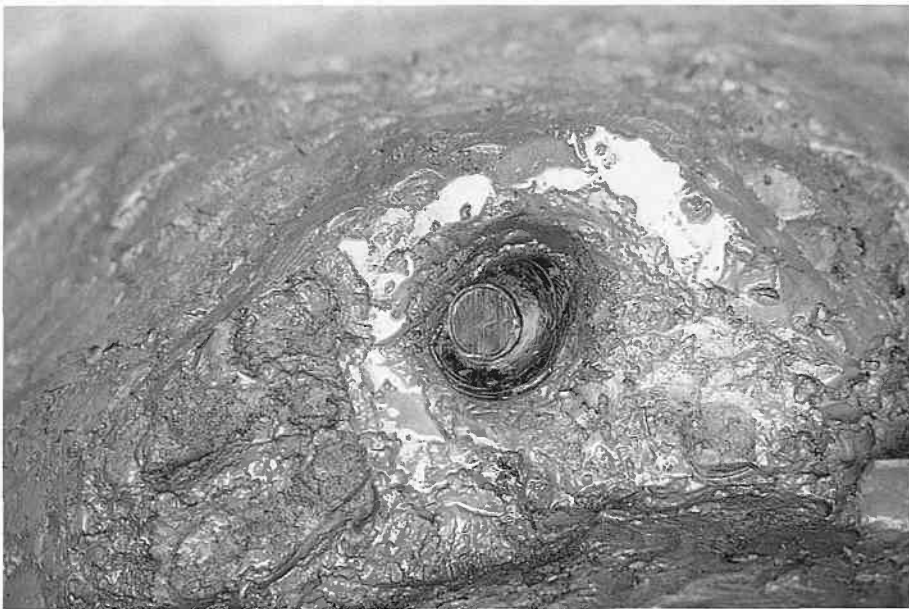


SK-26
断面（南西から）

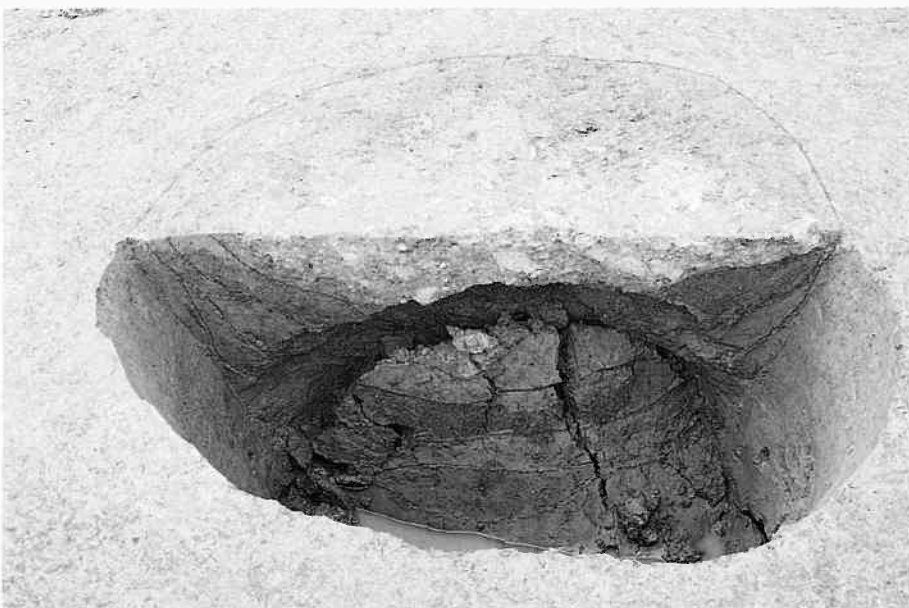




SK-26
完掘状況（南東から）



SK-26
遺物出土状況（北西から）



SK-27
断面（北東から）

SK-29
完掘状況（北東から）

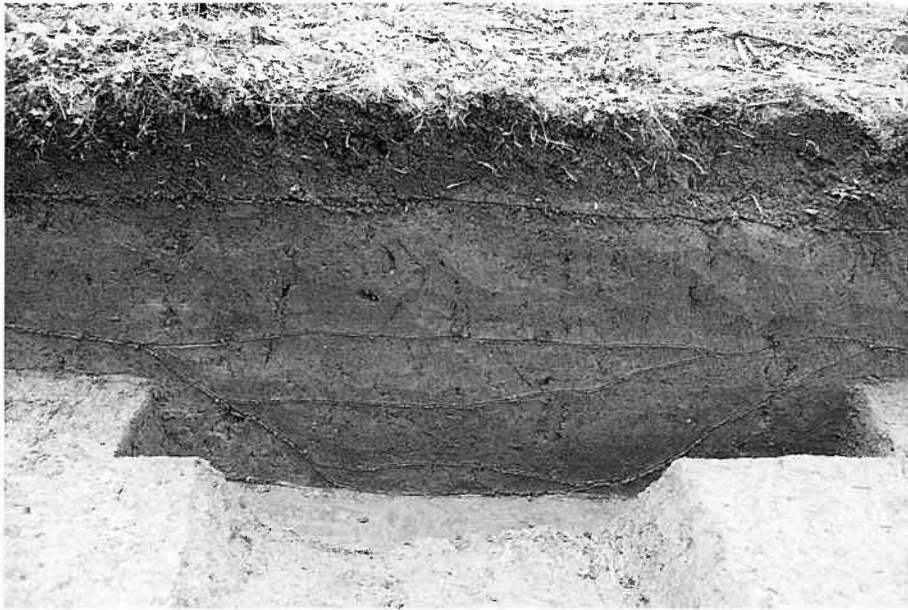


SK-30
断面（北東から）



SK-30
検出状況（南東から）

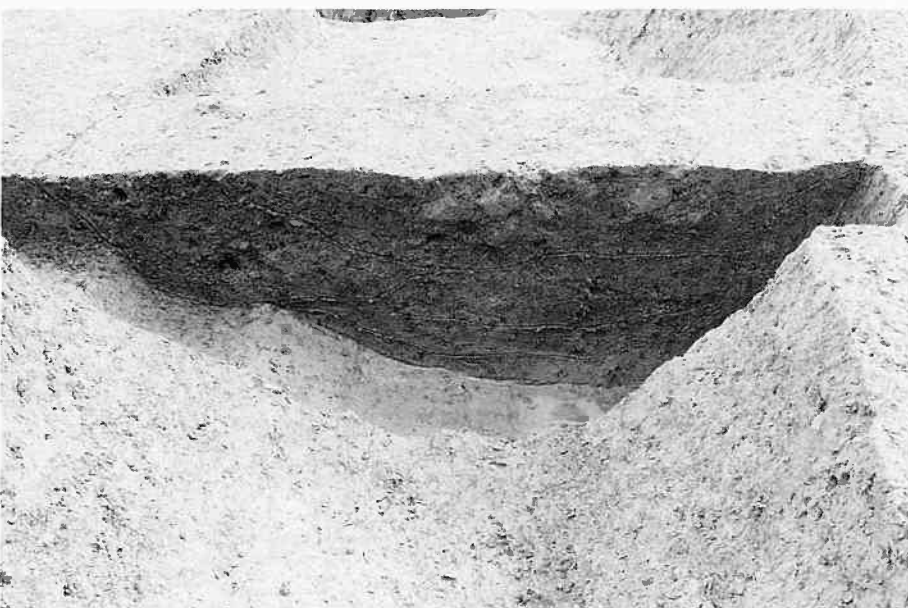




SD-01
断面（東から）



SD-03
断面（南西から）



SD-06
断面（西から）

SD-10
断面 (南から)

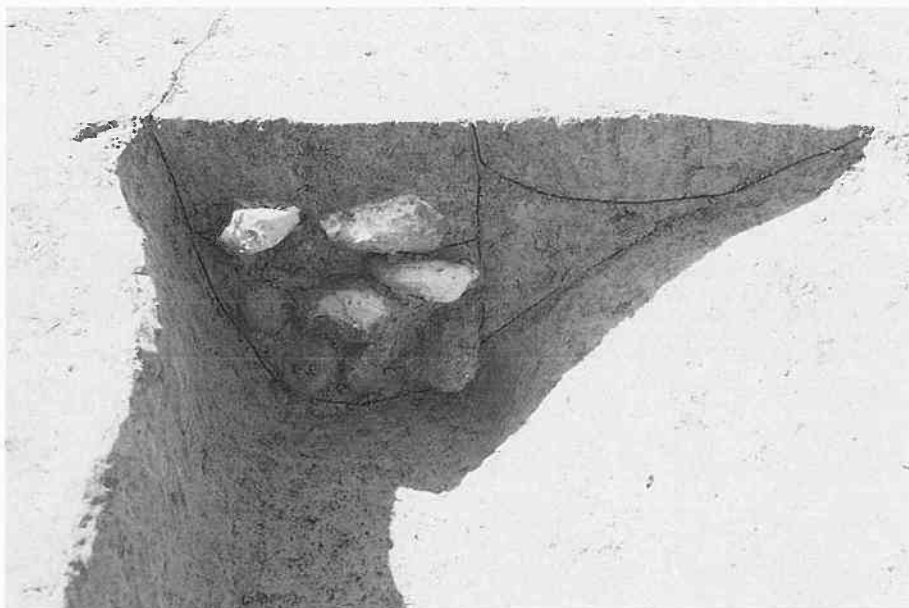


SD-15・16・17
断面 (南東から)

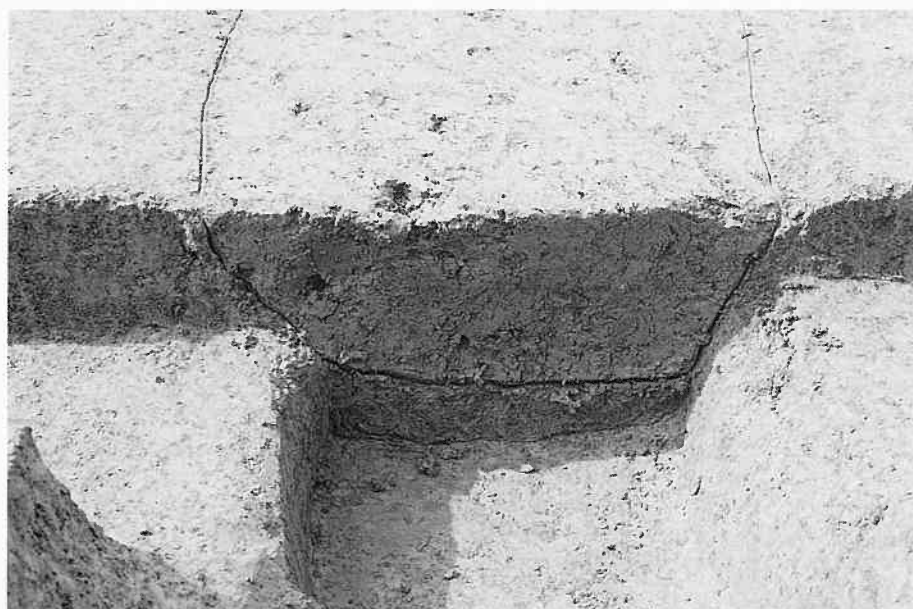


SD-21
断面 (南西から)





SD-23
断面（南西から）



SD-25
断面（南東から）

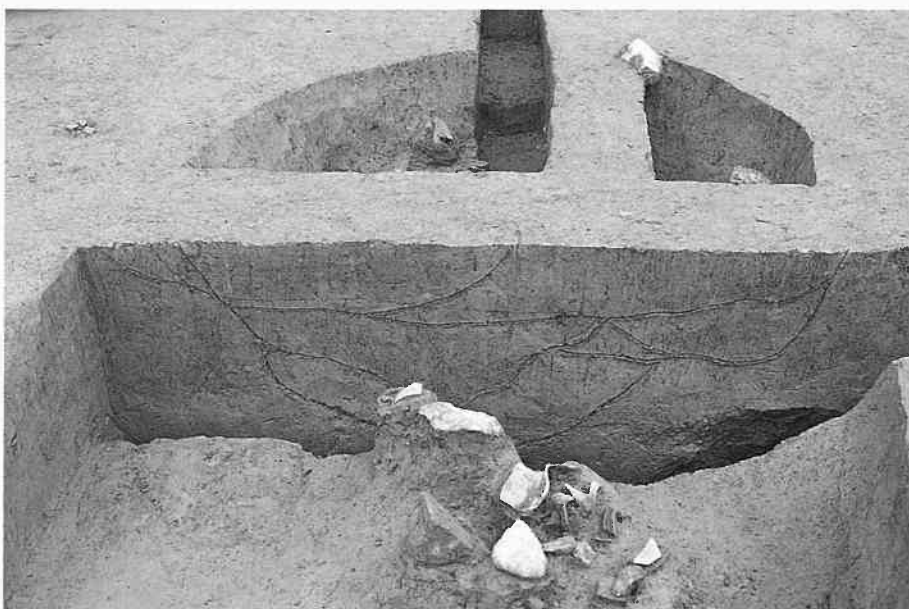


SD-34
断面①（北から）

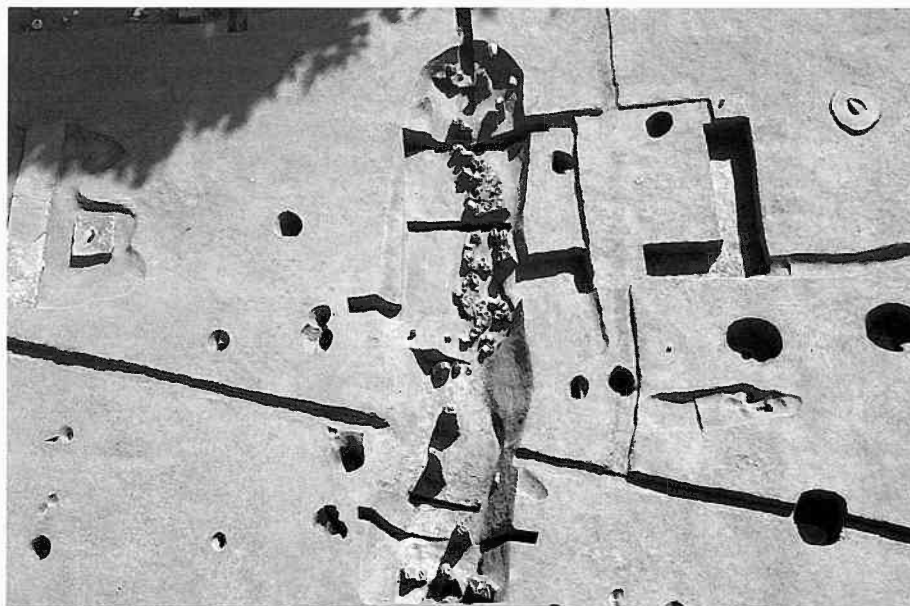
SD-34
断面② (南から)



SD-34
断面③ (北から)

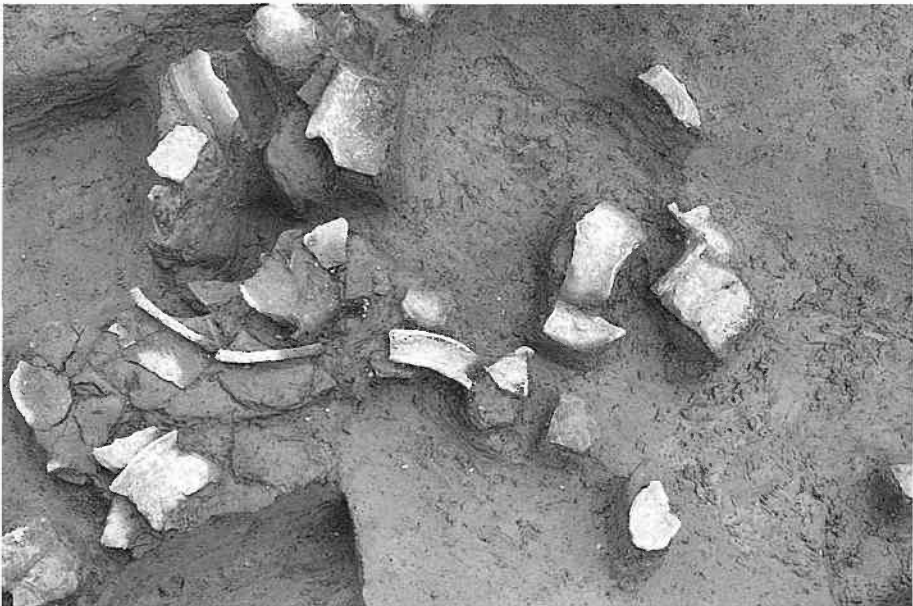


SD-34
検出状況 (北から)





SD-34
検出状況（北から）



SD-34
遺物出土状況（南東から）

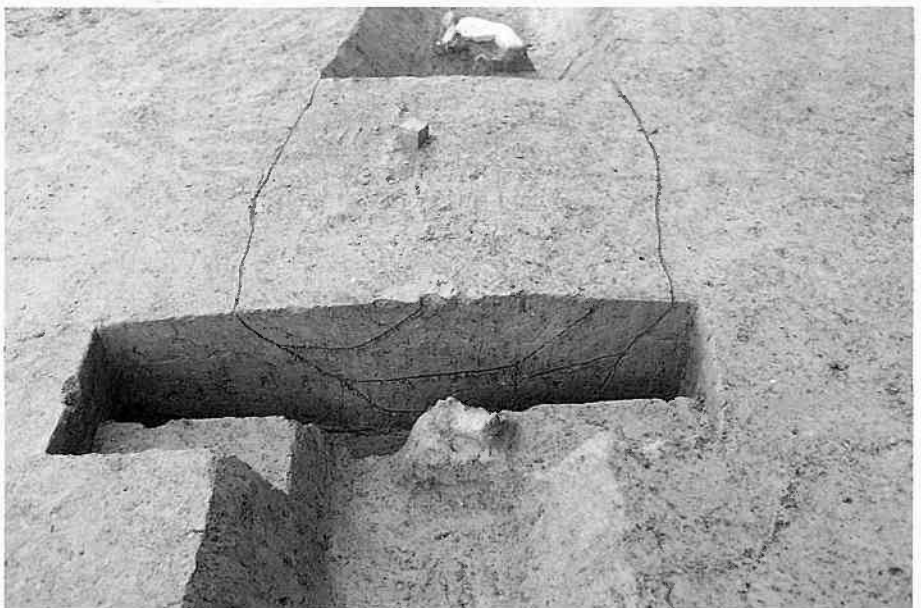


SD-34
完掘状況（北から）

SD-35
検出状況（西から）



SD-35
断面①（西から）





SD-35
完掘状況（西から）

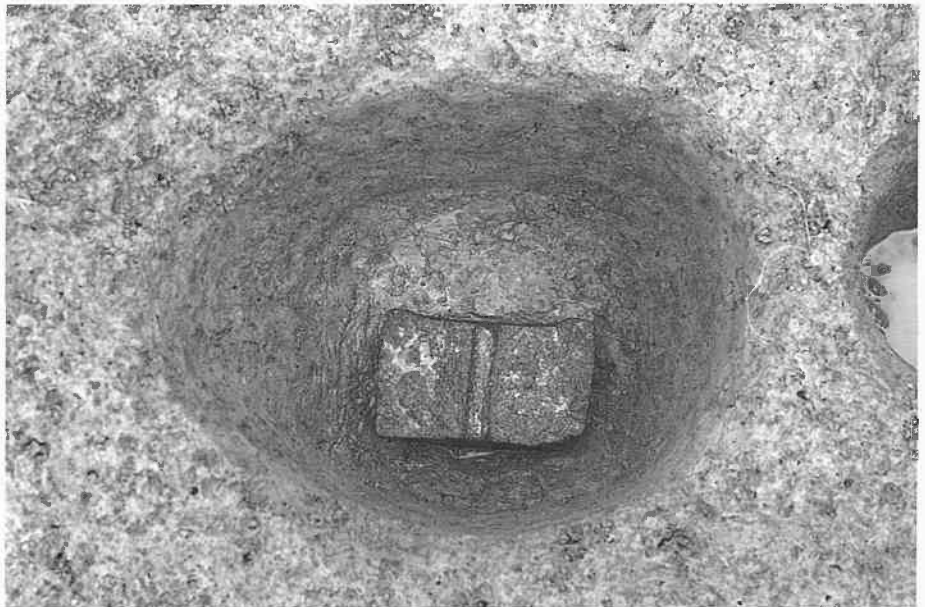


SD-35
断面②（西から）

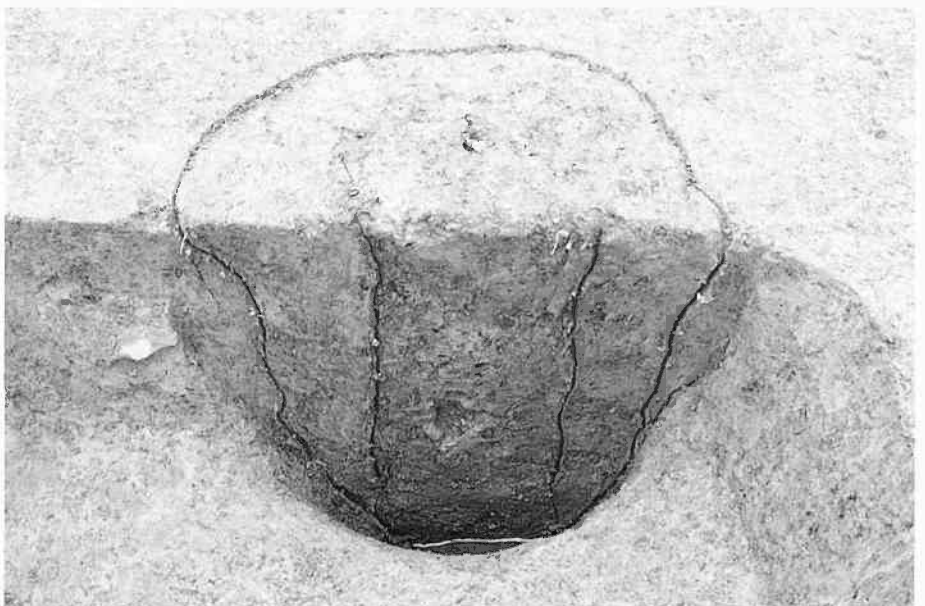
SD—35
遺物出土状況（南から）



P—1031
検出状況（北から）

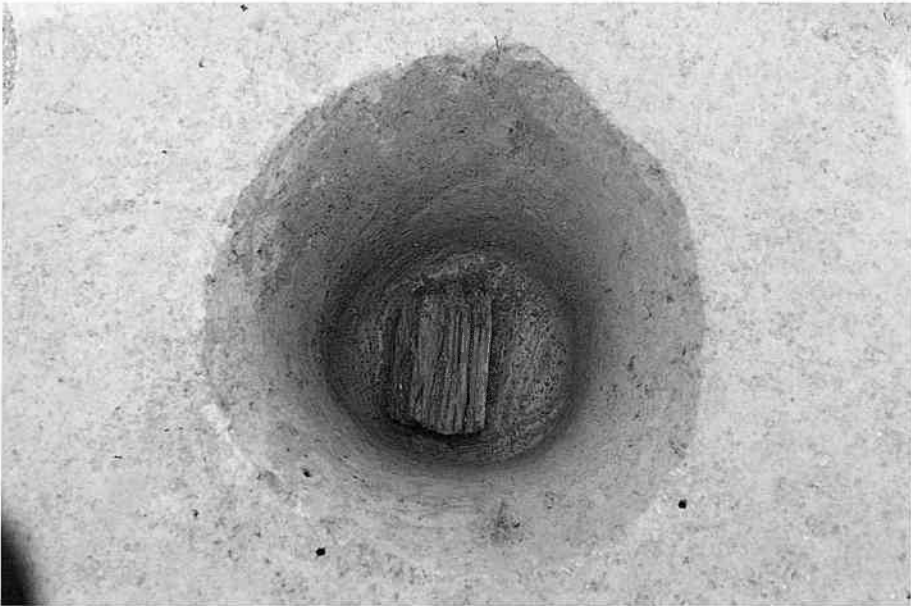


P—1397
断面（南東から）

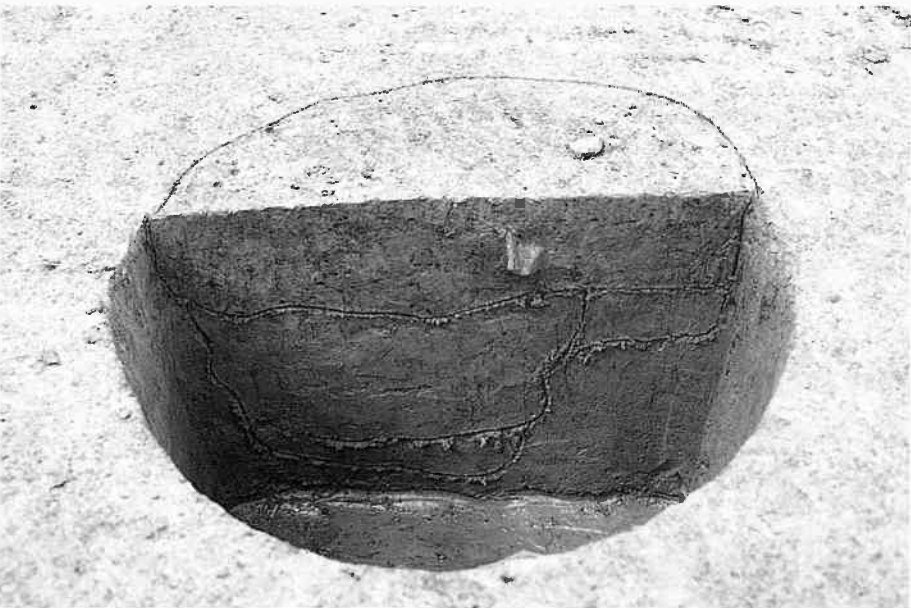




P-1405
検出状況（北東から）

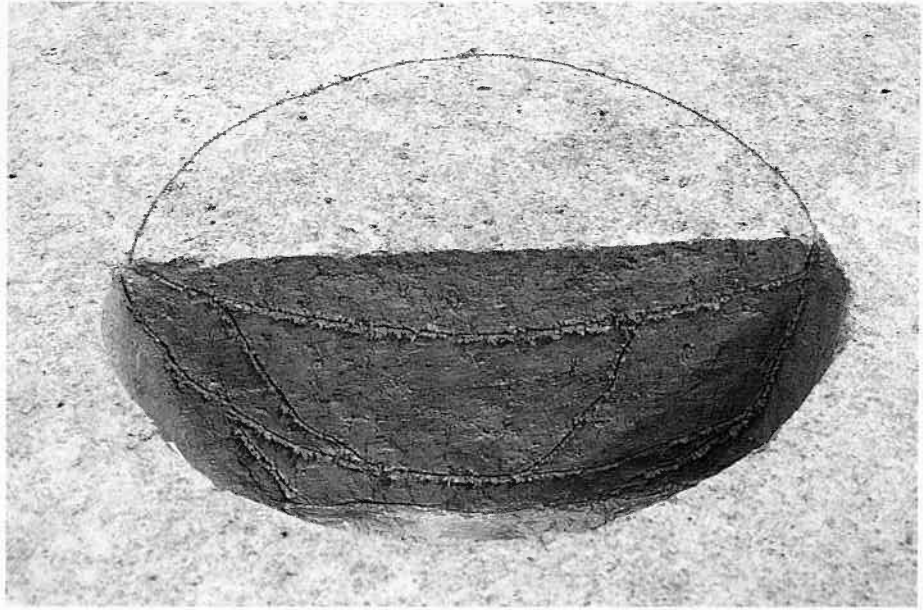


P-1555
検出状況（南東から）



P-1557
断面（東から）

P-1558
断面（北から）

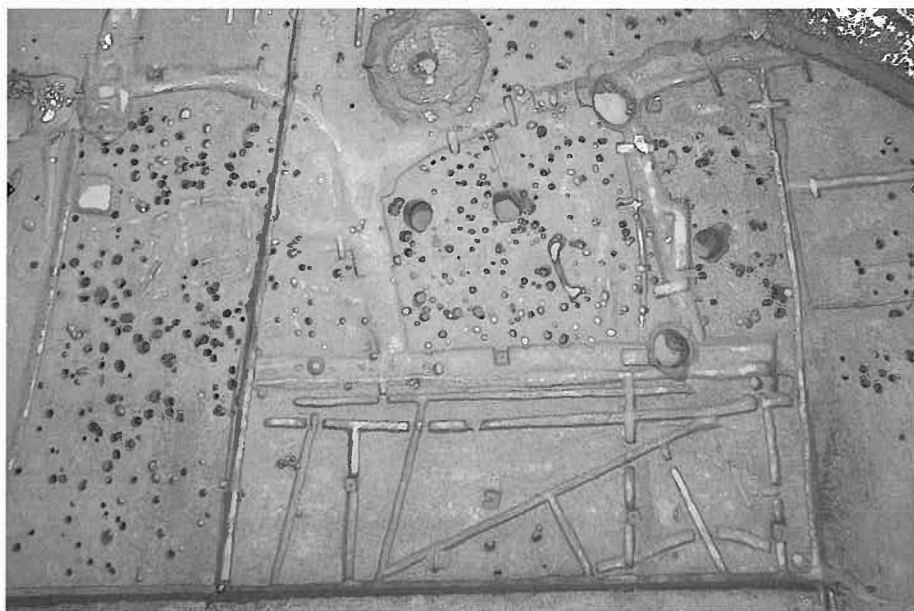


P-1634
断面（北から）

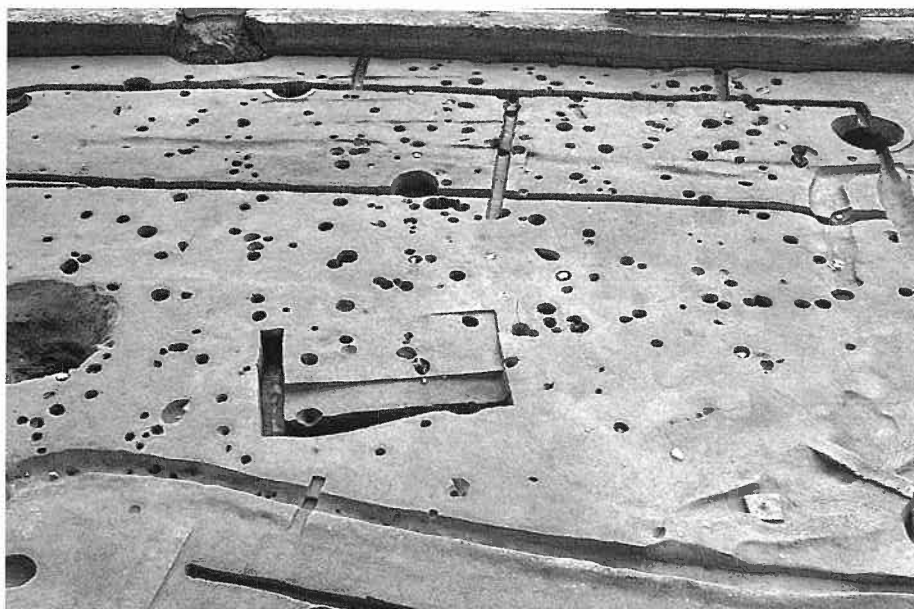


整地層断面（南から）





北半ピット群
(北東上空から)



南半ピット群 (北から)

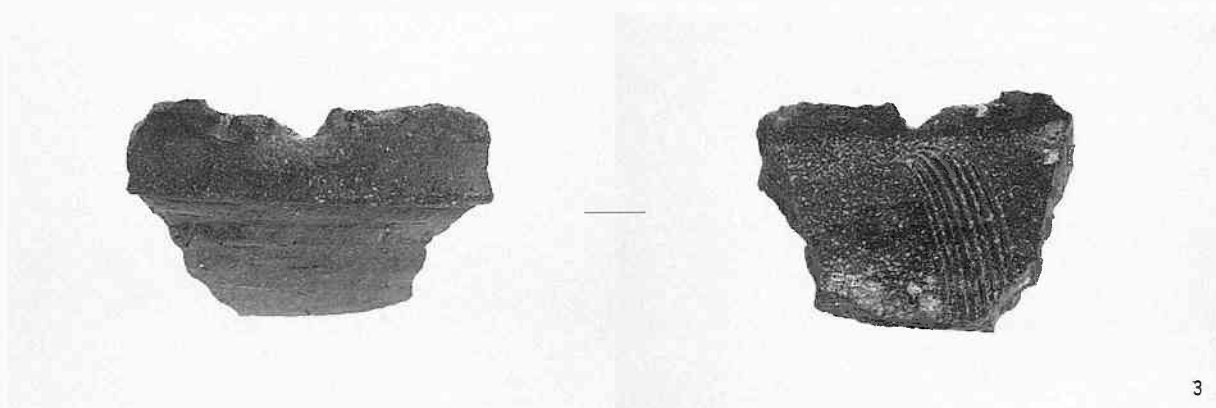


南半中央ベルト下
遺物出土状況(北東から)



1

SK-01 出土遺物



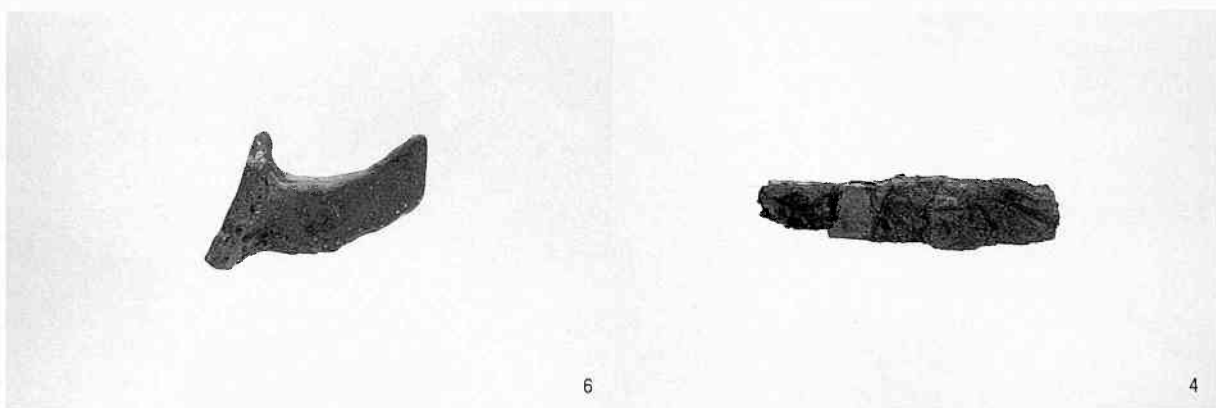
3

SK-02 出土遺物 (3)



3

SK-06 出土遺物 (2)

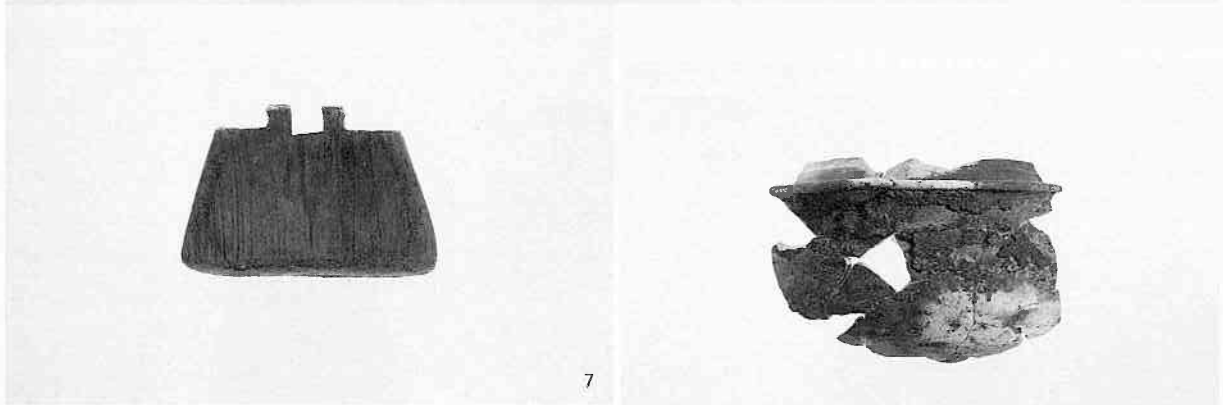
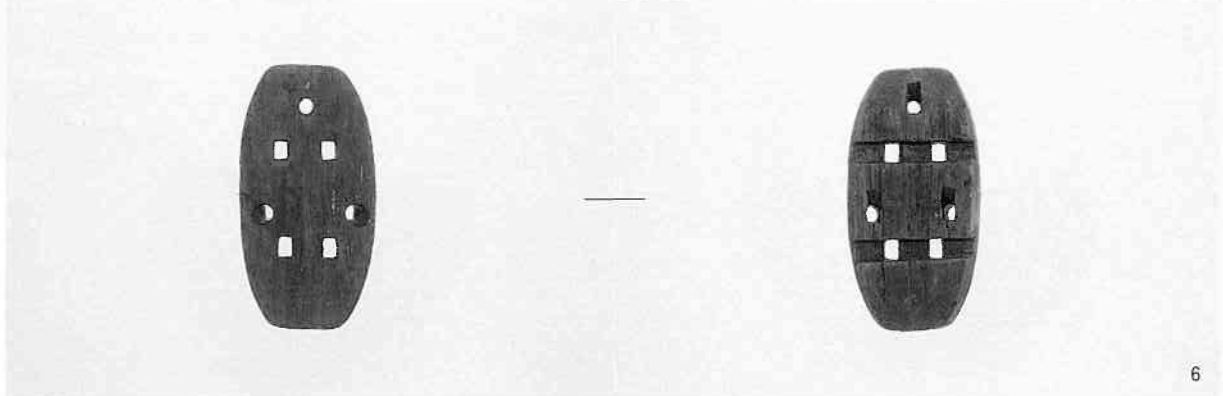
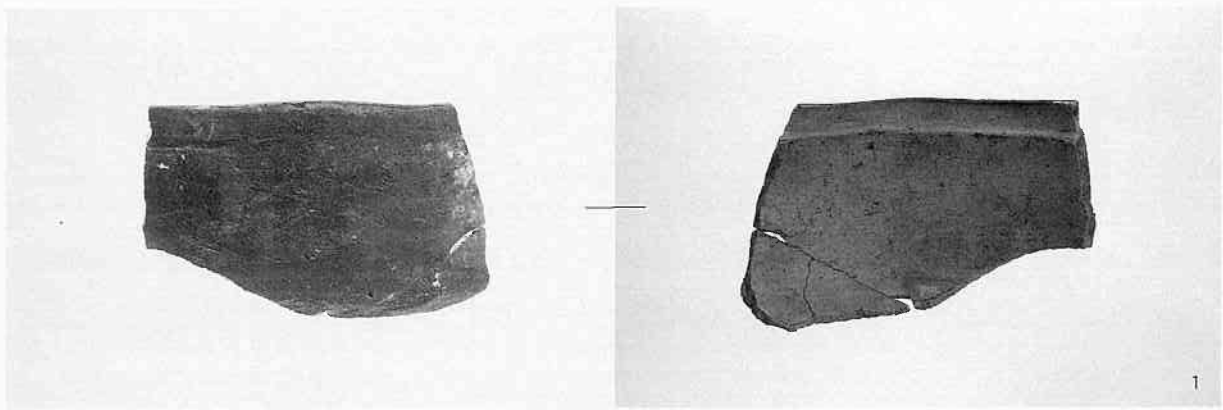


6

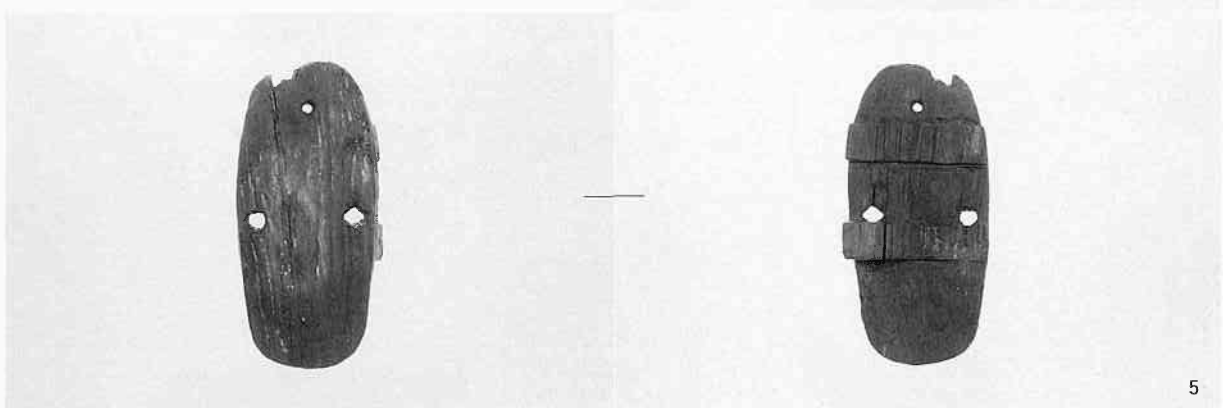
4

SK-06 出土遺物 (3)

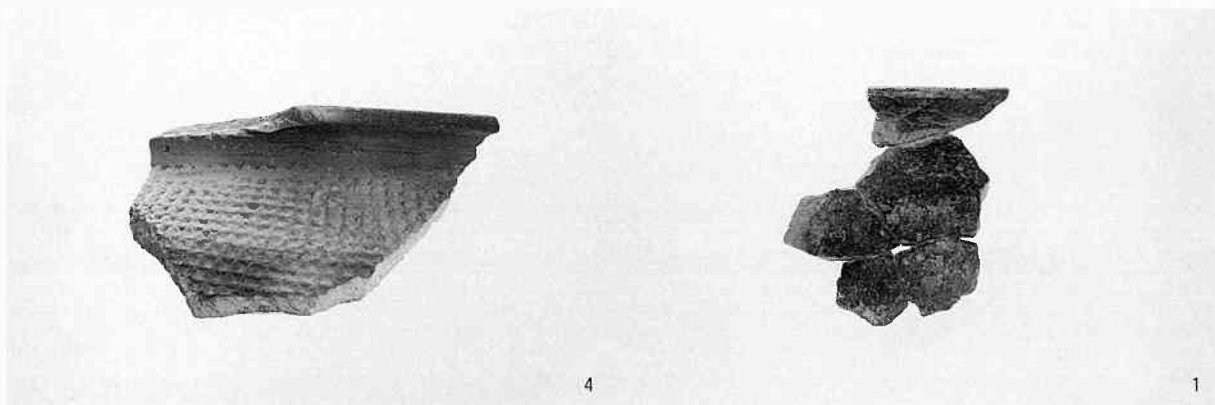
SK-08 出土遺物



SK-09 出土遺物 (4)

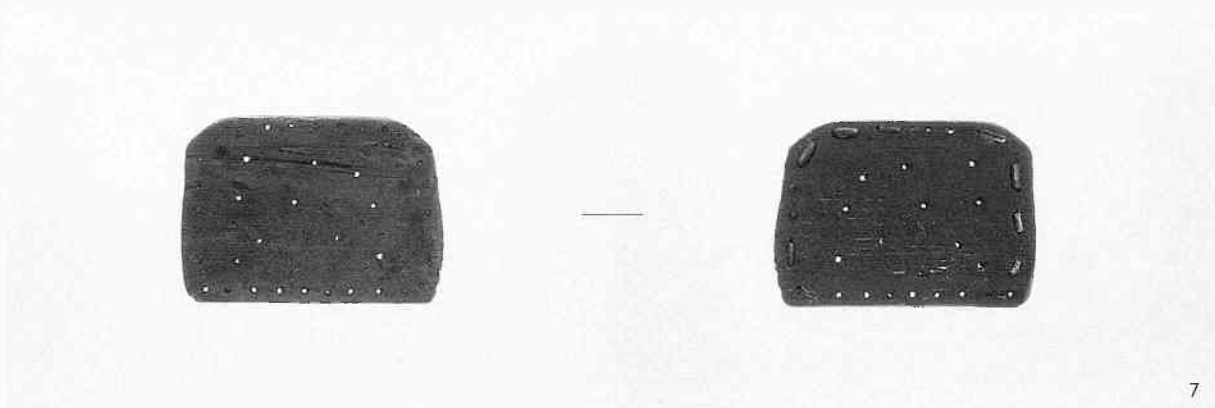


SK-10 出土遺物 (1)



SK-10 出土遺物 (2)

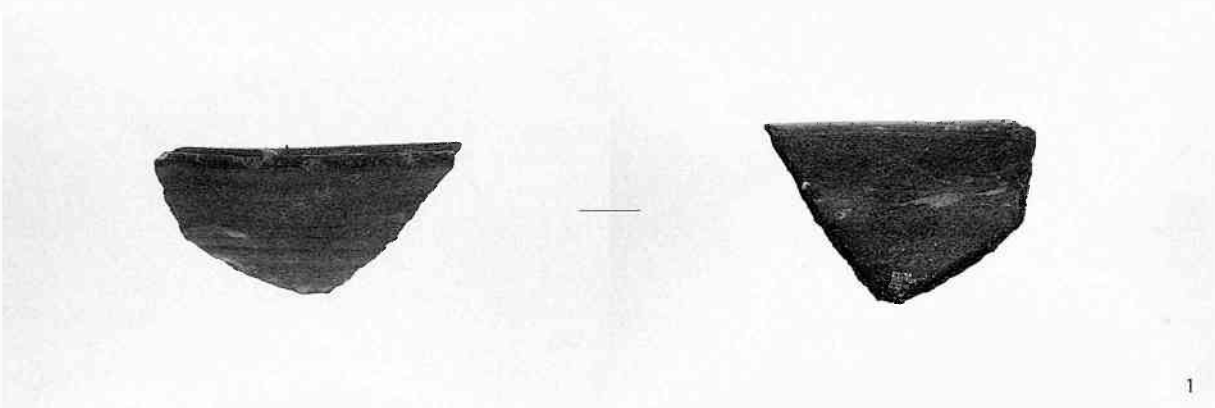
SK-11 出土遺物



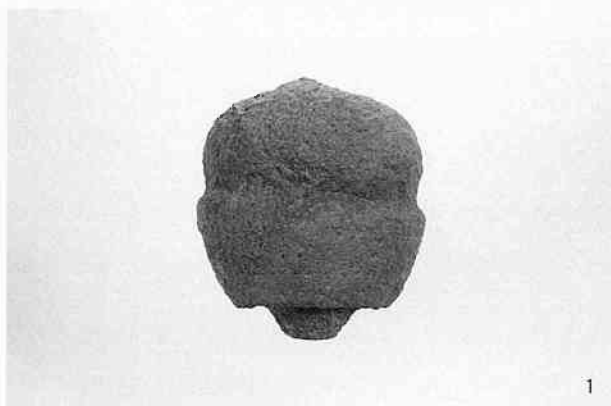
SK-12 出土遺物 (3)



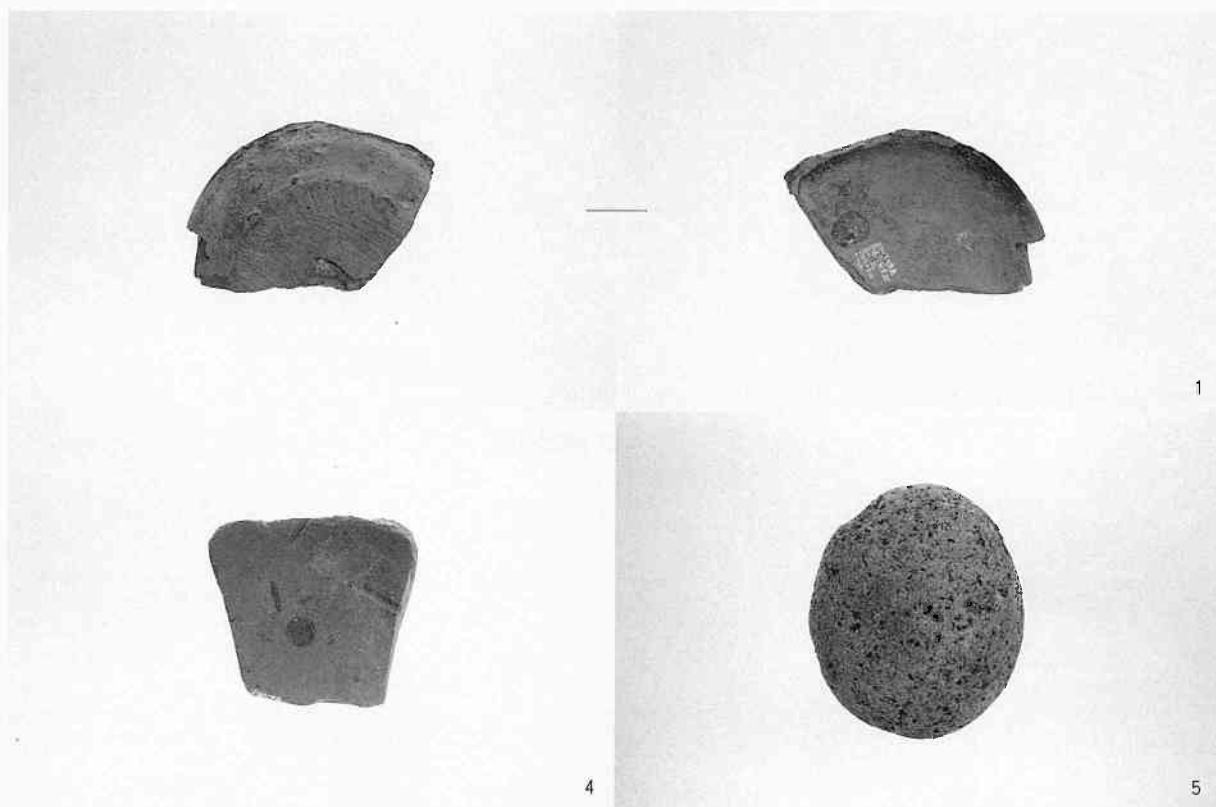
SK-14出土遺物



SK-17 出土遺物



SK-18 出土遺物



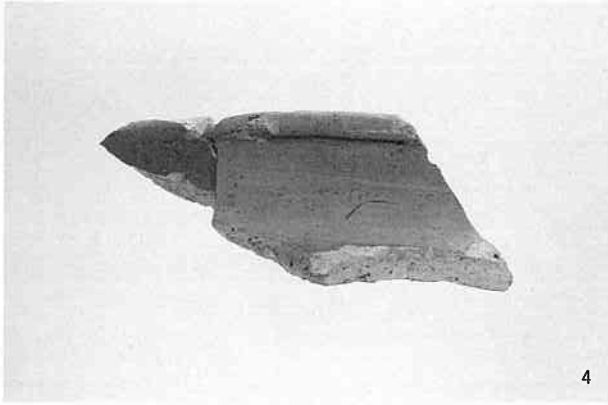
SK-26 出土遺物 (3)



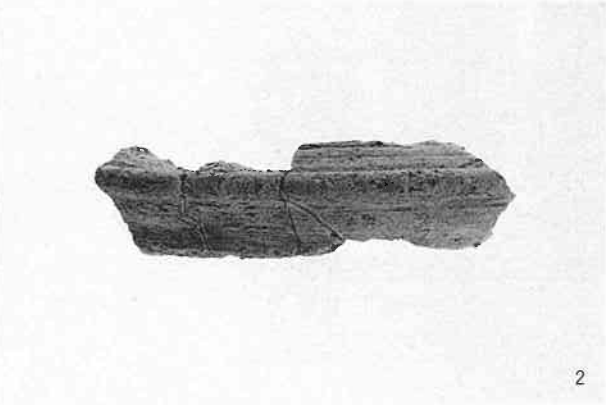
SK-29 出土遺物



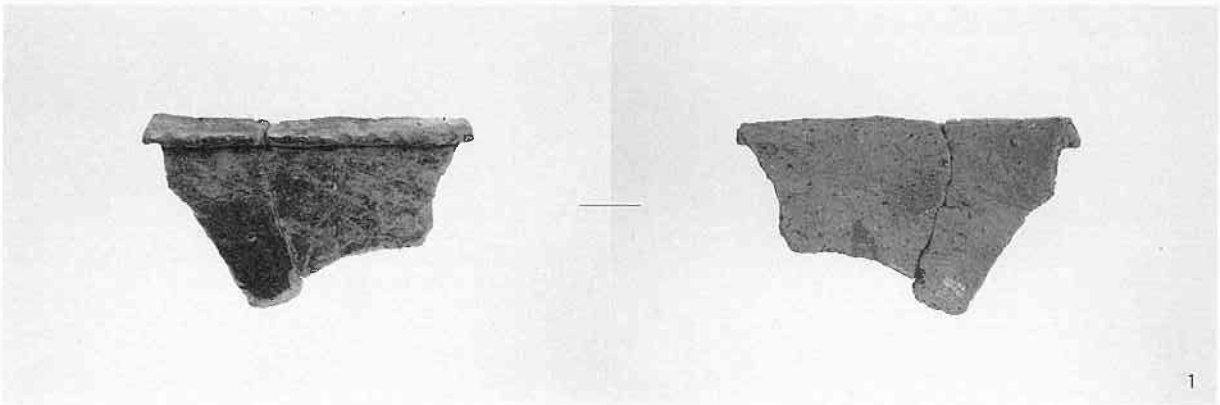
SK-30 出土遺物 (1)



SK-30 出土遺物 (2)



SK-31 出土遺物 (1)



SK-31 出土遺物 (2)



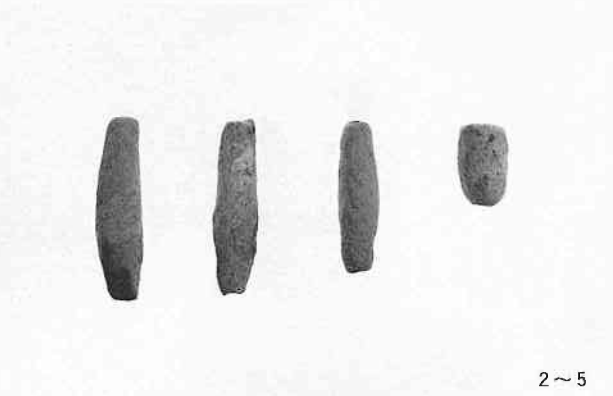
SK-32 出土遺物 (1)



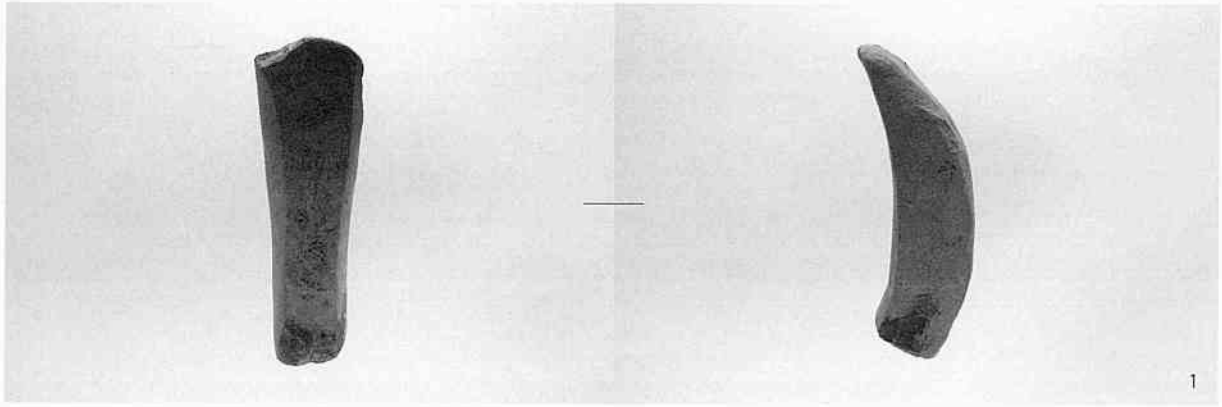
SK-35 出土遺物 (1)



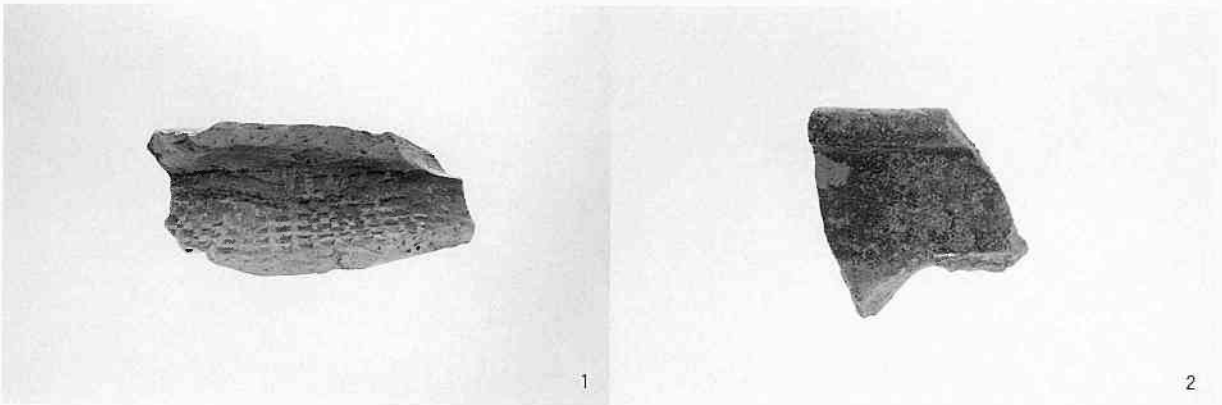
SD-03 出土遺物



2~5

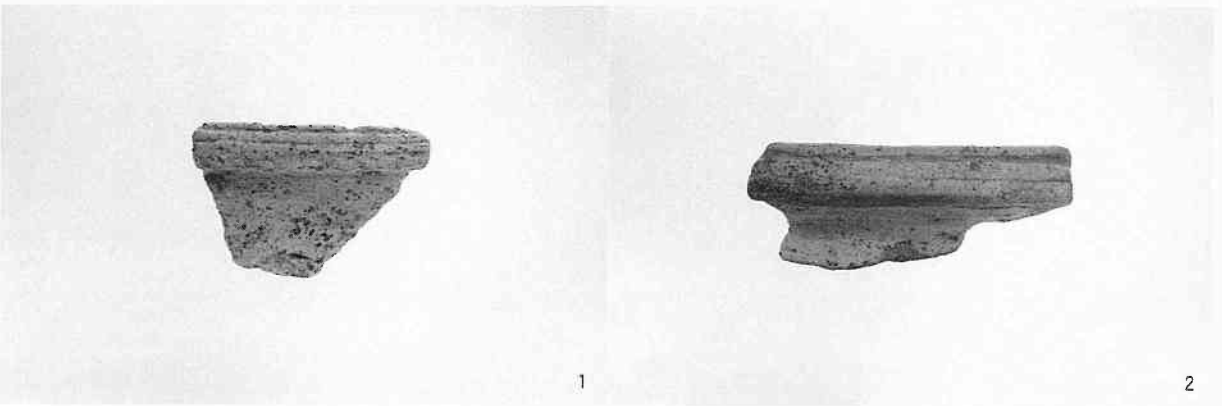


SD-07 出土遺物

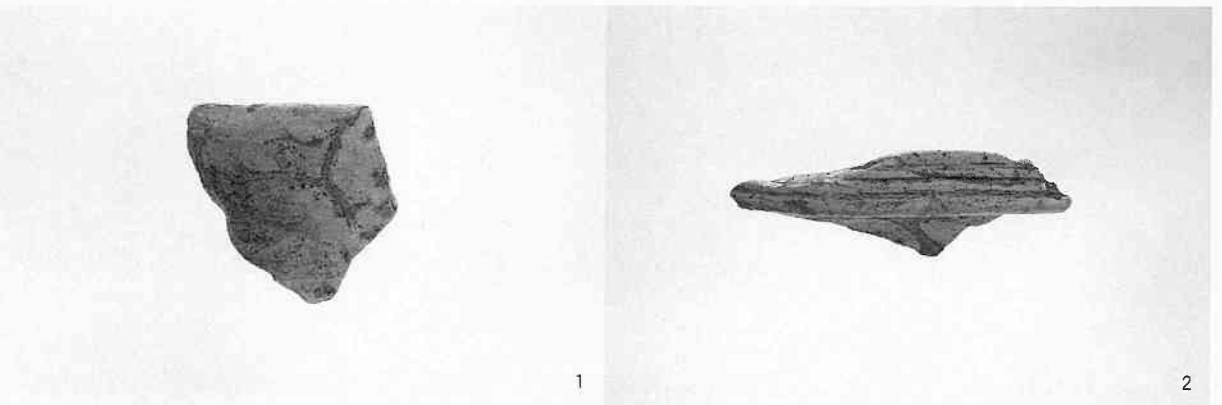


SD-08 出土遺物

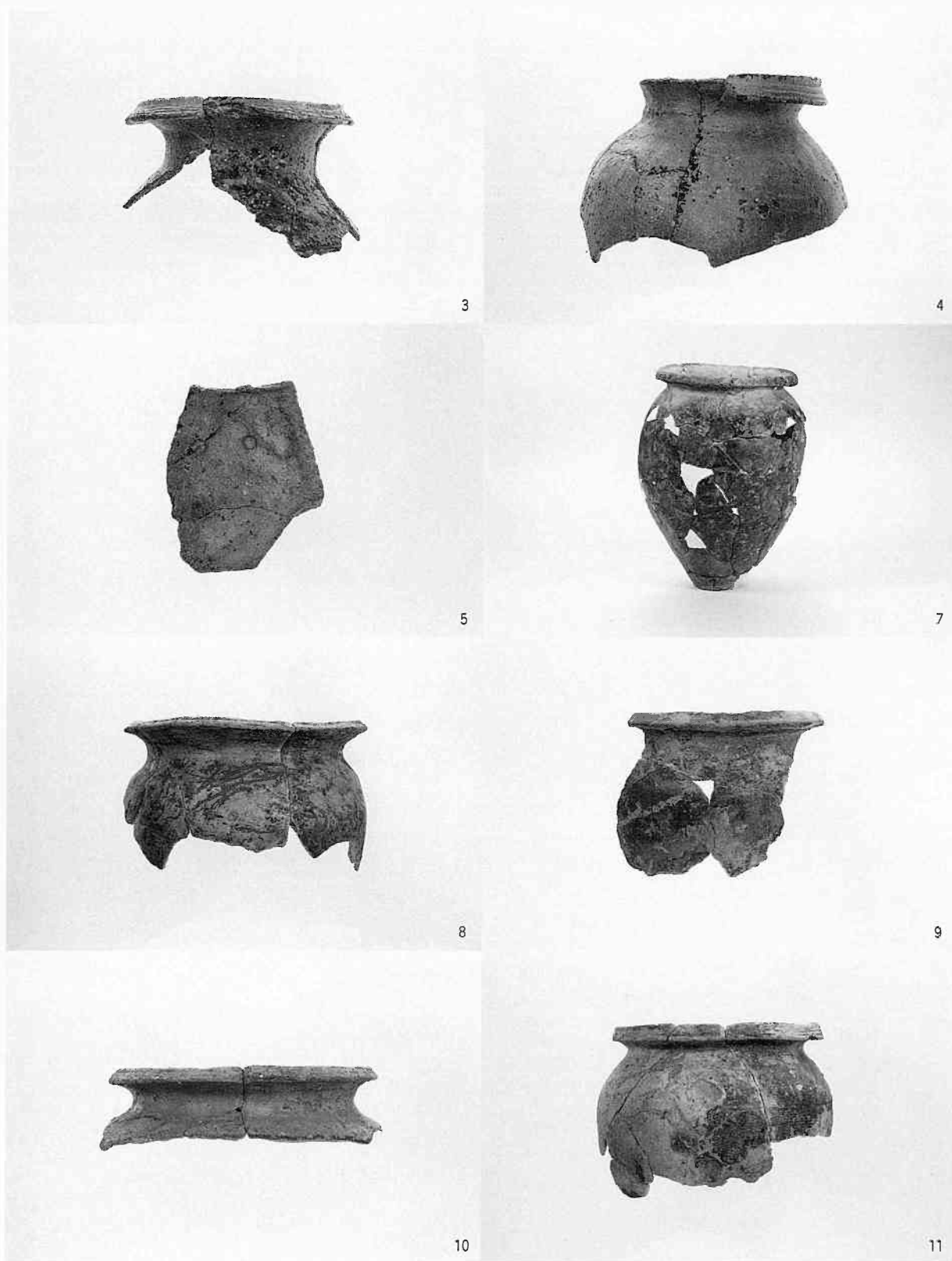
SD-21 出土遺物



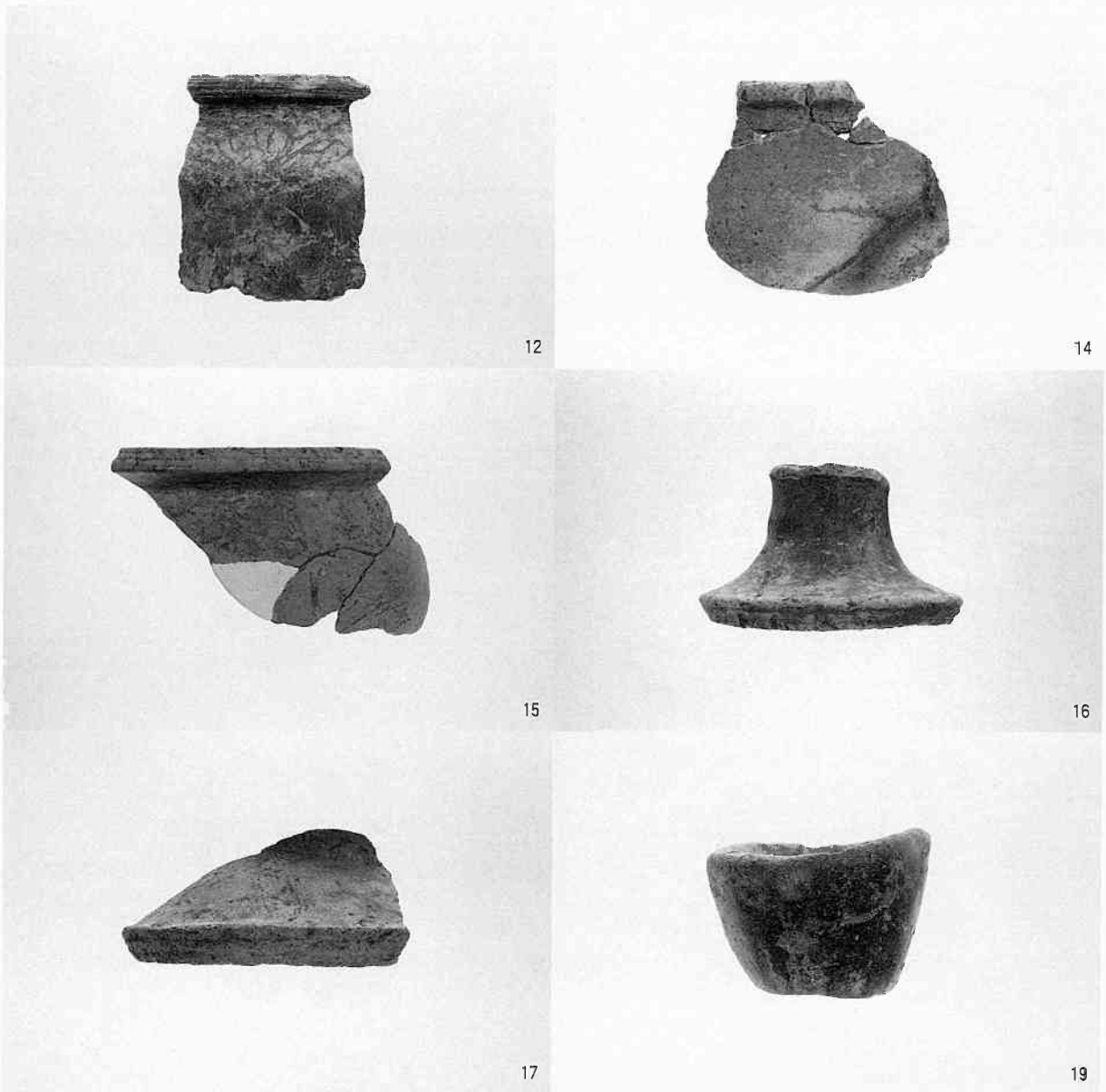
SD-32 出土遺物



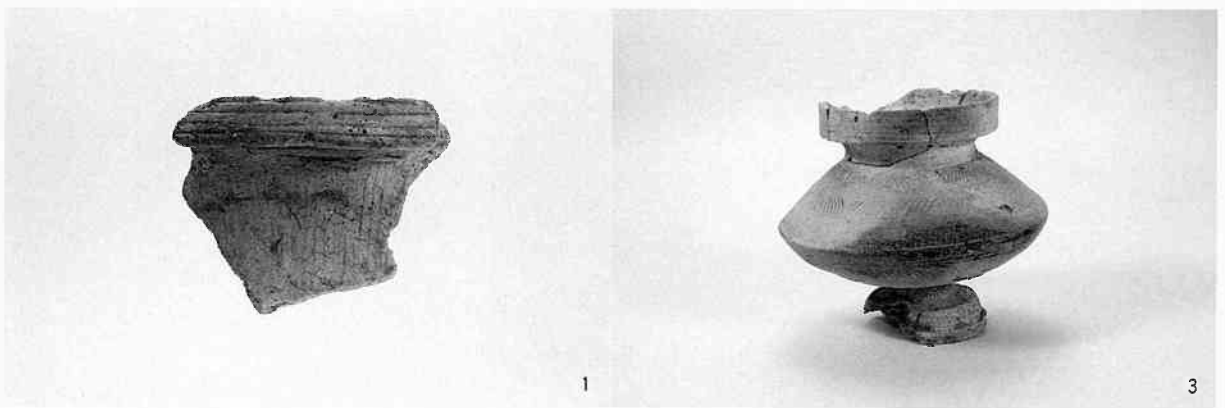
SD-34 出土遺物 (1)



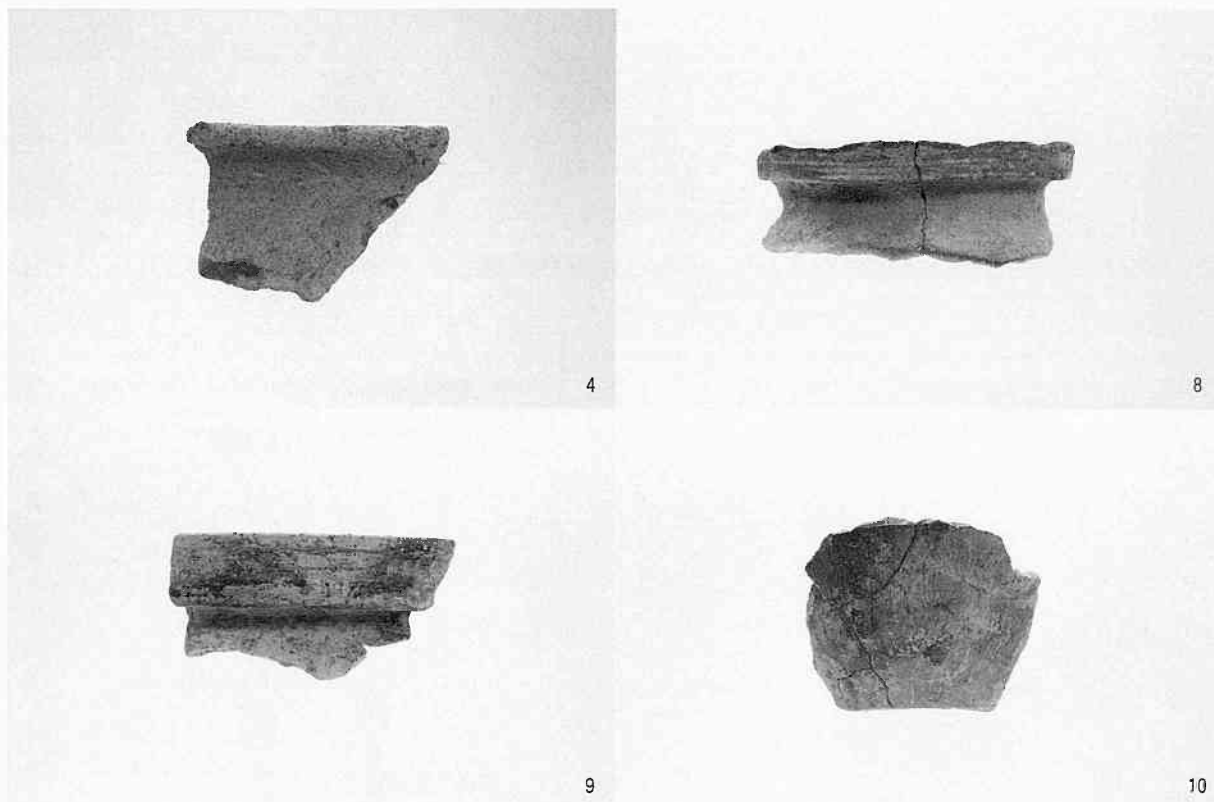
SD—34 出土遺物 (2)



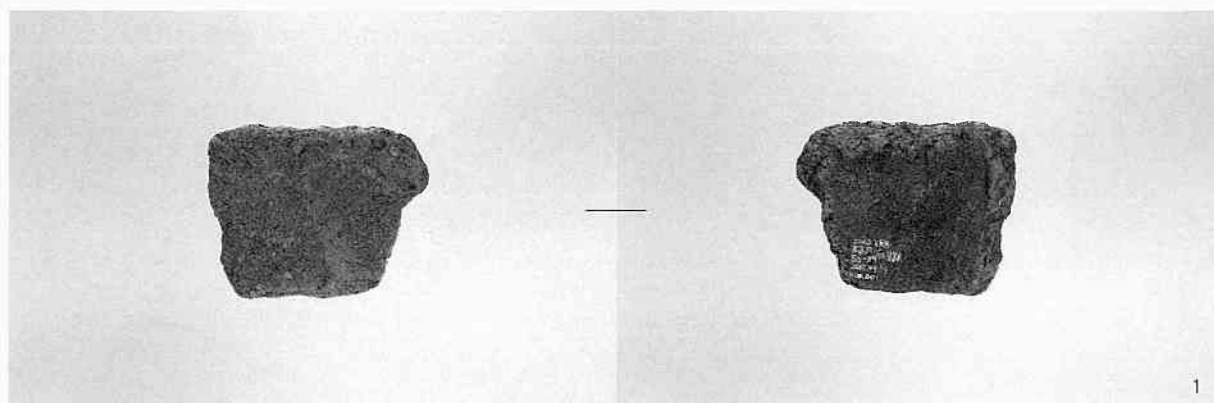
SD—34 出土遺物 (3)



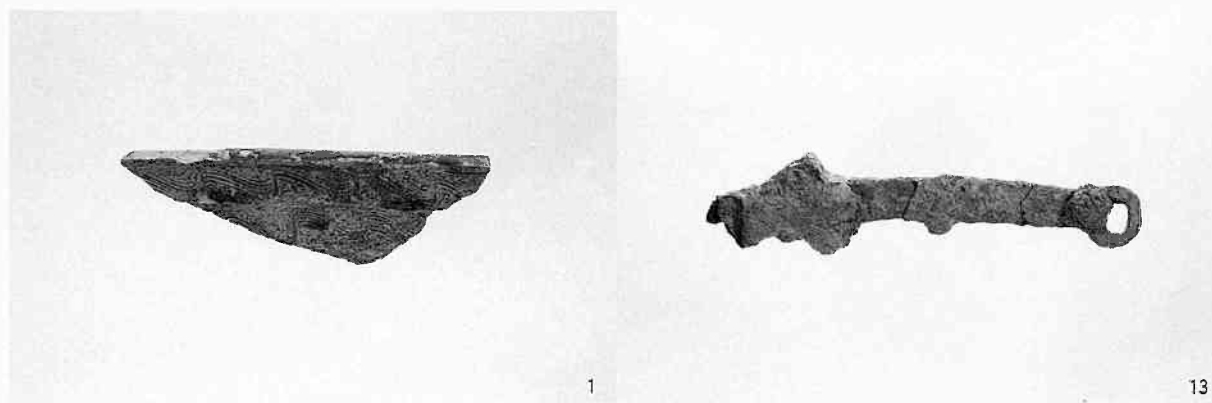
SD—35 出土遺物 (1)



SD—35 出土遺物 (2)



SD—39 出土遺物



SD—54 出土遺物

P—018 出土遺物



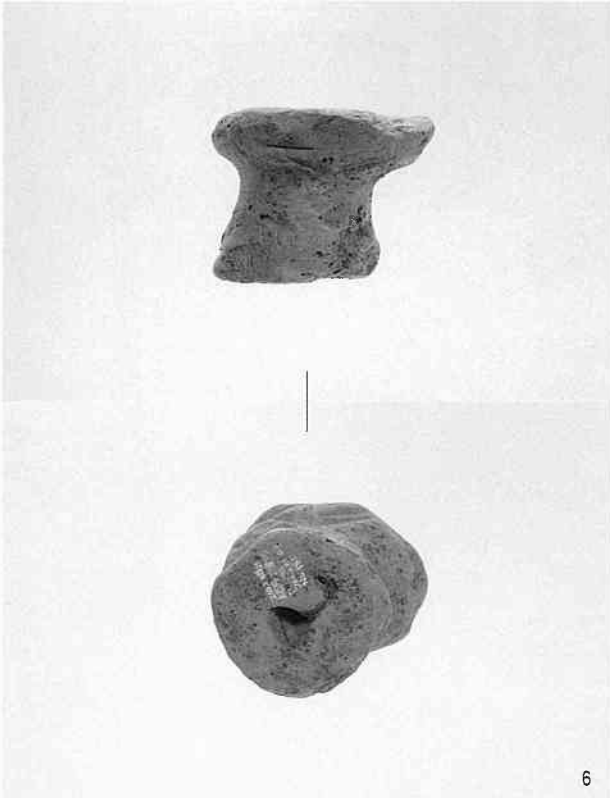
1

P-437 出土遺物



10

P-534 出土遺物



6

P-796 出土遺物



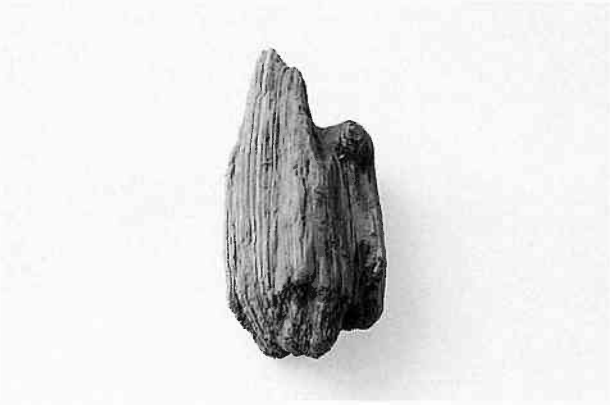
13

P-1078 出土遺物

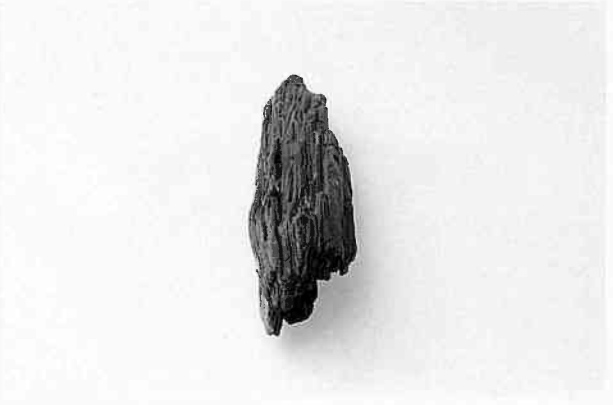


3

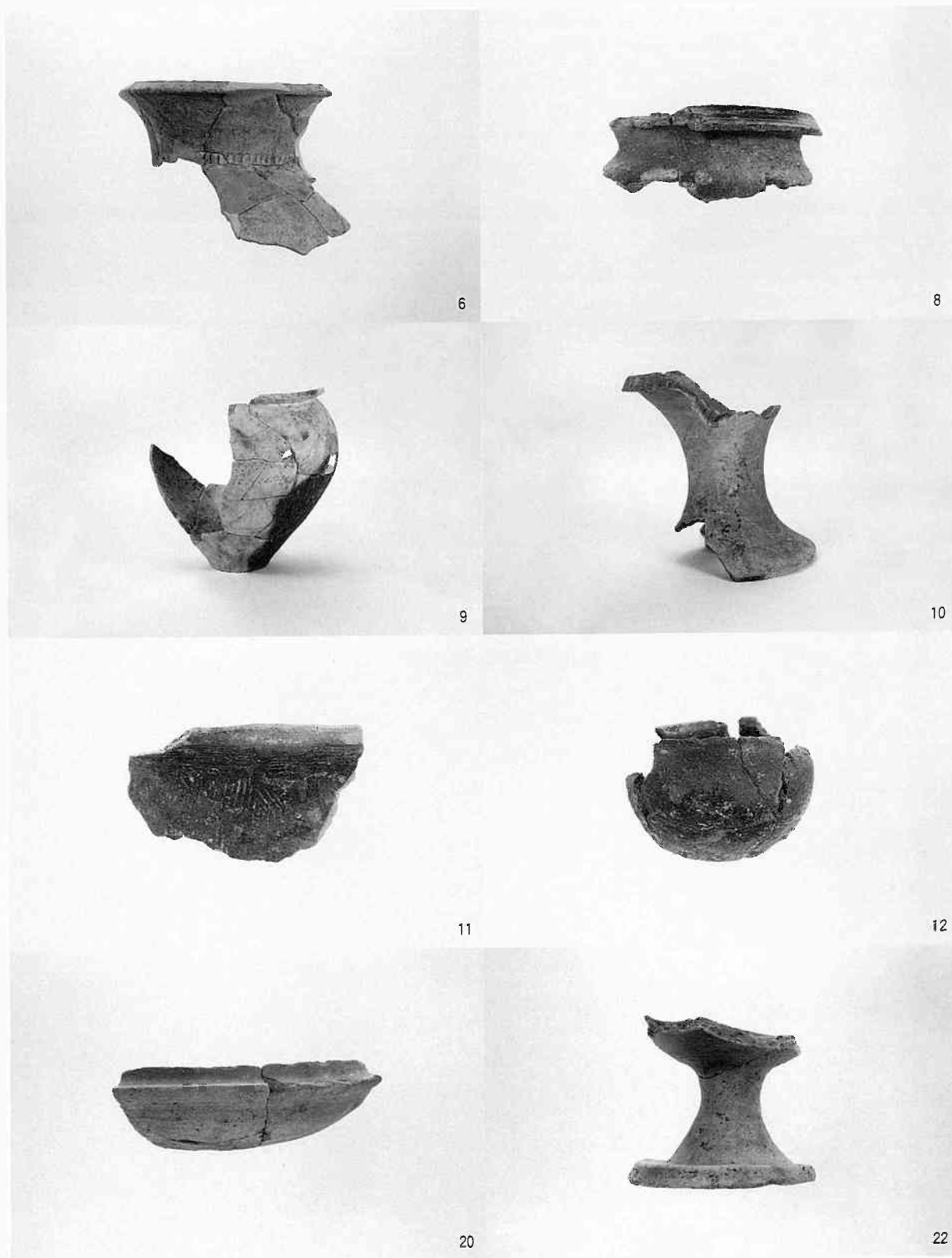
P-1269 出土遺物



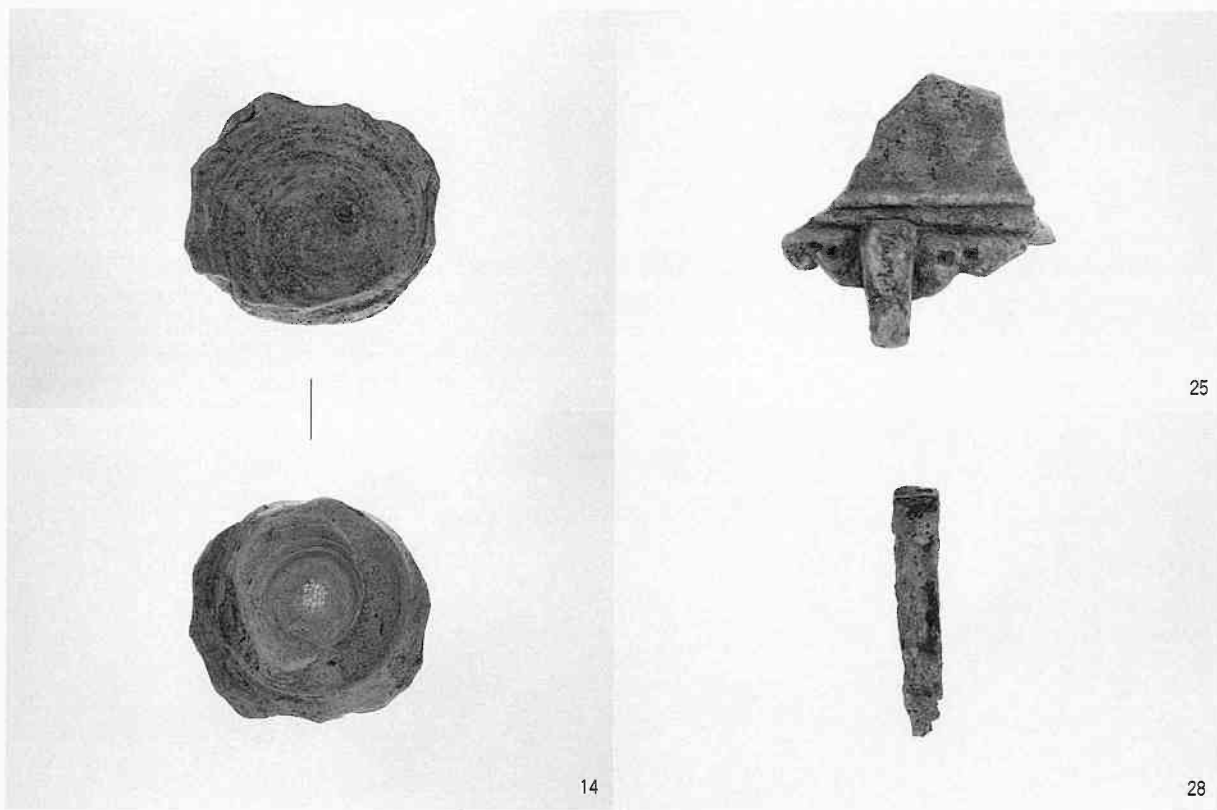
P-906 柱根



P-1405 柱根



遺構外出土遺物 (1)



遺構外出土遺物 (2)

報 告 書 抄 録

ふりがな	もとだかえんのまえいせき							
書名	本高円ノ前遺跡							
副書名	中国横断自動車道 姫路鳥取線整備促進関連事業に係る埋蔵文化財の発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	藤本 隆之							
編集機関	財団法人 鳥取市文化財団							
所在地	〒680-0015 鳥取県鳥取市上町88 TEL(0857)23-2410							
発行年月日	西暦2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
もとだかえんのまえいせき 本高円ノ前遺跡	とっとりし 鳥取市 もとだか 本高	31 201		35° 28' 31"	134° 12' 16"	2003.10.01 ~ 2004.03.30	3,236㎡	(中国横断 自動車道) 姫路鳥取線 整備促進 関連事業に 伴う調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
本高円ノ前遺跡	集落	弥生時代 後期 平安時代 鎌倉時代 室町時代	土坑 溝状遺構	2基 3条	土器	土坑内から密教法具 (五銚鈴、華瓶)が出土		
			掘立柱建物 土坑 溝状遺構 柱穴、ピット	10棟 39基 60条 1,269基	土器 須恵器 土師質土器 瓦質土器 陶磁器 (白磁、青磁、天目等) 銅製品 (五銚鈴、華瓶、銭貨) 木製品 (漆器、下駄等) 鉄製品			

本高円ノ前遺跡

中国横断自動車道 姫路鳥取線整備促進関連事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成16年 3月31日 印刷・発行

編集・発行 財団法人 鳥取市文化財団
印刷所 勝美印刷株式会社

